平成27年度　博士論文

日本語とタイ語の原因・理由文の構造—対照研究の視点から—

ケウワッタナ　ピヤトーン

平成 27 年度
博士論文（指導教員　田中　寛）

日本語とタイ語の原因・理由文の構造

―対照研究の視点から―

大東文化大学大学院　外国語学研究科
日本言語文化学専攻　博士課程後期課程

（学籍番号　13233101）

ケウワッタナ　ピヤトーン
（KAEWWATTANA　Piyatorn）

目次

章立て目次 I
図表目次 Ⅳ
凡例 V

序章

1. はじめに 1
1.1 文について 2
1.1.1 タイ語における「単文」 6
1.1.2 タイ語の複文構造 7
1.1.3 タイ語の重文構造 7
1.2 タイ語と日本語における原因・理由文をめぐる諸問題 8
1.3 原因・理由表現：因果構文について 9
2. 研究の目的 12
3. 近年における複文研究の現状 13
4. 本研究の構成 14
5. タイ語の表記について 15
5.1 子音の表記 15
5.2 母音の表記 15
5.3 声調 16
6. 本研究で扱う例文について 16

第 1 章 原因・理由文と原因・理由表現について

1.1 原因・理由文について 18
1.2 日本語とタイ語の原因・理由文 20
1.2.1 日本語の原因・理由文と原因・理由表現 21
1.2.1.1 接続表現である原因・理由表現について 21
1.2.1.2 文末表現・述語的な表現である原因・理由表現について 24
1.2.2 タイ語の原因・理由文と原因・理由表現 26
1.3 因果構文と因果関係を表す表現の分類 31
1.3.1 タイ語における因果関係を表すものの特徴 38
1.3.1.1 タイ語の原因・理由を表わす表現 38
1.3.1.2 タイ語の結果を表す表現 39
1.4 日本語の分類方法から見るタイ語の表現 42
1.4.1 「原因・理由を表す原因・理由文」とタイ語文 43
1.4.2 「判断の根拠を表す文」とタイ語文 45

1.4.3　「原因・理由を表さない原因・理由文」とタイ語文 46
1.5　本章のまとめ 48
章注 49

第 2 章　原因・理由表現をめぐる日タイ対照研究

2.1　「から」「ので」とタイ語の表現 51
2.1.1　「から」「ので」とタイ語の比較考察 52
2.1.2　言いさし文における「から」「ので」と phrɔ́ʔについて 57
2.2　原因・理由を表すテ形とタイ語の表現 61
2.3　因果関係を表すマーカーがないタイ語文 68
2.4　本章のまとめ 69
章注 70

第 3 章　事態系の原因・理由表現の日タイ対照研究

3.1　タイ語の因果関係を表す表現について 73
3.1.1　phrɔ́ʔと cɯŋ について 73
3.1.2　phrɔ́ʔと cɯŋ とその他の表現 75
3.2　事態系の原因・理由表現とタイ語の表現 77
3.2.1　「ため（に）」とタイ語の表現 77
3.2.1.1　「ため（に）」とタイ語の表現の比較考察 78
3.2.1.2　まとめ―「ため（に）」とタイ語の表現 84
3.2.2「せいで」「おかげで」とタイ語の表現 84
3.2.2.1　「せいで」と「おかげで」の意味・用法 85
3.2.2.2　「せいで」の意味・用法 86
3.2.2.3　「おかげで」の意味・用法 87
3.2.2.4　「せいで」「おかげで」とタイ語の比較考察 89
3.2.2.5　まとめ―「せいで」「おかげで」とタイ語の表現 96
3.2.3　「あまり（に）」とタイ語の表現 96
3.2.3.1　原因・理由を表す「あまり（に）」について 96
3.2.3.2　「あまり（に）」とタイ語の比較 99
3.2.3.3　con という単語について 100
3.2.3.4　「あまり（に）」と con の比較 101
3.2.3.5　まとめ―「あまり（に）」とタイ語の表現 106
3.2.4　「たけに」とタイ語の表現 107
3.2.4.1　「だけに」の意味・用法 107
3.2.4.2　「だけあって」について 110
3.2.4.3　「だけに」とタイ語の表現の比較考察 111
3.2.4.4　「だけに」と yîŋ の比較 115

3.2.4.5　「だけあって」とタイ語の比較 118
3.2.4.6　「だけあって」と sŏm 形の表現の比較 119
3.2.4.7　yîŋ と sŏm 形の表現の相違点について 123
3.2.4.8　まとめ―「だけに」「だけあって」とタイ語の表現 124
3.3　本章のまとめ 126
章注 126

第 4 章　判断系の原因・理由表現の日タイ対象研究

4.1　判断系の原因・理由表現とタイ語の表現 128
4.1.1　「のだから」の考察 128
4.1.1.1　「のだから」の意味・用法 128
4.1.1.2　「のだから」とタイ語の比較 132
4.1.1.3　まとめ―「のだから」とタイ語の表現 138
4.1.2　「からこそ」の考察 138
4.1.2.1　「からこそ」の意味・用法 139
4.1.2.2　「からこそ」とタイ語の比較 141
4.1.2.3　まとめ―「からこそ」とタイ語の表現 150
4.2　本章のまとめ 153
章注 153

終章

1.　全体のまとめ 155
1.1　文構造と接続表現について 155
1.2　タイ語における複合タイプと共起タイプの表現 157
1.3　タイ語の表現を日本語と比較する場合 160
1.4　事態系と判断系をタイ語と比較考察する結果 161
2.　今後の課題 162

参考文献 164
用例出典 172
本論文と既出論文との関係 175
謝辞 176

図表目次

表目次

表 0.1　子音（頭子音・末子音）一覧（田中 2004 より）15
表 0.2　母音の一覧（単母音・二重母音）（田中 2004 より）16
表 0.3　タイ語の声調（田中 2004 より）16
表 1.1　文構造の名称と定義の分け方19
表 1.2　タイ語における文の分類一覧32
表 1.3　タイ語における複文と重文の分類一覧32
表 1.4　タイ語における因果関係を表す表現の一覧33
表 3.1「だけに」、「だけあって」、yîŋ、sǒm 形の表現の意味表125
表 4.1　「からこそ」とタイ語の意味・用法比較表152

図目次

図 0.0　タイ語と日本語における因果関係を表す表現の位置の一覧10
図 1.1　因果構文における文および節の名称20
図 1.2　日本語とタイ語における原因・理由節と結果節の応答変換の比較29

凡例

（1）文の適切性マーカーについて

?　：文法・形式的に、または意味的にやや不自然さが感じられる場合ではあるが、意味が通じられると判定される例文。

??　：文法・形式的に、または意味的に非常に不自然さが感じられる場合で、意味が通じにくいと判定される例文。

#　：当該文脈では不適格であるが、他の文脈では意味が通じると判定される例文。

＊　：文法・形式的に、または意味的に不自然さが感じられ、非文法的である場合で、意味が通じないと判定される例文。

A／B：同一例文の中で A と B の交換が可能である場合を示す。例文の中で同じ位置に置かれている二つの要素を比較する場合に使用する。？と＊がともに発生する場合もある。

{}　：例文の内容・状況を補足する場合に使用する。また、その例文の言い換え、または書き換えがある場合にも使用する。

（2）省略記号について

本研究で扱う形態素単位の説明における省略記号は以下通り、田中（2004）と Tahapat（2014）を参考にしたものである。

BEN	Benefactive	授受形態素
PAS	Passive	受動形態素
CAUS	Causative	使役形態素
CL	Classifier	類別詞
COMP	Complement	補文標識（関係代名詞、引用詞相当）
CON	Conjunction	接続詞
COPU	Copula	繋動詞（判断詞）
FUT	Future	未来時制（未実現）
PERF	Perfect	完了
NEG	Negative	否定辞
PST	Past Tense	過去時制
Q	Question	文末疑問マーカー
MPP	Male Polite Particle	男性用文末丁寧詞
FPP	Female Polite Particle	女性用文末丁寧詞

序章

1. はじめに

この章では、本研究の動機および目的について述べる。また、本研究における各章の構成も紹介し、本研究で使用している分析対象および例文についても述べる。

まず、本論に入る前に文の概念について考えてみる必要がある。文とは何か、という命題は文法研究の出発点でもあり、最終的な帰結点でもあるのだが、それぞれの言語には固有の文概念があり、日本語のそれと共通的な面もあれば異なる面もある。文のとらえかた、文認識はそれぞれの言語の発想様式とも密接に関係している。まず、文の最も原初的なものは感嘆的に発せられるもの、また単語をそのまま提示する、いわば一語文と言われるものである。これは「独立語文」の部類に入る文である。例えば、「おお!」や「素晴らしい!」、または「お父さん!」などの感動、感嘆、詠嘆、応答、呼びかけなどの意味で用いる文である。日本語とタイ語を示そう。

1) あら！
โอ้โห !
ôohŏo!
2) びっくりした！
ตกใจหมด !
tòkcai-mòt !
3) ドロボー！
ขโมย !
khaʔmooi !

これらの文には注意喚起という伝達的要素があるが、仁田（2009）はこれらを未展開文と称している。一般的に文といわれるものは、さらに単語の語彙的機能を構造的に意味的に構成されたもので、普通は何らかの伝達的意図を有する。このなかには表示文と称していいものもある。簡潔さを旨とすることからこれらの名詞語彙も文として機能する。4）と5）は「煙草を吸わないでください」と「中に入らないでください」という禁止文、6）は「出口か入口か」の標識を補助説明するものである。

4) 禁煙
ห้ามสูบบุหรี่
hâam sùup bùʔrii
禁ずる 吸う 煙草

5)　進入禁止

ห้ามเข้า

hâam　khâo

禁ずる　入る

6)　入口／出口

ทางเข้า／ทางออก

thaaŋ　khâo　／　thaaŋ ɔ̀ɔk

方　　入る　／　方　出る

基本的には、文の最小の単位は単文があり、それより大きな文、または複雑な文は、複文と重文がある。これは、日本語でもタイ語でも共通していると考えているが、日本語における複文とタイ語における複文は、必ずしも同じものであるとはいえない。そして、両言語における複文はどのような相違点があるか理解できなければ、本研究で扱う原因・理由文の比較分析も不十分になるであろう。そもそも日本語とタイ語とでは、文の分類そのものも異なっていると考えるのが妥当である。それぞれの言語における文の分類、そして文構造を考える場合、それぞれの言語ではどのように構成されているかを理解する必要がある。

1.1　文について

本研究の対象は、日本語とタイ語の原因・理由文の構造の対照研究であるが、両言語の間には原因・理由文の概念をどのようにとらえているかを考える前に、文の基本的な構造が何を基準に組み立てられるかをみておこう。まず、文とは、言語表現の単位の一つであり、日本語でもタイ語でも、一つの文には最低でも主語と述語という二つのパーツを揃えなければならないというのが基本的である。

ここで「単文」「複文」「重文」のそれぞれの大まかな定義を確認しておこう。

「単文」：『日本語文法事典』（2014）では、日本語における文の構造的な分類の中で、「独立語文」と「述語文」に分けられると述べている。また、「独立語文」は、述語とそれへ従属していく成分という分化を有していない文であり、「述語文」とは、述語とそれに従属する成分という分析・総合の過程を有している文であるとも述べている。単文は「述語文」の部類に入る文構造である。一般的には、単文は主語と述語の関係を一組だけ含む文のことである。または、一つの節から成る文であるともいえる。ところが、実際では主語が省略される場合もあり、述語のほうが重要な要素であると考える。益岡（1997）は、単一の述語を中心にして組み立てられる文を単文であると述べている。例えば、次のような例文である。

7)　机の上に辞書がある。

8)　電車の中にかばんを忘れた。

また、次のような意思表示文も単文による伝達効果が見られる。

9)　わたしは法定速度を遵守します。

10)　シェーブング革命　驚きのコストパフォーマンス

11)　摂食障害から回復するための8つの秘訣。

9）は車体に表示された運転手の意思表示である。10）は名詞文であるが、宣伝効果をうたったものである。これらは単文的な性格を有する文である。11）は書名である。次の12）も全部書名である。

12)　a.「ポツダム宣言」を読んだことがありますか？

b. そうか！「人づきあい」で悩むことないんだ

c.「いい家」が欲しい

13)　a. トルコで爆発　86人死亡　（；トルコで爆発が起こり、86人が死亡した）

b. 常総水害　避難なお400人　（；常総水害によって、避難民はなお400人にのぼる）

c. 朝鮮労働党70年パレード　正恩氏展望なき誇示

（；朝鮮労働党の70年パレードでは正恩氏は展望のない誇示を表した）

（以上、朝日新聞2015.10.11）

タイ語の場合も14）、15）のような例も単文構成によるものとみなす。

14)　ฉันจึงมาหาความหมาย

chǎn　cɯŋ　maa　hǎa　khwaam-mǎay

私　CON　来る　探す　意味

「だから私は意味を求める」

15)　แลไปข้างหน้า

lɛɛ　pay　khâaŋ-nâa

見つめる　行く　前方

「未来を見つめて」

私たちの言語生活には多く、こうした単文による説明文、意思表示文が観察される。また16）のように話し手（質問者）に対する応答文にも単文構成のものが多く現れるのも日本語と共通している現象である。

16)　แล้วแต่กรรม

lɛ́ɛw-tɛ̀ɛ kam

次第だ　運

運次第です。

「複文」：『日本語文法事典』（2014）では、複文も単文と同様、「述語文」の部類に入る文構造であると述べている。さらに、構成要素として節を二つ以上含む文が複文であるとも述べている。言い換えれば、複文は述語文が二つ以上から構成されている文であるともいえるが、それぞれの述語は対等ではない場合に限る。そして、複文に中には、主節と従属節という二つの節に分けられる。主節はその文のメインとなる節であり、その節を従属するのは従属節である。『国語学事典』（1979）では、単文は主語と述語の関係が一回でだけ成り立っている文であるのに対し、複文は主語と述語の関係がすでに一回成り立っている文の、いずれかの従属的部分の構造に主語と述語の関係の認められるものを持つ文であると述べている。即ち、主語と述語の関係がすでに一回成り立っている文を修飾する部分、従属節を持つ文が複文である。つまり、次のような例文である。

17）　早口のなっていると気づいたら、途中で一泊おくのも効果的です。

（小池龍之介『考えない練習』）

18）　「代わるから、少し休んだ方がいい」

（ハセガワケイスケ『しにがみのバラッド。』）

益岡（1997）は、述語を中心として組み立てられる構造体が複数個存在する文は複文であると述べている。また、前田（2009）は、複文を構成する単文は一語文が入らないため、複文の定義の基本は単文というより述語文であると述べている。さらに益岡・田窪（1992）は、複文は複数の節で構成する文であり、文末の述語を中心とした節が文全体をまとめる働きをし、この節は主節と呼ぶと述べている。そして、主節以外の節は主節に対して特定の関係で結び付き、これらの節は接続節と呼ぶとも述べている。益岡（1997）では、接続節を従属節とも呼んでいる。

「重文」：『国語学事典』（1979）では、主語と述語が成り立つの部分の並列されたものであると述べている。つまり、複文は節を従属する従属節を持つ文であるが、重文は二つの節が並列に並んでいる文のことである。複文との違いは、重文における二つ以上ある主語と述語の各組の関係は、それぞれが対等でなければならない点である。言い換えれば、主節に相当する節が二つ以上から構成されている文は重文であるともいえる。例えば、次のような例文である。

19）　グループ首位をかけて大一番！

（朝日新聞 2015.10.8）

20）　キノが息をのんで、エルメスは大声を出した。

（時雨沢恵一『キノの旅』）

上記に例文 19）と 20）は、いずれも二つの節以上から構成されている上に、それぞれの節は対等の関係をもっている。例えば、例文 20）の場合、「キノが息をのんだ」と「エルメスは大声を出した」という二節に分けられ、それぞれの関係は対等であり、片方が片方を従属しているというわけではない。言い換えると、「キノが息をのんだ」と「エルメスは大声を出した」はいずれも主節であり、従属節が存在しないともいえる。または、「キノが息をのんだ」と「エルメスは大声を出した」はいずれも一つの単文として成り立っている上に、二つの単文が並列しているともいえる。とはいえ、重

文は単文、または主節に相当する節だけで構成されている文構造ではない。複文と複文から構成されている重文もある。その場合、文の中には従属節も含まれているが、主節に相当する節は必ず二つ以上でなければならない。故に、重文は単文と単文だけではなく、複文と複文から構成されている場合もある。ところが、これらの文構造を複文の一種として扱う定義もある。日本語における重文は、基本的には等位接続詞で結合される。そして、日本語記述文法研究会（2008）では、この等位接続詞が用いられている単文を等位節と呼んでいる。そして、等位節を従属節の一種として扱う場合、その文も複文として扱うという定義がある。つまり、文の中にある二つの主語と述語の各組の関係が対等であっても、主節と従属節に分けられるという考えである。さらにいうと、意味的に考察する場合、複文と重文の二通りに解釈できる場合もある。

21）　風邪を｛引き／引いて｝、会社を休んだ。

例文 21）のような並列的な構文は、前節と後節が対等であると解釈することが可能であるが、対等ではないと解釈することも可能であると考えられる。「風邪を引く」と「会社を休んだ」は、両方とも単文として成り立っている上に、従属節が含まれているというわけではない。故に、この文は単文に相当するもの、または主節に相当するものが二つから構成されている構文であり、重文であると解釈できると考える。一方、「風邪を引く」と「会社を休んだ」の間には、原因と結果という役割に分けられ、因果関係で繋がっていると考えることもできる。その場合、「会社を休んだ」は結果であり、主節に相当するものであるが、「風邪を引く」は原因を表すものであり、その主節を従属する節となる。つまり、複文として解釈することが可能である。本研究では意味的に主節を補足する役割を果たさない等位節の結合から成る文を重文として扱うが、例文 21）のような場合も主節を補足することを表わす表現が用いられていないため、重文として扱う。文と節に関しては、『国語学事典』（1979）では、節は文を構成する部分として一つのまとまりをなす連文節が、それ自体の中に主語対述語の関係を含むとき、この連文節を節というと呼ぶと述べている。主語と述語かる構成されている点に関しては、節も文と同じである。言い換えれば、その意味では文も節として扱うことができる。しかし、節は文を構成する要素の一つとして扱うため、基本的には複文と重文の中にある主語と述語の各組を節と呼ぶが、主語と述語が一組しかない単文を節とは呼ばない。さらに、基本的には文は句点で終わるものであるため、日本語では句点まで含まれているものを文として扱うが、節として扱わない。ただし、小説や新聞などで、閉じ括弧の中で句点がない場合でも文が閉じ括弧で終わるであれば、文として扱う。例えば、「おはよう。」の場合も「おはよう」の場合も文として扱う。

この項目でのそれぞれの文構造の概念は、日本語におけるものを中心にしているが、「単文」「複文」「重文」に分けられるのは、タイ語も日本語と同様である。とはいえ、それぞれの言語におけるこれらの文構造の概念は、必ずしも一致しているというわけではない。タイ語における「単文」「複文」「重文」を、それぞれの名称とともに特徴を瞥見しておこう。

1.1.1 タイ語における「単文」

เอกรรถประโยค（ʔeekkàtthà-prà̌ʔyòok）／ประโยคความเดียว（prà̌ʔyòok-khwaam-diaw）

主語と述語がそれぞれ一つしかない文のことを示し、英語では simple sentence であり、タイ語における「単文」である。また、日本語と同様、主語が省略される場合もあり、述語の方が文における一番の重要な要素である。そして、述語が一つしかないため、一般的には文の意味・内容が一つしかない。

22） นกบิน

nók　　bin

鳥　　飛ぶ

【主語】【述語】

鳥が飛んでいる。

≪タイ語≫（Kamchai Tongloo：*Lak Phaasaa-Thai*）

23） (เด็ก) อ่านหนังสือ

(dèk)　àan　nǎŋsǔɯ

(子供)　読む　本

【主語】【述語】【補足語】

（子供が）本を読んでいる。

≪タイ語≫（Kamchai Tongloo：*Lak Phaasaa-Thai*）

タイ語では、前の語と後の語の関係を示す「助詞」というものがないため、22）や 23）のように、名詞である主語と動詞である述語を並べるだけで文になる。文の補足語である他動詞の目的語も助詞を必要とせずにそのまま他動詞の後に並べる。文の構造的には、日本語における「まま来た」や「とり飛ぶ」など、幼児が用いる「二語文」というものに近いに見えるが、タイ語では助詞がなくても単文として成立する。また、主語を省略しても単文として成立する点は、タイ語も日本語と同様である。例えば、例文 23）の場合、dèk という主語を省略することが可能である。単文の概念は、助詞がないこと、動詞や形容詞の活用形がないこと、句点がないこと、語順が異なっていることなどのタイ語の特徴を除けば、タイ語における概念も日本後と同様であると考える。また、タイ語では日本語のような独立語文もある。「おお!」や「あー!」などの感動や驚きなどで声を上げる一語文だけではなく、「火事!」や「危ない!」などの単語一つから成る文もある。

24） ไฟไหม้!

fay-mây

火事

火事!

25） อันตราย!

antaʔraay

危ない

危ない!

日本語では、「火事だ!」「危ないぞ!」などのように終止形や終助詞を用いることも可能で、タイ語でもそのようなことが可能である。

1.1.2 タイ語の複文構造

สังกรประโยค（sǎŋkɔɔn-prà²yòok）／ประโยคความซ้อน（prà²yòok-khwaam-sɔ́ɔn）

英語では complex sentence と呼び、日本語における「複文」に類似すると考える。主節と従属節により構成されている文であり、述語が二つ以上から成る文である。つまり、一つ文の中に二つ以上の節が重なっている文であるとも言える。

26） พ่อผมที่ตายไปหลายปีแล้วคงเหงา

phɔ̂ɔ phǒm	thîi	taay	pay	lǎay-pii	lɛ̂ɛw	khoŋ ŋǎw
父 僕	COMP	死ぬ	行く	何年も	PST	多分 寂しい

もう何年も前に亡くなった僕の父は多分寂しいだろう。

≪タイ語≫（Lyovarin：*Sing-mii-Chiiwit-thii-Riak-waa-Khon*）

例文 26）におけるタイ語文の下線部は主節であり、それ以外は従属節である。つまり、この複文は、phɔ̂ɔ phǒm khoŋ ŋǎw と（phɔ̂ɔ phǒm）thîi taay pay lǎay-pii lɛ̂ɛw の二節に分けられる。一方、日本語の場合もそれと同様、「僕の父は多分寂しいだろう」と「もう何年も前に亡くなった（僕の父）」の二節に分けられる。主節と従属節で構成されている点に関しては、タイ語における複文が日本語と同様である。しかし、複文における従属節の分類は、タイ語が日本語と異なっている。基本的には従属節の意味的な役割によって分類が分かれている点に関しては、両言語ともに同様であるが、日本語においてはそれが 4 分類があり、タイ語においては 3 分類ある。従属節の各分類については、第 1 章で詳しく述べる。

1.1.3 タイ語の重文構造

อเนกรรถประโยค（ʔaneekkàttha-prà²yòok）／ประโยคความรวม（prà²yòok-khwaam-ruam）

英語では compound sentence と呼び、日本語における「重文」に類似すると考える。タイ語における複文と同様、述語が二つ以上から構成されている文であるが、述語が二つ以上あるといより、文が二つ以上繋がっている構造となっている。タイ語の複文では述語が二つ以上あっても、主節という複文の一番重要な内容がある部分は一つだけである。それに対して、タイ語の重文は主節か従属節ではなく、文と文に分けられる。そして、重要な内容はその重文の中にある文の数と同じであり、それぞれ

は対等である。つまり、二つの文から構成されている文である。タイ語では、文と文と繋げるためには接続詞が必要であるが、省略される場合もある。

27） ฉันเป็นพ่อค้า แต่เขาเป็นกสิกร

chǎn	pen	phɔ̂ɔkháa	tɛ̀ɛ	khǎw	pen	kàʔsìʔkɔ̂ɔn
私	COPU	商人	CON	彼	COPU	農家

私は商人だが、彼は農家だ。

≪タイ語≫（Kamchai Tongloo：*Lak Phaasaa-Thai*）

例文 27）は二つの単文から構成されている重文である。一つは chǎn pen phɔ̂ɔkháa であり、もう一つは khǎw pen kàʔsìʔkɔ̂ɔn である。そして、二つの単文と繋げるのは、tɛ̀ɛ という接続詞である。複文と違い、この重文の中にある二つの単文は対等であるため、重要な内容は二つに分かれている。

1.2 タイ語と日本語における原因・理由文をめぐる諸問題

タイ語における複文と重文を見れば、それぞれに対する日本語とタイ語の概念には重なっている部分があるが、異なっている部分もあるということが分かる。日本語では、等位節が主節を補足する役割を果たさない場合、二つの節の関係が対等である場合では、その文構造を重文として扱う。しかし、この場合の対等というのは、必ずしも両言語ともに一致しているというわけではない。日本語の場合、前節と後節が原因と結果という関係で結ばれている場合、「から」や「ので」などの接続表現を用いる。そして、それは原因・理由文になり、複文になる。ところが、タイ語の場合、例え前と後が原因と結果で結ばれている文でも、用いる接続表現によって、重文として扱うものがある。これは、タイ語における重文は 4 分類に分けられることができ、その中には単文と単文が因果関係で結ばれているものがあるからである。一方、タイ語における複文の中にも、日本語の原因・理由文に当てはまるものがある。要するに、タイ語における重文は、日本語における複文の領域に入るものがあり、複文と重文の概念が混同している部分がある。実質上、タイ語における因果関係で結合する重文の性質と特徴は、タイ語における複文とは異なっているが、日本語と比較する場合、混同されているように見えるものがある。それぞれの分類とその分析は、第 1 章で詳しく述べる。さらに、文構造に関しては、日本語のほうが複文ではないにも関わらず、タイ語に訳すと複文または重文になるという場合もある。例えば、「ノブを下げた状態（閉）で操作をしないでください。開閉が不良・ノブの破損・スライドアーム変形等窓の開閉が、出来なくなります。」と日本語で書かれている注意の張り紙があり、二つの文に別れている。しかし、これらの文をタイ語に訳す場合、次のように訳すことができる。

28） กรุณาอย่าขยับหน้าต่างขณะที่กลอนยังปิดอยู่เพราะจะทำให้หน้าต่างเปิดปิดยาก กลอนเสียหาย บานพับเสียรูป หรือไม่สามารถเปิดปิดหน้าต่างได้

kàʔrúʔnaa	yàa	khaʔyàp	nâa-tàaŋ	khàʔnà-thîi	klɔɔn	yaŋ	pìt
お願い	禁止	操作する	窓	時	ノブ	まだ	閉める
yùu	phrɔ́ʔ	càʔ-tham-hây	nâa-tàaŋ	pòət-pìt	yâak	klɔɔn	sĭa-hăay
いる	CON	になる	窓	開閉	難しい	ノブ	破損
baan-pháp	sĭa-rúup	rŭɯ	máy-săamâat	pòət-pìt	nâa-tàaŋ	dây	
スライドアーム	変形	または	不可能	開閉	窓	可能	

例文 28）では、張り紙に書かれている「ノブを下げた状態（閉）で操作をしないでください。」と「開閉が不良・ノブの破損・スライドアーム変形等窓の開閉が、出来なくなります。」を訳すのに、原因・理由を表す接続詞である phrɔ́ʔを用いて、二つの文を接続し、複文にする。元々、原文である二つの日本語文は、それぞれ因果関係で結び付けることが可能であるからこそ、このようなタイ語訳が可能になる。また、次のような日本語文もタイ語では原因理由のマーカーを用いている。

29a） ランプの光を見つめないでください。目の疲れや痛みの原因となります。

この用例では「ないでくください」とまず忠告し、もしそうしたら「目の疲れや痛みの原因となる」結果を明示している。この場合もタイ語では phrɔ́ʔを用いてあらわす。

29b） ห้ามจ้องมองแสงไฟเพราะอาจทำให้ปวดหรือระคายดวงตา

hâam	cɔ̂ɔŋ-mɔɔŋ	sĕɛŋfay	phrɔ́ʔ	àat	tham-háy	pùat	rŭɯ	raʔkaay	duaŋ-taa
禁じる	見つめる	光	CON	だろう	COUS	痛む	か	傷つける	瞳

電灯を見るのを禁じます。目の痛くするか傷つけるので。

当然ながら、訳す方法はこのように限るわけではないため、接続詞 phrɔ́ʔを用いなくても、別々の文を並べることが可能である。しかし、タイ語では文の読点「、」も句点「。」もないため、二つの文を並ぶことになる。その場合、前文と後文の関係を表す接続表現がないため、28）のような文のほうが自然な文であると考える。このような文の意味に関連する訳文の構造的な問題のほかに、日本語における原因・理由文がタイ語で原因・理由文に訳せない場合の問題もある。主に、複文の中の因果関係が見られないにもかかわらず、原因・理由表現が用いられる日本語文を訳す場合である。例えば、「一生懸命頑張りますから、よろしくお願いします」などの複文を、タイ語ではどのような文にすれば適切であるかという問題がある。

1.3 原因・理由表現：因果構文について

文構造の問題のほかに、表現自体にまつわる問題もある。基本的には、日本語における原因・理由表現はその名称通り、原因・理由を表す表現である。しかし、タイ語では原因と結果の関係で結ばれ

ている文の中には、原因・理由を表す表現のほかに、結果を示す表現もある。それぞれは用いられている文の分類が異なり、品詞も異なっている。しかし、日本語と比較する場合、いずれも日本語の原因・理由表現に対応している場合が多い。要するに、前と後を結合するために用いられている表現が原因・理由を表すものの場合であっても、結果を表すものの場合であっても、いずれも前と後の関係は同じ因果関係であるため、日本語の原因・理由文に対訳できる場合が多い。タイ語における因果関係を表す表現の分類についても、第1章で述べる。本章の1.2の項目で述べたように、日本語をタイ語と比較する場合、両方とも同じような内容を持っていても文の分類が異なっている場合がある。日本語の場合では原因・理由文が複文の一種であるが、タイ語の場合では複文の他に重文である場合がある。日本語における原因・理由文というのは、前節が原因・理由であり、後節が結果であるという構造を持つ複文である。一方、タイ語における原因・理由文は、phrɔ́ʔを使用する場合では前節が結果であり、後節が原因・理由である。しかし、cɯŋ を使用する場合では、節の順は日本語と同様である。これについては、phrɔ́ʔとcɯŋの間には意味・用法の違いがあるからである。タイ語におけるphrɔ́ʔは日本語の「から」や「ので」と同様、原因・理由を表す表現であり、cɯŋは結果を表す表現である。しかし、タイ語におけるこれらの表現は、節末ではなく、節の頭に用いられているため、「から」と意味・用法を持つphrɔ́ʔを使用している文の節順は、カラ構文の節順とは逆である。phrɔ́ʔと同じ意味を表す表現を使用している文の場合も同様である。

図 0.0　タイ語と日本語における因果関係を表す表現の位置の一覧

原因・理由	から／ので／ために／だけに／ せいで／おかげで／ もので／ ものだから／のだから／以上／からには／からこそ／etc.	＋	結果

結果	＋	phrɔ́ʔ／phrɔ́ʔ-wâa／nûɯaŋ-càak／etc.	原因・理由節
原因・理由節	＋	cɯŋ／ləəy／phrɔ́ʔ-chàʔnán／etc.	結果節

上記のように、日本語における原因・理由文は、原因・理由表現が前節の末にあるため、結果節はその後に続いている。タイ語の場合では、phrɔ́ʔは原因・理由を表わす節の頭に位置しているため、結果節の後に続いている。故に、phrɔ́ʔ構文の語順は、日本語の原因・理由文と異なっている。それに対して、cɯŋは結果を表す節の頭に位置しており、原因・理由節の後に続いている。そのため、cɯŋ構文は日本語と同じ節順になっている。また、タイ語の言語学においては、phrɔ́ʔ構文は複文構造に分類されているが、cɯŋ構文は重文に分類されている。ところが、日本語の原因・理由文のタイ語訳は、phrɔ́ʔ構文に訳された場合もあれば、cɯŋ構文に訳された場合もある。つまるところ、節順はどうであれ、phrɔ́ʔ構文とcɯŋ構文は両方とも意味的に日本語の原因・理由文に対応している場合がある。日本語における原因・理由文のタイ語訳は、使用されている表現の特徴を考慮すれば、タイ語のどの表現

に訳されるかの優先度が変わると推測できる。タイ語における原因・理由表現の機能と特徴の相違点に関するに研究はまだ不十分であるが、それぞれの表現には文体的な違いがあるということは明らかになっており、互いに置き換えることができない表現もあるため、意味・用法に関する相違点もあるということは確かである。日本語とタイ語の比較研究を行うためには、片方の言語の概念を応用して、考察することが必要であると考える。

上記の問題があって、日本語とタイ語の対照研究においても、原因・理由文に関する研究は互いの言語の相違点と共通点がまだ明らかになっていない点が多くある。故に、日本語とタイ語の対照研究をさらに発展させるためには、原因・理由文をさらに比較考察する必要がある。

一方、接続マーカーを用いないものもある。

30） เมาไม่ขับ

maw　máy　khàp

酔う　NEG　運転する

酔っぱらったら運転しない

例文 30）は圧縮された文で、「酔ったら運転しない」という意味でを表す。

31） เดินตามหลังผู้ใหญ่หมาไม่กัด

dəən　taam　lăn　phûu-yày　măa　máy　kàt

歩く　従う　後　大人　犬　NEG　咬む

大人の後を歩けば犬は咬まない（タイの諺）

例文 31）は条件節とその帰結文による構成で、これも接続マーカーがなく、前後の意味関係から判断される。ただし、このような文構造については口語的な要素も強く、本研究の対象としない。

また、語用論的な観点からは、原因・理由文は次のように注意喚起文には必要不可欠なものである。広告、標示などに多用される。

32a） 可燃物なので、火のそばに置かないでください。（レジ袋の標示警告文）

32b） 突起物や重いものを入れると敗れることがありますので、ご注意ください。（同上）

32c） 摩擦により衣服に色が付く場合がありますので、こすらないようにしてください。（同上）

例文 32a）のように原因・理由節の内部には条件節を含んで複合複文化した構造をもつものもある。また、33）は「（ない）ように」という目的節を含む構文であるが、「子供がかぶって遊ぶことがあるので」のように現実には原因・理由文として認識されることが多いと思われる。

33）　この袋を幼児や子どもがかぶって遊ばないよう使用・保管にはご注意ください。
⇒この袋を幼児や子どもがかぶって遊ぶことがあるので、使用・保管にはご注意ください。
（レジ袋の標示警告文）

また、「手紙をもらって安心した」のような文ではタイ語では「手紙をもらったことが私を安心させた」のように使役構文を用いることがあり、原因・理由文と使役文の相関関係についても考察する必要がある。

34）　手紙をもらって安心しました。
ได้รับจดหมาย ทำให้ฉันโล่งใจ

dây-ráp	còtmǎay	tham-hây	chǎn	lɔ́ŋcay
貰う	手紙	COUS	私	安心する

また、日本語では、次のような「んだ」「のだ」は、前文を説明する機能を持つ。

35）　a. 今日、早退させていただきたいのですが。子どもが熱を出しているんです。
b. 子どもが熱を出しているので、今日、早退させていただきたいのですが。

さらに、次のような「からだ」が全文を説明する形式も複文と見なされる。

36）　a. 昨日連絡しなかったのは、もう夜遅かったからです。
b. なぜ昨日連絡しなかったかというと、もう夜遅かったからです。

日本語では、対話で用いられる接続詞「それで」「だから」、また説明文に用いる「したがって」も文の階層構造から見れば複文を拡充したものである。

37）　a. 夫が浮気しまして。
――それであなたは裁判を起こすというんですか。
b. 私はもうあの人と会わないことにしました。
――だから、あの人と付き合わないほうがいいと言ったでしょう。
38）　今回、世界記憶遺産には登録が見送られました。従いまして、次回に申請となります。

しかし、こうした複文現象は本研究の考察対象とはしない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本語とタイ語の比較対照をすることによって、両言語における原因・理由表現の共通点および相違点を明らかにすることである。ここでは、既に研究されている日本語とタイ語に

おける文構造と表現の意味用法を解説することだけではなく、両言語における文構造と表現の意味・用法、そして分類方法などに関する新しい発見をすることも含む。特に、筆者は複文の構造および接続表現に関心を持ち、原因・理由文における対照研究を中心とする。日本語における原因・理由表現は多種多様であり、意味と用法の分析と分類に関する研究も多数ある。例えば「から」と「ので」など、互いに非常に似ている表現で、同じようによく使われている表現であっても、相違点があるということが多くの研究で述べられている。例えば、尾方理恵（1993）や岩崎卓（1995）などがそれに該当する。それでも、それぞれの用法における特徴の解説もまだ完全ではない部分があると考えられ、前田直子（2009）や田村早苗（2013）などの研究が続けられている。それほど日本語における原因・理由表現は難しい課題であり、奥がまだ深く、単純なものではないということが分かる。それに対して、タイ語における原因・理由表現と言えば、様々なものがあるにも関わらず、それぞれの意味と用法の違いがよく分からない表現が多くある。それぞれの表現の意味・用法の特徴を詳しく研究されたことがない表現が多いからである。例えば、Debi（2001）ではタイ語における因果関係を表す表現が大よそ 80 つもあると述べているが、それぞれの表現の違いに関しては、まだ明確になっていないものが殆どである。Phraya Upphakitsilpasan（1937）や Kamchai（2009）などでは、phráʔ、cuŋ、leey、daŋnán など、一部の因果関係を表す表現が取りあげられているものの、それらの相違点については殆ど触れていない。つまり、日本語における研究と比べて、タイ語における研究の方が遅れているといえる。タイ語の研究を発展させるためにも、研究が進んでいる日本語と比較研究を行うことが必要であると考える。故に、本研究はタイにおいて、言語学における研究を発展させるという目的も持っている。

3. 近年における複文研究の現状

複文研究は文研究の最も重要な課題のひとつである。しかし、一口に複文といっても上述のように文の観察する立場から絶対唯一の定義が確率されているわけではない。ここでは一般的に複文と認定されるものを、日本語をベースにして整理してみたい。

まず、複文は大きく連用表現と連体表現とに分類されよう。前者にはいわゆる従属節とされる副詞節と帰結節とされる主節による構文があげられる。条件構文、因果構文、目的構文、附帯状況文、時間節構文などがあげられる。また、補文を含む、すなわち「こと」「の」「ところ」などを受ける補文節もこのなかに含めてよいだろう。これらの個々の構文をめぐってはこれまで実に夥しい程の数の研究が蓄積されている。田中（2004c）、田中（2010）、前田（2006）、前田（2009）などはその代表的な成果である。また引用節の研究では藤田（2006）などの研究があり、「という」の介在をめぐる研究も少なくない。このうち、とくに条件構文の研究は盛んで、益岡編（2006）『条件表現の対照』では日本語を核として複数言語の条件表現の対照研究の成果を提示している。なお、複文表現として昨今、複合辞と称してさまざまな形式をめぐる研究も進められている。一方、連体節では連体修飾構造の詳細な研究が進んでおり、加藤（2003）、大島（2010）などの成果が重要である。

さらに文の拡張された事象については接続詞、接続助辞をめぐる研究、また談話における複文の研究など、砂川（2005）などにみられる、より大きなスケールでの研究も緒についたばかりの感がある。こうしてみると、複文の内包する領域は非常に広く、本研究で扱う因果構文はその一部に過ぎない。とはいえ、因果構文の研究を通じて、複文における主体、意志の問題など、他の複文領域にまたがる

本質的な接続の意味構造の解明が期待されるし、またこの成果を援用して、他の複文構造の本質に迫ることも可能であろう。本研究では原因・理由文（因果構文）の前文の意味、また後文の意味、さらに双方の統合的な意味構造がどのような伝達的な意味を有しているかを明らかにするために、日本語とタイ語の対照を研究の立場から、考察を試みるものである。

4. 本研究の構成

本研究は、序章と終章を含めて、6 章で構成する。序章では、研究の背景と目的、および研究の構成について述べる。また、例文の取り扱い、そして特別な記号などの解説についても述べる。さらに、文の構造に関する概念と本研究の立ち位置についても述べる。

第 1 章は、原因・理由文の分類方法に関する対照研究である。日本語における原因・理由文および原因・理由表現は、それぞれの特徴によって分類されているが、タイ語ではそのような分類はされていない。そのため、タイ語における原因・理由表現の用法もバラバラであり、纏まりがない部分がある。本研究では、日本語における原因・理由表現の分類方法を参考にして、タイ語の原因・理由表現の分類を試みる。また、タイ語の原因・理由表現の分類と特徴からみて、日本語における原因・理由表現の分類と特徴についても改めて考察する。この章では日本語における原因・理由表現の分類を元にして考察するため、「原因・理由を表わす原因・理由文」「判断の根拠を表わす原因・理由文」「可能条件を提示する原因・理由文」の三節に分けて考察する。また、最後に「タイ語の複文と重文における原因・理由文」についても考察する。また、原因・理由節で用いられる接続表現についても述べる。日本語における原因・理由表現とはどういうものか、タイ語における原因・理由表現とはどういうものかについて考察する。上記の分類方法に関する内容も参考にして、改めて両言語における原因・理由表現の共通点および相違点について述べる。

第 2 章では、原因・理由表現をめぐる日タイ対照研究の手始めとして、「から」と「ので」の機能特徴を中心にして、タイ語における原因・理由表現との比較について述べる。日本語では最も一般的に使われていると思われている「から」と「ので」のそれぞれの特徴、共通点、相違点について考察する。そして、タイ語における原因・理由表現を同様に考察する。タイ語では、最も一般的に使われていると思われている因果関係を表すマーカーには phrɔ̂ʔ と cɯŋ があり、この二つの表現の特徴、共通点、相違点について考察し、日本語の「から」と「ので」との比較考察を試みる。さらに、原因・理由を表す述語のテ形、そして原因・理由を表す表現が表記しない原因・理由文についても述べる。特にタイ語では句点を用いないため、文の区切りが曖昧な場合がある。その場合、原因・理由を表すマーカーを用いなくても、前文と後文とにおいて意味的な因果関係が成立する場合がある。ただし、この現象については本研究では詳しく議論しない。

第 3 章では、事態系の原因・理由表現を中心にして、タイ語と比較して述べる。日本語における原因・理由表現に一種として、事態系という原因・理由表現がある。この種類の原因・理由表現はどのような特徴があるかについて考察し、タイ語にもそのような特徴を持つ原因・理由表現があるかどうかを考察する。主に、日本語の事態系の原因・理由表現はどのようなタイ語の原因・理由表現に訳せるかを検討し、両言語の表現の間にある共通点と相違点を明にすることを試みる。対照研究の対象として、日本語における事態系の原因・理由表現である「ために」「せいで」「おかげで」「あまり（に）」「だけに」「だけあって」を選び、タイ語と比較考察する。

第 4 章では、判断系の原因・理由表現を中心にして、タイ語と比較して述べる。第 3 章と同様、判断系の原因・理由表現は日本語における原因・理由表現の一種であり、この種類の原因・理由表現の特徴について述べ、それらの表現に近いものはタイ語にはあるかを検討する。対照研究の対象として、日本語における判断系の原因・理由表現である「のだから」と「からこそ」を選び、タイ語と比較考察する。

終章では、各章のまとめ、及び本研究全体で明らかにされたこと、さらに残された諸問題とともに、今後の研究課題について述べる。

5. タイ語の表記について

本研究で使用するタイ語の IPA 表記は、田中（2004a）と宇戸（2008）を参考にする。

5.1 子音の表記

タイ語における子音の表記は、田中（2004a）により、以下の表にまとめる。

表 0.1 子音（頭子音・末子音）一覧

	唇音	唇歯音	歯音	硬口蓋音	軟口蓋音	喉音
無声有気閉鎖音	P		*t	c	*k	*ʔ
無無有気閉鎖音	ph		th	ch	Kh	
有声閉鎖音	*b		*d			
摩擦音		F	s			
鼻音	*m		*n		*ŋ	
流音			r , l			
半母音	*o/w			*i/y		

ʔ は音声閉鎖音

* は末子音にも使用される

（田中 2004a より）

なお、音声閉鎖音は、田中（2004a）における子音一覧では ʔ で表記しているが、宇戸（2008）では ʔ で表記している。本研究では、宇戸（2008）と同様、 ʔ を使用する。

5.2 母音の表記

タイ語における基本母音の表記は、田中（2004a）により、以下の表にまとめる。単母音は、短母音と長母音に分ける。

表 0.2　母音の一覧（単母音・二重母音）

単母音		二重母音
短母音	長母音	ai
a	aa	ua
i	ii	ia
ɯ	ɯɯ	ɯa
u	uu	au
e	ee	ai
ɛ	ɛɛ	aw
o	oo	əəi
ɔ	ɔɔ	
ə	əə	

（田中 2004a より）

5.3　声調

タイ語では、声調が 5 段階ある。田中（2004a）では、次のようにまとめる。

表 0.3　タイ語の声調

	平声	Mid-tone
＼	低声	Low-tone
∧	下声	Falling-tone
／	高声	High-tone
∨	上声	Rising-tone

（田中 2004a より）

6.　本研究で扱う例文について

本研究で扱う例文については、小説からとった用例を中心とし、比較考察をする際には、翻訳された作品からとった用例も使用した。日本語からタイ語に翻訳された作品とタイ語から日本語に翻訳された作品を両方とも扱うが、日本語が原作である作品のほうが多い。また、対訳された用例の中には、翻訳の偏りがある場合があり、表現の意味・用法などを比較して論じることができない場合も多いため、筆者による訳例を使用する場合がある。また、文構造や表現の意味・用法を比較して論じる際に、表現を置き換えるなどで例文の一部を改変した作例を使用する場合もある。これらの作例は、可能な限り客観性があるものを採用するため、複数のタイ語母語話者に確認することを心がけた。さらに、インターネットからとった用例も使用した。主に、インターネット検索エンジン（www.google.com）、新聞サイト（毎日新聞、産経新聞、YOMIURI ONLINE、讀賣報知写真館）、インターネット掲示板（教えて!goo、Pantip）、コーパス（KOTONOHA）などからとった用例を使用した。なお、例文は原文が日本語である場合、日本語の例文を先行提示した。逆に、原文がタイ語である場合、タイ語の例

文を先行提示する。また、タイ語文の下にはその文のタイ語のIPA表記を提示し、タイ語表記の下にはグロス、すなわち各単語の日本語の直訳を提示した。それぞれの用例の出典は、その例文の後に提示した。タイ語文の出典の直前には≪タイ語≫と表示し、日本語文の出典の直前には≪日本語≫と表示した。日本語文とタイ語文が両方とも同じ出典の場合、≪日タイ≫と表示した。ただし、翻訳文がない例文は、その言語の文の出典のみを提示する。出典の明記がない例文は筆者による翻訳または作例である。

第 1 章

原因・理由文と原因・理由表現について

1.1　原因・理由文について

本章では、日本語とタイ語における原因・理由文のこと、原因・理由文で用いられている原因・理由を表す表現のことを比較考察する。日本語では、複文の構造を持ち、原因と結果という関係で構成されている文の一部を、原因・理由文と称している。複文とは、主節と従属節という二つの節が含まれている文のことである。一般的には、文全体の一番重要な内容を持っている部分は主節であり、その主節を修飾する節は従属節である。言い換えれば、文の中の節が節によって修飾された構造が複文である。そして、日本語とタイ語、両言語においての複文は、主節と従属節で構成されている構文であるが、両言語の間には、文の分類に関する相違点がある。その相違点によって、複文と重文という文の分類が混同しているものがあり、複文を重文から分けて考察すること、または従属節を分類することが困難になる場合がある。

序章の 1.3 の項目で述べたとおり、タイ語では、文の中で原因・理由と結果になりうる節を含む文は、複文と重文の二つに分けられるという概念がある。前文が原因を表わし、後文が結果を表わす場合、その文は重文であるという概念がある。逆に、前文が結果を表わし、後文が原因を表わす場合、その文は複文であるという概念がある。それに対して、日本語では原因・理由文といえば、やはり前節が原因・理由であり、後節が結果である場合の文構造に限定されている。よって、タイ語における原因・理由節および複文構造の定義では日本語と異なる部分がある。また、その「原因・理由文」という文構造の名称も定着しているものではなく、共有の概念を持つ名称ではないと考える。原因・理由文を、原因・理由と結果を含む文のことを示す場合があり、文の中の原因・理由になりうる部分だけのことを示す場合もある。

まず、本研究では、日本語における原因・理由分はどういうものを示すかについて、本項目で述べる。日本語における「原因・理由文」はその名称からして「文」であり、「節」ではない。よって、「原因・理由文」を称する場合、句点まで含む構造を示す。そして、「原因・理由文」は元々複文の構造における従属節の分類から生まれた文構造であり、複文の中にある従属節が主節の原因・理由を表す場合の名称である。よって、従属節が原因・理由であり、主節が結果である構造に限定し、「原因・理由文」という名称を用いる。さらに、本研究では、節と節の間に原因・理由と結果という関係を「因果関係」と称する。因果というのは即ち、「原因と結果」のことであり、片方が原因で片方が結果に分けられる関係であれば、原因と結果の順番を問わず、「因果関係」と呼ぶ、そして、因果関係を持つ文の構造を、「因果構文」と呼ぶ。言い換えれば、日本語において、従属節が主節の原因・理由である場合の文構造を「原因・理由文」と呼び、「因果構文」とも呼ぶ。一方、従属節が主節の結果である場合の文構造を「原因・理由文」とは呼ばないが、この場合も「因果構文」と呼ぶ。

次は、タイ語においての原因・理由文について述べる。タイ語において、文の中で原因・理由と結果の関係を持つ文の構造は、複文と重文の構造に分けられる。それでも日本語と同様、原因・理由と結果に分けられる場合であれば、いずれも「因果構文」と呼ぶ。しかし、タイ語では句点がないため、どこまでが文でどこまでが節であるかを分析することが難しい場合がある。さらにいうと、タイ語では、文と節の違いは日本語ほどはっきりとしない部分があるため、主節と従属節で構成されている文を、文と文で構成されているから見分けることが難しい。日本語の場合では、主節と従属節の関係で、「原因・理由文」を定義することが可能であるが、タイ語では「複文」であることを定義することすら困難である。

Phraya Upphakitsilpasan（1937）によれば、文の中にある原因・理由と結果の関係が、結果から原因・理由の順番である場合は複文であり、原因・理由から結果の順番である場合は重文であると述べている。タイ語の語順は日本語の逆であるため、文の重要な部分も逆である。つまり、日本語では原因・理由である従属節から結果である主節という順番の文構造が複文構造であり、原因・理由文であるのに対し、タイ語では結果から原因・理由という順番で構成されている構文が複文である。

また、タイ語において、文のメインの内容である部分は前件であり、それを修飾するのは後件である。要するに、日本語の分類方法を応用して、従属節の意味で複文を分類する、つまりメインの部分を修飾する部分の意味から文構造の名称を与えるならば、結果から原因・理由という順番の構造を持つ文は、タイ語の「原因・理由文」である。それに対して、原因・理由から結果という順番の構造を持つ文は、「結果文」または「結果誘導文」と呼ぶべきであろう。この「結果文」という文の構造は、タイ語では重文として分類されているが、構造的ではなく、意味的に考えれば、複文と同じ分類方法で「結果文」として称することが不自然ではないと考える。最も、タイ語における重文は、文と文で構成されている構文を示すものであるが、意味的に考えれば、原因と結果に分けられるのは原因・理由文である複文とは変わらないといえる。故に、主節であるか従属節であるかとは関係なく、前件が結果であり、後件が原因・理由である場合、本研究ではその文構造を「原因・理由文」と呼ぶ。

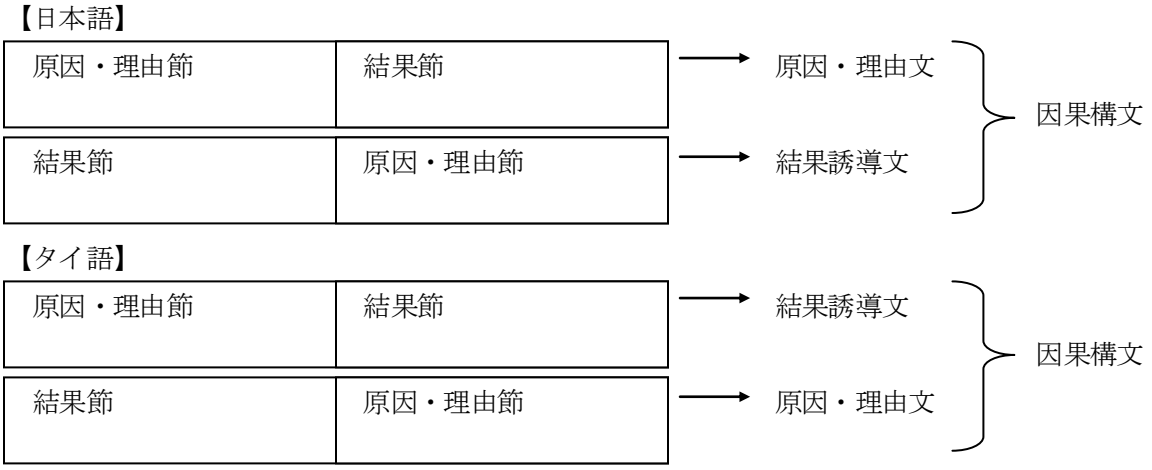
一方、前件が原因・理由であり、後件が結果である場合、本研究ではその文構造を「結果文」または「結果誘導文」と呼ぶ。そして、両方とも因果関係を持つ構文であるため、両方とも「因果構文」と呼ぶ。さらに、日本語では従属節が主節の原因である場合を「原因・理由文」と呼ぶが、その逆の構造がないというわけではない。メインである部分が原因・理由、つまり主節が原因・理由である場合、本研究では日本語の場合もタイ語と同様、「結果誘導文」と呼ぶ。一般的には、「～した原因は～」や「～の原因は～」などの表現が用いる場合である。以下のように、それぞれの名称を次の表でまとめる。

表 1.1　文構造の名称と定義の分け方

	構造	構造的名称	意味的名称	
日本語	原因＋結果	複文	原因・理由文	因果構文
	結果＋原因	複文	結果誘導文	
タイ語	原因＋結果	複文	結果誘導文	
	結果＋原因	重文	原因・理由文	

上記に述べたとおり、日本語とタイ語、両言語ともに原因と結果の関係で構成されている構文は「因果構文」と呼ぶ。そして、原因・理由と結果の順番によって、日本語とタイ語における分類はそれぞれ異なっているが、「原因・理由文」と「結果誘導文」の二分類に分けられる。さらに、タイ語ではそれぞれを構造的に「複文」と「重文」に分けられるが、日本語ではいずれの場合も「複文」である。

図 1.1　因果構文における文および節の名称



また、文全体の名称を「原因・理由文」と「結果誘導文」に分けるが、文の中にある原因・理由である部分は「原因・理由節」と呼び、結果である部分を「結果節」と呼ぶ。タイ語の複文に関して述べている先行研究は、Phraya Upphakitsilpasan（1937）のほかに、Kamchai（2009）、Paasinee（1981）、Methawee（2001）などがある。タイ語の複文の先行研究は、複文構造の分類や特徴などを分析するものが多いが、表現または文法自体の機能特徴を分析するものは少ない。タイの因果構文でよく使用されている表現である phrɔ́ʔや cɯŋ などの細かい分析なども見られない。

さらにいえば、タイ語の表現自体の機能特徴を分析したものがまだ少ないことが、日本語と比較対照した研究も少ない原因になると考える。日本語と比較対照したものの中には、富田（1957）や田中（2002）などのタイ語の複文と接続表現の内容が含まれている比較研究が存在する。そして、比較研究がまだ少ないため、富田（1957）と田中（2002）を先行研究として参考にする。その他には、比較研究ではなく、タイ語のみの研究と日本語のみの研究を先行研究として扱う。

1.2　日本語とタイ語の原因・理由文

日本語では、基本的に原因・理由文は複文構造の分類に含まれており、主節と従属節が因果関係で結ばれている文構造のことである。そして、原因・理由節とは、広義の条件節の一つであり、ある事態を引き起こす原因を表わす従属節のことである。つまり、ある結果の原因・理由を述べる条件節の一つである。日本語における原因・理由節が含む複文では、主節が結果を表わすものとなる。

1.2.1　日本語の原因・理由文と原因・理由表現

日本語の原因・理由文では「から」「ので」「ために」「せいで」「おかげで」など多義多様である。また、以下のようなものも原因・理由節と呼べるものである。

1)　体が丈夫だからといって、無理をしてはいけない。
2)　さんざん迷った結果、留学をあきらめることにした。
3)　社長は興奮のあまり、入れ歯をはずしてしまった。
4)　さすがに横綱だけあって／だけに、勝ち方も安定している。
5)　なぜ京都がいいかといえば、伝統文化が残っているからだ。
6)　あの人に会いにいったのは、借金があったからだ。

例文 1）から 3）までのように、日本語では原因・理由表現は接続表現であり、前件と後件を因果関係で結びつける表現である。また、4）のように「さすがに」など他の表現と一緒に用いる慣用的な原因・理由表現も存在する。そして、5）と 6）のように、文末に用いる原因・理由表現もある。

1.2.1.1　接続表現である原因・理由表現について

複文は主節と従属節で構成されているが、その主節と従属節を結び付ける表現も重要である。原因・理由文であれば、原因・理由を表す接続表現が必要である。まず、その中でもよく見られる「から」と「ので」を取りあげる。次の例文 7）と 9）は「ので」の例文であり、例文 8）と 10）は「から」の例文である。

7)　今日は弁当を忘れたので、食堂で昼ごはんを食べた。
8)　途中で道に迷ったから、遅れて来た。
9)　大きな小屋から山賊達が手に手にライフルを持って出てきて、岩の陰に隠れましたが全然どこから撃たれているのか分からないので混乱していました。
（時雨沢恵一『キノの旅VI』）
10)　私は十年の刑期が確定して、交通刑務所に入った。仕事も生活も全て失った。まあ、既に両親も亡くなっていて独り身だったから、悲します人は少なかったけれどね。
（時雨沢恵一『キノの旅VI』）

例文 7）では、「今日は弁当を忘れた」という従属節が原因・理由で、主節の「食堂で昼ごはんを食べた」という結果になった。一方、例文 8）では、「途中で道に迷った」が原因で、「遅れて来た」が結果である。例文 7）と 8）と同様に、例文 9）の「ので」が用いられている「全然どこから撃たれているのか分からない」という節、例文 10）の「から」が用いられている「既に両親も亡くなっていて独り身だった」という節は、原因・理由節である。さらに言うと、7）、9）の「ので」節は中立的叙述であり、事態本位の客観的な表現である。一方、8）、10）の「から」節は文脈に強く依存しており、前提として「なぜ～か」という質問文を想定している。このように、原因・理由節は、

主節の事態を引き起こすものである。言い換えれば、もしその原因・理由節の事態がなければ、主節の事態も発生しないともいえる。

「から」と「ので」は、両方とも原因・理由節でよく使われており、置き換えることが可能な場合も多い。そのため、「から」と「ので」が表わす意味は、ほぼ同じであると考えられる。しかし、形式に関しては違いがある。田中（2004a）によれば、「から」は文末呈示の用法が最初の認識としてあり、接続呈示の用法がその埋め込み文であると述べている。一方、「ので」の方は、接続呈示の用法が一般的であり、文末呈示の用法はとくに意識されていないと述べている。つまり、「から」の用法は「～から。」のように、文末に置くことが最初の認識である。逆に「ので」の最初の認識は、「～ので、～」のような接続表現の形式である。そのため、「から」の方は、普通に文末に置くことが可能であり、述語化することが可能である。しかし、「ので」の方は一般的には述語化することができない。

11a） 先に帰ったのは、具合が悪かったからです。
＊11b） 先に帰ったのは、具合が悪かったのでです。

上記の例文 11a）のように、「から」は終助詞的な用法を持ち、文末に置くことができる。それに対して、例文 11b）のように、「ので」は述語化するために文末に置くことが一般的ではない。同様に、次の例文 12a）と 12b）のように、文末がナ形容詞または名詞の場合、「だからです」は見られるが、「なのでです」は用いられない。

12a） もちろん、瞬間接着剤が危険だからですよ。だって、あれが指について取れなくなったらどうするんですか？　目に入ったら？　子供が飲んじゃったら？　そりゃあもう、取り返しのつかないことになりますよ。

（時雨沢恵一『キノの旅VI』）

＊12b） もちろん、瞬間接着剤が危険なのですよ。だって、あれが指について取れなくなったらどうするんですか？　目に入ったら？　子供が飲んじゃったら？　そりゃあもう、取り返しのつかないことになりますよ。

実際、「ので」が文末に置かれることもよく見られるが、その場合、終助詞「ね」は使われるが、「だ」や「です」が後に来ることがない。つまり、文末にある「ので」は「から」と違い、述語化するためのものではないといえる。また、その後に来る部分が省略されただけであるとも考えられる。

13） 具合が悪かったので…（先に帰りました）
14） いえ、アルコールは飲みませんので。

（時雨沢恵一『キノの旅IV』）

例文 13）のように、「ので」は文末にあるが、この文は単に「先に帰りました」という主節が省略されただけであると考えられる。一方、例文 14）では酒に勧められたが、断ったという場面である。つまり「飲みません」という節が省略された。その他、「から」には「のだから」「からこそ」や「からには」「からといって」などの助詞が接続した形式も存在するが、「ので」にはないという違いもある。また、「から」と「ので」はほぼ同じ意味で表わすが、意味用法に関する相違点がないわけでもない。丁寧な文体では比較的に「から」より「ので」の方が現れやすいという相違点が存在する。他にも、田中（2004a）によれば、「から」の方は「どうして」という疑問文に答える応答文がもととなって生成されたものであると述べている。それと比べて、「ので」は「どうして」という疑問を背後に感じさせないとも述べている。つまり、「ので」の方が文の背後関係を踏まえず、単に因果関係を表わすだけともいえる。

15）　「どうして遅刻したのか？」
「遅刻したのは道に迷ったからだ」（迷わなかったら、遅刻しなかったはずだ）
「道に迷ったので（遅刻した）」

上記の例文 15）のように、「から」は「ので」と比べて、文の背後関係を踏まえて質問を答えるものであるという印象が強いと考えられる。当然ながら、「どうして」の他に、「なぜ」などの疑問文に対しても「から」の使用も見られる。

16）　「キノさん。あなたは、私を撃とうと思えば撃てた。どうして？」
「ボクは神様ではありませんから。それだけです」
（時雨沢恵一『キノの旅VI』）

17）　「もう一つ聞きたいんですけど。どこへ行っても棚が低いのは、なぜです？」
「高いところに物を置くと、落ちてきた時に危険だからです。」
（時雨沢恵一『キノの旅VI』）

このように、「から」と「ので」は両方とも原因・因果関係を表わす表現であり、ほぼ同じ意味を表わすものであるが、形式と意味用法に関する相違点が存在する。「から」と「ので」に関する考察は、また第 2 章で考察することとし、次は「から」と「ので」以外の原因・理由表現を用いる原因・理由も取りあげてみる。

18）　りょうは上下の歯が前にせり出しているせいで、口全体が鶏のくちばしのようにとがっている。
（岩井三四二『竹千代を盗め』）

19）　子連れなもので、一泊で帰らなきゃいけないんですけど。
（赤川次郎『茜色のプロムナード』）

20）　この四年間、あれだけ不愉快な思いをさせられたのだから、これくらいの意趣返しは当然だ。

（永嶋恵美『あなたの恋人、強奪します。泥棒猫ヒナコの事件簿』）

原因・理由表現は「から」と「ので」のほかに、18）から20）のように様々ある。そして、「から」と「ので」と異なり、単純に原因・理由を表すだけではないものもある。例えば、18）の「せいで」は原因・理由を表す上に、その原因・理由の結果は望ましくない事態であることも表す。言い換えれば、原因・理由が悪いという意味を表してるともいえる。19）の「もので」は、「から」と「ので」に類似しているように見えるが、「もので」のほうは原因・理由が不本意または予定外などの意味も含み、その結果は自分の責任ではないという意味も表わしている。20）の「のだから」は、原因・理由が話し手の判断の根拠であることも表している。その他、原因・理由を表していない場合の原因・理由表現も存在する。

21）　「ちょっと待って。今そちらへいくから」

（<http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/>2015/05/25 アクセス）

前田（2009）では、「から」は原因・理由を表しているとは言いがたい場合があると述べている。また、このような「から」は可能の条件を提示している場合があるとも述べている。例文57）の「から」も原因・理由を表しているとは言いがたいと考えられる。このように、同じ接続表現である原因・理由表現でも、日本語ではさまざまな表現があり、それぞれの表現はそれぞれの特徴がある。

1.2.1.2　文末表現・述語的な表現である原因・理由表現について

日本語における原因・理由表現は複文の接続表現のほかに、文末で用いる表現もある。例えば、「～からだ」「～わけだ」「～おかげだ」「～せいだ」「～からこそだ」などである。要するに、「だ」が接続して、述語になる原因・理由表現である。また、述語的な表現であるため、必ず文末ではなく、「～という」「～って」「～が」などの表現が続く場合もある。

22）　私はあなたの意見を軽蔑までしなかったけれども、決して尊敬を払い得る程度にはなれなかった。あなたの考えには何らの背景もなかったし、あなたは自分の過去をもつには余りに若過ぎたからです。

（夏目漱石『こころ』）

23）　過酷な環境を生き抜くためには、体内にどれだけ内臓脂肪を蓄えているかが、生存のカギをにぎっていました。内臓脂肪を多く蓄えるほど、生存に有利だったわけです。

（南雲吉則『「空腹」が人を健康にする』）

24）今回の修復工事中では歴史的な発見もありました。まず、大天守最上階北側の軒下で謎の家紋が見つかったのです。歴代城主のものではなく、何を意味するのか不明。工事の際に至近距離で壁面を観察できたおかげです。

（<http://www.yomiuri.co.jp/>2015/05/26 アクセス）

25） 平岡は驚ろいた様に代助を見た。その眼が血ばしっている。二三日能よく眠らない所為だと云う。

（夏目漱石『それから』）

26） 細身の体で剣を構える姿は、まさに、「武士はくわねど」そのままの清く貧しい侍のよう。たった一瞬斬られるだけの場面のために、黙々と一人で稽古に励む。そのストイックな姿が、妖しい殺気をはらむのは、福本が演じるからこそだ。

（<http://www.yomiuri.co.jp/>2015/06/08 アクセス）

これらの表現も原因・理由を表すが、前件と後件の接続の形ではなく、前々の文の原因・理由を表す形で用いられている。または、会話で相手の返答としても用いられている。述語の用法で用いられる原因・理由表現は多数あるが、「ので」は「だ」と接続して「のでだ」の形で用いることはできない。ところが、言いさし文または返答の場合では文末に「ので」を用いる場合もある。

27） 「ああ、なるほど。旅人さんが何か忘れ物を思い出されたのですね。それは、私達が弁償いたします。無関係な貴方を巻き込んでしまって、大変申し訳なく思っています」
「いいえ、いいです。大したものではありませんので」

（時雨沢恵一『キノの旅Ⅲ』）

また、「だ」ではなく、「ので」が「な」と接続して用いられる場合もある。

28） 「そんなことは構わないんです。じゃ、お一人で」
「うん。娘も遠くにいるのでな」

（赤川次郎『茜色のプロムナード』）

ただし、本研究では接続表現のみ分析の対象として取り扱うため、文末で用いる「から」や「ので」などは詳しく考察しない。さらに、「そうだとすると」など、複数の語から構成される接続詞相当形式の表現も考察を中心にしない。タイ語の場合では、pen-phɔ́ʔ-wâa や pen-hèet-hây など、複数の語からなる接続表現も見られるが、殆どはその元となっている phɔ́ʔと殆ど同じ意味・用法を持っている。日本語とタイ語を比較する場合、対訳の用例に複合的な原因・理由表現が出てくる場合もあり、考察の余地はあるが、日本語のほうはなるべく基本的な原因・理由表現に絞るため、複雑に構成されている接続詞相当形式の表現は比較考察の対象としない。

1.2.2　タイ語の原因・理由文と原因・理由表現

タイ語における複文の従属節は、文の中の役割によって、大きく 3 分類に分けられる。その中には、wísèetnaanú-prayòok というものがある。この wísèetnaanú-prayòok という従属節は、英語では adverb clause と呼び、複文の中の動詞、形容詞、形容動詞など、名詞か代名詞以外の要素を修飾するものである。富田（1957）はこの従属節を「副詞節」と呼び、田中（2002）は「修飾節」と呼ぶ。また、Phraya Upphakitsilpasan（1937）によれば、wísèetnaanú-prayòok はさらに六つの種類に分けられると述べている。その中の一つは、原因・理由を表わす文 wísèetnaanú-prayòok である。つまり、タイ語の原因・理由節は wísèetnaanú-prayòok の一種であり、原因・理由文はこの種類の従属節が含まれている複文である。タイ語の原因・理由節では、phrɔ́ʔという表現が代表的である。例えば、例文 29）と 30）である。

29）　เด็กร้องไห้<u>เพราะ</u>ถูกตี

dèk	rɔ́ɔŋhây	<u>phrɔ́ʔ</u>	thùuk	tii
子供	泣く	<u>CON</u>	PAS	叩く

子供は叩かれた<u>から</u>、泣いた。

30）　ผมเขียนมา<u>เพราะ</u>อยากให้ผู้อ่านทุกท่านคิดให้ดีดี

phòm	khìanmaa	<u>phrɔ́ʔ</u>	yàak-hây	phûuàan	thúktháan	khít	hâydiidii
僕	書いて送った	<u>CON</u>	して欲しい	読者	皆	考える	よく

僕は読者の皆さんによく考えて欲しい<u>ので</u>、書いて送りました。

≪タイ語≫（Piyawan SubSamruam：*Karn-dern-thaang khorng Kino 2*）

例文 29）と 30）では、phrɔ́ʔは主節の原因・理由を表わすために用いられている。phrɔ́ʔ自体は、英語の because、日本語の「から」に近い意味を持っているため、因果の関係を持つ複文の構造ではよく用いられている。例文 29）の従属節では、phrɔ́ʔを用いて、主節の動詞である rɔ́ɔŋhây の理由を表わすものである。日本語で言えば、主節の動詞である「泣く」の原因を表わすために、「から」が用いられていて、「叩かれた」という従属節で修飾していると同じである。また、それと同様に、例文 30）の従属節も phrɔ́ʔを用いて、主節の原因・理由を表わすことは、日本語文の主節である「書いて送りました」の原因・理由を表わすために、「ので」が用いられたことと同じである。このように phrɔ́ʔ自体は、単なる原因・理由を現す日本語の「から」と「ので」に近い意味を持っているため、多くの因果の関係を持つ文の構造で使われている。

また、例文 15）で述べた通り、日本語における原因・理由文は、「どうして」などの質問を背景にし、「のは」などを用いて、結果の部分を先に述べて、原因・理由の部分を後に「から」で述べることが可能である。タイ語の phrɔ́ʔ構文も似ているようなことをすることが可能であるが、原因・理由節と結果節を置き換える必要はない。なぜならば、タイ語における phrɔ́ʔ構文は、元々結果の部分を先に取り上げて、その原因・理由をその後で述べること構造となっているからである。ただし、日本語の場合、聞き手がすでに結果の部分を知り、話し手は聞き手がまだ知らないその結果の原因・理由を述べるという意味で、例文 15）のように「～のは」という表現が用いられている。それに対し、タイ語における通常の phrɔ́ʔ構文では、その「～のは」のニュアンスが表さないため、「～のは～から

だ」構文のニュアンスに近づくためには「thîi～phrɔ́ʔ～」の形式をとる必要がある。例えば、次の例文31）である。

31） ที่เขาไม่มา เพราะเขาไม่สบาย

thîi	khǎw	máy-maa	phrɔ́ʔ	khǎw	máy-saʔbaay
COMP	彼	来なかった	CON	彼	具合が悪かった

彼が来なかったのは、具合が悪かったからだ。

例文31）のタイ語文でのthîiは、指示詞であるが、関係代名詞でもある。この例文のthîiは、ある事柄を先に述べて、その事柄が成立することに関係する別の事柄を示すために用いられている。先に述べた事柄は聞き手がすでに知っている情報であり、その後の事柄は話し手が聞き手に提供する新しい情報である。または、聞き手が既に知っている情報であるが、先に述べた事柄の原因・理由は他ではなく後述の事柄であると話し手が主張する場合にも用いられる表現である。つまり、この場合のthîiは、日本語の「のは」と類似する働きをする表現であるといえる。また、例文31）は単に原因・理由を述べるだけではなく、「どうして来なかったか？」という質問に対しての原因・理由を述べることが前提で構成されている文であるともいえる。タイ語と日本語の間で、最も認識しやすい原因・理由文に関する相違点は節の順番であると考える。本章の1.1の項目の表1.1と図1.1で述べたように、日本語の語順はタイ語とは異なっている。そのため、一般的には例文29）と30）のように、日本語では原因・理由節は主節の前に置くが、タイ語では主節の後に置く。言い換えれば、原因・理由である従属節を先に述べるのが日本語における複文である原因・理由文の構造であり、原因・理由である部分を後で述べるのがタイ語における原因・理由文の構造であるといえる。とはいえ、タイ語には日本語における原因・理由文と同じ節順をもつ構文も存在する。例えば、次の例文32）である。

32） เขาขยันเรียน เขาจึงสอบผ่าน

khǎw	kaʔyàn	rian	khǎw	cɯŋ	sɔ̀ɔpphàan
彼	真面目	勉強	彼	CON	試験を合格する

彼は真面目に勉強したから、試験に合格した。

例文32）では、khǎw kaʔyàn rianは原因・理由であり、khǎw sɔ̀ɔpphàanは結果である。cɯŋは二つの節を因果関係で結び付けるために用いられている表現である。このように、タイ語では日本語における通常の原因・理由文と同じように、原因・理由節から結果節の順で因果関係を述べる構文もある。しかし、タイ語の場合では、32）ような構造は複文として認められていない。本章の1.1の項目の表1.1で述べたように、32）のような文構造は、重文として分類されている。

Phraya Upphakitsilpasan（1937）によれば、タイ語の複文構造では、主節の原因・理由を表わす用法と持つ従属節が、主節の後に置かなければならない法則があると述べている。その順番が逆の場合、その文は複文ではなく、重文であると述べている。また、タイ語ではhèettàwaaneeekkàtthà-prayòokという重文が存在する。Phraya Upphakitsilpasan（1937）とKamchai（2009）によれば、hèettàwaaneeekkàtthà-

prayòok は、前文と後文が因果関係で繋がっている重文であるが、この文では必ず「原因・理由」を表わす文が「結果」を表わす文の前に位置しなければならないと述べている。つまり、「原因・理由＋接続詞＋結果」という構造でなければならない。さらに、Phraya Upphakitsilpasan（1937）は、重文である因果構文では、接続表現 cɯŋ が必要であると述べている。つまり、32）のような因果構文では cɯŋ が一般的な表現である [1] 。なお、重文である因果構文では、原因・理由節と結果節を接続する表現が cɯŋ であるが、原因・理由節に phrɔ́ʔ も共起することが可能である。例えば、次の例文 33）のようにである。

33） เพราะเขาหน้าตาดี จึงมีคนชอบเยอะ

phrɔ́ʔ	khǎw	náataadii	cɯŋ	mii	khon	chɔ́ɔp	yɔ́ʔ
CON1	彼	格好いい	CON2	いる	人	好き	たくさん

彼は格好いいから、たくさんの人に好かれる。

例文 32）と 33）の因果関係の節順は、29）から 31）までのような複文構造とは逆であるが、意味的には日本語の原因・理由条件文とは変わらないと考える。つまり、phrɔ́ʔ〜cɯŋ〜という構造は、複文構造と認められていないが、日本語の複文構造である原因・理由条件文と同じ意味を表し、同じ語順を持っている。しかし、phrɔ́ʔ と cɯŋ の間には意味・用法に関する相違点がある。phrɔ́ʔ は、因果構文の中にある原因・理由節を示す表現であり、原因・理由を表す表現であるため、日本語の「から」や「ので」と同様であると考える。一方、cɯŋ はその逆であり、因果構文の中にある結果の部分を表す表現である。33）のように、phrɔ́ʔ の後は原因・理由であり、cɯŋ の後は結果である。この相違点があるため、phrɔ́ʔ は「から」の対訳として使用でき、「から」に対応しているといえるが、cɯŋ は「から」の対訳になりえるかどうかという問題がある。この問題を考察するためには、それぞれの表現の位置と修飾する部分から考察する必要がある。（序章の 1.3 の項目の図 0.0 参考）

日本語では、「から」は原因・理由節に位置する表現であると同様、タイ語の phrɔ́ʔ も原因・理由節に位置する表現である。それに対して、cɯŋ は結果節に位置する表現である。例文 32）の前節と後節をそれぞれに分けて、日本語とタイ語を比較すれば、「から」と phrɔ́ʔ と cɯŋ の違いが分かる。

34a） เพราะเขาขยันเรียน

phrɔ́ʔ	khǎw	kaʔyàn	rian
から	彼	真面目	勉強

彼は真面目に勉強したから…

#34b） เขาจึงสอบผ่าน

khǎw	cɯŋ	sɔ̀ɔpphàan
彼	CON	試験を合格する

その結果、彼は試験に合格した。

上記の 34a）では phrʔ́を「から」に当てはまることが可能であるが、34b）の cɯŋ に当てはまる表現はこの日本語文には存在しない。最も、34b）のタイ語文は、会話の始まり文として用いることは不可能であり、「結果はどうだった？」などの質問文の回答文としても用いられにくい。要するに、cɯŋ はこのような結果節だけで用いる用法はない。それに対して、日本語の場合では、「その結果～」などは用いられる。cɯŋ 自体は、この「その結果～」に近い意味・用法を持つとも考えられるが、34b）のタイ語文は実質ではそのまま用いられない文であるため、cɯŋ は「その結果～」に対応しているとも言い難い。34b）と 34b）を比較し、改めて 32）を見れば、日本語における原因・理由文の「から」に対応しているのは cɯŋ ではなく、phrʔ́のほうであることが明白である。さらに言うならば、タイ語の場合では原因・理由を述べた後、前節と後節の関係を表すためには、結果を表す表現が必要としているため、cɯŋ が用いられる。それに対して、日本語では前節と後節の関係を表す表現が原因・理由節の末に位置するため、結果を表す表現は不要である。故に、32）と 33）のようなタイ語文は日本語の原因・理由文と同じ語順を持っているものの、因果関係を表す表現のメカニズムが異なっているため、cɯŋ に対応している表現が日本語文の原因・理由文には存在しない。

34c）เขาสอบผ่าน

khǎw　　sɔ̀ɔpphàan

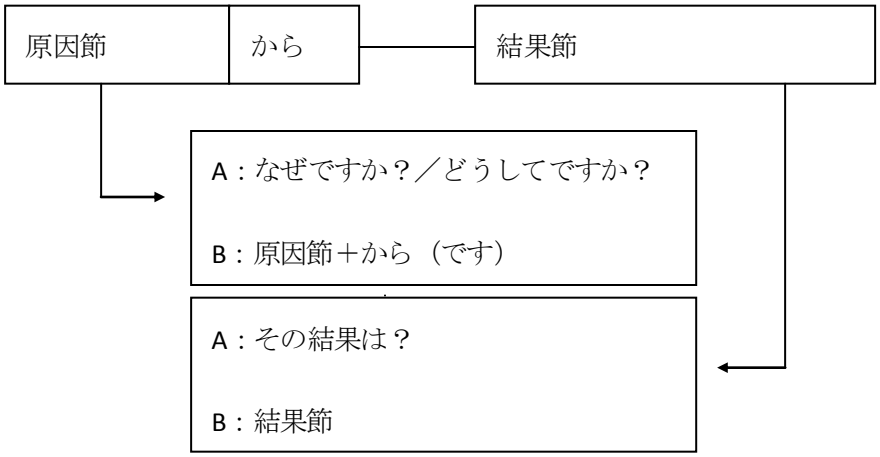
彼　　試験を合格する

彼は試験に合格した。

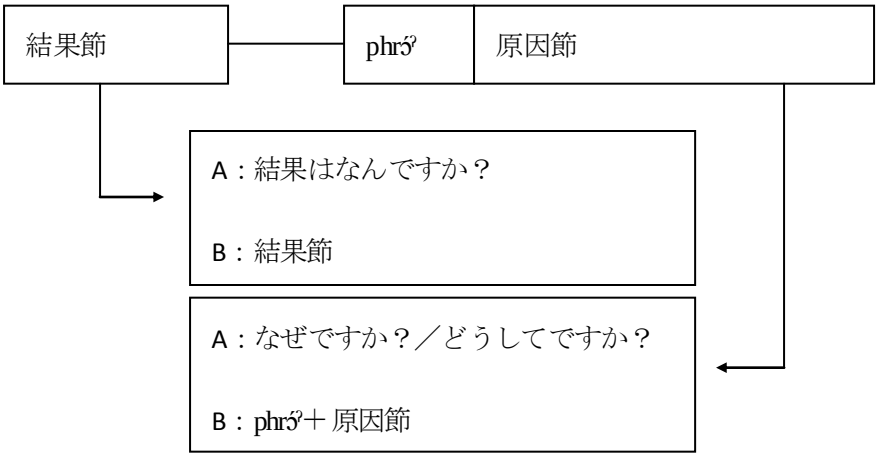
例文 34c）のような場合であれば、タイ語と日本語は互いに問題なく対訳文として用いられる。34c）の日本語文はそのまま 34a）の結果節として用いられるのに対し、タイ語では 34b）のような cɯŋ 構文にしなければ 34a）の結果節として用いられない点もまた両言語における因果関係を表す表現のメカニズムの違いが原因である。

図 1.2　日本語とタイ語における原因・理由節と結果節の応答変換の比較

【日本語】



【タイ語】（複文）



【タイ語】（重文）

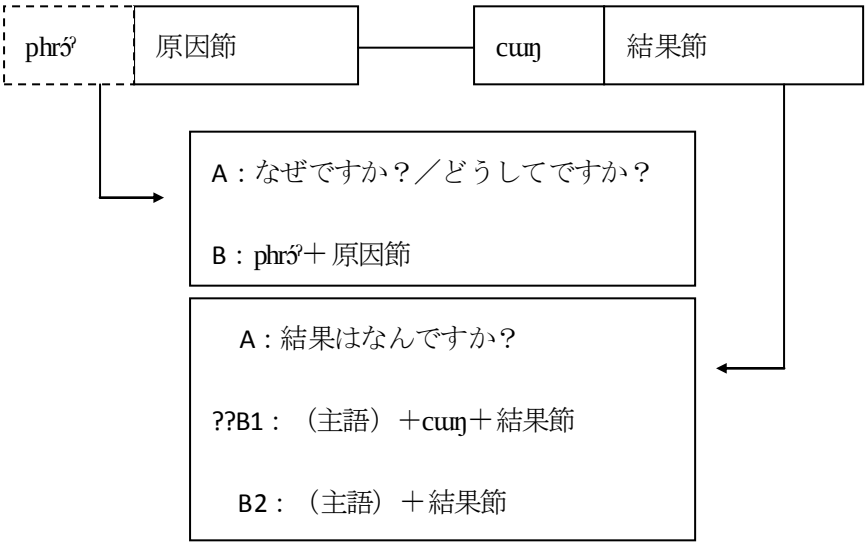


図 1.2 では、日本語の場合、基本的には原因・理由文の中にある原因・理由節は原因・理由を問いかける質問文の応答文として用いられ、結果節は結果を問いかける質問文の応答文として用いられる。「から」節は、一般的には一つの文として用いるためには文末に「だ」や「です」が必要であるが、会話などでは「だ」「です」がなくてもそのまま応答文として用いられないというわけでない。結果節のほうは、元々は複文の主節であるため、そのまま一つの文として用いることが可能である場合が多いと考える。

一方、タイ語の複文の方は、日本語と殆ど変わらず、原因・理由節と結果節がそのままそれぞれの質問文に応じる応答文として用いられると考える。タイ語の文では「だ」のような文末表現が元々必要ないため、複文から取った原因・理由節をその用いられる。結果節も同様である。ところが、タイ語の重文の方は、結果節がそのままでは応答文として自然に用いられない場合があるいと考える。答える文として用いる場合、cɯŋ は必要ない。また、重文の方では、原因・理由節から始まるため、原

因・理由節と結果節の主語が一緒の場合、結果節の主語が省略される場合が多い。そのため、重文の結果節を応答文として用いる場合、省略された主語も入れるべきの場合もある[(2)]。

なお、これはあくまでも日本語の方が「から」構文であり、タイ語の方が phrɔ́ʔ構文と cɯŋ 構文である場合を前提にした考察である。「から」以外にも様々な原因・理由を表す表現があり、タイ語では phrɔ́ʔと cɯŋ 以外にも因果関係を表す表現が数多ある。上記のような考察だけでは両言語における因果関係を表す表現のメカニズムを違いを全て解明することが出来るというわけではなく、さらに表現を取り上げ、それぞれの表現をさらに比較考察する必要がある。

1.3　因果構文と因果関係を表す表現の分類

本項目では、日本語における原因・理由表現の分類方法を用いて、タイ語の原因・理由表現を分類することを試みる。ただし、タイ語における原因・理由を表す表現のほかに、結果を表す表現も日本語と比較して考察する。日本語における原因・理由表現は、「から」と「ので」がよく見られるが、「ために」「だけに」「せいで」「おかげで」「のだから」「からには」「以上」「からこそ」など様々な表現があり、多種多様である。さらにいうならば、複文で使用されている接続表現だけではなく、文末表現の「～からだ」「～せいだ」などの形でも用いられ、文頭に使用されている「だから～」「だって～」などもある。さらに、それぞれの表現には原因・理由を表すほかに、限定的な意味・用法があるものもある。

原因・理由表現の数が多い故に、日本語の原因・理由表現に関する研究の数も多い。例えば、「から」と「ので」の丁寧さを中心にして考察している山本（2001）、原因・理由を表す「ため」と「によって」の比較研究を行っている池上（2008）、「から」「ので」のほかに原因・理由を表す「テ系」というものの特徴について考察している山下（1999）、「おかげで」と「せいで」のプラス性とマイナス性について比較考察している三浦（2007）などが取り上げられる。その中で、原因・理由文の分類、及びそれぞれの分類に使用されている原因・理由表現に関して述べている研究は、前田（2009）や益岡・田窪（1992）などがある。特に、前田（2009）は、益岡・田窪（1992）で述べられている原因・理由文の 2 種類のほかに、もう一つの種類の原因・理由文についても述べている。合わせて、原因・理由文とその表現は、3 種類に分けられている。本項目では、この分類方法を参考にして、タイ語の原因・理由表現を分類することを試みる。一方、タイ語では、節と節を因果関係で結び付ける場合、原因・理由を表す表現を用いるほかに、結果を表す表現を用いる場合もある。本章の 1.2.2 の項目で述べたとおり、cɯŋ という表現は、結果節に用いる表現であり、結果の部分を示す表現である。原因・理由を表す表現と結果を表す表現を合わせれば、タイ語における因果関係を表す表現は数多である。ところが、殆どの機能特徴の違いが明らかになっておらず、それらの表現の相違点を言及する研究も殆ど見当たらない。さらに、因果関係を表す表現の数が多いのは、よく用いられている表現から作られた複合的な表現も含まれているからであり、因果関係を表す表現の種類と機能の特徴が多いというわけではないと考える。とはいえ、タイ語における因果関係を表す表現の中にも、別の因果関係を表す表現に置き換えることが難しい場合もある。つまり、タイ語における因果関係を表す表現はどれも同じというわけではないといえる。日本語における因果関係を表す表現のように、それぞれの表現には何らかの特徴があり、分類することが可能であると考えられる。タイ語の因果関係

を表す表現の分類について言及している研究は、Debi（2000）があるが、詳しくは言及されていない[3]。序章の 1.1 の項目ではすでにタイ語における文の分類について述べており、本章の 1.2.2 の項目ですでにタイ語における因果構文について触れていたが、Phrayaa Upphakitsilpasan（1937）及び Kamchai（2009）を参考にして、改めてタイ語の文構造を以下の表 1.2 にまとめる。

表 1.2　タイ語における文の分類一覧

分類の名称	文の構造	用いる接続表現
เอกรรถประโยค／ประโยคความเดียว eekkàtthà-praʔyòok／praʔyòok-khwaam-diaw （simple sentence）（単文）	主語＋述語	—
สังกรประโยค／ประโยคความซ้อน sǎŋkɔɔn-praʔyòok／praʔyòok-khwaam-sɔ́ɔn （複文／complex sentence）	主節＋従属節	ประพันธสรรพนาม pràʔphanthá?-sàpphaʔnaam ประพันธวิเศษ pràʔphanthá?-wîʔsèet บุพบท bùpphaʔbòt
อเนกรรถประโยค／ประโยคความรวม aneekkàttha-praʔyòok／praʔyòok-khwaam-ruam （compund sentence）（重文）	文＋文 （節＋節）	สันธาน sǎnthaan

タイ語における重文の構造は基本的に文と文で構成されているが、本研究では文の中にある文に近い構成要素を節と呼ぶ。厳密でいうと、タイ語における重文の中にある節は、それぞれが対等であり、それぞれが一つの文として独立することが可能である。さらに、タイ語における複文と重文は、意味的にさらに分類することができる。それぞれの分類を、以下の表 1.3 にまとめた。基本的には、複文は従属節が表す意味から分類され、重文は節と節の関係で分類されている。

表 1.3　タイ語における複文と重文の分類一覧

分類 1	分類 2	
複文	主節	
	従属節	1）นามานุประโยค naamaanú?-praʔyòok（noun clause）（名詞節）
		2）คุณานุประโยค khúʔnaanú?-praʔyòok（adjective/adjectival clause）（形容節」
		3）วิเศษณานุประโยค wîʔsěetnaanú?-praʔyòok（adverb/adverbial clause）（修飾節） 3.1）บอกกาล bɔ̀ɔk-kaan：時間を表わす従属節 3.2）บอกสถาน bɔ̀ɔk-sàʔthǎan：場所を表す従属節 3.3）บอกเหตุ bɔ̀ɔk-hèet：原因・理由を表す従属節 3.4）บอกผล bɔ̀ɔk-phǒn：結果を表す従属節 3.5）บอกความเปรียบ bɔ̀ɔk-khwaam-prìap：対比を表す従属節
重文	1）อันวยาเนกรรถประโยค anwáʔyaaneekkatthà?-praʔyòok （連接重文・順接構文）	
	2）พยติเรกาเนกรรถประโยค pháʔyáʔtiʔreekaaneekàtthà?-praʔyòok （反意重文・逆接構文）	
	3）วิกัลปาเนกรรถประโยค wí?kanpaaneekkàtthà?-praʔyòok （選択複文）	
	4）เหตวาเนกรรถประโยค heetàʔwaaneekkàtthà?-praʔyòok （因果構文）	

タイ語における複文は基本的に主節と従属節に分けられ、さらに従属節がどのような意味で主節を修飾するかによって、意味的に5種類に分けることが出来る。その5種類の中で、因果構文の部類に入れるのは、原因・理由を表す従属節と含む複文と結果を表す従属節を含む複文である。原因・理由を表す従属節では、phrɔ́ʔなどの原因・理由を表す表現が用いられているが、タイ語における結果を表す従属節は、結果を表す表現 cɯŋ が用いられない。代わりに、con という表現が用いられている。一方、重文の方は、文の中の節と節の関係で4種類に分類できる。その4種類の中で、因果構文の部類に入る構文は heetàʔwaaneekkàtthàʔ-praʔyòok である。この種類の重文では、cɯŋ という表現が用いらる。とはいえ、phrɔ́ʔと cɯŋ 以外にも、様々な表現が用いられている。二つ以上の表現を併せて用いる場合もあり、複合的な表現も存在する。

表 1.4　タイ語における因果関係を表す表現の一覧

表現の共通意味・用法	基本表現	派生表現
原因・理由を表す／原因・理由を示す	phrɔ́ʔ	phrɔ́ʔ-wâa、kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔ、kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔ-wâa、pen-phrɔ́ʔ、pen-phrɔ́ʔ-wâa、khɯɯ-phrɔ́ʔ、etc.
	hèet	hèet-wâa、hèet-phrɔ́ʔ、hèet-phrɔ́ʔ-wâa、hèet-dûay、dûay-hèet-wâa、dûay-hèet-khɯɯ、hèet-khɯɯ、hèet-càak、hèet-maa-càak、hèet-maa-càak-wâa、etc.
	nûaŋ	nûaŋ-wâa、nûaŋ-càak、nûaŋ-càak-wâa、nûaŋ-maa-càak、nûaŋ-maa-càak-wâa、dûay-hèet-khɯɯ-nûaŋ-maa-càak-wâa、etc.
結果を表す／結果を示す	cɯŋ	【複合】 phrɔ́ʔ-ŋán-cɯŋ、phrɔ́ʔ-chàʔnán-cɯŋ、daŋnán-cɯŋ、chàʔnán-cɯŋ、hèet-chàʔníi-cɯŋ、phrɔ́ʔ-hèet-chàʔníi-cɯŋ、phrɔ́ʔ-hèet-níi-cɯŋ、phrɔ́ʔ-ŋíi-cɯŋ、dûay-hèet-níi-cɯŋ、cɯŋ-pen-hèet-hay、cɯŋ-kɔ̀ɔ-hay-kɛ̀ɛt、cɯŋ-sòŋ-phòn-hây、etc.
		【共起 1】（原因節と結果節タイプ） phrɔ́ʔ～cɯŋ、kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔ～cɯŋ、phrɔ́ʔ-wâa～cɯŋ、pen-phrɔ́ʔ～cɯŋ、nûaŋ-càak～cɯŋ、hèet-wâa～cɯŋ、hèet-phrɔ́ʔ～cɯŋ、dûay-hèet-wâa～cɯŋ、phrɔ́ʔ～daŋnán-cɯŋ、phrɔ́ʔ～chàʔnán-cɯŋ、phrɔ́ʔ～dûay-hèet-níi-cɯŋ、nûaŋ-càak～daŋnán-cɯŋ、nûaŋ-càak～dûay-hèet-níi-cɯŋ、etc.

		【共起 2】（同じ結果節タイプ） phrɔ́ʔ-ŋán～cɯŋ、phrɔ́ʔ-chàʔnán～cɯŋ、 daŋnán～cɯŋ、chàʔnán～cɯŋ、hèet-chàʔníi～cɯŋ、 phrɔ́ʔ-hèet-chàʔníi～cɯŋ、phrɔ́ʔ-hèet-níi～cɯŋ、 phrɔ́ʔ-ŋíi～cɯŋ、dûay-hèet-níi～cɯŋ、etc. 【共起 3】（共起 1・2 の共有タイプ） phrɔ́ʔ～daŋnán～cɯŋ、phrɔ́ʔ～chàʔnán～cɯŋ、 phrɔ́ʔ～dûay-hèet-níi～cɯŋ、 nûɯaŋ-càak～daŋnán～cɯŋ、 nûɯaŋ-càak～chàʔnán～cɯŋ、 nûɯaŋ-càak～dûay-hèet-níi～cɯŋ、etc.
	ləəy	【複合】 kɔ̂ʔ-ləəy、phrɔ́ʔ-ŋán-ləəy、phrɔ́ʔ-chàʔnán-ləəy、 daŋnán-ləəy、chàʔnán-ləəy、phrɔ́ʔ-hèet-níi-ləəy、 phrɔ́ʔ-ŋíi-ləəy、dûay-hèet-níi-ləəy、 ləəy-pen-hèet-hay、kɔ̂ʔ-ləəy-pen-hèet-hay、 ləəy-kɔ̀ɔ-hay-kəət、ləəy-sòŋ-phòn-hây、etc.
		【共起 1】（原因節と結果節タイプ） phrɔ́ʔ～ləəy、kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔ～ləəy、phrɔ́ʔ-wâa～ləəy、 pen-phrɔ́ʔ～ləəy、nûɯaŋ-càak～ləəy、 hèet-wâa～ləəy、hèet-phrɔ́ʔ～ləəy、 dûay-hèet-wâa～ləəy、phrɔ́ʔ～daŋnán-ləəy、 phrɔ́ʔ～chàʔnán-ləəy、phrɔ́ʔ～dûay-hèet-níi-ləəy、 nûɯaŋ-càak～daŋnán-ləəy、 nûɯaŋ-càak～dûay-hèet-níi-ləəy、etc. 【共起 2】（同じ結果節タイプ） phrɔ́ʔ-ŋán～ləəy、phrɔ́ʔ-chàʔnán～ləəy、 daŋnán～ləəy、chàʔnán～ləəy、 phrɔ́ʔ-hèet-níi～ləəy、phrɔ́ʔ-ŋíi～ləəy、 dûay-hèet-níi～ləəy、etc. 【共起 3】（共起 1・2 の共有タイプ） phrɔ́ʔ～daŋnán～ləəy、phrɔ́ʔ～chàʔnán～ləəy、 phrɔ́ʔ～dûay-hèet-níi～ləəy、

		nûuŋ-càak～daŋnán～ləəy、 nûuŋ-càak～chàʔnán～ləəy、 nûuŋ-càak～dûay-hèet-níi～ləəy、etc.
	daŋnán	【複合】 daŋnán-cɯŋ、daŋnán-ləəy、etc.
		【共起 1】（原因節と結果節タイプ） phrɔ́ʔ～daŋnán-cɯŋ、nûuŋ-càak～daŋnán-cɯŋ、 phrɔ́ʔ～daŋnán-ləəy、nûuŋ-càak～daŋnán-ləəy、etc. 【共起 2】（同じ結果節タイプ） daŋnán～cɯŋ、daŋnán～ləəy、etc. 【共起 3】（共起 1・2 の共有タイプ） nûuŋ-càak～daŋnán～cɯŋ、phrɔ́ʔ～daŋnán～ləəy、 nûuŋ-càak～daŋnán～ləəy、etc.
	chàʔnán	【複合】 phrɔ́ʔ-chàʔnán、chàʔnán-cɯŋ、chàʔnán-ləəy、etc.
		【共起 1】（原因節と結果節タイプ） phrɔ́ʔ～chàʔnán-cɯŋ、phrɔ́ʔ～chàʔnán-ləəy、etc. 【共起 2】（同じ結果節タイプ） chàʔnán～cɯŋ、phrɔ́ʔ-chàʔnán～cɯŋ、 chàʔnán～ləəy、phrɔ́ʔ-chàʔnán～ləəy、etc. 【共起 3】（共起 1・2 の共有タイプ） phrɔ́ʔ～chàʔnán～cɯŋ、phrɔ́ʔ～chàʔnán～ləəy、 nûuŋ-càak～chàʔnán～cɯŋ、 nûuŋ-càak～chàʔnán～ləəy、etc.
	chàʔníi	【複文】 dûay-hèet-chàʔníi-cɯŋ、dûay-hèet-chàʔníi-ləəy、etc.
		【共起 1】（原因節と結果節タイプ） phrɔ́ʔ～dûay-hèet-chàʔníi-cɯŋ、 nûuŋ-càak～dûay-hèet-chàʔníi-cɯŋ、etc. 【共起 2】（同じ結果節タイプ） dûay-hèet-chàʔníi～cɯŋ、etc.

		【共起 3】（共起 1・2 の共有タイプ） phrɔ́ʔ～dûay-hèet-chàʔníi～cɯŋ、 nûaŋ-càak～dûay-hèet-níi～cɯŋ、etc.
	phŏn	【複合】 phŏn-khɯɯ、phŏn-kɔ̂ʔ-khɯɯ、 phŏn-thîi-dây-khɯɯ、pen-phŏn-hây、 sòŋ-phŏn-hây、phŏn-khɯɯ-tham-hây、etc.
		【共起 1】（原因節と結果節タイプ） phrɔ́ʔ～phŏn-khɯɯ、phrɔ́ʔ～sòŋ-phŏn-hây、 nûaŋ-càak～phŏn-khɯɯ、 càak-kaan-thîi～phŏn-khɯɯ、etc. 【共起 2】（同じ結果節タイプ） phŏn-khɯɯ～cɯŋ、phŏn-khɯɯ～ləəy、etc. 【共起 3】（共起 1・2 の共有タイプ） phrɔ́ʔ～phŏn-khɯɯ～ləəy、 nûaŋ-càak～phŏn-kɔ̂ʔ-khɯɯ～cɯŋ、etc.
	tham-hây	【複合】 cɯŋ-tham-hây、ləəy-tham-hây、con-tham-hây、 phŏn-khɯɯ-tham-hây、daŋnán-cɯŋ-tham-hây、 daŋnán-ləəy-tham-hây、chàʔnán-cɯŋ-tham-hây、 chàʔnán-ləəy-tham-hây、 phrɔ́ʔ-chàʔnán-cɯŋ-tham-hây、etc.
		【共起 1】（原因節と結果節タイプ） phrɔ́ʔ～tham-hây、nûaŋ-càak～tham-hây、 càak-kaan-thîi～tham-hây、phrɔ́ʔ～ləəy-tham-hây、 nûaŋ-càak～cɯŋ-tham-hây、 càak-kaan-thîi～cɯŋ-tham-hây、etc. 【共起 2】（同じ結果節タイプ） — 【共起 3】（共起 1・2 の共有タイプ） —

	con	con-tham-hây、con-sòŋ-phŏn-hây、con-kɔ̀ɔ-hây、con-pen-hèet-hây、etc.

上記の表 1.4 では、原因・理由を表す表現と結果を表す表現が分けられている他に、基本表現と派生表現に分けられている。基本的には、基本表現はそのまま因果関係を表す表現として用いることが可能であり、派生表現はその基本表現を元にして作られた表現である。派生表現の構成は様々であり、同じ接続表現から構成される場合があり、副詞や関係詞などと組み合わせた場合もある。無論、基本表現とそれに組み合わせている表現の働きは別々であり、pen-phrɔ́ʔ-wâa などは三つの単語がくっ付いていて、一つの表現ではないと考えることも妥当である。しかし、pen-phrɔ́ʔ-wâa だけではなく、kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔ や phrɔ́ʔ-ŋán-cɯŋ、daŋnán-cɯŋ、lɤ̀ɤy-tham-hây など、それぞれの要素の働きを分解することが可能であるが、これらの表現は形式的に用いる場合が多くあり、慣用的に用いる場合もある。それぞれの形式を構成するためには基本的には基礎の表現があり、組み合わせたものによって、その基礎の表現に追加機能が加わる場合もある。単純に様々な表現を関連性なしに並べるではなく、これの表現を基本表現から派生されたもう一つの表現形式として認めるべきであると考える[6]。

派生表現の意味・用法は、基本的にその表現の元である基本表現と同様であり、元である基本表現と置き換えることが可能である。ただし、chàʰníi や phŏn など、単独では接続表現として用い難いものもある。chàʰníi は dûay-hèet-chàʰníi-cɯŋ で、phŏn は phŏn-khɯɯ という複合的な形で用いる場合が多い。表 1.4 のように、因果関係を表す表現の派生表現は、二つ以上の表現から作られた複合的な表現と別々の節で共起する表現に分けることができる。複合的な表現は一つの表現として扱うことができると考え、一つの纏りが同じ節で用いる。例えば、pen-phrɔ́ʔ-wâa は pen と phrɔ́ʔ と wâa という三つの表現から成る複合的な表現であり、phrɔ́ʔ から派生した表現であるため、その意味・用法は phrɔ́ʔ が元であり、節の中の位置も phrɔ́ʔ と同様である。一方、二つ以上の表現が別々の位置で共起するものもある。例えば、phrɔ́ʔ～cɯŋ の場合、phrɔ́ʔ は重文の因果構文における前節に位置し、cɯŋ はその後節に位置する。このような別々の位置で共起するタイプの表現は、原因・理由節と結果節のそれぞれに位置するもの、同じ結果節に位置するもの、原因・理由節と同じ結果節に位置するものという三つのタイプに分けられる。

原因・理由節と結果節のそれぞれに位置するタイプは、phrɔ́ʔ～cɯŋ のような、phrɔ́ʔ と cɯŋ のそれぞれが別々で原因・理由節と結果節に位置するタイプである。同じ結果節に位置するタイプは、daŋnán～cɯŋ のような、daŋnán も cɯŋ も同じ結果節に位置するが、それぞれの位置がくっついていないタイプである。主に、結果節の主語を囲んでいる場合が多い。そして、原因・理由節と同じ結果節に位置するタイプは、phrɔ́ʔ～daŋnán～cɯŋ のように、phrɔ́ʔ は原因・理由節に位置し、daŋnán と cɯŋ は同じ結果節で別々に位置するタイプのことである。基本的には原因・理由を表す表現と結果を表す表現ともに、複合的な派生表現が存在するが、共起タイプの派生表現は重文である因果構文にしか見られないと考える。つまり、phrɔ́ʔ～cɯŋ という共起タイプの表現は見られるが、cɯŋ～phrɔ́ʔ という共起タイプの表現は見られない。con は複文である因果構文で用いる表現であるため、共起タイプの派生表現が存在しないと考える。

1.3.1　タイ語における因果関係を表すものの特徴

日本語では様々な原因・理由を表す表現がある。文中に使われている接続詞のほかに、文頭や文末に使われている原因・理由表現もある。一方、タイ語の因果構文で用いる表現は、第 1 章の 1.3 の項目における表 1.4 のように、原因・理由を表す表現と結果を表す表現がある。原因・理由を表す表現は、基本的には複文で用いられているものであり、原因・理由節の頭に位置し、その前の結果節と接続する表現である。一方、結果を表す表現は、基本的に重文で用いられている表現であり、結果節の頭または結果節の中に位置し、前の原因・理由節と接続する表現である。

Phrayaa Upphakitsilpasan（1937）及び Kamchai（2009）は、複文の従属節を 6 種類に分けており、その中には原因・理由の内容を持つ従属節があると述べている。そして、その従属節で使われているのは、タイ語の原因・理由表現であるといえる。そのタイ語の原因・理由を表わす表現は、phrɔ́ʔや nûaŋ-càak などがある [4]。そして、タイ語の重文は、文と文、または節と節の間にはどういう内容の関係で繋がっているかによって、4 種類に分けることができる。その中には因果関係で繋がっている重文があり、cɯɯŋ、ləəy、chàʔnán などの結果を表す表現が使われている [5]。また、Phrayaa Upphakitsilpasan（1937）は、複文と重文の因果関係を持つ構文の違いは、複文は結果節から始まる構文であるのに対して、重文は原因・理由節から始まる構文であると指摘している。つまり、タイ語では「結果＋原因」の場合が複文であり、「原因＋結果」の場合は重文である。この文構造の違いによって、日本語の原因・理由文をタイ語に訳す場合、複文から重文になる場合があり、訳文に原因・理由表現のかわりに結果表現が現れる場合がある。

1.3.1.1　タイ語の原因・理由を表わす表現

タイ語の原因・理由表現は、スコータイ時代から現代まで使われている phrɔ́ʔが代表的である [7]。冨田（1957）は、phrɔ́ʔの品詞は関係修飾詞であると述べている。しかし、実際には主節と従属節を繋げるものであるため、日本語の複文で使われている「から」や「ので」などと変わらないと考える。

35）สุนัขตาย<u>เพราะ</u>มันถูกรถยนต์ทับ

sùʔnák	taay	<u>phrɔ́ʔ</u>	man	thùuk	rót-yon	tháp
犬	死ぬ	<u>CON</u>	それ	PAS	車	ぶつかる

犬が車にぶつかった<u>から</u>、死んだ。

≪タイ≫（Kamchai Tongloo：*Lak Phaasaa-Thai*）

36）金がない<u>ので</u>行けない。

ไปไม่ได้ <u>เพราะ</u> ไม่มีเงิน

pay	mây-dây	<u>phrɔ́ʔ</u>	mây-mii	ŋəən
行く	できない	<u>CON</u>	ない	お金

≪日タイ≫（Preeya Ingkaphirom：*Waiyakorn Phaasaa Yii-pun*）

例文 35）と 36）では、phrɔ́ʔの後は従属節であり、前節は主節である。タイ語の場合、複文では結果の部分が前節であるため、節の順番は日本語の原因・理由文と逆である。

37） ผู้หญิงมีปริมาตรเลือดน้อยกว่าผู้ชายเนื่องจากมีไขมันมากกว่าความดันเลือด

phûu-yǐŋ	mii	paʔriʔmàat	lûat	nɔ́ɔy	kwàa	phûu-chaay	nûaŋ-càak
女	持つ	体積	血	少ない	より	男	CON

mii	khǎy-man	mâak	kwàa	khwaam-dan-lûat
持つ	脂肪	多い	より	血圧

女は血圧より脂肪が多いため、男より血の体積が少ない。

≪タイ≫（<http://pantip.com/> 2014/10/22 access）

原因・理由を表す表現は phrɔ́ʔのほかに例文 37）のように nûaŋ-càak という表現がある。nûaŋ-càak という表現は、比較的に phrɔ́ʔより新しい表現である。nûaŋ と càak という単語から作られた複合語の原因・理由を表す表現であるが、nûaŋ だけで用いる場合が少ない。この表現のほかにも、nûaŋ-maa-càak や nûaŋ-càak-wâa など、似ている複合語の表現がいくつかある。しかし、例文から見ても、これらの表現の意味と用法は phrɔ́ʔと類似していることが分かる。日本語と比べると、「から」と「ので」の間には丁寧さ、または文体的な違いがあるが、phrɔ́ʔと nûaŋ-càak の間には文体的な違いがあるかどうかはまだ明確ではない。しかし、phrɔ́ʔは口語的な場合でも文語的な場合でも同じように用いられる上に、砕けた言い方の場合でも用いられるのに対し、nûaŋ-càak は砕けた言い方に用い難いと考える。

38） ไม่อยากเจอ｛เพราะ／？เนื่องจาก｝เกลียดขี้หน้าโว้ย

mây-yàak	cəə	｛phrɔ́ʔ／？nûaŋ-càak｝	klìat-khîi-nâa	wôoy
したくない	合う	CON	嫌い	なのだ

アイツが嫌いから合いたくないんだよ!

例文 38）における wôoy という文末表現は、物事に対し話し手の怒りや不満などのを感情を強く表す表現であり、あまり丁寧ではない口語的な表現で、喧嘩口調などで用いる場合が多い。このような口語的な表現が用いられている場合では、nûaŋ-càak は用い難い。故に、nûaŋ-càak は phrɔ́ʔと比べて、会話などでは丁寧な口調の場合に用法が限定されている表現であるといえる。

1.3.1.2 タイ語の結果を表す表現

タイ語の結果を表す表現は、cɯŋ が代表的である[8]。この表現は重文の構造で文と文を接続するために使われていて、因果関係の結果の部分を表す接続詞である。

39） ถนนแคบ รถจึงชนกัน

thaʔnŏn	khɛ̂ɛp	rót	cɯŋ	chon	kan
道	狭い	車	CON	ぶつかる	互いに

道が狭いため、車がぶつかってしまった。

≪タイ≫（Phatcharaaporn Kaewklitsapaang：*Kroong-saang Phaasaa-Yiipun*）

40） เราไม่เคยรู้ว่าความรักจะเดินทางจากเราไปเมื่อไหร่ จึงไม่ได้เตรียมพร้อมที่จะรับมือกับมัน

raw	mây-khəəy	rûu-wâa	khwaam-rák	càʔ	dəən-thaaŋ-càak	raw	pay
我々	したことない	知る	恋	FUT	去る	我々	行く

mûa-rày	cɯŋ	mây-dây	triam-phrɔ́ɔm	thîi-càʔ	ráp-mɯɯ	kàp	man
いつ	CON	していない	準備	FUT	対策する	に	それ

我々は、いつ恋が去っていくかを知るすべがないため、それに向けた準備することもできるはずがない。

≪タイ≫（Jutisorn：*Buang Gau*）

例文 39）と 40）のように、結果を表す cɯŋ を使う場合、節と節の因果関係は原因・理由から結果の順番に並べる。タイ語では、このような文は重文の一種であるとされている。結果を表す表現は、cɯŋ のほかに、ləəy や chàʔnán などがある。

41） ชายหนุ่มไม่มีเวลาจะอธิบายให้คู่หูเข้าใจเลยต้องปล่อยเลยตามเลย

chaay-nǔm	mây-mii	weelaa	càʔ	àʔthíʔbaay	hây	khûu-hǔu	khâw-cay	ləəy
少年	ない	時間	のに	説明	に	相棒	理解する	CON

tɔ̂ŋ	plɔ̀ɔy-ləəy-taam-ləəy
しなければならない	放っておく

少年は相棒に事情を説明する暇がないので、放っておくしかなかった。

≪タイ≫（Madame Constant：*Khaattakam taay duang-daaw*）

ləəy という表現は、例文 41）のように、結果を表す表現であるが、元々場所を通り過ぎたという意味を表す表現である。そのため、例文 41）の場合のように、物事の経過を表す意味もあると考えられる。つまり、「説明する暇がない」という事態が経過し、「放っておく」という結果に辿り着くという意味も表わしている。実際、結果を表す ləəy の意味・用法は cɯŋ とほぼ一致していると考えられ、置き換えることが可能な場合も多い。ただし、ləəy の方は cɯŋ より口語的な言葉である。一方、chàʔnán という表現は、他の原因・理由表現と結果表現と共起する場合が多い。特に、phrɔ́ʔ と cɯŋ と一緒に共起する場合がよく見られる。phrɔ́ʔ-chàʔnán という複合的な形で用いられている場合もある。実際では、chàʔnán を単独で接続表現として用いる場合は少なく、cɯŋ の補足として用いられている場合が多い。

42） เรามีเป้าหมายเดียวกัน ฉะนั้นควรร่วมมือกัน

raw	mii	pâw-mǎay	diaw-kan	chàʔnán	khuan	rûam-mɯɯ	kan
私達	持つ	目的	同じ	CON	べき	協力する	互いに

私達の目的は同じだから、協力すべきだ。

43） น้ำเน่า ฉะนั้นยุงจึงชุม

náam	nâw	chàʔnán	yuŋ	cɯŋ	chum
水	汚染する	CON1	蚊	CON2	集まる

水が汚れているので、蚊が集まる。

≪タイ≫（Phrayaa Upphakitsilpasan：*Lak Phaasaa-Thai*）

例文 43）のように、cɯŋ と共起する場合がある。42）の場合、chàʔnán は結果を表す接続表現であるが、43）の場合の chàʔnán は cɯŋ の補足である。そのため、43）の cɯŋ は省略され難いが、chàʔnán を省略することが可能である。42）と 43）を見れば、chàʔnán は結果文の主語の前に置くものであるのに対して、cɯŋ は主語の後に置くものであることが分かる。例文 43）のタイ語文の結果節には yuŋ、つまり「蚊」という主語があり、chàʔnán はその主語の前に位置し、cɯŋ はその主語の後に位置している。この違いによって、43）の場合のような cɯŋ が chàʔnán と共起する場合では、cɯŋ は必ず chàʔnán の後に現れることになる。逆に、42）のような結果節には主語がない場合では、chàʔnán を接続表現として使用することも可能であるが、主語がないと使用できない場合もあると考えられる。また、結果節に主語がない場合では、chàʔnán の代わりに cɯŋ を使用することも可能である。実際、例文 42）では cɯŋ を chàʔnán で置き換えることが可能である [9]。ところが、次のような場合もある。

44） เธอทำผิด ฉะนั้นเธอต้องรับโทษ

thəə	tham	phìt	chàʔnán	thəə	tôŋ	ráp	thôɔt
君	する	罪	CON	君	しなければならない	受ける	罰

君は罪を犯したから、罰を受けなければならない。

例文 44）の場合、結果節には thəə、つまり「君」という主語があるが、cɯŋ を使用せずに chàʔnán を用いることができる。結果節には主語のほかに、tôŋ という命令の表現もある。結果節に命令の表現がある場合、chàʔnán のみでも使用できるということが分かる。命令の表現のほかにも、禁止、依頼、勧誘などの表現があれば、44）のように、chàʔnán を結果表現として用いることが可能であると考えられる。また、44）の場合では chàʔnán の代わりに cɯŋ を用いることも可能であるが、cɯŋ を主語の後に置く必要がある。例文 42）の chàʔnán を cɯŋ でそのまま置き換えるが可能であるが、44）で同じようなことはできない。

このように、タイ語の結果表現の中には、意味が類似していても、限定的な用法があるものもある。タイ語では、cɯŋ と chàʔnán のように、とある表現が同じカテゴリーの表現を補足するために用いることが可能な場合が多い。また、chàʔnán＋cɯŋ で chàʔnán-cɯŋ にするなど、二つの表現を合わせて複合語に作ることもできる。第 1 章の 1.3 の項目の表 1.4 にも、因果関係を表す表現の組み合わせをまとめてある。一方、日本語のほうは「せいで」や「からこそ」などの複合的な表現もある。

しかし、例文 43）の chàʔnán と cɯŋ ように、同じ意味・用法で用いているにも関わらず、それぞれが別々の位置で共起している用法は、日本語の「から」や「ので」には見られない。「～から、です

から～」などのような言い直すという使い方はあるが、例文 43）の chàʔnán と cɯŋ は日本語と違い、言い直すのために二つの因果表現を用いているというわけではない。

45） 神という友は常に守って下さいますから、ですから、あなたを愛してもその為に勉強の方を怠る事なき様心掛けています。

（鳩山 一郎『若き血の清く燃えて―鳩山一郎から薫へのラブレター』）

上記の例文 45）における「～から」と「ですから～」は、両方とも原因・理由を表す表現であるが、「ですから～」は前の「～から」の言い直しである。同じ文で同じ意味・用法で用いられている上に、言い直すではない chàʔnán～cɯŋ とは異なっている。

1.4 日本語の分類方法から見るタイ語の表現

前田（2009）は、主節と従属節の内容を基準にして、日本語の原因・理由文を 3 種類に分けている。「原因・理由を表す原因・理由文」「判断の根拠を表す原因・理由文」「原因・理由を表さない原因・理由文」である[10]。「原因・理由を表す原因・理由文」は、前節が後節の原因・理由である場合の文であり、「から」「ので」のほかに「ために」「おかげで」「せいで」などの事態系の原因・理由表現が用いられている。

46） 雨が降ったので、気温が低下した。 （前田直子『日本語の複文』）

47） 彼に助けて貰ったおかげで、無事仕事を終えることができた。

（前田直子『日本語の複文』）

「判断の根拠を表す原因・理由文」は、前節が後節の原因・理由となる場合のほかに、後節の判断の根拠となる場合の文である。「のだから」「からこそ」などの判断系の原因・理由表現が使われている。前田（2009）は、この種類の原因・理由文の特徴としては、命令、禁止、依頼、勧誘などの表現、または意志・希望などの表出表現が使われる場合があると述べている。

48） 顔も洗っていないし髭も剃っていないのだから、さぞかしみすぼらしい顔をしていることだろう。

（夏川草介『神様のカルテ』）

「原因・理由を表さない原因・理由文」は、原因・理由を表す表現が用いられているにもかかわらず、前節が後節の原因・理由になりえない場合の文である。

49） どんなことでもいいから、みんなただ万歳と叫ぶための口実が欲しいだけではないかと思えた。

（阿部和重『IP／NN 阿部和重傑作集』）

一方、タイ語の因果構文では、「原因・理由を表す表現を用いる文」と「結果を表す表現を用いる文」に分けられる。ここでは、原因・理由を表す表現は phrɔ́ʔ と nûaŋ-càak を考察の対象とし、結果を表す表現は cɯŋ、ləəy、chàʔnán を考察の対象とする。これらの表現が使われている因果構文の内容からみて、日本語の原因・理由文の分類と比較考察を試みる。

1.4.1 「原因・理由を表す原因・理由文」とタイ語文

まず、内容的に「原因・理由を表す原因・理由文」に当てはまる文で、原因・理由を表す表現が使われている文から見てみる。

50） เด็กร้องไห้ {เพราะ／เนื่องจาก} ถูกตี

dèk	rɔ́ɔŋháy	{phrɔ́ʔ／nûaŋ-càak}	thùuk	tii
子供	泣く	CON	PAS	叩く

子供は叩かれたから、泣いた。

51） เมื่อวานถูกหัวหน้าโกรธ {เพราะ／เนื่องจาก} มาสาย

mûawaan	thùuk	hŭanâa	kròot	{phrɔ́ʔ／nûaŋ-càak}	maa-sǎay
昨日	PAS	上司	怒る	CON	遅刻する

昨日は遅刻したから、上司に怒られた。

例文 50）では、dèk rɔ́ɔŋháy は結果で、thùuk tii は原因である。一方、例文 51）では mûawaan thùuk hŭanâa kròot が結果で maa-sǎay は原因である。いずれの場合でも phrɔ́ʔ と nûaŋ-càak は原因・理由表現として使用できる。これらの例文を見れば、日本語の原因・理由を表わす文の〈P＋から＋Q〉は、意味的にはタイ語の〈Q＋phrɔ́ʔ＋P〉と同じであるといえる。

52） 温かい場所にいたせいで、外に出ると気温がとても低く感じる。

เธอรู้สึกว่าอุณหภูมิต่ำมากเมื่อออกมาข้างนอกเพราะอยู่ในที่อบอุ่นมาตลอด

thəə	rúu-sùuk	wáa	unnaʔhàʔphuum		tàm	mâak	mûa	ɔ̀ɔk-maa	khâaŋ-nɔ̂ɔk
彼女	感じる	COMP	温度		低い	とても	すると	出た	外
phrɔ́ʔ	yùu	nay	thîi	òb-ùn	maa-taʔtɔ̀ɔt				
CON	いる	中	場所	温かい	ずっと				

≪日本≫（ハセガワケイスケ『しにがみのバラッド。2』）

≪タイ≫（Supattraa Phadungpriichaathai： Yom-ma-tuut sii khaaw 2）

例文 52）の場合、日本語では「せいで」というマイナス性を表す原因・理由表現が使われているが、タイ語の場合の phrɔ́ʔはマイナス性を表していない。しかし、前節と後節の因果関係を表す機能は、phrɔ́ʔも「せいで」と同様であるため、52）のような原因・理由を表す文の場合でも phrɔ́ʔは使用できる。また、52）の phrɔ́ʔを nûaŋ-càak で置き換えることも可能である。次は、結果を表す表現 cɯŋ、ləəy、chàʔnán の例文もあげてみる。

53） เมื่อวานมาสาย {จึง／เลย} ถูกหัวหน้าโกรธ

múawaan	maa-sǎay	{cɯŋ／ləəy}	thùuk	hǔanâa	kròot
昨日	遅刻する	CON	PAS	上司	怒る

昨日は遅刻したから、上司に怒られた。

例文 53）のように、結果表現が使われている文の場合、〈P＋cɯŋ＋Q〉になるため、日本語の〈P＋から＋Q〉と同じ語順となっている。例文 53）の場合では、thùuk hǔanâa kròot が結果節であるため、結果表現はその節の前に置かれている。この例文では、cɯŋ と ləəy のいずれも同じように使用できる。しかし、結果節に主語がないため、chàʔnán を使用することができない。

54） เขามาสายฉะนั้นเขา {จึง／เลย} ถูกหัวหน้าโกรธ

khǎw	maa-sǎay	chàʔnán	khaw	{cɯŋ／ləəy}	thùuk	hǔanâa	kròot
彼	遅刻する	CON1	彼	CON2	PAS	上司	怒る

彼は遅刻したから、彼は上司に怒られた。

例文 54）では、結果節に khǎw、つまり「彼」という主語がある。そのため、この場合では chàʔnán を用いることができる。しかし、この場合の chàʔnán は cɯŋ または ləəy の補足であるため、cɯŋ または ləəy なしでは使用できない。逆に、例文 54）では chàʔnán がなくても、cɯŋ と ləəy は使用できる。chàʔnán の使用の制限から考えると、命令、禁止、依頼、勧誘などの表現が出てこない原因・理由文の場合では、この表現は単独では使用できないと考えられる。

55） ที่นี่เป็นสถานที่ส่วนรวม {ฉะนั้น／จึง／เลย} ห้ามพูดเสียงดัง

thîi-níi	pen	saʔthaan-thîi	suan-ruam	{chàʔnán／cɯŋ／ləəy}	hâam	phûut	siaŋ-daŋ
ここ	COPU	場所	公衆	CON	禁止	喋る	大きい声

ここは公衆の場所のため、大きい声で喋ってはいけない。

例文 55）のような場合ならば、chàʔnán、cɯŋ、ləəy のいずれも使用することができる。しかし、次の 56）のような例文もある。

56） เธอยังทำการบ้านไม่เสร็จ {ฉะนั้น／จึง} ห้ามออกไปเล่นข้างนอก

thəə	yaŋ	tham	kaan-bâan	máy-sèt	{chàʔnán／cɯŋ}	hâam	ɔ̀ɔk-pay
君	まだ	する	宿題	終わらない	CON	禁止	外出する
lêen	khâaŋ-nɔ̂ɔk						
遊ぶ	外						

君の宿題はまだ終わっていないから、遊びに行くことは許されない。

例文 56）の場合では chàʔnán と cɯŋ が使用されやすいが、lɤ̀ɤy は使用されにくいと考えられる。lɤ̀ɤy は物事が経過して結果になるという意味的な特徴があるため、因果関係の流れによって使用されにくい場合がある。56）の場合では「こういう事情・もの・場所である」が原因であることで、結果的に「禁止されている」という内容になっている。それに対して、56）では話し手により禁止されているため、結論としてはそのような結果になるという内容である。このニュアンスの違いは、lɤ̀ɤy が使用されにくい原因であると考えられる。このように、chàʔnán と lɤ̀ɤy にはそれぞれの使用の制限があることが分かる。

1.4.2 「判断の根拠を表す文」とタイ語文

次は、「判断の根拠を表す文」の場合を見てみる。日本語の場合、判断の根拠を表す文の結果文には判断を表わす表現や命令、禁止、依頼、勧誘などの表現が現れる場合がある。

57） ไม่มีน่าจะมีคนอยู่ {เพราะ／เนื่องจาก} ไฟไม่ได้เปิด

mây	nâa-càʔ	mii	khon	yùu	{phrɔ́ʔ／nûaŋ-càak}	fay	mây-dây-pɤ̀ɤtNEG
NEG	多分	いる	人	いる	CON	電気	ついていない

電気がついていないから、多分誰もいない。

例文 57）では、原因・理由を表す表現を用いる場合、phrɔ́ʔ と nûaŋ-càak のいずれも使用することができる。mây nâa-càʔ mii khon yùu は結果節であり、nâa-càʔ は話し手の判断を表わす表現である。そして fay mây-dây pɤ̀ɤt はその結果の原因・理由であり、話し手の判断の根拠でもある。このように、判断の根拠を表す内容を持つ原因・理由文でも、phrɔ́ʔ と nûaŋ-càak は使用できることが分かった。

58） ไฟไม่ได้เปิด {ฉะนั้น／จึง／เลย} ไม่น่าจะมีคนอยู่

fay	mây-dây-pɤ̀ɤt	{chàʔnán／cɯŋ／lɤ̀ɤy}	mây	nâa-càʔ	mii	khon	yùu
電気	ついていない	CON	NEG	多分	いる	人	いる

電気がついていないから、多分誰もいない。

また、58）のように、結果を表す表現である chàʔnán、cɯŋ、lɤ̀ɤy も、判断の根拠を表す文に使用できることが分かった。例文 58）の結果文では主語がない上に、判断を表わす表現があるため、chàʔnán は cɯŋ と lɤ̀ɤy と同様に単独で接続詞として使用できる。よって、判断を表わす表現がある場合、chàʔnán は接続詞として使用できる場合があるという事が分かった。

59） ไฟไม่ได้เปิด {ฉะนั้น／จึง／เลย} คงไม่มีคนอยู่

fay	mây-dây-pɤ̀ɤt	{chàʔnán／cɯŋ／lɤ̀ɤy}	koŋ	mây	mii	khon	yùu
電気	ついていない	CON	多分	NEG	いる	人	いる

電気がついていないから、多分誰もいない。

60） ไฟไม่ได้เปิด {ฉะนั้น／จึง／เลย} คิดว่าไม่มีคนอยู่

fay	mây-dây-pèət	{chàʔnán／cɯŋ／ləəy}	khít-waa	mây	mii	khon	yùu
電気	ついていない	CON	と思う	NEG	いる	人	いる

電気がついていないから、誰もいないと思う。

例文 59）のように、koŋ という表現に変えても chàʔnán、cɯŋ、ləəy のいずれも使用できる[11]。また、例文 60）では khít-waa、つまり「と思う」という表現になるが、59）と同様、いずれの結果表現も使用できる。これらの例文から、chàʔnán、cɯŋ、ləəy のうち、ləəy だけは口語的な表現であると感じられる。58）から 60）まで判断の根拠を表す文では chàʔnán、cɯŋ、ləəy のいずれも使用できるが、結果節に出てくる判断または話し手の思考を表わす表現によっては、特定の結果表現の使用に変動があると考えられる。実際、タイのインターネット掲示板 PANTIP.COM で検査した結果、mây-nâa-càʔの場合では cɯŋ が一番多く使われており、koŋ の場合は ləəy の方が一番多く使われているという結果が出た[12]。しかし、この結果から判断の根拠を表す文で使われている chàʔnán、cɯŋ、ləəy の優先度を決定することができるというわけではない。

1.4.3 「原因・理由を表さない原因・理由文」とタイ語文

最後に、「原因・理由を表さない原因・理由文」の場合をみてみる。

61） อย่าไปไหน {？เพราะ／＊เนื่องจาก} ฉันจะรีบกลับมา

yàa	pay	nǎy	{？phrɔ́ʔ／＊nûaŋ-càak}	chǎn	càʔ	rîip	klàp-maa
禁止	行く	どこ	CON	私	FUT	早く	もどる

すぐ戻ってくるから、どこにも行かないで。

例文 61）の場合、phrɔ́ʔは使用できるが、使用され難いと考えられる。前節が後節の原因・理由にならないため、不自然さを感じる。一方、nûaŋ-càak はこのような原因・理由を表さない文に使用された場合が見られず、使用できないと考える。実際、例文 61）のような文であれば、原因・理由を使用しなくても非文にはならず、より自然な文になると考える。ただし、関係詞も接続詞もないため、62）のようにすると二つの文になり、複文でも重文でもない文構造になると考える。

62） อย่าไปไหน ฉันจะรีบกลับมา

yàa	pay	nǎy	chǎn	càʔ	rîip	klàp-maa
禁止	行く	どこ	私	FUT	早く	もどる

どこにも行くな。すぐに戻ってくる。

63） เธอไปโรงพยาบาลเถอะ {＊เพราะ／＊เนื่องจาก} เดี๋ยวฉันจะไปส่ง

thəə	pay	rɔɔŋpaʔyaabaan	thə̀ʔ	{＊phrɔ́ʔ／＊nûaŋ-càak}	dǐaw	chǎn	càʔ
君	行く	病院	ね	CON	FUT	私	FUT
pay	sòŋ						
行く	送る						

送ってあげるから、病院へ行きなさい。

例文 63）の場合では、原因・理由表現の phrɔ́ʔ と nûaŋ-càak のいずれも使用できないと考える。また、この例文も 62）と同様、原因・理由表現がなくても非文ではなく、二つの文になる。このように、タイ語の原因・理由を表わす表現は、原因・理由を表さない文の場合では使用され難いと考えられる。

64） ฉันจะรีบกลับมา ฉะนั้น เธอ {＊จึง／＊เลย} อย่าไปไหน

chǎn	càʔ	rîip	klàp-maa	chàʔnán	thəə	{＊cɯŋ／＊ləəy}	yàa	pay	nǎy
私	FUT	早く	もどる	CON1	君	CON2	禁止	行く	どこ

すぐ戻ってくるから、どこにも行かないで。

一方、結果を表す表現が使われている文の場合、64）chàʔnán は使用できるが、cɯŋ と ləəy は使用できないと考える。この場合では、結果節に主語があってもなくても、chàʔnán は使用できる。また、これは後の節に禁止を表す表現があることにも関係があると考えられる。実際、chàʔnán は cɯŋ と ləəy と比べて、禁止を表す表現 yàa と合わせて用いられている場合がよく見られる。

65） ความแน่นอนคือความไม่แน่นอน ฉะนั้นอย่ามั่นใจในตัวเองมากนัก

khwaam-nɛ́ɛ-nɔɔn	khɯɯ	khwaam-máy-nɛ́ɛ-nɔɔn	chàʔnán	yàa	mân-chay	nay
確定	COPU	不確定	CON	禁止	自信を持つ	に
tua-eeŋ	mâak-nák					
自分	とても					

確信というものは本当は確実とは限らないため、あまり自信を持ちすぎてはいけない。

≪タイ≫（<http://th.w3dictionary.org/> 2014/10/22 access）

66） จอมยุทธย่อมต้องมีบาดแผล ฉะนั้นอย่าใส่ใจเลยครับ

cɔɔm-yût	yɔ́ɔm-tɔ̂ɔŋ	mii	bàat-phlɛ̌ɛ	chàʔnán	yàa	sày-cay	ləəy	khráp
武士	当たり前	持つ	傷	CON	禁止	気にする	終止形	丁寧

武士に傷は当たり前なことですから、気にしないでください。

≪タイ≫（<http://th.w3dictionary.org/> 2014/10/22 access）

このように、禁止などの表現があれば、chàʔnán は原因・理由を表さない文の場合でも接続詞として使用できることが分かる。それに対して、原因・理由を表さない文では、cɯŋ と ləəy は使用されにくい、または使用できないと考えられる。なお、例文 102）では ləəy も出てくるが、この場合の ləəy は結果を表す表現ではなく、終止形である[13]。

1.5　本章のまとめ

本章では、タイ語の因果関係を表す表現の特徴を考察し、日本語の原因・理由文の分類方法を参考にして、比較考察をした。その結果は以下にまとめる。

（A）タイ語の因果関係を表す表現は、「原因・理由を表す表現」と「結果を表す表現」の2種類に分けることができる。それに対して、日本語の場合では原因・理由表現の種類によって、3種類に分けることができる。

（B）タイ語の因果関係を表す表現の中には、意味と用法が類似しているものが多数あり、置き換えることが可能なものもある。しかし、使用の制限があるものもある。chàʔnán は、結果節に主語がある場合、基本的には cɯŋ または lɤɤy の補足としてしか用いられない。ただし、結果文に判断・禁止・命令・依頼などの表現があれば、cɯŋ と lɤɤy と同様に単独で接続詞として用いることが可能な場合がある。lɤɤy は、物事が経過してある結果になるという意味を持っている。これは、「自然にそのような結果になる」という場合であれば使用できるが、「誰かが命令してそうなる」などであれば、使用されにくい傾向がある。

（C）日本語の原因・理由表現の分類方法から考えると、同じように分類することができるものはあるが、できないものもある。「原因・理由を表す原因・理由文」では、phrɔ́ʔ と nûɯaŋ-càak のいずれも使用することができる場合が多いと考えられる。一方、結果を表す表現 cɯŋ、lɤɤy、chàʔnán の中で、単独では使用できない場合があるのは chàʔnán だけである。ただし、禁止や命令などの表現がある場合、「原因・理由を表す原因・理由文」でも chàʔnán を結果表現として使用できる。

（D）「判断の根拠を表す原因・理由文」では、phrɔ́ʔ と nûɯaŋ-càak のいずれも使用できる。「原因・理由を表す原因・理由文」の場合と同様である。結果を表す表現 cɯŋ、lɤɤy、chàʔnán も、いずれも使用できる場合がある。ただし、その中には、chàʔnán の方が使用されやすい場合があると考えられる。chàʔnán は禁止や命令などの表現がないと使用できない場合があるという使用の制限があるが、判断を表わす表現などがあれば、使うことができる。また、「判断の根拠を表す原因・理由文」では、判断の表現のほかに、禁止や命令などの表現も使われている場合が多いという特徴があるため、比較的に「原因・理由を表す原因・理由文」より chàʔnán はこの種類の原因・理由文で使用されやすいと考えられる。cɯŋ と lɤɤy は、結果文に使われている判断の表現によっては、chàʔnán と比べて使い難く感じる場合がある。

（E）「原因・理由を表さない原因・理由文」では、原因・理由を表す表現と結果を表す表現のいずれも使用されにくい傾向があり、使わないほうが自然な文になるという場合もある。その中で、「原因・理由を表さない原因・理由文」で自然に使用できる因果関係を表す表現は chàʔnán のみである。ただし、禁止や命令などの表現も必要という使用の制限がある。

タイ語の因果関係を表す表現は、文と文、または節と節の内容から分類することはできるが、使用の制限がある表現がある、ということを確認できた。本章で取り上げたタイ語の表現はまだ少ないため、その他の因果関係を表す表現の検討を今後の課題にする。また、日本語の分類方法では、分別し難い表現もあり、それらの表現に対して別の分類方法を考える必要がある。

章注：

(1) Phraya Upphakitsilpasan（1937）によれば、因果構文は「cɯŋ」が必要と述べているが、「ləəy」や「thamhây」など、「cɯŋ」と似ている働きをする言葉はいくつかある。「ləəy」と「thamhây」の違いについては、田中（2004b）でも取り上げられている。

(2) 例文 32）及び 34b）のように、cɯŋ は必ず主語の後に位置する表現である。主語がない場合、または主語が省略されている場合、33）のように、cɯŋ は結果節の頭に位置する。

(3) Debi（2000）は、タイ語における原因・理由表現が三種類に分けられると述べている。「原因・理由と結果を並列的に表す表現」「結果の条件を表す表現」「原因・理由と逆接を表す表現」である。しかし、これらの例文と詳しい説明はなく、最後の「原因・理由と逆接を表す表現」も原因・理由表現として分類すべきではないという問題点がある。

(4) phrɔ́ʔは原因・理由表現ではあるが、品詞は「から」や「ので」と違い、接続助詞ではないと考えられる。Phraya a Upphakitsilpasan（1937）及び Kamchai（2009）は、複文の構造で、因果関係を持っている主節と従属節を結び付けるものは、praʔphanthá̌ʔ-wî̌ʔsèet であると述べている。そして、冨田（1957）は、praʔphanthá̌ʔ-wî̌ʔseet を日本語で「関係修飾詞」と名付けた。故に、phrɔ́ʔの品詞は関係修飾詞である。ところが、praʔphanthá̌ʔ-wî̌ʔseet は英語で relative adverb と呼ばれているため、日本語で「関係副詞」と呼ぶこともできると考えられる。

(5) Phraya a Upphakitsilpasan（1937）及び Kamchai（2009）は、タイ語の重文は、文と文を結び付けるためには、kham-sǎnthaan が必要である。冨田（1957）は、この kham-sǎnthaan を日本語で「接続詞」と呼んでいる。また、接続詞と kham-sǎnthaan は両方とも、英語の conjunction に当てはまる。

(6) 派生表現について、本研究では一つの表現形式として考え、表 1.4 に様々な表現の組み合わせを取りあげた。しかし、その中には、一つの表現形式として認めるべきであるかどうかを断定できないものもあり、更なる検討が必要であると考える。

(7) Debi（2000）は、phrɔ́ʔは 13 世紀のスコータイ時代から現代のラッタナコーシン時代まで使われている表現であり、nûaŋ-càak は 1932 年のラッタナコーシン時代に使われ始めた表現であると述べている。しかし、phrɔ́ʔと nûaŋ-càak の使用率については詳しく述べていない。

(8) Debi（2000）は、cɯŋ は phrɔ́ʔと同様、1237 年のスコータイ時代から現代のラッタナコーシン時代まで使われている表現であると述べている。一方、chàʔnán は 1350 年のアユタヤ時代に使われ始め、ləəy は 1932 年のラッタナコーシン時代に使われ始めたとも述べている。これらの表現はいずれも現代まで使われている。

(9) chǎʔnán のほかに、daŋnán という表現もある。daŋnán は chǎʔnán と同様、結果を表す表現である。また、daŋnán は結果文の主語の前に置く表現であり、主語がないと使用できない場合があるという特徴も chǎʔnán と同様である。この二つの表現は意味と用法が類似しているため、置き換えることが可能な場合もある。例えば、例文 42）から 44）までの chǎʔnán は、daŋnán で置き換えることが可能である。しかし、chàʔnán と daŋnán の間には相違点があるかどうかは、まだ明らかではない。cɯŋ と ləəy のように、文体的な違いがあるということも考えられる。

(10) 前田（2009）pp.115-124 参考。

(11) koŋ は náa-càʔと同様、「多分」という意味を表すが、必ず否定形の前に置く表現である。

(12) <http://pantip.com/>で 2014 年 10 月 23 日に検索を行った結果、「chàʔnán／cɯŋ／ləəy＋náa-càʔ」の場合、chǎʔnán のが使われている例は 65 例あり、cɯŋ と ləəy は 2000 例以上ある。否定形で「chǎʔnán／cɯŋ／ləəy＋máy-náa-càʔ」

の場合、chǎ̋nán の結果は 19 例あり、cɯŋ は 895 例あり、ləəy は 647 例ある。「chǎ̋nán／cɯŋ／ləəy＋koŋ」の場合では、chǎ̋nán の結果は 171 記事あり、cɯŋ は 368 例あり、ləəy は 2000 例ある。とはいえ、この検索結果から判断の根拠を表す文ではない例も混ざっているため、判断の根拠を表す文で使われている chǎ̋nán、cɯŋ、ləəy の使用率の順番を決定することはできない。

（13） 終止形である ləəy は三つの意味・用法を持つ。「直ぐ様に動作を行う、または直ぐ様にとある状態になる」「相手に行動しようと進める、励ます、または行動しろと急かす」「まさにそうであると強調する」の三つである。例文 66）の場合では、相手に気にしないことを進める意味で用いられている。

第 2 章

原因・理由表現をめぐる日タイ対照研究

本章では日本語における原因・理由表現「から」と「ので」を中心にして、タイ語における原因・理由表現と比較考察する。また、述語のテ形の原因・理由構文、そして因果関係を表す表現が現れない因果構文についても考察する。

2.1 「から」「ので」とタイ語の表現

第 1 章で述べたとおり、日本語の原因・理由を表わす表現は多所多様であり、意味・用法が一見単純そうに見えるものであっても、単純ではないものがある。その中で、原因・理由表現といえば、一般的に最も用いられていると考えられるのは「から」と「ので」であろう。とはいっても、「から」と「ので」の意味・用法は単純というわけではない。主節と従属節を接続し、原因・理由を表す意味・用法という面だけで考察する場合、「ために」「おかげで」「せいで」などと比べれば、「から」と「ので」のほうは単純であると考えられるが、ほぼ類似しているように見える「から」と「ので」の間には相違点があり、単純ではない面もある。

一方、タイ語では phrɔ́ʔが代表的な表現であり、この表現は原因・理由を表わす以外の意味・用法がないと考えられ、例外や原因・理由節における限定的な用法がないと考えられる。そのため、原因・理由を表す意味・用法だけで考察する場合、phrɔ́ʔは日本語の「から」と「ので」のみならず、多くの日本語の原因・理由を表わす表現に対応しているといえる。しかし、日本語における原因・理由表現は、単純に原因・理由を表すものだけではない。メイン機能である原因・理由を表すほかに、「おかげで」のプラス性を表す機能、「せいで」のマイナス性を表す機能など、サブ機能を持つものもある。それらの表現と比べる場合、phrɔ́ʔはそれらのメイン機能にしか対応していない場合が多い。「から」「ので」と比較する場合であっても、phrɔ́ʔはそれぞれの機能に対応していない部分もあると考えられる。さらに、タイ語における因果構文では、原因・理由を表わす表現だけではなく、結果を表わす表現も用いられている。その結果を表わす表現の中でも代表的なものは cɯŋ である。つまり、タイ語における因果構文は、原因を表わす表現で接続するものと結果を表わす表現で接続するもの、という二種類に分けられるといえる。

日本語の「から」や「ので」などで接続する構文は、phrɔ́ʔ構文にも cɯŋ 構文にも訳すことが可能な場合が多いであるが、構造的に phrɔ́ʔ構文は cɯŋ 構文と異なっている。その上、phrɔ́ʔと cɯŋ そのものの意味・用法を「から」と「ので」と比較考察する場合、phrɔ́ʔと cɯŋ はいずれも「から」「ので」に類似しているというわけではなく、それぞれには対応と非対応の部分がある。故に、日本語とタイ語の因果構文で用いられている表現の対応性を比較考察するうえで、「から」と「ので」の相違点を踏まえて考察するだけでなく、phrɔ́ʔと cɯŋ の違いについても踏まえて考察する必要がある。phrɔ́ʔ節は cɯŋ 節より構造的に日本語のカラ節とノデ節に近いため、本章では cɯŋ より phrɔ́ʔの方を中心にして、「から」と「ので」とを比較考察することにする [(1)] 。

日本語では、原因・理由の表現である「から」と「ので」が言いさし文にも用いられているが、タイ語ではphrɔ́ʔなどの原因・理由の表現が言いさし文で使われていることは見られない。つまり、言いさし文で使われている「から」と「ので」はphrɔ́ʔに対応しない一つの例である。言いさし文でも、原因・理由を表わす場合もあるが、本研究では接続表現を中心にして考察するため、言いさし文の場合の「から」と「ので」については詳しく論じない。

2.1.1 「から」「ので」とタイ語の比較考察

日本語では、「から」「ので」「ために」「からといって」「だけ」などがあり、それぞれの表現にはそれぞれの特徴がある。次の 1）から 6）まではそれらの表現が用いられている用例である。

1） 今日は土曜日だから、銀行は休みですよ。
（グループ・ジャマシイ『教師と学習者のための日本語文型辞典』）

2） すぐに戻ってくるから、ここで待ってて！
（時雨沢恵一『キノの旅Ⅳ』）

3） 雨が降りそうなので試合は中止します。
（グループ・ジャマシイ『教師と学習者のための日本語文型辞典』）

4） 男が説得を続ける旅人に掴みかかったため、旅人はやむを得ず、持っていたハンド・パースエイダー（二二口径・自動式）を二発発砲してことなきをえた。
（時雨沢恵一『キノの旅Ⅱ』）

5） いくらおふくろだからといって、ぼくの日記を読むなんってゆるせない。
（グループ・ジャマシイ『教師と学習者のための日本語文型辞典』）

6） かれらは若いだけに徹夜をしてもへいきなようだ。
（グループ・ジャマシイ『教師と学習者のための日本語文型辞典』）

その他にも、「せいで」「おかげで」「なぜ～かといえば」など様々な表現が存在するが、前田（2009）は、最も広いタイプの原因・理由を表わすと考えられるのは「から」と「ので」であると述べている。そのため、本章では「から」と「ので」を中心に比較考察する。「から」と「ので」は両方とも原因・理由を表わす表現であり、互いに置き換えることが可能な場合も多い。

7a）お金が足りなかったから、結局あの本は買えなかった。
7b）お金が足りなかったので、結局あの本は買えなかった。
8a）薬はタンスの上にあるから、取ってきてください。
8b）薬はタンスの上にあるので、取ってきてください。
9a）メーカーのマークがないから、それは偽物だ。
9b）メーカーのマークがないので、それは偽物だ。

例文 7a）から 9b）までは、「から」と「ので」が互いに置き換えることが可能な例文である。前田（2009）によれば、日本語の原因・理由文は「事態の原因・理由」「後件実行の可能条件提示」「判断の根拠」という 3 種類に分けることができ、「から」と「ので」はその中のどの種類の原因・理由にでも用いられると述べている。例文 7a）と 7b）は「事態の原因・理由」であり、8a）と 8b）は「後件実行の可能条件提示」である。そして、例文 9a）と 9b）は「判断の根拠」である。

一方、タイ語における因果関係で結ばれている構文は、複文の中で wísèetnaanú-prà?yòok という従属節が含まれている構文と、重文である heetà?waaneekkàtthà?-prayòok という構文が存在する [(2)]。複文の wí?sěetnaanú?-pra?yòok の場合では、結果を表わす節が必ず前述であり、原因・理由である節は後述でなければならない構造を持っている。この構文では、phrɔ́?が代表的な原因・理由を表す表現である。それに対して、重文の heetà?waaneekkàtthà?-prayòok では原因・理由節を先に述べ、結果節を後で述べる構造となっている。この構文では、cɯŋ が代表的な接続表現である。

10） เมื่อวานถูกหัวหน้าโกรธเพราะมาสาย

mûawaan	thùuk	hŭanáa	kròot	phrɔ́?	maa-sǎay
昨日	PAS	上司	怒る	CON	遅刻する

昨日は遅刻したから上司に怒られた。

11） เมื่อวานมาสายจึงถูกหัวหน้าโกรธ

múawaan	maa-sǎay	cɯŋ	thùuk	hŭanáa	kròot
昨日	遅刻する	CON	PAS	上司	怒る

昨日は遅刻したから上司に怒られた。

例文 10）では phrɔ́?が用いられ、原因・理由節を後に述べているのに対して、11）では cɯŋ が用いられ、原因・理由を先に述べている。本来、wí?sěetnaanú?-pra?yòok と heetà?waaneekkàtthà?-prayòok は、文の分類が異なっているが、節の順番と用いる接続表現が異なっているものの、意味的には 10）と 11）はいずれも類似している内容を持っている。要するに、タイ語における因果関係で結ばれている構文は、構造的に「結果から述べる文」と「原因・理由から述べる文」の 2 種類に分けられるといえる。とはいえ、日本語と比較する場合、「結果から述べる文」と「原因・理由から述べる文」をいずれも原因・理由文と呼ぶのは間違いであろう。あえていうならば、phrɔ́?など原因・理由表現を用いる「結果から述べる文」のほうは原因・理由文に相当するといえるが、cɯŋ などの結果を表す表現を用いる「原因・理由から述べる文」のほうは原因・理由文というよりも、結果を提示している構文であるため、結果文または結果提示文と呼ぶべきであろう。

その他、タイ語と日本語の間には語順の違いがあり、日本語では「から」や「ので」など接続表現が節末に位置するのに対して、タイ語の phrɔ́?や cɯŋ などは節または文の頭に位置するものである。また、例文 7a から 9b）のように、日本語における複文は、内容の一番重要な部分を後で述べる場合が多いのに対して、タイ語は一番重要な部分、あるいは話の重点を先に述べる場合が多いと考えられる。日本語の原因・理由文の構造を考慮すれば、原因・理由節は従属節であり、その結果は主節であ

り、日本語の場合はその主節が原因・理由節の後にあるのに対し、タイ語の原因・理由文はその逆の節順を持っている。次の例文 12）の下線部は重点となる部分であり、二重下線部は接続表現である。

12） 疲れているので、きょうは早く帰ります。

วันนี้จะกลับบ้านเร็วเพราะเหนื่อย

wan-níi	caʔ	klàp	bâan	rew	phrɔ́ʔ	nùay
今日	FUT	帰る	家	早く	CON	疲れている

≪日タイ≫（Somkiat Chawengkijwanich：*20 hua-khoo ded phichit Waiyakorn Phaasaa-Yiipun Chan-Klaang*）

例文 12）のように、日本語の場合では、「きょうは早く帰る」という重要な部分である主節が後節であるのに対して、タイ語では主節が前節である。この違いによって、日本語の「から」や「ので」が用いられている原因・理由文の構造は、phrɔ́ʔを使用しているタイ語の原因・理由文の構造と異なり、節の順番が逆である。しかしながら、12）の日本語文とタイ語文は両方とも同じ内容を表わしているため、第 1 章の 1.4.1 の項目で述べたとおり、日本語の複文構造〈P＋から／ので＋Q〉は、意味的に考えて、タイ語の〈Q＋phrɔ́ʔ＋P〉という構文が表す意味に近いと考えられる[(3)]。例文 12）と同様、次の例文 13）と 14）の下線部は話の重点となる部分であり、二重下線部は接続表現である。

13） 国に行っても、ヤツを殺ってないから、成功報酬はもらえませんよ。

ถ้ากลับไปเมืองนั้นก็คงไม่ได้ค่าตอบแทน เพราะเรายังไม่ได้ฆ่าหมอนั่น

thâa	klàp-pay		mɯaŋ	nán	kɔ̂ɔ-khɔŋ	mây	dây	khâa-tɔ̀ɔp-thɛɛn
もし	帰る		国	その	多分	NEG	貰う	報酬
phrɔ́ʔ	raw	yaŋ	mây	dây	khâa	mɔ̌ɔnân		
CON	私達	まだ	NEG	PERF	殺す	やつ		

≪日本語≫（時雨沢恵一『キノの旅Ⅱ』）

≪タイ語≫（Piyawan Subsamruam：*Karn Demtaang Khong KINO 2*）

14） 全然どこから撃たれているのか分からないので混乱していました

พวกเขาแตกตื่น เพราะไม่รู้ว่าถูกยิงจากทางไหน

pûak-khǎw	tɛ̀ɛk-tùɯɯn	phrɔ́ʔ	máy-rúu	wáa	thùuk	yiŋ	càak-thaaŋ-nǎy
彼ら	混乱する	CON	分からない	COMP	BEN	撃つ	どこから

≪日本語≫（時雨沢恵一『キノの旅Ⅵ』）

≪タイ語≫（Chatinant Kittipatimaakun：*Karn Derntaang Khong KINO 6*）

例文 13）と 14）のように、「から」と「ので」の原因・理由文は、タイ語の phrɔ́ʔの原因・理由文が対応できるといえる。とはいえ、これは「から」と「ので」が互いに置き換えることが可能な原因・理由文の場合の phrɔ́ʔの対応性である。実際、「から」と「ので」の間には相違点も存在する。前田（2009）によれば、「ので」は「事態の原因・理由」の用法が最も多いと述べている。一方、「後

件実行の可能条件提示」と「判断の根拠」の用法では「から」の方が許容度が高いと述べている。しかし、許容度の判定には個人差もあるとも述べている。

15） 我が国では、ホテルがありませんので、旅人さんは迎賓館にお泊まりになってもらっています。

（時雨沢恵一『キノの旅Ⅱ』）

16） 西門前についたら、俺の姉といとこが審査官をやっているから、そこに立ち寄るといい。

（時雨沢恵一『キノの旅Ⅱ』）

17） 国長は、ぜひ今晩歓迎会を開きたいと意気込んでいた。しかし気の利いた誰かさんが、旅人さんはきっとお疲れだから、明日にしましょうと言ってくれた。

（時雨沢恵一『キノの旅Ⅱ』）

上記の用例 15）から 17）までは順番に「事態の原因・理由」「後件実行の可能条件提示」「判断の根拠」である。さらに、田中（2004a）は、「から」と「ので」の間には形式的に違いがあると述べている。「から」は文末呈示の用法が最初の認識として存在するのに対して、「ので」の方は文末呈示の用法がとくに意識されていない。つまり、「から」は「～からだ。」や「～からです。」などの形で使用可能で、文末に置くことができるが、「ので」を「～のでだ。」や「～のでです。」の形で使うことはできない。

18a）成績が悪いのは勉強が足りなかったからだ。
＊18b）成績が悪いのは勉強が足りなかったのでだ。

例文 18b）のように、「ので」は「から」と違い、「のでだ」の形で使うと非文になる。また、田中（2004a）は、「から」の方は基本的に「なぜ」という疑問を背後に感じさせるのに対して、「ので」のほうが事態の背後関係を踏まえず、単に因果関係を表わすだけと述べている。例えば、例文 19）の場合、「から」の方は「ので」より事態の背景を踏まえて質問を回答したという意味合いがあると考えられる。

19） A：「こんなに寒いのに、どうしてヒーターをつけないですか？」
B1：「ヒーターをつけないのは壊れているからです。」
B 2：「ヒーターが壊れているので。（つけない）」

20） 「どこへ行っても棚が低いのは、なぜです？」
「高いところに物を置くと、落ちてきた時に危険だからです。」

（時雨沢恵一『キノの旅Ⅵ』）

このように、「から」と「ので」はいずれも原因・理由を表す表現であり、意味的には類似しているが、相違点がないというわけでもない。タイ語の phrɔ̂ は、上記の文末呈示の用法に関する相違点を

考慮すれば、「ので」より「から」の方に近いと考えられる。その理由は、phrɔ́ʔも「からだ」と「からです」と同様に、質問の回答文に用いられるからである。ただし、文末で使われている「から」とは違い、タイ語のphrɔ́ʔは文頭で使われている表現である。そのため、回答文の場合でもphrɔ́ʔは文頭に位置する。

21a）どうして肉を食べないの？

ทำไมไม่กินเนื้อล่ะ?

tham-may	mây	kin	nûa	làʔ
どうして	NEG	食べる	肉	Q

21b）私はベジタリアンだからです

เพราะผมเป็นมังสวิรัติครับ

phrɔ́ʔ	phŏm	pen	maŋsăʔwíʔrat	khráp
から	私	COPU	ベジタリアン	MPP

例文21a）は質問文であり、21b）はその回答文である。21b）のように、日本語の「から」とは異なり、タイ語のphrɔ́ʔは文頭に位置するものである。また、文末にあるkhrápは丁寧語であり、日本語の「です」と同じである[4]。つまり、日本語では原因・理由の表現である「から」の位置は、タイ語のphrɔ́ʔと異なっているが、丁寧語である「です」とkhrápの位置は同じである。故に、日本語の「～からです。」という文型をタイ語に訳す場合、phrɔ́ʔ～khráp という文型になるといえる。さらに、「どうして」などの質問を背景にし、「のは」などを使って結果を先に述べ、原因・理由を後で「から」で述べることが可能であるのは、phrɔ́ʔも同様である。例えば、次の22）の例文である。

22） 肉を食べないのは、私はベジタリアンだからです

ที่ไม่กินเนื้อเพราะผมเป็นมังสวิรัติครับ

thîi	mây	kin	nûa	phrɔ́ʔ	phŏm	pen	maŋsăʔwíʔrat	khráp
COMP	NEG	食べる	肉	CON	私	COPU	ベジタリアン	MPP

例文22）では、タイ語のthîiは関係代名詞であり、この場合では「のは」と似ている働きをしている。このように、タイ語のphrɔ́ʔは日本語の「から」との共通点が多くあり、同じ用法で用いられる場合が多い。一方、「ので」との対応性もあるが、「から」ほどではないと考えられる。例文21b）と22）のように、「から」は「からだ」と「からです」の形で使用することが可能であり、タイ語のphrɔ́ʔはその「から」の用法にも対応している。それに対して、「ので」は「のでだ」と「のでです」の形では用いられない。その面では、phrɔ́ʔが「ので」より「から」の方に対応しているといえる。さらに、「ので」は「なぜ」という疑問を背後に感じさせず、中立叙述的な用法であるという特徴があるが、phrɔ́ʔはそのような特徴がないと考える。実際、phrɔ́ʔは疑問の背後関係を踏まえても踏まえなくても使用できるからこそ、「から」と「ので」を両方とも対応していると考える。つまり、事態の背

後関係を踏まえて原因・理由を述べる「から」の用法も、事態の背後関係を感じさせない「ので」の用法も、phrɔ́ʔは対応しているといえる。

23a）昨日はどうして仕事を休みましたか？

เมื่อวานทำไมหยุดงานล่ะครับ

mûa-waan	tham-may	yùt	ŋaan	làʔ	khráp
昨日	どうして	休む	仕事	Q	MPP

例文 23a）は質問文であり、その回答文は次の 23b）と 23c）である。

23b）風邪を引いたからです。

เพราะเป็นหวัดครับ

phrɔ́ʔ	pen-wàt	khráp
から	風邪を引く	MPP

23c）風邪を引いたので。

เพราะเป็นหวัด(ครับ)

phrɔ́ʔ	pen-wàt	(khráp)
ので	風邪を引く	(MPP)

例文 23b）では「から」が用いられていて、23c）は「ので」が用いられている。しかし、例文 23b）と 23c）は両方とも、タイ語に訳す場合、phrɔ́ʔを用いることが可能である。よって、疑問の背後関係を踏まえて原因・理由を述べる場合でも、そうではない場合でも、phrɔ́ʔを用いることが可能であると考えられる。言い換えれば、日本語の「から」と「ので」の疑問の背後関係に関する相違点を考慮しても、タイ語の phrɔ́ʔとの対応性は変わらないと考えられる。このように、phrɔ́ʔは「から」の「からだ」と「からです」の文末呈示の用法のみならず、疑問の背後関係を踏まえて原因・理由を述べる用法にも対応しているため、phrɔ́ʔは「ので」より「から」のほうに近い部分がある考えられる。「から」か「ので」を phrɔ́ʔに訳す場合、phrɔ́ʔが「から」か「ので」の片方にしか対応していない場合があるとは考え難い。とはいえ、「から」と「ので」のうち、phrɔ́ʔがより類似しているのはどちらかを明確にするためには、「から」と「ので」の相違点をさらに考慮し、更なる検討が必要であろう。

2.1.2　言いさし文における「から」「ので」と phrɔ́ʔについて

本研究では言いさし文における原因・理由表現を中心にして考察しないが、日本語とタイ語、それぞれの表現の特徴と相違点及び共通点をさらに理解するために、ここで言いさし文の場合の原因・理由表現についても触れる程度で比較考察する。タイ語の原因・理由表現である phrɔ́ʔは、日本語の「から」と「ので」に対応している場合が多いが、「から」と「ので」ならどのような場合でも phrɔ́ʔに訳せるというわけでもない。「から」と「ので」の用法の中にも、phrɔ́ʔが対応していないものもある。その一つは、言いさし文で用いられている「から」と「ので」である。白川（2009）によれば、言い

さし文というのは、広い意味では主節を伴わずに従属節のみで表現される文ということであると述べている。つまり、次のような例文に当たる。

24）　使えばいいじゃん？　せっかくもらったんだし。

（時雨沢恵一『キノの旅Ⅱ』）

25）　あれほど買ってくれたのに……、急にいらないって言われたんだ。本当に急にだよ。でもそれはいいや。まだいいんだ。僕だって、好きな戦車の絵を、好き勝手に描いていただけなんだから。でも、でも、いらないからって僕の絵を燃やすんだ。それが僕にはすごく悲しい。せっかく描いたのに……

（時雨沢恵一『キノの旅Ⅱ』）

上記の例文 24）と 25）の「し」「から」「のに」で終結した文は言いさし文である。言いさし文の種類と形式は様々であるが、本文では「から」と「ので」で終結した言いさし文だけをタイ語と比較考察することにする。複文では、「から」と「ので」は両方とも原因・理由を表わす接続表現であるため、結果である主節がその後に続くのは一般的である。しかし、言いさし文は主節を述べずに従属節のみを述べる文であるため、「から」と「ので」節の言いさし文は原因・理由を述べるが、結果までは述べない文である[(5)]。例えば、次の例文 26）と 27）である。

26）「お客様を満足させるのが、案内人の仕事ですから」

（時雨沢恵一『キノの旅Ⅱ』）

27）「そうだ、旅人さんも、このお酒一杯いかがですか？」
「いえ、アルコールは飲みませんので」

（時雨沢恵一『キノの旅Ⅳ』）

これらの例文は原因・理由を述べるが、主節を述べない。しかし、日本語ではこのような文でも一つの文として完成している。実際、相手は日本語の母語話者であれば、26）と 27）のような言いさし文だけでも、その文の意味全体を理解できる場合が多い。さらに、「から」と「ので」を述べた時点でその文が終わったということも相手が理解できると考えられる。その結果、日本語では 26）と 27）のように言いさし文で原因・理由を述べた場合、相手から「から」と「ので」の後に続く部分を要求されることはないと考えられる。言い換えれば、日本語の言いさし文では、「から」と「ので」の後に続く部分を誰もが予測できるため、あえて最後まで述べる必要はないともいえる。例えば、例文 27）を最後まで述べる場合、次のような内容になると予測できる。

28）いえ、アルコールは飲みませんので、結構です。

さらに言うならば、例文 27）のような相手の誘いを断る場合の言いさし文は、特に消えた内容が予測しやすいと考えられる。例文 26）の場合なら、「いいですよ」または「お礼などいりません」

などの内容が続くと予測できる。このように、日本語では言いさし文として「から」と「ので」で原因・理由のみを述べることが可能である。しかし、白川（2009）によれば、日本語の言いさし文では接続表現が使われているが、他言語の言いさし文では何の接続表現も伴わないことが多いと述べている。つまり、上記の例文 24）から 27）までの接続表現が使われている言いさし文は、日本語の特徴の一つともいえる。実際、タイ語における言いさし文では、原因・理由の接続表現を用いることが見られない。例えば、上記の 26）をタイ語にする場合、次の 29）のようにできる。

29） お客様を満足させるのが、案内人の仕事ですから。

การทำให้ลูกค้าพึงพอใจคืองานของคนนำทางค่ะ

kaan	tham-hây	lûuk-kháa	phɯŋ-phɔɔ-cay	khɯɯ	ŋaan	khɔ̆ɔŋ
こと	CAUS	お客様	満足する	COPU	仕事	の
khon-nam-thaaŋ		kàʔ				
案内人		FPP				

≪日本語≫（時雨沢恵一『キノの旅Ⅱ』）

≪タイ語≫（Piyawan Subsamruam：*Kam Demtaang Khong KINO 2*）

上記の例文 29）のように、日本語文では、原因・理由を表わす「から」が用いられたが、タイ語文のほうでは原因・理由を表す表現が用いられていない。また、例文 27）の場合でもこれと同様であり、次の 30）のようなタイ語文にできる。

30） いえ、アルコールは飲みませんので。

ไม่ล่ะครับ ไม่ดื่มแอลกอฮอล์

mây-làʔ	khráp	máy	dùɯm	ɛɛnkɔɔhɔɔn
いえ	MPP	NEG	飲む	アルコール

≪日本語≫（時雨沢恵一『キノの旅Ⅳ』）

≪タイ語≫（Piyawan Subsamruam：*Kam Demtaang Khong KINO 4*）

上記の例文 30）も日本語文では「ので」が用いられたが、タイ語に訳すと原因・理由を表す表現が見られない。このように、タイ語では、原因・理由だけを述べて、文を終わらせる場合には phráʔなどの原因・理由の表現を使用しないことが一般的であると考える。つまり、原因・理由を表わす言いさし文であっても、原因・理由を表わす表現は使用しない。例文 30）の場合では、máy dùɯm ɛɛnkɔɔhɔɔn という部分が日本語文の「アルコールは飲みません」という部分に当てはまるが、日本語文では「ので」があるにもかかわらず、タイ語文ではそれに対応している表現がない。要するに 30）のタイ語文は「アルコールは飲みません」という内容だけを述べたが、それは原因・理由であることを示す表現がない。とはいえ、例文 30）では、「いえ」という相手の誘いを断る文もあるため、断るという意味は既に相手に伝わったはずである。そして、30）のような場面では、「いえ」の後に

続いた文が断った理由であることは、あえて原因・理由の表現を用いなくても、相手は分かるはずであると考える。

簡潔に言うならば、例文 30）の máy dùɯɯm ɛɛnkɔɔhɔɔn という文は、直前の máy-lǎʔ khráp という文を補足する原因・理由文である。しかし、接続表現がないため、日本語と違い、30）のタイ語文はその後に続く内容が予測されることはないと考える。言い換えれば、30）のタイ語文の内容はそれだけでも完結しているといえる。とはいえ、用いる必要はないが、次の例文 31）のように、あえて phrɔ́ʔを用いることも可能である。

31） ไม่ล่ะครับ เพราะ ไม่ดื่มแอลกอฮอล์

mây-lǎʔ	khráp	phrɔ́ʔ	mây	dùɯɯm	ɛɛnkɔɔhɔɔn
いえ	MPP	ので	NEG	飲む	アルコール

アルコールは飲みませんので、結構です。

ただし、31）のタイ語文は接続表現 phrɔ́ʔを用いたため、言いさし文ではなくなった。31）のタイ語文を日本語文と比較する場合、意味的にも構造的にも、30）のような言いさし文より 31）のような複文である原因・理由文のほうに近い。さらに言うならば、31）のような言い方は 30）より表現が硬く感じられ、簡潔ではない。そのため、「このお酒一杯いかがですか？」という相手の誘いを断るならば、30）の方がより自然であると考えられる。

また、言いさし文ではなくなったとはいえ、接続表現 phrɔ́ʔを用いた 31）は非文であるというわけではない。これは、この文には既に「いえ」という否定の意味を表わす部分があったからだと考えられる。31）に「いえ」という部分がなかった場合、その文は「このお酒一杯いかがですか？」の疑問文の回答文として用いられなくなる。

32） เพราะ ไม่ดื่มแอลกอฮอล์

phrɔ́ʔ	máy	dùɯɯm	ɛɛnkɔɔhɔɔn
ので	【否定形】	飲む	アルコール

アルコールは飲みませんので。

上記の例文 32）自体は非文ではないが、27）のような会話で相手に対して答える文として用いられ難い。その理由は、phrɔ́ʔ máy dùɯɯm ɛɛnkɔɔhɔɔn という文だけでは、断るという意味を表わさないからである。つまり、この文は原因・理由しか表わさないため、相手の誘いを断るためには用いられない[6]。ただし、例文 32）のタイ語文は、「このお酒一杯いかがですか？」の返答文としては用いられないが、「どうして酒を飲まないですか？」や「なぜ飲まない？」など、原因・理由を問い合わせる「なぜ」系の疑問文の返答文としては用いられる。これは、29）で phrɔ́ʔを用いた場合も同様である。

33） เพราะการทำให้ลูกค้าพึงพอใจคืองานของคนนำทางค่ะ

phrɔ́ʔ kaan tham-hâylûuk-kháa phɯŋ-phɔɔ-cay khɯɯ ŋaan

から こと CAUS お客様 満足する 仕事

khɔ̌ɔŋ khon-nam-thaaŋ kàʔ

の 案内人 FPP

お客様を満足させるのが、案内人の仕事ですから。

例文 33）は 29）で phrɔ́ʔを使った場合の例文である。この例文は、「どうしてこんなに丁寧に説明してくれるでしょうか？」のような疑問文の返答文として用いられる。

このように、日本語の原因・理由を表わす言いさし文は、「から」や「ので」などの原因・理由を表す表現を用いられているが、タイ語では一般的には原因・理由表現を言いさし文に用いられていない。よって、タイ語の原因・理由を表わす接続表現 phrɔ́ʔは、複文で用いられている「から」と「ので」に対応しているが、言いさし文での「から」と「ので」に対応していないと考える。

2.2 原因・理由を表すテ形とタイ語の表現

日本語では「花が咲き、花が舞う」などの連用形で節と節が繋がる構文があるが、テ形という活用形で節を繋げる構文も存在する [7]。このテ形という活用形は、一般的には前の語句と後の語句を接続する活用語であり、主に等位節、または並列節を作るために用いられている。

34） 大鳥居のまえを横ぎって、斜めに電車通りのほうへ出る。

（横溝正史『真珠郎』）

35） おいしく食べて、気軽に「美」と「健康」を追求！

（Hanako 編集部『Hanako』2015 年 10 月 8 日号）

益岡・田窪（1992）によれば、テ形による並列は、並列の関係を表すほかに、述語を修飾する用法も持っていると述べている。また、その用法は具体的に手段、付帯状態、原因・理由を表す用法があると述べている。例えば、次の例文 36）は手段、37）は付帯状態、38）は原因・理由を表すテ形並列である。

36） 私はこの二、三年、新幹線以外の電車に乗ったことがない。常にタクシーを使って移動している。

（安田佳生『千円札は拾うな。』）

37） 綾香は、缶コーヒーの販売機にもたれて立っていた。

（赤川次郎『真珠色のコーヒーカップ』）

38） 爽香は昨日大阪へ出張していて、一日会社に来ていない。

（赤川次郎『桜色のハーフコート』）

本研究では、原因・理由を表す場合のテ形並列だけを考察の対象とする。38）では、テ形並列が前節と後節の並列関係を表しているほか、前節が原因・理由で後節の結果に至るという関係も表している。つまり、「爽香は昨日大阪へ出張していたので、一日会社に来ていない」のように言い換えることも可能であり、38）のテ形並列節は原因・理由文における従属節のような働きをしている。

基本的にはテ形も連用形の一つであると考えるが、連用形による並列とテ形による並列には違いがある。益岡・田窪（1992）は、テ形並列は比較的に連用形並列より口語的であると述べている。さらに、文法的性格の面では、連用形並列のほうがより典型的な並列表現であると考えられ、動的事態の並列表現においては、テ形並列のほうが時間的に前後関係の意味が出やすいとも述べている。要するに、連用形並列と比べて、テ形並列のほうは、後節が前節に引き続き起こることであるという意味が出やすいと考えられる。

39a）鶏肉を一口大に切り、ほうれん草をざく切りにする。
39b）鶏肉を一口大に切って、ほうれん草をざく切りにする。

連用形並列の例文 39a）と比べて、テ形並列の 39b）のほうが「鶏肉を一口大に切る」と「ほうれん草をざく切りにする」の継起関係が伝わりやすいと考えられる。このように、テ形並列は原因・理由を表すほかに、節と節の継起関係も表す。テ形による並列は、ナクテ形という否定形で用いることもできる。ナクテ形並列はテ形と同様、並列関係を表すほかに、原因・理由を表すこともできる[8]。

40）　友達がいなくて寂しい。
41）　私の友人も子どもが勉強しなくて困っていました。
（佐々木圭一『伝え方が 9 割』）
42）　キノは、持った感じは悪くなくて、とても扱いやすそうだと言った。
（時雨沢恵一『キノの旅Ⅴ』）

原因・理由を表すテ形の特徴は、連用形より口語的、並列関係が成り立つ原因・理由を表す、節と節の継起関係を表す、否定形であるナクテ形で並列と原因・理由を表すことが可能、の 4 点にまとめられる。並列関係を表すため、基本的には「乏しいからこそ幸せだ」のような常識に反する原因・理由の関係（逆接的な原因・理由ともいえる）を表すのに用い難いと考えられる[9]。

並列の原因・理由を表すこと、否定の並列にも用いられること、この 2 点に関しては、「から」と同様であるといえる[10]。要するに、原因・理由を表すテ形の特徴は、口語的であることと継起関係を表すことの 2 点に重点を置くべきであろう。

一方、原因・理由を表すテ形並列をタイ語にする場合、次の 43a）のようにすることが出来る。

43a） 面接ではすっかり上がってしまって、うまく答えられなかった。

ประหม่ามากตอนสอบสัมภาษณ์ ก็เลยตอบได้ไม่ค่อยดี

prǎʔ-màa	mâak	tɔɔn	sɔ̀ɔp-sǎmphâat	kɔ̂ʔ-ləəy	tɔ̀ɔp	dây	mây	khɔ̂ɔy	dii
上がる	とても	時	面接	CON	答える	出来る	NEG	あまり	いい

≪日タイ≫（Pranee Jongsutjarittam：*Phojjanaanukrom Kham-Yiipun Laak-laay Khwaammaay*）

例文 43a）では、kɔ̂ʔ-ləəy という因果関係を表す接続表現が用いられている。kɔ̂ʔ-ləəy は kɔ̂ʔ と ləəy から作られた表現であり[(11)]、11）の cɯŋ と同様、結果を表す表現である。43a）のタイ語文では前節が原因・理由であり、kɔ̂ʔ-ləəy はその結果が後節であること表わしている。kɔ̂ʔ-ləəy は ləəy と比べて、話し手の主張や判断が出やすいが、43a）のような場合では kɔ̂ʔ-ləəy を ləəy で置き換えることが可能である。

43b） 面接ではすっかり上がってしまって、うまく答えられなかった。

ประหม่ามากตอนสอบสัมภาษณ์ เลยตอบได้ไม่ค่อยดี

prǎʔ-màa	mâak	tɔɔn	sɔ̀ɔp-sǎmphâat	ləəy	tɔ̀ɔp	dây	mây	khɔ̂ɔy	dii
上がる	とても	時	面接する	CON	答える	出来る	NEG	あまり	いい

kɔ̂ʔ-ləəy は ləəy から成る表現であるため、意味・用法はほぼ同じである。いずれも結果を表すため、その意味・用法で用いる場合であれば、基本的には完全に互いに置き換えることが可能である。ただし、kɔ̂ʔ-ləəy は ləəy よりも原因と結果の内容に対する話し手の主張・判断の意味が出やすいと考える。故に、43a）は 43b）と比べて、「うまく答えられなかった」という結果になるのは仕方ないこと、自分のせいではないことの意味も出ている。要するに、43b）のほうはより単純な因果関係であるともいえる。

kɔ̂ʔ-ləəy と ləəy のほかに、次の 44）のように、テ形並列におけるタイ語訳は cɯŋ という表現も用いられている。

44） 爽香は昨日大阪へ出張していて、一日会社に来ていない。

เมื่อวานเธอไปดูงานที่โอซากาจึงไม่ได้เข้าออฟฟิศ

mûa-waan		thəə	pay	duu-ŋaan	thîi	oosaakaa	cɯŋ	mây-dây
昨日		彼女	行く	出張する	場所	大阪	CON	NEG
khâw	ɔɔffít							
来る	会社							

≪日本≫（赤川次郎『桜色のハーフコート』）

≪タイ≫（Rattanajit Thongpreem：*Sugihara Sayaka leem 20 tom Haaf-coot sii Sakura*）

例文 44）の cɯŋ は ləəy とほぼ同じ意味・用法を表わしている。また、次の 45）のような訳文も見られる。

45） 照明が落ちて部屋が暗くなる。

ไฟส่องสว่างดับ ห้องก็มืดลง

fay-sɔ̀ɔŋ-sǎʔwàaŋ	dap	hɔ̂ɔŋ	kɔ̂ʔ	mûɯt-loŋ
照明	落ちる	部屋	CON	暗くなる

≪日タイ≫（Pranee Jongsutjarittam：*Phojjanaanukrom Kham-Yiipun Laak-laay Khwaammaay*）

例文 45）のように、kɔ̂ʔは結果を表す表現として用いることが可能。ただし、lɤ̀ay と比べて、kɔ̂ʔのほうはより継起関係の意味合いが強い。そのため、45）の kɔ̂ʔは原因と結果の関係を表さず、単に前後の継起関係だけを表していると解釈することも可能である。逆に、lɤ̀ay のほうは kɔ̂ʔより因果関係の意味合いが強いともいえる。

例文 43a）から 45）までのテ形並列のタイ語訳は、結果を表す表現が用いられている重文であるが、原因・理由を表す表現を用いる複文に訳すことも可能である。

46） 運動不足で体力が落ちる。

ร่างกายอ่อนแอลง เพราะออกกำลังกายไม่เพียงพอ

râaŋ-kaay	ɔ̀ɔn-ɛɛ-loŋ	phrɔ́ʔ	ɔ̀ɔk-kamlaŋ-kaay	mây	phiaŋ-phɔɔ
体	弱くなる	CON	運動する	NEG	足りる

≪日タイ≫（Pranee Jongsutjarittam：*Phojjanaanukrom Kham-Yiipun Laak-laay Khwaammaay*）

phrɔ́ʔは原因・理由を表す表現で、cɯŋ や lɤ̀ay などは結果を表す表現であるが、実質上、前後が原因と結果の関係を表す点にはいずれも同様であるため、テ形並列を cɯŋ や lɤ̀ay に訳せるであれば、当然 phrɔ́ʔにも訳せる。さらに、次の 47）のようにテ形並列を con 構文に訳すことも可能である。con は phrɔ́ʔと同様で、重文ではなく複文に用いられている。しかし、con は cɯŋ や lɤ̀ay などと同様、結果を表す。

47） 雰囲気に押されて何もいえなかった。

บรรยากาศกดดันจนพูดอะไรไม่ออก

banyaakàat	kòt-dan	con	phɯɯt-àʔray-may-ɔɔk
雰囲気	重い	CON	何もいえない

≪日タイ≫（Pranee Jongsutjarittam：*Phojjanaanukrom Kham-Yiipun Laak-laay Khwaammaay*）

ただし、con は単純に結果を表すだけではなく、時間・距離・状態・動作の継起が至る終点も表してる。また、物事の程度を表す意味・用法も持っている。つまり、結果を表すほかに、「まで」と「ほど」に近い意味・用法も持っている。例えば、47）のタイ語文の場合、「雰囲気に押される」という事態が進み、ある程度または限度を超えて、「何もいえなかった」という結果に至るという意味で con が用いられている。

このように、テ形述語をタイ語にする場合、原因・理由表現または結果を表す表現を用いる構文に訳すことが可能である。一般的には、原因と結果の関係で節が並んでいる場合、タイ語も日本語と同様、並列関係にもなる。43a）から 47）までの日本語文もタイ語文も、前節と後節の関係が並列であり、原因とその結果が並んでいる。構造的に見れば、タイ語のほうは活用形がないため、因果関係を結ぶ表現はいずれの場合も日本語の「から」と同様、述語の活用に関わっていない。つまり、ナクテの場合でもテ形の場合と同様、タイ語で cɯŋ や ləəy、phrɔ́ʔなどに訳すことができる。

要するに、テ形並列とタイ語を比較する場合、住目すべきなのは、cɯŋ や ləəy、phrɔ́ʔなどの表現はテ形による並列をどの範囲までに対応しているかという点である。無論、並列の関係、原因と結果の関係を表す点は、タイ語も日本語と同様である。となれば、テ形並列の口語的である点、継起関係を表す表現である点、この 2 点に重点を置き、比較考察すべきであろう。

まず、phrɔ́ʔから見る。phrɔ́ʔには文体的な縛りがなく、文語的・口語的のいずれの場合にも用いられる。そのため、日本語のテ形並列が明らかに口語的に用いられてる場合であっても、phrɔ́ʔはそのテ形の訳として対応している。しかし、phrɔ́ʔは継起関係を表す機能がないと考えられる。内容的に前後の継起関係が薄い場合、46）のように phrɔ́ʔを用いても不自然ではないが、継起関係が出やすい場合では phrɔ́ʔとテ形の意味合いに相違が出てくる。例えば、次の 48a）場合である。

48a） 警察が来て、犯人があわてて逃げた。

คนร้ายรีบหนี เพราะตำรวจมา

khon-ráay	rîip	nǐi	phrɔ́ʔ	tam-rùat	maa
犯人	慌てる	逃げる	CON	警察	来る

例文 48a）の日本語文では、テ形が「犯人があわてて逃げた」の原因・理由を表しているほか、「警察が来た」と「犯人があわてて逃げた」が順番に起き、継起関係も表している。一方、タイ語文の phrɔ́ʔは「犯人があわてて逃げた」の原因・理由だけを表している。この文自体は自然な文であるが、前後の継起関係を表す表現がない。さらにいうと、phrɔ́ʔ構文の節順は、テ形並列の節順と逆であるため、前後の継起関係を日本語のように表すことができない。これは phrɔ́ʔに限らず、タイ語の複文構文で用いられている他の原因・理由を表す表現も同様であると考える。要するに、日本語文に継起関係が出やすい内容であればであるほど、タイ語で原因・理由表現を用いる複文に訳すとその表現がテ形を十分に対応できないと考えられる [12]。

次は結果を表す表現のほうをテ形と比較考察してみる。48a）と同じ日本語文をタイ語で結果表現を用いるように訳す場合、次の 48b）のようにできる。

48b） 警察が来て、犯人があわてて逃げた。

ตำรวจมา คนร้าย {จึง／เลย／ก็เลย} รีบหนี

tam-rùat	maa	khon-ráay	{cɯŋ／ləəy／kɔ̂ʔ-ləəy}	rîip	nǐi
警察	来る	犯人	CON	慌てる	逃げる

例文 48b）の場合、タイ語文の節順は結果から原因の順であり、日本語と同じであるため、48a）と比べて構造的に考えて前後の継起関係が出やすいといえる。cɯŋ、ləəy、kɔ̂ʔ-ləəy は 48b）ではいずれも互いに置き換えることが可能であり、ほぼ同じ意味を表している。ただし、この中では cɯŋ だけが継起関係が表していないと考えられる。cɯŋ は典型的な結果を示す表現であり、後節が前節の結果であることを示す以外の機能はほぼ見られない。要するに、前節と後節の時間的前後関係がどうであれ、cɯŋ は前節の結果しか表さない表現である。44）の場合も、cɯŋ は「一日会社に来ていない」が前節の結果であることを示すだけで、前後関係を表していないと考える。ただし、48b）のような、前節と後節が順番に起きたことを内容から推測しやすい場合では、cɯŋ 自体が継起関係を表さずとも、時間的前後関係が成り立ちやすいと考える。つまり、48b）の場合では、「犯人があわてて逃げた」という事態が「警察が来た」の後であることが前後の内容から推測されやすいため、cɯŋ 自体が継起関係を表す機能がなくても問題ない。

一方、ləəy と kɔ̂ʔ-ləəy は、cɯŋ と比べてより口語的な表現であるため、その点においては cɯŋ よりテ形に近い。さらに、ləəy は元々「通り越す」という意味も持ち、事態・場所・時間が通り越したを表す機能がある。その機能は結果を表す場合にも働いているため、ləəy は結果を表すと同時に継起関係も表す場合が多い。この点に関しても、cɯŋ より ləəy のほうがテ形に近いといえる。ləəy から作られた kɔ̂ʔ-ləəy も同様である。ただし、ləəy には話し手の主張と判断を表わすという特徴もある。主に、前後の関係に対し、話し手はその結果になることが当然であり、仕方がないことであり、自分の責任ではないと主張している意味が含まれている。ただし、この ləəy の意味・用法は、話し手が自分自身が話題である場合にしか用いられないと考えられる。例えば、48b）の場合は、話し手自身が話題ではないため、話し手の主張を表すことができない。しかし、話し手自身が泥棒で 48b）のような内容を話す場合、ləəy を「警察がきたから、仕方がなくてあわてて逃げた」という意味で用いることが可能である。これは日本語の原因・理由を表わすテ形にはない意味・用法であると考える。

最後に、con も ləəy と同様、結果を表す表現であり、継起関係を表す意味・用法もあると考える。ただし、con はその他に、程度を表す意味・用法も持っている。要するに、con で結果を表す場合、その結果になる原因・理由は、前節における時間・状態・数量・動作がある限度を超えたからである場合に用いる。そのため、48b）に con を用いる場合、cɯŋ 構文と ləəy 構文と違うニュアンスになる。

48c）ตำรวจมา<u>จน</u>คนร้ายต้องรีบหนี

tam-rùat	maa	<u>con</u>	khon-ráay	tɔ̂ŋ	rîip	nǐi
警察	来る	<u>CON</u>	犯人	義務	慌てる	逃げる

例文 48c）の con は前節と後節の因果関係と継起関係を表しているが、それ以外にも原因・理由の程度が限度を超えている意味も表わしている。「犯人があわてて逃げなければならなかった」という結果になったのは、「警察が来た」ことが原因・理由であるが、この場合では単に「警察が来たから、犯人があわてて逃げなければならなかった」という意味ではない。数量的に「警察が何人も来たから」か、回数的に「警察が何度も（攻めて）来たから」か、動作の勢い的に「警察が激しい勢いで（攻めて）来た」か、これらの意味も con は表わしている。そのため、48c）の con 構文は、48b）の

日本語文のテ形並列構文の訳として用いることが出来ないと考える。また、テ形とは異なる con の意味・用法は、次の 49）から 51）までの例文から見られる。

49） ทุกจนแตก

thúp	con	tɛ̀ɛk
叩く	CON	割れる

50） ทุบประตูจนพัง

thúp	prǎʔ-tɯɯ	con	paŋ
叩く	ドア	CON	壊れる

51） ต้มพาสต้าจนสุก

tôm	paastâa	con	sùk
茹でる	パスタ	CON	茹で上がる

従属節の述語が動詞の場合、con は直接的に因果関係を表すというより、結果に至るまで述語の動作が続いていることを表す場合、または結果に至るほどその動作の勢いが強いことを表す場合がある。この二つの意味のうち、どの意味が出やすいかは、動作とその対象による変動すると考えられる。49）から 51）までは、いずれの場合も原因と結果の関係が表されており、結果に至るまで述語の動作が続いている意味も出ている。ただし、51）だけは結果に至るほどその動作の勢いが強いの意味が出ていない。

例文 49）と 50）では、その結果に至るまで thúp という動作が続いていた、その結果に至るほど thúp という動作の勢いが強い、この二つのいずれの意味にも解釈できる。ただし、49）では thúp の対象が分からないため、con は単に前後の因果関係を表すだけと解釈することもできる。その解釈に基づき、「数回叩いて割った」と「勢いよく叩いて割った」の解釈が可能になる。言い換えれば、「数回叩いて割った」と「勢いよく叩いて割った」の意味より、「叩いたから割れた」の意味がが優先的に出やすいと考えられる。それに対して、50）では、叩くの対象はドアである。叩いた対象が不明の 49）と比べて、50）では単に叩いたからドアが壊れただけではなく、「数回叩いた」または「勢いよく叩いた」から壊れたの意味も出やすいと考えられる。

一方、51）のほうの動作は「ゆでる」であり、「勢い強く」より「続く」の意味が出やすい。また、このタイ語文は 49）と 50）より、時間的前後の関連性が高いと考えられ、「茹でたから茹で上がった」よりも「茹で上がったまで茹でた」の意味が出やすいと考える。言い換えれば、51）の前節と後節の関係は、原因と結果の関係よりも、時間的前後関係が出ているといえる。

このように、con の意味的な特徴を考察すると、日本語のテ形が対応していない部分がることが分かった。50）を日本語文にする場合、「ドアを叩いて、（ドアが）壊れた」のようにすることは出来る。それに対して、51）を日本語文にする場合、「パスタを茹でて、茹で上がった」よりも「パスタが茹で上がるまで茹でた」のように「まで」を用いたほうがタイ語文に近いと考える。要するに、con は「から」や原因・理由を表すテ形より「まで」のほうに近い意味・用法で用いる場合がある。

2.3　因果関係を表すマーカーがないタイ語文

日本語の場合、節と節の間に因果関係を付ける場合、因果関係を表す接続表現が必要である。前節と後節の関係を表す連用形、テ形、または接続表現がなければ、節と節を繋げることが出来ず、句点で文と文に分ける必要がある。それに対して、タイ語のほうでは読点も句点もないため、文と文、または節と節を並ぶだけで関連付けすることが可能な場合がある。主に、簡潔構文になる場合が多い。その中で、因果関係を表す表現がなくても、前後の因果関係が出やすい場合もある。

52a）กินเยอะ น้ำหนักขึ้น

kin　yə́ʔ　nám-nàk khûun

食べる　たくさん　体重　増える

たくさん食べたから、体重が増えた。（たくさん食べた。体重が増えた。）

日本語文では原因・理由文に接続表現が必要であるが、タイ語に訳す場合、タイ語文にも必ず接続表現が必要というわけではない。ただし、タイ語ではあえて接続表現を用いて前節と後節の関係を分かりやすくすることがいずれの場合も可能である。言い換えれば、接続表現がない場合はその接続表現が省略されているだけであるともいえる。52a）の場合にも、ləəy や con を用いることが可能である。または phrə́ʔ構文にすることも可能である

52b）กินเยอะ {เลย／จน} น้ำหนักขึ้น

kin　yə́ʔ　{ləəy／con}　nám-nàk khûun

食べる　たくさん　CON　体重　増える

52c）น้ำหนักขึ้น เพราะกินเยอะ

kin　yə́ʔ　phrə́ʔ　nám-nàk khûun

食べる　たくさん　CON　体重　増える

接続表現を用いる場合、その表現のニュアンスも加わる。例えば、phrə́ʔを用いる場合、単純な因果関係になるが、ləəy を用いる場合、継起関係も出てくる。タイ語では、ləəy を phrə́ʔ-chàʔnán-ləəy にする、または phrə́ʔ-chàʔnán-ləəy-pen-heet-hay にすることができ、表現を重ねて用いることが可能である。52b）の場合も、ləəy を phrə́ʔ-chàʔnán-ləəy-pen-heet-hay にすることが可能である。ただし、タイ語では、必要以上に複数の表現を用いることが好まない場合が多い。

タイ語では表現を重ねれば重なるほど、文語的になる傾向もあるため、phrə́ʔ-chàʔnán-ləəy-pen-heet-hay のような非常に長い表現形式を用いる場合、文の内容がその表現に相応する文語的でなければ不自然な文になる。52b）で phrə́ʔ-chàʔnán-ləəy-pen-heet-hay を用いることが可能であるが、不自然である。基本的にこのような重ねあっている表現を用いなくても、関節に ləəy だけを用いる、または 52a）のように接続表現を用いないほうが自然なタイ語文になる場合も多い。

とはいえ、逆に接続表現を用いないと不自然である場合もある。特に phrə́ʔ構文は結果から原因・理由の順で内容を述べているため、phrə́ʔを省略すると前節と後節の関係が出難く、不自然になる場合が

ある。52c）も phrɔ́ʔがなければ、「体重が増えた」と「たくさん食べた」が並んでいるだけになり、前後の因果関係も継起関係も出難くなり、内容が正しく伝わらない可能性がある。要するに、接続表現を省略しても問題ない場合があれば、省略すべきではない場合もある。

日本語からタイ語、またはタイ語から日本語に訳す場合、タイ語文に接続表現を用いるべきであるかどうかは、前後の内容とその関係を考慮しなければならない。無論、日本語には複雑な意味・用法を持つ表現が多数あり、それらの表現を用いている構文をタイ語に訳す場合、タイ語文にもその表現に対応しているものがなければ適切な訳にはならない場合がある。

53） 日に当たって顔が真っ黒になった。

ตากแดดหน้าดำปี๋

tàak　dɛ̀ɛd　nâa　dam-pǐi

当たる　日光　顔　真っ黒

≪日タイ≫（Pranee Jongsutjarittam：*Phojjanaanukrom Kham-Yiipun Laak-laay Khwaammaay*）

例文 53）のタイ語訳には接続表現がないが、因果関係と継起関係を表す lɤ̀ɤy を用いるか、継起関係だけを表す lɛ̂ɛw を用いるか、動作の程度と因果関係を表す con を用いるか、原文である日本語文のニュアンスに合わせて、これらの接続表現も tàak dɛ̀ɛd と nâa dam-pǐi の間に用いるべきであろう。

2.4　本章のまとめ

本章ではタイ語の原因・理由を表わす接続表現 phrɔ́ʔを中心にして、日本語の接続表現「から」と「ので」と比較考察した。結果として、複文における原因・理由を表わす phrɔ́ʔは「から」と「ので」のいずれもほぼ同様に対応していることが分かった。「から」と「ので」の間には文体的な相違点があるが、phrɔ́ʔは文語的な場合でも、口語的な場合でも、どのような文体にでも用いられる。つまり、phrɔ́ʔは文体的な違いを介せず「から」と「ので」の訳として用いられる。「から」と「ので」の形態論的な違いの面では、「ので」は「なので」や「んで」など、接続形が変わることがあるが、タイ語では語形が変形することはない。そのため、あえて比較するであれば、phrɔ́ʔは変形しない「から」のほうに近いといえる。また、「から」は「からこそ」「からには」「からといって」などの複合的な形式があると同様、phrɔ́ʔも phrɔ́ʔ-wâa、kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔ、kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔ-wâa などの複合的な形式がある。ただし、これは phrɔ́ʔにしかない特徴ではなく、タイ語における原因・理由表現が共通している特徴である。

意味的な違いに関しては、「から」は主観的であり、「ので」は客観的であるが、phrɔ́ʔはいずれの場合も訳として用いられる。さらに、主観的と客観的という違いは絶対的なものではなく、個人差もあるため、この意味的な違いで phrɔ́ʔが「から」か「ので」の片方にしか対応していないことはないと考える。また、「から」と「ので」の文末呈示の用法における違いに関しては、phrɔ́ʔは「からだ」と「からです」と同様に、質問文の答文として用いられる。ただし、構造的な特徴があり、日本語の「から」は文末に位置するのに対し、phrɔ́ʔは文頭に位置する。そのため、「節＋からだ」を phrɔ́ʔに訳す場合、〈phrɔ́ʔ＋節〉という構造になる。また、「なぜ」などの疑問文の返答文では、原因・理由を表す表現の面で phrɔ́ʔは「から」「ので」に対応しているが、言い尽くした言いさし文の場合では

phrɔ́ʔが対応し難いと考えられる[13]。phrɔ́ʔは単純な原因・理由を表す表現であるが、「から」とは異なり、突然に原因・理由を言い尽くすのには用い難いと考える。

「から」と「ので」の違いを考慮し、phrɔ́ʔと比較考察を行ったが、まだ十分に考察していない点がいくつか残っている。特にモダリティーに関する相違点という大きな課題が残されている。また、cɯŋの「から」と「ので」に対する対応性に関してはまだ充分に考察されていない。phrɔ́ʔとcɯŋの間には構造的にも意味的にも相違点があるため、「から」と「ので」に対するphrɔ́ʔとcɯŋのそれぞれの対応性は異なっていると考えられる。その上、phrɔ́ʔとcɯŋはタイ語の代表的な原因・理由の表現であるが、その他にもləəyやthamhâyなどの因果構文で用いられる表現が多数ある。phrɔ́ʔ以外の表現の「から」と「ので」に対する対応性の比較考察も今後の課題として必要である。

また、本章では原因・理由を表わすテ形並列とタイ語の比較考察もした。並列関係と因果関係を表すという点に関しては、phrɔ́ʔ、cɯŋ、ləəy、conのいずれも日本語と同様であるが、テ形の継起関係を表す機能を考慮すると、その機能に対するタイ語表現のそれぞれの対応性の違いが分かる。節順の関係上、phrɔ́ʔはcɯŋ、ləəy、conと比べて、継起関係が表され難い表現である。言い換えれば、cɯŋ、ləəy、conの節順は、日本語のテ形並列構文と同様であるため、いずれも継起関係を表すことができる。しかし、この中で、最も継起関係が出やすい表現は、ləəyであると考えられる。cɯŋはləəyと置き換えやすい表現であるが、ləəyと比べて、前後の継起関係よりも結果を示す意味のほうが出やすい。そして、conは因果関係も継起関係も表すが、テ形とは異なる意味・用法を持っている。conは、「結果に至るまで述語の動作が続いている」と「結果に至るほどその動作の勢いが強い」の意味も表わしているため、テ形の訳として用いると、そのテ形と異なる意味も出てくる場合がある。

最後に、本章では因果関係を表す表現がないタイ語文に関しても日本語と比較考察した。結果として、日本語の原因・理由文は節と節の関係を表わす接続表現が必要であるが、タイ語の場合では節と節の間に因果関係が推測されやすい内容だった場合、因果関係を表す接続表現を用いない場合がある。ただし、いずれの場合でも、因果関係を表す接続表現が省略されただけと考えるべきであり、あえて用いることも可能な場合が殆どである。タイ語には節と文を区別する読点と句点がないため、接続表現がない場合、どこまでが文でどこまでが節かを区別し難い場合が多い。そのため、原因と結果の関係で並んでいる節は、接続表現がない場合、簡潔な因果構文として扱うことができ、二つの文として扱うこともできる。日本語の原因・理由文をタイ語文にする場合、因果関係を表す接続表現が必ずしも必要ではないが、より節と節の関係を表すためには、やはり適切な接続表現を用いるべきであると考える。

章注：

(1) タイ語ではphrɔ́ʔの他にphrɔ́ʔ-wáaという複合的な原因・理由表現も存在する。用例で用いられている場合、phrɔ́ʔの派生表現もphrɔ́ʔと同様、比較考察の対象とする。

(2) タイ語におけるwʔsěɛtnaanúʔ-praʔyòokは、複文の中に名詞と代名詞以外の要素を修飾する従属節である。そして、heɛtǎʔwaaneekkàtthǎʔ-prayòokは意味的に因果という関係で繋がっている重文である。第1章、1.3の項目の表1.3参考。

(3) 日本語の〈P＋から／ので＋Q〉という構造を持つ文は、タイ語に訳す場合、〈Q＋phrɔ́ʔ＋P〉という構造になるため、二つの構文が表す意味は類似していると考える。ただし、元の文の内容によっては、〈P＋から／ので＋Q〉を〈Q＋phrɔ́ʔ＋P〉に訳すことができない場合もある。特に、「そこにナイフがあるから、使ってください」のような「から」が原因・理由を表しているとは言い難い原因・理由文の場合、その「から」を phrɔ́ʔ に訳すことが出来ない場合があり、〈Q＋phrɔ́ʔ＋P〉に訳すことが難しい場合がある。が原因・理由を表さない「から」については、前田（2009）pp.120-124 参考。

(4) khráp は男性の丁寧語であり、女性の丁寧語は kâʔ と káʔ がある。

(5) 「から」と「ので」節の言いさし文の中でも、原因・理由を表わすとは言い難いものもあるが、本文ではそれらについての考察を省略する。

(6) 実際、相手を断るだけならば、かなり無愛想ではあるが、máy dùɯm ɛ̂ɛnkɔ̀ɔhɔ̀ɔn だけ、つまり「アルコールは飲みません」という内容だけを述べて、断ることが可能ではある。しかし、その場合でもその文だけでは断るという意味を表わしていない。そのため、断るという意味を表わすための身振り手振りが必要になると考えられる。

(7) 実際では、動詞とイ形容詞の活用形は「て」であり、ナ形容詞と名詞の活用形は「で」であるが、ここではいずれもテ形にまとめる。

(8) 否定のテ形には「なくて」と「ないで」があるが、この二つの間には相違点がある。益岡・田窪（1992）は、ナクテは述語のすべての種類について用いられ、ナイデは動詞にのみ用いられると述べている。また、動詞の場合、ナクテは並列表現と原因・理由表現として用いるのに対して、ナイデは予想・期待に反する別の事態が起こる場合に用いる用法と動作の付帯状況を表す用法で用いる。本研究は原因・理由表現を中心にするため、ナイデについての考察は省略する。

(9) 「からこそ」は前後の因果関係が一般の常識に反する場合でも、「乏しいからこそ幸せだ」のように用いられるが、テ形は「乏しくて幸せだ」のような用法で用いることが一般的にはできないと考える。つまり、「から」が「乏しいから幸せだ」のように用い難いことと同様である。ただし、「このゲームは難しくてはまる」や「世界は危険で面白い」のよう使い方は可能である。この場合では原因・理由ではく、「世界は危険」と「世界は面白い」という二つの事実があり、その二つが並列だけがテ形が表していると考える。そもそも、「世界は危険だからこそ面白い」「世界は危険でも面白い」「世界は危険なのに面白い」などはいずれも自然にいえるが、「世界は危険で面白い」も含めて、それぞれのニュアンスは同じであるというわけではない。例えば、「からこそ」は、その前後の因果関係は一般の真理に反しているが、その因果関係もまた真理であるという話し手の主張が含まれているのに対して、「世界は危険で面白い」のテ形はそのようなニュアンスがないと考える。

(10) 「から」構文の場合、従属節の述語が否定形であっても「子どもが勉強しないから困っていました」のように用いることが可能である。ただし、ナクテ形はその述語の活用形であるのに対して、「から」は述語の活用形に関わっていない。また、ナクテ形もテ形と同様、前後の継起関係が出やすいのに対して、原因・理由を表す「から」は否定の場合でも単なる原因・理由を表すだけであると考える。

(11) kɔ̂ʔ-lɔ̂ɔy は kɔ́ʔ と lɔ̂ɔy を組み合わせた表現である。kɔ̂ʔ は lɔ̂ɔy と同様、そのまま結果を表す表現として用いられるが、その原因と結果の関係に対する強調の意味が出やすい。lɔ̂ɔy 自体も結果を表すほかに、仕方なくその結果になるという話し手の主張・判断も出やすい。kɔ̂ʔ-lɔ̂ɔy は、lɔ̂ɔy と kɔ̂ʔ のそれぞれの機能が重ね合っているため、

基本的に ləəy と比べて kɔ̂ʔ-ləəy のほうは話し手の主張や判断なども表わしやすい。特に、流れ的にその結果になるのは当然であると主張する意味、仕方がないと主張する意味、または自分のせいではないと主張する意味では、ləəy より kɔ̂ʔ-ləəy の方が出やすいと考えられる。

(12) タイ語文で前後の継起関係を表したい場合、lǎŋ-càak-nân などの時制を表す表現を用いることが可能である。ただし、この表現は原因・理由を表さないため、原因・理由を表すテ形の訳として用いても十分に対応できない。さらに、この表現は phrɔ̂ʔ と共起し難い場合もあるため、lǎŋ-càak-nân も phrɔ̂ʔ もテ形並列の訳としては不適切な点がある。

(13) 白川（2009）は、言いたいことを言い尽くした言いさし文を「言い尽くし」と呼び、言いさし文の一つの種類として扱うと述べている。

第 3 章

事態系の原因・理由表現の日タイ対照研究

3.1　タイ語の因果関係を表す表現について

本章では日本語における事態系の原因・理由表現を中心にして、タイ語における因果関係を表す表現と比較考察する。ただし、その前にタイ語における基本的な因果関係を表す表現の分類と特徴を改めて確認する。

3.1.1　phrɔ́ʔと cɯŋ について

第 1 章では、タイ語の文構造と表現の特徴に関して述べ、第 2 章では日本語の原因・理由表現をタイ語の表現と比較考察したが、ここでは phrɔ́ʔと cɯŋ を取りあげて、改めてそれぞれの違いを見ていく。Phrayaa Upphakitsilpasan（1937）によれば、タイ語の原因・理由文は複文の一種であり、phrɔ́ʔは従属節が主節の原因・理由を表わす場合に用いられていると述べている。しかし、cɯŋ の方は複文ではなく、重文の構造に用いられているとも述べている [(1)]。これは、Kamchai（2009）でも同じように解説されており、タイ語の文構造の特徴の一つである。しかし、実際では、いずれも複文の構造に見える問題がある。例えば、次の例文 1）と 2a）である。

1）　ยุงชุมเพราะน้ำเน่า

yuŋ　chum　phrɔ́ʔ　náam　nâw

蚊　集まる　CON　水　汚染する

水が汚れているから、蚊が集まる。

≪タイ≫（Phrayaa Upphakitsilpasan：*Lak Phaasaa-Thai*）

2a）　น้ำเน่าจึงยุงชุม

náam　nâw　cɯŋ　yuŋ　chum

水　汚染する　CON　蚊　集まる

水が汚れているから、蚊が集まる。

≪タイ≫（Phrayaa Upphakitsilpasan：*Lak Phaasaa-Thai*）

Phrayaa Upphakitsilpasan（1937）によれば、タイ語の場合、1）は複文として扱うが、2a）は重文として扱うと述べている。しかし、これらの例文を日本語に訳す場合、両方とも日本語の複文構造にすることが可能である。用いる文の構造の違いのほかに、phrɔ́ʔと cɯŋ の間には意味的な違いもある。phrɔ́ʔの方は日本語の「から」や「ので」などと同様、主節の原因・理由を表わす表現である。タイ語の節順は、従属節が主節の後ろに続くものであり、一般的には原因・理由表現が節の頭に位置ものである。そのため、phrɔ́ʔの直後は従属節であり、その複文の原因・理由節である。一方、cɯŋ の方は原因・理由というより、結果を示す表現である。そのため、cɯŋ の直後には前節の原因・理由ではなく、結果である。Debi（2000）では、phrɔ́ʔは文の原因・理由を表わす接続詞であり、cɯŋ は文の結果を表わす

接続詞であるとも述べている。これが原因で、例文 1）と 2a）の文全体の意味内容は同じであるが、1）と 2a）の原因・理由と結果の節順は逆である。実際、例文 2a）の原因・理由節は前節であるため、例文 2a）の前節の頭に phrɔ́ʔを置くことも可能である。

2b） เพราะน้ำแน่าจึงยุงชุม

phrɔ́ʔ	náam	nâw	cɯŋ	yuŋ	chum
CON1	水	汚染する	CON2	蚊	集まる

タイ語では 2a）と 2b）は重文であるため、結果を表わす節は従属節ではなく、文に相当している節として扱うともいえる。この場合では、phrɔ́ʔは節と節を接続する機能が働いていないため、省略されても問題ない。それに対して、cɯŋ の方は接続詞としての機能が働いているため、例え phrɔ́ʔを残しても cɯŋ を省略することはできない。つまり、2b）のような例文では、cɯŋ の方が前件と後件の関係を表わす表現であり、phrɔ́ʔより重要な役割を持っている。さらに、cɯŋ は phrɔ́ʔと違い、節の頭だけではなく、節の中に位置する場合もある。主に、後節の主語の後には cɯŋ が位置する。言い換えれば、後節に主語がある場合、cɯŋ は必ずその主語の後に位置しなければならない。

3） เพราะเขาขยันเขาจึงสอบได้

phrɔ́ʔ	khǎw	khaʔyǎn	khǎw	cɯŋ	sɔ̀ɔp-dây
CON1	彼	勤勉だ	彼	CON2	合格

彼は勤勉だから、試験に合格できた。

≪タイ≫（Kamchai Tongloo：*Lak Phaasaa-Thai*）

例文 3）の cɯŋ は後節の頭ではなく、主語である khǎw の直後に位置している。この例文のような前節にも同じ主語が現れる場合には、後節の主語を省略しても問題ない。要するに、例文 3）の後節にある khǎw を省略することが可能である。または、逆に前節の khǎw を省略し、後節の khǎw を残すことも可能である。さらに、例文 3）におけるタイ語文と日本語文を比較してみれば、cɯŋ は「から」と違い、原因・理由節ではなく、結果節に置くものであることが確認できる。本来ならば例文 3）の「から」は、意味的には cɯŋ ではなく、原因・理由節に位置する phrɔ́ʔの方に当てはまると考えられる。しかし、3）のような文構造では、接続詞として働いているのは phrɔ́ʔではなく cɯŋ の方であるが、例文 1）から 3）までの文構造は、いずれも同じ日本語文に訳せる。タイ語と日本語の間には文の分類に関する違いがあるため、翻訳しても同じ分類の文構造になるとは限らない。実際、文の分類が異なっているにも関わらず、日本語の原因・理由文をタイ語の cɯŋ 構文にすることも多い。

4） 祖父は年のせいで、物忘れがひどくなった。

เพราะความชรา คุณตาจึงหลงลืมหนักขึ้น

phrɔ́ʔ	khwaam-chaʔraa	khun-taa	cɯŋ	lǒŋ-lɯɯm	nàk-khûn
CON1	年齢	祖父	CON2	物忘れ	ひどくなる

≪日タイ≫（Wiirawan Washiradirok：*500 Ruup-Prayook Phaasaa-Yiipun N1-N3*）

ただし、意味的に考察する場合でも、節順が文全体の意味に関わる場合もある。第2で述べてテ形並列とタイ語の比較考察はそれに該当する。その場合では、ある程度で文の分類の違いについても考慮すべきであろう。

3.1.2 phrɔ́ʔと cɯŋ とその他の表現

ここではphrɔ́ʔと cɯŋ 以外にも、他の表現の例文も見ていく。本章の3.1.1項目で述べた通り、原因・理由を表す表現はphrɔ́ʔが代表的であり、結果を表す表現はcɯŋ が代表的である。原因・理由を表す表現はphrɔ́ʔ以外あまり見られないが、結果を表す表現はcɯŋ の他に ləəy と chàʔnán もよく見られる。Phrayaa Upphakitsilpasan（1937）は、phrɔ́ʔは複文構造で用いられている表現であり、cɯŋ、ləəy、chàʔnán は重文構造で用いられている表現であると指摘している。3.1.1項目の繰り返しになるが、原因・理由を表す表現と結果を表す表現の間には用いられている文の分類が異なっており、文構造に関する違いもある。その上に、phrɔ́ʔの品詞はcɯŋ、ləəy、chàʔnán と異なっている[(2)]。（第1章1.3項目参考）しかし、本稿では表現そのものの意味用法の比較を中心とするため、その違いについては詳しく触れないこととする。

5) ไม่มีใครหยุดกินอะไร เพราะมันยุ่งยากเกินไปที่ต้องปลดหน้ากากออกซิเจนออกมา

mây-mii khray yùt kin aʔray phrɔ́ʔ man yûŋ-yâak kəən-pay thîi
いない 誰 休憩 食べる 何か CON それ 面倒な 過ぎる COMP

thɔ̂ɔŋ plòt nâa-kàak ɔ́ɔk-siʔ-ceen ɔ̀ɔk-maa
必要 外す マスク 酸素 出る

酸素マスクを外すのが面倒すぎたため、誰も食事休憩をとらなかった。

≪タイ≫（Win Lyovarin：*Sorng keen thii kod lok*）

6) เฟืองโมราใส่เสื้อยืดกางเกงยีนในตอนเย็น รวบผมไปถักเป็นเปียตะขาบข้างหลัง ป้านอมพี่เลี้ยงหล่อนเป็นคนถักให้ ใครจะกล้าถักเป็นเปียน่าขยะแขยงนั่นด้วยตัวเองกันล่ะ และเนื่องจากเปียนี้อยู่บนศีรีสระด้านหลังที่หญิงสาวไม่อาจมองเห็น ฉะนั้น ไม่ว่ามันจะเป็นตะขาบหรือกิ้งกือก็ช่างมันเถอะ

fûaŋmooraa sày sûa-yûɯt kaaŋkeeŋ-yiin nay-tɔɔn-yen rûap-phǒm pay
ファンモーラー 履く シャツ ジーンズ 午後に 髪をまとめて 方向に

thàk-pen-pia tàʔkhàap khâaŋ-lǎŋ pâa-nɔɔm phîi-líaŋ lǒn pen khon
三つ編みにする ムカデ 後ろ ノームばあ 乳母 彼女 は 人

thàk hây khray càʔ klâa thàk-pen-pia nâa-khaʔyàʔkhaʔyɛ̌ɛŋ nân
編む BEN 誰 FUT 勇気 三つ編みにする 気持ち悪い あの

dûay-tua-eeŋ kan-làʔ lɛ́ʔ nûaŋcàak pia níi yùu-bon srǐi-sàʔ dâan-lǎŋ
自分で COPU また CON1 三つ編み この 上にある 頭 後ろ

thîI yǐŋ-sǎaw mây-àakt mɔɔŋ-hěn chàʔnán mây-wâa man cà-pen tàʔkhàap
COMP 彼女 不可能 見える CON2 いずれ それ COPU ムカデ

rǔɯ kîŋkɯɯ kɔ̂ɔ châaŋ-man thɤ̀ʔ
CON ヤスデ CON かまわない COPU

フアンモーラーは午後にジーンズをはき、シャツを着る。髪はムカデのような三つ編みで、後ろに流れている。その三つ編みは、彼女の面倒を見ているノーム叔母ちゃんがしてやったんだ。自分であんな気持ち悪い三つ編みをするヤツはいるものか。そして、その三つ編みは彼女自身にも見えないように後ろに流してあるから、ムカデだろうがヤスデだろうが、どうでもいいことだ。

≪タイ≫（Srisurang：*Pleeng sii naam-gern*）

例文 5）では phrɔ́ʔが用いられているが、6）では nûaŋcàak と chàʔnán が用いられている。いずれも日本語の原因・理由表現に訳すことができる。5）の phrɔ́ʔの例文は原因・理由を表す表現であり、6）の nûaŋcàak も原因・理由を表す表現である。それらに対して、6）の chàʔnán は cɯŋ と ləəy と同様で、結果を表す表現である。chàʔnán という表現は、6）のように、phrɔ́ʔや nûaŋcàak などの原因・理由を表す表現と共起する場合が多い。さらに、chàʔnán は phrɔ́ʔ-chàʔnán という複合語の形で用いられる場合も多い。複合的な表現である phrɔ́ʔ-chàʔnán と chàʔnán の違いはまだ明確ではないが、殆どの場合では言い換えることができる。実際、例文 22）の場合でも chàʔnán を phrɔ́ʔ-chàʔnán で言い換えることが可能である。ところが、cɯŋ、ləəy、chàʔnán は、どれも結果を表す表現であるが、多くの場合、cɯŋ または ləəy を chàʔnán で言い換えることができない。そして、chàʔnán を cɯŋ または ləəy で言い換えることが可能な文も限られている。例文 22）の chàʔnán もそのまま cɯŋ で置き換えることができない。それの対して、殆どの場合、cɯŋ と ləəy は chàʔnán-cɯŋ で置き換えることができる。chàʔnán-cɯŋ は cɯŋ が基で作られた表現であるため、chàʔnán-cɯŋ の意味・用法は cɯŋ と殆ど同じであり、置き換えることが可能である。

7） เราไม่เคยรู้ว่าความรักจะเดินทางจากเราไปเมื่อไหร่ {จึง／ฉะนั้นจึง} ไม่ได้เตรียมพร้อมที่จะรับมือกับมัน

raw mây-keey rúu-wâa khwaam-rák càʔ dəən-thaaŋ-càak raw pay
我々 したことない 知る 恋 FUT 去る 我々 行く

mûa-rày {cɯŋ／chàʔnán-cɯŋ} mây-dây triam-phrɔ́ɔm thîi-càʔ ráp-mɯɯ kàp man
いつ CON NEG 準備する FUT 対策する に それ

我々は、いつ恋が去っていくかを知るすべがないため、それの対策を準備することもできるはずがない。

8） ชายหนุ่มไม่มีเวลาจะอธิบายให้คู่หูเข้าใจ {เลย／ฉะนั้นจึง} ต้องปล่อยเลยตามเลย

chaay-nǔm máy-mii veelaa càʔ àʔthíʔbaay hây khûu-hǔu khâw-cay
少年 ない 時間 FUT 説明する BEN 相棒 理解する

{ləəy／chàʔnán-cɯŋ} tɔ̂ɔŋ plɔ̀ɔy-ləəy-taam-ləəy
CON 必要 放っておく

少年は相棒に事情を説明する暇がないので、放っておくしかなかった。

例文 7）と 8）のように、7）の cɯŋ と 8）の ləəy を chàʔnán-cɯŋ で置き換えることができる。cɯŋ または ləəy を chàʔnán で言い換えることができる場合もあるが、あまり見られない。例えば、次のような場合であれば言い換えることができる。

9)　ช่วงนี้ไข้หวัดนกกำลังระบาด {จึง／เลย／ฉะนั้น} ต้องระวังให้ดี

chûaŋ-níi	khây-lûat-ʔɔ̀ɔk	kam-laŋ	raʔbàat	{cɯŋ／ləəy／chàʔnán}	tɔ̂ɔŋ
最近	デング熱	進行中	流行る	CON	必要
raʔwaŋ	hây-dii				
気をつける	ちゃんと				

最近デング熱が流行っているから、気をつけないといけない。

このように、タイ語の因果関係を表す表現には意味と用法が類似しているものが多いと考えられる。しかし、これらの表現の間には、まだ明確になっていない相違点もある。言い換えられる場合もあれば、言い換えられない場合もある。それぞれの表現の意味用法と特徴を正しく理解するためには、更なる分析が必要である。

3.2　事態系の原因・理由表現とタイ語の表現

日本語における原因・理由表現は、大きく「事態系」と「判断系」の2種類に分けられる。前田（2009）によれば、「事態系」は原因・理由を表し、「判断系」は原因・理由のほかに話し手の判断の根拠も表すと述べている[3]。

一方、タイ語の方は基本的にphrɔ́ʔとcɯŋを中心として、日本語と比較する対象として選んだ。タイ語では、事態系と判断系の原因・理由表現が分類されていないため、これらの表現の中に日本語の事態系の表現に近いものがあるかを考察する。また、タイ語ではこれら以外の原因・理由表現も存在するが、例えばləəyやchàʔnánなどがある。これら以外にも、phrɔ́ʔ-chàʔnán-cɯŋやphrɔ́ʔ-chàʔnánなどもあるが、元々がphrɔ́ʔ、cɯŋ、ləəyから作られた表現が多い。（第1章1.3項目の表1.3参考）これらの複合的な表現は、なんらかの限定的な用法も持っていると考えられるが、基本的には（phrɔ́ʔ）chàʔnán（cɯŋ）のように一部省略されても、その元にする表現と同じ意味・用法で用いられる場合が多い。そのため、ここでは基本的な表現のほうを中心にして考察する。

3.2.1　「ため（に）」とタイ語の表現

本項目では、日本語における事態系の原因・理由表現である「ため（に）」を中心にして、タイ語と比較考察する。タイ語のほうは、基本的にphrɔ́ʔとcɯŋを中心にして「ため（に）」と比較考察を行う。

「ため」と「ために」の相違点に関しては、焦点化することが可能かどうかという点にあるが[4]、両方とも多くの場合には交換することが可能であるため、ここではこれらの違いについては詳しく言及しない。まず、「ため（に）」は事態系の原因・理由表現であるため、従属節が主節の原因・理由を表わす場合には用いられるが、従属節が主節における話し手の判断の根拠を表わす場合には用い難いと考える。

10)　その運転手の体躯は細く、そして影も長く細い。茶色のコートを着ていて、裾が長いため、余った部分を両腿に巻きつけてとめていた。

（時雨沢恵一『キノの旅』）

11） 旅人は口頭で何度か注意をしたが、男は相当酒に酔っており、訳の分からない発言を繰り返した。その後、男が説得を続ける旅人に掴みかかったため、旅人はやむを得ず、持っていたハンド・パースエイダーを二発発砲してことなきをえた。

（時雨沢恵一『キノの旅Ⅱ』）

例文 10）と 11）は、いずれも従属節が主節の原因・理由を表わすものであるため、「ため（に）」を使用することができる。しかし、判断の根拠を表わす場合には、一般的には「から」と「ので」しか用いられない。そのため、次の例文 13）のように「ため（に）」が用い難いと考えられる。

12） 月のあかりはどこかぼんやりありましたが、霧が非常に深かったのです。ところがボートは左舷の方半分はもうだめになっていましたから、とてもみんなは乗り切らないのです。

（宮沢賢治『新編 銀河鉄道の夜』）

？13） 月のあかりはどこかぼんやりありましたが、霧が非常に深かったのです。ところがボートは左舷の方半分はもうだめになっていましたため（に）、とてもみんなは乗り切らないのです。

さらに、前田（2009）によれば、「ため（に）」は「から」と「ので」と比べて、丁寧体に続き難い表現であるとも述べている。そのため、例文 12）と 13）のような場合では、「ため（に）」より「から」の方がより自然な文であると考えられる。また、益岡（1997）によれば、「ため（に）」は客観的な因果関係を表わすという特徴もあると述べている。つまり、主節が話しての判断である場合、それは客観的な因果関係を表わすとはいえないため、「ため（に）」を用いることができないということになる。

3.2.1.1 「ため（に）」とタイ語の表現の比較考察

「ため（に）」構文をタイ語文にする場合、次の 14a）と 15a）のようにできる。

14a) すぐにでも出国したがっていたがバギーの修理のためしばらく足止めをくっていた。

ท่านแสดงท่าทางอยากออกจากเมืองนี้ไปเร็วๆ แต่เพราะต้องซ่อมบำรุงรถบักกี้ พวกเราจึงจำเป็นต้องอยู่ที่นี่ชั่วคราว

thân	sà?dɛɛŋ-thâa-thaaŋ yàak		ɔ̀ɔk-càak mɯaŋ	nîi	pay	rew-rew	tɛ̀ɛ
あの方	様子を見せる	したい	出る 国	この	行く	早く	逆接
phrɔ́?	tɔ̂ŋ	sɔ̂ɔm-bamruŋ	rót-bâkkîi	pûak-raw		cɯŋ	cam-pen-tɔ̂ŋ
CON1	必要	修理する	バギー	我々		CON2	しなければならない
yùu	thîi-nîi	chûa-khràaw					
いる	ここ	しばらく					

≪日本≫（時雨沢恵一『キノの旅Ⅲ』）

≪タイ≫（Chaninan Gittipatimarkun：*KINO NO TABI 3*）

15a）かすかにしか日が当たらないため、地面にはまったく草が生えていない。

เนื่องจากไม่ถูกแดดส่องแม้แต่น้อย บริเวณหน้าดินจึงไม่มีหญ้าขึ้นซักต้น

nûaŋ-càak	mây	thùuk	dɛ̀ɛt-sɔ̀ɔŋ	méɛ-tɛ̀ɛ-nɔ́ɔy	bɔɔriʔween	nâa-din
CON1	NEG	受身	日が当たる	全然	場所	地面

cɯŋ	mây-mii	yáa	kúun	sák-tôn
CON2	ない	草	生える	一本も

≪日本≫（時雨沢恵一『キノの旅』）

≪タイ≫（Chaninan Gittipatimarkun：*KINO NO TABI*）

例文 15a）の nûaŋ-càak は例文 14a）の phrɔ́ʔと同様、原因・理由を表わす表現である。一方、cɯŋ の方は結果を表す表現であり、接続表現として用いられている[5]。そのため、この場合では phrɔ́ʔと nûaŋ-càak を省略することが可能であるが、cɯŋ を省略することはできない。

日本語文の「ため」は原因・理由を表わす表現であるため、原因・理由節に位置している。それに対して、cɯŋ は結果を表わす表現であるため、結果節の方に位置する。例文 15a）の日本語文もタイ語文も、両方とも前節と後節は因果関係で結ばれている上に、日本語文とタイ語文は両方とも判断の根拠を表わす原因・理由文ではない。構造的に違いはあるが、例文 14a）と 15a）は、「ため（に）」構文を cɯŋ 構文に訳すことが可能であり、両方とも意味的に類似している。

ただし、「ため（に）」構文を cɯŋ 構文ではなく、phrɔ́ʔ構文に訳すことも可能である。意味・用法の関係上、phrɔ́ʔは「ため（に）」と同様、原因・理由を表わす表現であるため、表現自体だけを見れば、cɯŋ と比べて phrɔ́ʔの方が意味的に「ため（に）」に類似しているといえる。とはいえ、これは「ため（に）」に限ったことではなく、原因・理由を表す意味・用法から考えれば、phrɔ́ʔは cɯŋ よりも日本語の原因・理由表現に近い。実際、例文 14a）と 15a）は両方とも、phrɔ́ʔ構文にすることが可能である

14b）すぐにでも出国したがっていたがバギーの修理のためしばらく足止めをくっていた。

ท่านแสดงท่าทางอยากออกจากเมืองนี้ไปเร็วๆ แต่พวกเราจำเป็นต้องอยู่ที่นี่ชั่วคราว เพราะต้องซ่อมบำรุงรถบักกี้

thân	sàʔdɛɛŋ-thâa-thaaŋ	yàak	ɔ̀ɔk-càak	mɯaŋ	nîi	pay	rew-rew	tɛ̀ɛ
あの方	様子を見せる	したい	出る	国	この	行く	すぐにでも	逆接

pûak-raw	cam-pen-tôŋ	yùu	thîi-nîi	chúa-khràaw	phrɔ́ʔ	tôŋ
我々	しなければならない	いる	ここ	しばらく	CON	必要

sɔ̂ɔm-bamruŋ	rót-bâkkîi
修理する	バギー

≪日本≫（時雨沢恵一『キノの旅Ⅲ』）

15b）かすかにしか日が当たらないため、地面にはまったく草が生えていない。

บริเวณหน้าดินไม่มีหญ้าขึ้นซักต้น เพราะไม่ถูกแดดส่องแม้แต่น้อย

bɔɔriʔween	nâa-din	mây-mii	yáa	kúun	sák-tôn	phrɔ́ʔ	mây	thùuk	dɛ̀ɛt-sɔ̀ɔŋ
場所	地面	ない	草	生える	一本も	CON	否定	受身	日が当たる

méɛ-tɛ̀ɛ-nɔ́ɔy

全然

≪日本≫（時雨沢恵一『キノの旅』）

例文 14b）と 15b）のように、14a）と 15a）のタイ語文の原因・理由節と結果節の節順を逆にすることで、cɯŋ 構文から phrɔ́ʔ構文にすることが可能である。cɯŋ 構文の殆どが基本的に、このように phrɔ́ʔ構文にすることが可能である。文構造を中心として比較してみれば、14b）と 15b）のタイ語文の節順は日本語文と逆であるが、原因・理由を表わす表現で前節と後節を結び付けている点では日本語文と同様である。

タイ語の節順は、一般的には日本語と逆であるが、文全体の内容から見れば、14b）と 15b）のタイ語文は日本語文と変わらない。さらに、14b）15b）の方は原因・理由を表す表現で節と節を結び付けるため、14a）15a）よりも構造的に日本語文に近い部分がある。文全体の意味は、タイ語文も日本語文と同様であると考えられるが、タイ語の場合では節順が異なっているため、話し手が重点にしたい部分も異なっていると考えられる。14b）と 15b）のような phrɔ́ʔ構文と比較する場合、日本語では結果節を原因・理由節の後で述べるのに対して、タイ語の場合は結果節を先に述べるということになる。その結果、日本語文は文を最後まで述べなければ結果の部分が分からないのに対して、タイ語文は文を最後まで述べなければ原因・理由の部分が分からない。文全体の内容が同じであっても、この違いによって、話の部分的な重要度も異なっていると考えられる。

14c）すぐにでも出国したがっていたが、バギーの修理のため…（しばらく足止めをくっていた）

ท่านแสดงท่าทางอยากออกจากเมืองนี้ไปเร็วๆ แต่พวกเราจำเป็นต้องอยู่ที่นี่ชั่วคราว（เพราะต้องซ่อมบำรุงรถบักกี้）

thân sa̍ʔdɛɛŋ-thâa-thaaŋ yàak ʔɔ̀ɔk-càak muaŋ nîi pay rew-rew tɛ̀ɛ pûak-raw cam-pen-tɔ̂ŋ yùu thîi-nîi chúa-khràaw（phrɔ́ʔ tɔ̂ŋ sɔ̀ɔm-bamruŋ rót-bâkkîi）

15c）かすかにしか日が当たらないため…（地面にはまったく草が生えていない）

บริเวณหน้าดินไม่มีหญ้าขึ้นซักต้น（เพราะไม่ถูกแดดส่องแม้แต่น้อย）

bɔɔriʔween nâa-din mây-mii yáa kúun sák-tôn （phrɔ́ʔ mây thùuk dɛ̀ɛt-sɔ̀ɔŋ méɛ-tɛ̀ɛ-nɔ́ɔy）

日本語では基本的に原因・理由文における主節は結果節に当たるため、文全体の一番重要な内容は結果になる。それに基づいて、14c）と 15c）を見れば、タイ語の場合では話し手にとって結果が内容の重点であり、文を最後まで言わなくても重点がが伝わる。後で述べる原因・理由の部分は、その重点の後付け補足であるともいえる。一方、日本語の場合では、原因・理由も含めて、全部の内容を重点にして伝えたいため、結果を最後に言うことにすると考えられる。ちなみにこれは、あくまでも同

じ文構造で話し手が述べる場合である。話し手が話したい部分だけを述べれば、タイ語でも日本語でも同じである。上記の 14c）と 15c）は、タイ語と日本語が同じ原因・理由構文である場合、それぞれの言語における話し手の重点はどこにあるかという面だけを考察した。その結果、タイ語の方は先に結果を述べるため、話し手の重点は結果の部分までのに対して、日本語の場合は原因・理由の部分も含めて結果までが重点であると考えられる。ところが、タイ語文の cɯŋ 構文の場合は、phrɔ́ʔ構文と同じようにはならい。

14d) すぐにでも出国したがっていたが、バギーの修理のため…（しばらく足止めをくっていた）
ท่านแสดงท่าทางอยากออกจากเมืองนี้ไปเร็วๆ แต่เพราะต้องซ่อมบำรุงรถบักกี้…（พวกเราจึงจำเป็นต้องอยู่ที่นี่ชั่วคราว）
thân sǎʔdɛɛŋ-thâa-thaaŋ yàak ʔɔ̀ok-càak mɯaŋ nîi pay rew-rew tɛ̀ɛ phrɔ́ʔ tɔ̂ŋ sɔ̂ɔm-bamruŋ rót-bâkkîi…（pûak-raw cɯŋ cam-pen-tɔ̂ŋ yùu thîi-nîi chúa-khràaw）

15d）かすかにしか日が当たらないため…（地面にはまったく草が生えていない）
เนื่องจากไม่ถูกแดดส่องแม้แต่น้อย…（บริเวณหน้าดินจึงไม่มีหญ้าขึ้นซักต้น）
nûaŋ-càak mây thùuk dɛ̀ɛt-sɔ̀ɔŋ mɛ́ɛ-tɛ̀ɛ-nɔ́ɔy…（bɔ̀ɔriʔween nâa-din cɯŋ mây-mii yáa kúun sák-tôn）

例文 14d）15d）を見れば、cɯŋ 構文の場合、節順が日本文と同じであるため、話の重点も日本語の「ため（に）」構文と同じであると考えられる。すなわち、原因・理由も含めて結果の部分までが重点であるため、最後まで述べないと話の内容が十分に伝わらない。

接続表現自体の意味・用法を中心にして比較考察する場合、phrɔ́ʔ構文の方が「ため（に」」構文に近いが、構造的に比較考察する場合、cɯŋ 構文の方が「ため（に」」構文に近いと考えられる。とはいえ、節順のことも考慮すれば、文の内容を伝達する順は cɯŋ 構文のほうが「ため（に）」構文と同じである上に、内容の重点も日本語に近いと考えられる。次の 16a）から 17a）までの例文も、タイ語文は cɯŋ 構文であり、節順は日本語の「ため（に）」構文と同じであるため、内容を伝える流れは非常に類似している。

16a）この勇敢なる黒犬は人々の立騒でいる間にどこかへ姿を隠したため、表彰したいにもすることが出来ず、当局は大いに困っている。
เนื่องจากหมาสีดำที่กล้าหาญตัวนี้ได้หลบหายไปในช่วงที่ผู้คนกำลังแตกตื่นกันอยู่ จึงไม่สามารถจะประกาศเกียรติคุณชมเชยได้ ทำให้เจ้าหน้าที่ผู้เกี่ยวข้องต้องยุ่งยากใจอย่างมาก

nûaŋ-càak	mǎa	sǐi-dam	thîi	klâa-hǎan	tua	nîi	dây-lòp-hǎay-pay
CON1	犬	黒い	関係詞	勇敢	匹	この	姿を隠した

nay-chûaŋ-thîi	phûu-khon	kamlaŋ-tɛ̀ɛk-tùɯɯn-kan-yùu cɯŋ	mây-sǎamáat	caʔ
間	人々	騒いでいる CON2	できない	未来

praʔkàat-kìattiʔkhun-chom-cheey	dây	tham-hây	câw-nâa-thîi-phûu-kìaw-khɔ̂ɔŋ	
表彰する	可能	CAUS	当局	

thɔ̂ɔŋ	yûŋ-yâak-cay	yàaŋ-mâak
させるを得ない	困っている	大いに

≪日本≫（芥川龍之介『芥川龍之介全集 5』）

≪タイ≫（Monthar Pimthong：*Ruang-san Yiipun 4*）

17a）一行は穂高山と槍ヶ岳との間に途を失い、かつ過日の暴風雨に天幕糧食等を奪われたため、ほとんど死を覚悟していた。

นักเรียนกลุ่มนี้ได้หลงทางไปในระหว่างภูเขาโฮทากายาม่าและภูเขายาริกาทาเกะ เนื่องจากต้องสูญเสียเต็นท์และเสบียงอาหารไปจากการถูกพายุพัดกระหน่ำเมื่อสองสามวันก่อนหน้านั้น พวกนักเรียนจึงคิดว่าคงจะไม่มีทางรอดแน่นอน

nák-rian	klùm	níi	dây-lŏŋ-thaaŋ	pay-nay-rá?wàaŋ	phuu-khǎw-hoo-taa-kaa-yaa-má?
学生	一行	この	迷ってしまった	間	穂高山

lɛ́?	phuu-khǎw-yaa-rí?-kaa-taa-kɛ̀?	nûaŋ-càak	thôŋ-sǔun-sǐa	tén lɛ́?
と	槍ヶ岳	CON1	失ってしまった	テント と

sa?biaŋ-aahǎan	pay-càak-kaan	thùuk	phaayú?-fŏn	phát-kra?nàm	mûa
食料	によって	CAUS	暴風雨	激しい	時

sɔ̌ɔŋ-sǎam-wan	kɔ̀ɔn-nâa-nán	pûak-nák-rian	cɯɯ	khít-wâa khoŋ-cà?	mây-mii-thaaŋ
二三日	その前	学生達	CON2	と思う 恐らく	不可能

rɔ̂ɔt	nɛ̂ɛ-nɔɔn
生き残る	絶対

≪日本≫（芥川龍之介『芥川龍之介全集 5』）

≪タイ≫（Monthar Pimthong：*Ruang-san Yiipun 4*）

18a）弾丸は男の右肩に当たったが、男が叫びながらさらに近づいたため、旅人は足を狙ってもう一発だけ撃った。

ลูกกระสุนโดนเข้าที่ไหล่ขวา แต่ผู้ชายตะโกนด่าทอซ้ำยังเข้ามใกล้ นักเดินทางจึงเล็งไปที่เท้าแล้วยิงอีกนัด

lûuk-krà?sǔn	doon-khâw	thîi	lày	khwǎa	tɛ̀ɛ	phûu-chaay	ta?koon-dàa-thɔɔ	
弾丸	当たる	場所	肩	右	逆接	男	叫ぶ	

câm-yaŋ kháw-maa-klây	nák-dəən-thaaŋ	cɯɯ	leŋ-pay-thîi	tháw	lɛ́ɛw	yiŋ	ìik-nat
しかも 近づく	旅人	CON	に狙う	足	そして	打つ	もう一発

≪日本≫（時雨沢恵一『キノの旅Ⅱ』）

≪タイ≫（Piyawan Subsamruam：*KINO NO TABI 2*）

19a）道が狭いため、車がぶつかってしまった。

ถนนแคบรถจึงชนกัน

tha?nŏn khɛ̂ɛp	rót	cɯɯ	chon	kan	
道 狭い	車	CON	ぶつかる	互いに	

≪日タイ≫（Phatcharaaporn Kaewklitsapaang：*Kroong-saang Phaasaa-Yiipun*）

また、前田（2009）は、「ため（に）」は「から」「ので」と比べて、話し言葉では用いられ難く、ニューズや論説的な文に用いられやすいという文体的な特徴があると述べている。一方、タイ語のほうでは、phrɔ́ʔは文体的な制限がなく、文語的にも口語的にも用いられる。それに対して、結果表現を口語的に用いるであれば、cɯŋよりもləəyのほうが用いやすい。そのため、cɯŋは「ため（に）」と同様、ニューズや論説的などの場合によく用いられると考える。例文 16a）から 18a）までの例文も、口語的な内容ではなく、ニューズのような内容で、文語的な文であるため、phrɔ́ʔ構文よりもcɯŋ構文にした方が文体が内容に合っているといえる。一方、19a）は短い文であり、16a）から18a）までの例文と比べて文語的ではない。しかし、文語的な表現である「ため（に）」が用いられているため、19a）のような例文でもphrɔ́ʔ構文よりcɯŋ構文のほうが日本語文に近いと考える。

この文体的な特徴は、cɯŋとləəyの相違点でもある。実際、16a）から18a）までの例文のcɯŋをləəyで置き換えれば、より口語的な文体になる。

16b）เนื่องจากหมาสีดำที่กล้าหาญตัวนี้ได้หลบหายไปในช่วงที่ผู้คนกำลังแตกตื่นกันอยู่ เลยไม่สามารถจะประกาศเกียรติคุณชมเชยได้ ทำให้เจ้าหน้าที่ผู้เกี่ยวข้องต้องยุ่งยากใจอย่างมาก

nûaŋ-càak mǎa sǐi-dam thîi klâa-hǎan tua-níi dây-lòp-hǎay-pay nay-chûaŋ-thîi phûu-khon kamlaŋ-tɛ̀ɛk-tɯ̀ɯn-kan-yùu ləəy mây-sǎamâat caʔ praʔkàat-kìattiʔkhun-chom-cheey dây tham-hây câw-nâa-thîi phûu-kìaw-khɔ̂ɔŋ thɔ̂ɔŋ yûŋ-yâak-cay yàaŋ-mâak

17b）นักเรียนกลุ่มนี้ได้หลงทางไปในระหว่างภูเขาโฮทากายาม่าและภูเขายาริกาทาเกะ เนื่องจากต้องสูญเสียเต็นท์และเสบียงอาหารไปจากการถูกพายุพัดกระหน่ำเมื่อสองสามวันก่อนหน้านั้น พวกนักเรียนเลยคิดว่าคงจะไม่มีทางรอดแน่นอน

nák-rian klùm-nîi dây-lǒŋ-thaaŋ pay-nay-ráʔwàaŋ phuu-khǎw-hoo-taa-kaa-yaa-máʔ léʔ phuu-khǎw-yaa-ríʔ-kaa-taa-kèʔ nûaŋ-càak thôŋ-sǔun-sǐa tén léʔ sàʔbiaŋ-aahǎan pay-càak-kaan-thùuk phaayúʔ-fǒn-phát-kraʔnàm mûa-sɔ̌ɔŋ-sàam-wan-kɔ̀ɔn-nâa-nán pûak-nák-rian ləəy khít-wâa khoŋ-caʔ mây-mii-thaaŋ rɔ́ɔt nɛ̂ɛ-nɔɔn

18b）ลูกกระสุนโดนเข้าที่ไหล่ขวา แต่ผู้ชายตะโกนด่าทอซ้ำยังเข้ามาใกล้ นักเดินทางเลยเล็งไปที่เท้าแล้วยิงอีกนัด

lúuk-kraʔsǔn doon-khâw-thîi lày khwǎa tɛ̀ɛ phûu-chaay tàʔkoon-dàa-thɔɔ cám-yaŋ khâw-maa-klây nák-dəən-thaaŋ ləəy leŋ-pay-thîi tháw léɛw yiŋ ìik-nát

また、19a）の場合でもcɯŋをləəyで置き換えることが可能である。

19b）ถนนแคบรถเลยชนกัน

thaʔnǒn khɛ̂ɛp rót ləəy chon-kan

この場合でもcɯŋを用いている19a）の方がləəyを用いている19b）より文語的である。このように、cɯŋとləəyは意味的には類似しているが、文体的な相違点がある。そして、このような相違点があるため、日本語の「ため（に）」構文をタイ語に訳す場合、cɯŋ構文にすれば、節順が日本語と同

じになるうえに、文語的になるため、phrɔ́ʔ構文か lɤɤy 構文にするよりも「ため（に）」構文に近い構文になるといえる。

3.2.1.2　まとめ―「ため（に）」とタイ語の表現

本稿で事態系の原因・理由表現である「ため（に）」とタイ語における原因・理由表現を比較した結果は、次のようにまとめることができる。

（A）日本語では原因・理由表現を「事態系」と「判断系」の二種類に分けられているが、タイ語ではそのような分類はない。代わりに、タイ語の因果関係を表す表現は、「原因・理由を表わす表現」と「結果を表わす表現」の二分類がある。phrɔ́ʔは「原因・理由を表わす」の部類に入り、cɯŋ は「結果を表わす」の部類に入る。（第 1 章 1.3 項目参考）「ため（に）」は「事態系」であるため、従属節が主節の原因・理由を表わす場合には使用できるが、判断の根拠を表わす場合には使用できない。一方、タイ語では事態系と判断系の概念がないと考えられ、phrɔ́ʔと cɯŋ は「ため（に）」と同じように事態系で原因・理由を表わす場合には使用できる上に、判断系の場合にも使用できると考えられる。特に、第 2 章で述べた通り、タイ語における「原因・理由を表わす」の部類に入る phrɔ́ʔは、「から」と「ので」のいずれも対応している。「から」と「ので」は事態系の場合のみならず、判断系の場合にも用いられる表現であるため、phrɔ́ʔもそれらと同様、いずれの場合にも用いられる。

（B）cɯŋ は結果を表わす表現であり、原因・理由を表わす表現とは異なる文構造で用いられている。phrɔ́ʔは、結果節から述べる文構造に用いられているが、cɯŋ のほうは原因・理由節から述べる文構造に用いられている。そのため、phrɔ́ʔを用いる因果構文の節順は日本語と逆であるが、cɯŋ を接続表現として用いる構文の節順は日本語文と同じである。日本語とタイ語の文を比べてみれば、phrɔ́ʔ構文と cɯŋ 構文のいずれも、文全体の意味は日本語と殆ど変わらないといえる。しかし、phrɔ́ʔ構文と cɯŋ 構文の節順が異なっているため、日本語と同様で原因・理由を先に述べる cɯŋ 構文の方は、phrɔ́ʔ構文より日本語文に近いといえる。

（C）また、「ため（に）」は文語的な表現であり、話し言葉よりニューズなどでよく用いられているという文体的な特徴がある。タイ語の cɯŋ もそれと同様、文語的な文のほうに用いやすい。それ対して、phrɔ́ʔは文体的な特徴がなく、lɤɤy は口語的な表現であるため、これらの表現より cɯŋ のほうが「ため（に）」に近い特徴を持っているといえる。

結果として、「ため（に）」は、タイ語の phrɔ́ʔと cɯŋ のいずれもが対応しているが、文体的な特徴と文構造の関係で、cɯŋ のほうが「ため（に）」に近い表現であると考える。しかし、事態系という特徴に関しては、タイ語ではあまり認識できない。他の事態系の表現と比較考察する場合、「ため（に）」と同じ事態系の表現であっても、cɯŋ 以外の表現に訳されやすい表現もあると考えられる。例えば、lɤɤy は cɯŋ よりも口語的な表現であるため、「ため（に）」より口語的な表現であれば、lɤɤy のほうが対応しやすいであろう。

3.2.2「せいで」「おかげで」とタイ語の表現

本項目では、日本語における事態系の原因・理由表現「せいで」「おかげで」を中心にして、タイ語における原因・理由表現と比較考察する。日本語における原因・理由表現の中には、単なる原因・理由を表すだけではなく、それ以外の意味用法も兼ねて用いられているものが多数ある。「せいで」

と「おかげで」はその中の二つであり、これらは事態に関するプラス性とマイナス性を表す意味的な特徴がある。一方、タイ語においてはphrɔ́ʔとcuŋの他に、lɤ̀ɤyやchàʔnánなど、因果関係を表す表現が様々あるものの、これらの表現に原因・理由または結果を表す他に何らかの限定的な意味・用法があるかどうかはまだ明確になっていない部分がある。例えば、phrɔ́ʔは「から」「ので」と同様、原因・理由を表す表現であるが、「せいで」や「おかげで」のようにプラス性やマイナス性を表わす機能があるかどうかはまだ明らかになっていない。故に、「せいで」と「おかげで」が、実際にタイ語による表現のものと、どの程度まで対応しているかも明確になっていない。よって、タイ語と日本語の原因・理由表現の相違点を明らかにするために、「せいで」と「おかげで」をタイ語による表現のものと比較考察することを試みる。

また、本項目における原因・理由表現というものは、原因・理由を表す意味がある表現を示し、節と節を接続する「から」や「ので」のみならず、文頭で用いられている「だから～」と「だって～」や文末で用いられている「～からだ」「～おかげだ」「～せいだ」なども含める。ただし、本研究では因果構文の前節と後節の関係を中心にして比較考察するため、接続表現である「おかげで」と「せいで」だけを中心にする。

日本語における原因・理由文に関する研究は多数あるが、その中で、「せいで」と「おかげで」の研究の数が多いとは言えない。「せいで」と「おかげで」を扱っている研究には三浦（2007）、前田（2009）、益岡・田窪（1992）などがある。一方、タイ語における原因・理由文の研究はあまり進んでおらず、原因・理由表現の機能特徴を考察するものは少ない。因果関係を表すphrɔ́ʔ、cuŋ、lɤ̀ɤy、chàʔnánのそれぞれの意味用法は、原因・理由または結果を表すほかに何らかの意味用法があると述べている研究は管見の限り見当たらなかった。つまり、日本語における「せいで」と「おかげで」のように原因・理由を表すほかに事態に対してプラス性やマイナス性を表わす機能が、タイ語の原因・理由表現にもあるかどうかは、まだ明らかになっていない。タイ語の原因・理由表現に関する研究は、Methawee（2001）やKamchai（2009）などがあるが、いずれも原因・理由表現の機能特徴を中心にしたものではない。タイ語における原因・理由文の研究はまだあまり進んでおらず、数は少ないが、それでも日本語と比較した研究もある。日本語とタイ語の比較研究は、冨田（1957）の研究がある。さらに、田中（2004a）や高橋（2013）などの研究もある。本稿では、これらの研究からタイ語の原因・理由節の名称や比較考察の方法などを参考にし、「せいで」と「おかげで」を中心にして、タイ語の原因・理由表現を日本語のものと比較して考察する。

3.2.2.1 「せいで」と「おかげで」の意味・用法

「せいで」と「おかげで」は両方とも原因・理由を表す表現である。しかし、「から」と「ので」と違い、「せいで」と「おかげで」は原因・理由を表すだけでなく、その因果関係が望ましい事態かどうかということも表す表現である。

前田（2009）は、「せい＋で」「おかげ＋で」という形で「せいで」と「おかげで」が構成されていると考えた。また、前田（2009）は、「せい」と「おかげ」は原因を表す名詞であるが、独立した名詞として機能することはなく、節や「名詞＋の」を受けなければならないとも述べている。よって、「名詞＋の＋名詞」などの形で、「君のおかげ」「酒のせい」など、「せい」と「おかげ」は名詞として使うことができる。その名詞から、「せいで」「おかげで」という表現が作られて、接続表現と

して用いられている。従属節と主節を結び付けるために使われており、従属節と主節の因果関係を表す機能を持っている。その点においては、「から」や「ので」などの接続助詞も「せいで」と「おかげで」と同様であるが、「せいで」と「おかげで」は因果関係を表すほかに、その因果関係にあるプラス性とマイナス性を表す機能もある。

また、「せいで」と「おかげで」は節と節を接続する表現であるが、「～せいだ」と「～おかげだ」という述語的な用法もある。この場合では、「名詞＋文末表現」の形と同様であるため、この「せい」と「おかげ」の品詞は名詞である。そして「せい」と「おかげ」は独立した名詞として機能することはないため、「～せいだ」と「～おかげだ」の場合では「の」を受けることが必要である。

3.2.2.2 「せいで」の意味・用法

「せいで」は複文の中で、前件と後件[(6)]の因果関係を表し、望ましくない事態を表す原因・理由表現である。つまり、よくない結果を引き起こした原因を表す表現である。さらに、その結果の責任は前件にあるというニュアンスを持つ場合もある。例えば、次の例文である。

20a） わがままな母親のせいで、彼女は結婚が遅れた。

（グループ・ジャマシイ『教師と学習者のための日本語文型辞典』）

21a） 3 人が遅刻したせいで、みんな新幹線に乗れなかった。

（グループ・ジャマシイ『教師と学習者のための日本語文型辞典』）

22） 兄に同情の多い母から見ると、嫂の後姿は、いかにも冷淡らしく思われたのだろう。が自分はそれに対して何とも答えなかった。ただ歩きながら嫂の性格をもっと一般的に考えるようになった。自分は母の批評が満更当っていないとも思わなかった。けれども我肉身の子を可愛がり過ぎるせいで、少し彼女の欠点を苛酷に見ていはしまいかと疑った。

（夏目漱石『夏目漱石全集 7』）

23） 父は年の所為で健康の衰えたのを理由として、近々実業界を退く意志のある事を代助に洩らした。

（夏目漱石『夏目漱石全集 7』）

グループ・ジャマシイ（1998）では、「せいで」は「ので」や「ために」で言い換えることが可能な場合が多いと述べている。しかし、「ので」と「ために」より、「せいで」の方が前件に責任があるという意味が強いと考えられる。また、「せい」は形式名詞であるため、「名詞＋の＋せいで」の場合ではそのまま「せいで」を「ために」と「ので」で言い換えることができない場合がある。例えば、20a）と 21a）を「ので」と「ために」で言い換えると、次のようになる。

20b） 母親がわがままだったので、彼女は結婚が遅れた。

21b） 3 人が遅刻したために、みんな新幹線に乗れなかった。

また、「せい」は一般的には望ましくない事態を表す名詞であるが、そうではない場合もある。前田（2009）は、中立的な因果関係を表すと言うべき場合もあると述べている。しかし、その場合、「せいか」という形で使われる場合が多いと考えられる。例えば、次の例文24）と25）である。

24）　秋は、夜空が澄んでいるせいか、遠景が、春よりも美しい。

（平岩弓枝『午後の恋人（下）』）

25）　私は兄といっしょの蚊帳の中に寝た。妹の夫だけは、客扱いを受けているせいか、独り離れた座敷に入って休んだ。

（夏目漱石『こころ』）

上記の例文24）と25）の「せい」は、マイナス性を表すではなく、中立を表すと考えられる。グループ・ジャマシイ（1998）によれば、「せいか」は「はっきりはいないがこれこれの理由で」という意味を表すと述べられている。つまり、プラス性でもマイナス性でもなく中立を表すということであると考えられる。ところが、「せいか」は「せいで」の一つの形式ではなく、別の表現であるとも考えられる。本稿では、原因・理由を表すだけではなく、プラス性とマイナス性を表す機能特徴をタイ語の表現と比較するため、「せいで」の方を中心にして比較考察をする。

3.2.2.3　「おかげで」の意味・用法

「おかげで」は「せいで」と同様、原因・理由を表すが、「せいで」は望ましくない事態を表すものであるのに対して、「おかげで」は望ましい事態を表すものである。例えば、次の例文がある。

26）　あなたのおかげで助かりました。

（グループ・ジャマシイ『教師と学習者のための日本語文型辞典』）

27）　あなたが来てくれたおかげで、楽しい会になりました。

（グループ・ジャマシイ『教師と学習者のための日本語文型辞典』）

28）　明治の初年に横浜へ移住奨励のため、政府が移住者に土地を与えた事がある。その時ただ貰った地面の御蔭で、今は非常な金満家になったものがある。

（夏目漱石『それから』）

29）　「ヒロがいてくれたおかげで、困ってる子がいたら自然に助け合いのできる、優しいクラスに、すばらしいクラスになったんだ」

（乙武洋匡『五体不満足　完全版』）

グループ・ジャマシイ（1998）によれば、「おかげで」は原因・理由を表すが、それは良い結果を導く場合に用いると述べられている。そして、「せいで」は責任が前件にあることを表すのに対して、「おかげで」は前件に恩があることを表す場合もあると考えられる。例えば、次の例文30）と31）である。

30）　卓上の談話は重に平凡な世間話であった。始のうちは、それさえ余り興味が乗らない様に見えた。父はこう云う場合には、よく自分の好きな書画骨董の話を持ち出すのを常としていた。そうして気が向けば、いくらでも、蔵から出して来て、客の前に陳べたものである。父の御蔭で、代助は多少この道に好悪を有てる様になっていた。兄も同様の原因から、画家の名前位は心得ていた。

（夏目漱石『それから』）

31）　元全日本の選手だったコーチがふたりもいたのだ。彼らを中心とした監督・コーチ陣、全国でも指折りだったに違いない。そんなコーチ陣が、戦術面、精神面でしっかりと指導してくれたおかげで、「戸山グリーンホーネッツ」は常に都大会でベスト4に入るような強豪チームになることができた。

（乙武洋匡『五体不満足　完全版』）

例文30）と31）では、書き手または話し手が後節に良い結果が出たことに関して、前件に出てきた人物またはその人物の行為に恩があると感じていると考えられる。25）の場合では「父」であり、31）の場合では「コーチ陣（の指導）」である。このように「おかげで」は一般的には望ましい事態を表す表現である。ところが、益岡・田窪（1992）は、「おかげで」は自嘲的な使い方で望ましくない事態の原因を表すこともできると述べている。つまり、皮肉な言い方で「おかげで」を使うことができる。

32）　あいつがやめたおかげで、こっちは二人分働かされた。

（益岡・田窪『基礎日本語文法―改訂版―』）

33）　「おれは自分の子供を綾成す事ができないばかりじゃない。自分の父や母でさえ綾成す技巧を持っていない。それどころか肝心のわが妻さえどうしたら綾成せるかいまだに分別がつかないんだ。この年になるまで学問をした御蔭で、そんな技巧は覚える余暇がなかった。二郎、ある技巧は、人生を幸福にするために、どうしても必要と見えるね」

（夏目漱石『夏目漱石全集7』）

34）　「叔父さんは、昨日御父さんから奢って貰ったんですってね」
「ああ、御馳走になったよ。御蔭で今日は腹具合が悪くって不可ない」

（夏目漱石『それから』）

35）　（背が）伸びなかったんだからしょーがないじゃん！おかげで、やえ子はいまだに、ラフな服装のときは間違いなく小学生に間違われる。

（ハセガワケイスケ『しにがみのバラッド。3』）

例文32）から35）には、「おかげで」が用いられているが、それらは望ましい事態を表すのではなく、皮肉な言い方で望ましくない事態を表している。「おかげで」は、相手の動作が望ましい事態の原因であることを表す場合、「～てくれた」や「～てもらった」などがよく用いられている。それらの表現は、相手が話し手または話し手に関係がある人のために何かをする表現であり、話し手がその行為に対して感謝している意味をもっているからである。例えば、例文31）がそれに該当する。

しかし、「おかげで」が皮肉の意味で用いられている場合には、相手の行為に感謝しているわけではないため、「～てくれた」や「～てもらった」などの表現が使われていない。例えば、例文 27）と 33）がそれにあたる。つまり、前件と後件の内容だけでなく、「おかげで」の前に「～てくれた」などの表現があるかどうかを見ることで、その「おかげで」は皮肉の意味で用いられているかどうかを確認することができると考えられる。

36）君がその意見を出してくれたおかげで、海外出張することになった。
37）君がその意見を出したおかげで、海外出張することになった。

例文 36）では、「～てくれた」という表現があるため、「おかげで」は望ましい事態を表していることが分かる。しかし、37）の場合では、「～したおかげで」の形になっているため、皮肉の意味で言っている可能性もあると考えられる。

3.2.2.4 「せいで」「おかげで」とタイ語の比較考察

タイ語における phrɔ̂ʔ、cɯŋ、lɤ̂ay、chàʔnán は、どれも前節と後節を因果関係で結び付ける表現であるが、因果関係を表すこと以外に他の意味も表わすかどうかはまだ明確になっていない。しかし、日本語の「おかげで」と「せいで」と比較考察することによって、タイ語におけるこれらの表現は、事態の原因に対するプラス性やマイナス性を表す機能を持っているかどうかを確認することができる。

まずは、「おかげで」の例文を挙げる。次の例文は、日本語が原文である用例とその用例からタイ語に翻訳されたものである。

38） さう思ふと、一時、外に注意を集中したおかげで忘れてゐた、さつきの不安が、何時の間にか、心に帰つて来る。

เมื่อโกะอิคิดเช่นนี้ ความรู้สึกอึดอัดซึ่งเข้าลืมไปเพราะหันไปเอาใจใส่กับเหตุการณ์ภายนอกเมื่อสักครู่ก็หวนกลับมาสู่จิตใจของโกะอิอีกครั้งหนึ่ง

mûa	koʔîʔ	khít-chêen-níi		khwaam-rúu-sùuk	ùt-àt-cay	sûŋ	khǎw	lɯɯm-pay
の時に	五位	そう思う		気持ち	不安	COMP	彼	忘れた
phrɔ̂ʔ	hǎn-pay	aw-cay-sày	kàp	hèet-kaan	phaay-nɔ̂ɔk	mûa-sák-khrûu-níi		kɔ̂ɔ
CON	向かう	集中する	に	出来事	外	先ほど		CON
hŭan-klàp-maa		sùu		cìt-cay	khɔ̌ɔŋ	koʔîʔ	ìik-khráŋ-nùŋ	
帰ってくる		に	心	の	五位	再び		

≪日本≫（芥川龍之介『現代日本文學大系 43 芥川龍之介集』）
≪タイ≫（Monthar Pimthong：*Ruang-san Yiipun 4*）

39） 厚い雲の下、キノとエルメスは、凍った道を走っていた。スタッド・タイヤと補助スキーのおかげで、かなりのスピードを出している。

คิโนะและเฮอร์เมสวิ่งไปบนถนนน้ำแข็งท่ามกลางหมอกหนา รถเร่งความเร็วได้ค่อนข้างสูงเพราะสมรรถภาพของยางฝังสตัดและกระดานสกีเสริม

khíʔnóʔ	lɛʔ	hɤɤ-méet	wîŋ-pay	bon	thàʔnŏn	náam-kɛ̌ŋ	thâam-klaaŋ
キノ	と	エルメス	走っていく	上に	道	凍った	囲まれる

mɔ̀ɔk-nǎa	rót	rêeŋ-khwaam-rew	dây	khɔ̂ɔn-khâaŋ	sǔuŋ	phrɔ́ʔ
厚い霧	バイク	スピードを出す	可能	かなり	高い	CON

saʔmànthàʔphâap	khɔ̌ɔŋ	yaaŋ-fǎŋ-saʔtád	lɛ́ɛ	kraʔdaan-sàʔkii-sɔ̌ɔm
性能	の	スタッド・タイヤ	と	補助スキー

≪日本≫（時雨沢恵一『キノの旅Ⅱ』）

≪タイ≫（Piyawan Subsamruam：*KINO NO TABI 2*）

例文 38）と 39）では、「おかげで」は phrɔ́ʔに訳されている。これらの例文から、「～したおかげで」の場合でも、「名詞＋の＋おかげで」の場合でも、phrɔ́ʔ構文に訳すことが可能であることが分かる。次は「せいで」の例文を下記に挙げた。

40） 赤茶色をした道の土は、乾期のせいで細かくひび割れていた。

ดินบนถนนสีน้ำตาลแดงแตกระแหงเพราะความแห้งแล้ง

din	bon	thàʔnŏn	sǐi-nám-taan-dɛɛŋ	tɛ̀ɛk-raʔhɛ̌ɛŋ	phrɔ́ʔ	khwaam-hɛ̂ɛŋ-lɛ́ɛŋ
土	上	道	赤茶色	細かくひび割れる	CON	乾期

≪日本≫（時雨沢恵一『キノの旅Ⅳ』）

≪タイ≫（Piyawan Subsamruam：*KINO NO TABI 4*）

41） 温かい場所にいたせいで、外に出ると気温がとても低く感じる。

เธอรู้สึกว่าอุณหภูมิต่ำมากเมื่อออกมาข้างนอกเพราะอยู่ในที่อบอุ่นมาตลอด

thɤɤ	rûu-sùk	wáa	unnaʔphuum	tàm	máak	múa	ɔ̀ɔk-maa	khâaŋ-nɔ̂ɔk	phrɔ́ʔ
彼女	感じる	COMP	温度	低い	とても	時	出た	外	CON

yùu	nay	thîi	òb-ùn	maa-taʔrɔ̀ɔt
いる	中	場所	温かい	ずっと

≪日本≫（ハセガワケイスケ『しにがみのバラッド。2』）

≪タイ≫（Supattraa Phadungpriichaathai：*Yom-ma-tuut sii khaaw 2*）

上記の例文 40）と 41）のように、「おかげで」の例文と同様、「せいで」が動詞に付けられた場合でも、名詞に付けられた場合でも phrɔ́ʔ構文に訳すことができる。故に、オカゲデ構文とセイデ構文は両方とも phrɔ́ʔ構文に対応していると考えられる。

ところが、「おかげで」は望ましい事態の原因を表す機能があり、「せいで」は望ましくない事態の原因を表す機能があるが、phrɔ́ʔという表現はそのような機能があるかどうかは確認できない。例えば、38）と 39）の場合では、日本語文の「おかげで」はプラスの意味で用いられていることが分かるが、phrɔ́ʔもプラスの意味で用いられているかどうかは分からない。38）のタイ語文を日本語文にする場合、「おかげで」ではなく、「から」にしても phrɔ́ʔ構文と同じ意味を表すことができる。つまり、「外に注意を集中したから忘れていた」という内容になっても、phrɔ́ʔ構文に訳すことができる。それ

と同様、39）の例文を「スタッド・タイヤと補助スキーがあるから、かなりのスピードを出している」という内容にしても、phrɔ́ʔ構文に訳すことができる。

一方、40）と41）の場合では、「せいで」からマイナス性を確認できるが、phrɔ́ʔ構文のphrɔ́ʔからマイナス性を確認できない。例え40）の内容を「乾期だったので細かくひび割れていた」にし、41）の内容を「温かい場所にいたから、外に出ると気温がとても低く感じる」にしても、phrɔ́ʔ構文に訳すことができる。「おかげで」の場合と同様である。つまり、「おかげで」と「せいで」の場合でも、「から」と「ので」の場合でも同じphrɔ́ʔ構文に訳すことができる。そのため、38）から41）までの例文がphrɔ́ʔ構文に訳せるからといって、phrɔ́ʔ自体はプラス性とマイナス性を表す機能を持っている、ということになるわけではない。

42） あなたが来てくれたおかげで、楽しい会になりました。

เป็นงานเลี้ยงที่สนุกเพราะคุณช่วยมาเข้าร่วม

pen	ŋaan-líaŋ	thîi	sǎʔnùk	phrɔ́ʔ	khun	chûay	maa	khâw-rûam
COPU	会	COMP	楽しい	CON	あなた	BEN	来る	参加する

≪日本≫（グループ・ジャマシイ『教師と学習者のための日本語文型辞典』）

43） 3人が遅刻したせいで、みんな新幹線に乗れなかった。

ทุกคนตกรถไฟเพราะมีคนมาสายสามคน

thúk-khon	tòk	rót-fay	phrɔ́ʔ	mii	khon	maa-sǎay	sǎam-khon
みんな	乗り遅れた	電車	CON	いる	人	遅刻する	3人

≪日本≫（グループ・ジャマシイ『教師と学習者のための日本語文型辞典』）

例文42）と43）では、前節と後節の内容がプラスとマイナスの因果関係で結ばれていることが比較的わかりやすい。特に42）では「くれた」という表現もあるため、話し手が感謝しているという気持ちも表されている。言い換えれば、32）と43）は「おかげで」と「せいで」が用いられているからだけではなく、前節と後節の内容からもプラスとマイナスの因果関係が表れている。それに対して、タイ語文の方のphrɔ́ʔ構文では、前節と後節の内容からプラスとマイナスの因果関係を感じることができても、phrɔ́ʔ自体からはプラス性もマイナス性も感じられない。例えば、42）の場合では、日本語の「くれた」に対応しているchûayという表現があるから、話し手の感謝の気持ちが感じ取れる。しかし、この例文の前節と後節の因果関係がプラスであることは内容によるものであり、phrɔ́ʔによるものではない。要するに、日本語の場合では「おかげで」という表現自体がプラス性を表しているが、タイ語のphrɔ́ʔはプラス性を表していないと考えられる。これは「せいで」の例文である43）の場合も同様である。そうなると、phrɔ́ʔという表現はプラス性とマイナス性を両方とも表している表現ではなく。プラス性もマイナス性も表さない表現であると考えられる。そして、そのためか、「おかげで」と「せいで」は、phrɔ́ʔ以外の表現に訳されているものも見られる。例えば、次の例文である。

44） 数年前から始まった新しい研修医学制度のおかげで、最初二年間の研修期間は一般の病院に出て行く医者が増えたが、三年目になると結局その多くが医局に組み込まれているのが現状である。

ระบบฝึกงานแพทย์แบบใหม่ที่เริ่มใช้เมื่อสองสามปีที่แล้วช่วยให้พักนี้แพทย์ที่ออกฝึกงานตามโรงพยาบาลทั่วไปเป็นเวลาสองปีมีจำนวนเพิ่มขึ้น แต่สภาวการณ์แท้จริงก็คือ พอเข้าปีที่สามแพทย์ส่วนใหญ่ก็กลับไปกระจุกตัวอยู่ในสำนักงานแพทย์อยู่ดี

raʔbòp-fùuk-ŋaan-phɛ́ɛt			bɛ̀ɛp-mày		thîi	rə̂əm-cháy		múa	sɔ̌ɔŋ-sǎam-pii thîi-lɛ́ɛw
研修医学制度			新しい		CON	始まった		時	二三年 前
chûay-hây		phák-níi	phɛ̂ɛt	thîi	ɔ̀ɔk	fùuk-ŋaan	taam	rooŋ-phâʔyaa-baan	thûa-pay
CON		最近	医者	COMP	出て行く	研修	に	病院	一般
pen	weelaa	sɔ̌ɔŋ-pii	mii	cam-nuan		phə̂əm-khûun		tɛ̀ɛ	sàʔphaa-wáʔkaan
COPU	時間	二年	ある	数		増える		CON	現状
thɛ́ɛ-ciŋ	kɔ̂ɔ-khɯɯ		phɔɔ	khâw	pii-thîi-sǎam		phɛ́ɛt	sùan-yǎy	kɔ̂ɔ klàp-pay
本当	とは		あと	入る	三年目		医者	多くの	CON 戻る
kràʔcùk-tua			yùu-nay	sǎm-nák-ŋaan-phɛ̂ɛt			yùu-dii		
組み込まれている			中に	医局			結局		

≪日本≫（夏川草介『神様のカルテ』）

≪タイ≫（Pornchai Wittayaleetpan：*Ichito khun-moo huajai theewadaa*）

45） 「実際、安曇さんはお前のおかげで幸せに逝ったんだ、間違いなくな」

แต่เรื่องจริงก็คือแกช่วยให้คุณอะสุมิจากโลกนี้ไปอย่างมีความสุขเรื่องนี้จริงแท้แน่นอน

tɛ̀ɛ	rûaŋ-ciŋ	kɔ̂ɔ-khɯɯ	kɛɛ	chûay-hây	khun-aʔsùʔmíʔ	càak-lôok-níi-pay
しかし	実際	COPU	お前	助ける	安曇さん	逝った
yàaŋ-mii-khwaam-sùk		rûaŋ-níi ciŋ-thɛ́ɛ-nɛ̂ɛ-nɔɔn				
幸せに		この話 間違いない				

≪日本≫（夏川草介『神様のカルテ』）

≪タイ≫（Pornchai Wittayaleetpan：*Ichito khun-moo huajai theewadaa*）

46） 三日前まで降り続いた雪のおかげで町並みは白く、おかげで町全体がまぶしく輝いてい見える。

หิมะที่ตกลงมาอย่างต่อเนื่องจนถึงเมื่อสามวันก่อนทำให้บ้านเรือนเป็นสีขาวโพลน และ ทำให้ทั้งเมืองดูสว่างสไวจนแสบตา

hìʔmâʔ	thîi	tòk-loŋ-maa	yàaŋ-tɔ̀ɔ-nûaŋ	con-thŭŭŋ	múa-sǎam-wan-kɔ̀ɔn		tham-hây
雪	COMP	降って来る	続いている	まで	三日前		CON
bâan-ruan		pen	sǐi-khǎaw-phloon	lɛ́ʔ	tham-hây	tháŋ	mɯaŋ duu
町並み		は	白い	また	CON	全体	町 見える
saʔwàaŋ-saʔwǎy		con	sɛ̀ɛp-taa				
輝く		まで	まぶしい				

≪日本≫（夏川草介『神様のカルテ』）

≪タイ≫（Pornchai Wittayaleetpan：*Ichito khun-moo huajai theewadaa*）

47） あまりにも長い間、同じ格好のまま座り続けていたせいで、お尻の底がおせんべいのように平たくなってしまった

การนั่งในท่าเดียวติดต่อกันนานนานทำให้ก้นฉันแทบแบนราบเหมือนขนมเซมเบ้

kaan-náŋ	nay-tháa-diaw	tìt-tɔ̀ɔ-kan	naan-naan	tham-hây	kôn	chǎn
座る	同じ格好	続いている	長く	CON	お尻	私

thɛ̂ɛp	bɛɛn-râap	mǔan	khǎʔnǒm-sem-bêe
ほど	平たく	のように	おせんべい

≪日本≫（阿川佐和子『ウメ子』）

≪タイ≫（Suwannaa Arai『*Dek-ying Umeko*』）

例文 44）と 45）では「おかげで」が chûay-hây に訳されている。この chûay-hây という表現は、「助ける」という意味もある。基本的には、ある事態を引き起こすのを助けるという意味で用いられる表現であり、ある結果を引き起こすという意味・用法もあるといえる。ただし、45）のような場合では、chûay-hây は接続表現としての機能はなく、動詞として用いられている。それでも、意味的には日本語の「おかげで」に類似しているといえる。chûay-hây は「助ける」という意味を持っているため、phrɔ́ʔ よりもプラス性があるといえる。実際、44）と 45）のタイ語文は、42）や 43）の phrɔ́ʔ構文よりプラス性を表している。

一方、例文 46）は「おかげで」の例文で、47）は「せいで」の例文であるが、両方とも tham-hây という表現に訳されている。この表現は、ある事態を別の事態にする、またはある事態を引き起こすという意味を持っている。つまり、chûay-hây と類似している意味・用法を持っている。しかし、chûay-hây 自体はプラスの意味があるのに対して、tham-hây はプラスの意味がない。そのため、「せいで」の場合でもこの表現に訳すことができる。要するに、tham-hây は phrɔ́ʔ と同様、プラス性もマイナス性もない表現なのである。

その他に、次の例文 48）のように、tham-hây は phrɔ́ʔ と一緒に使われることもある。さらに、例文 49）のように、chûay-hây を chûay と hây に分けて、使われることもある。

48） 草が取られ、空が映るほど磨き上げられたレールのおかげで、昨日よりはるかに走りやすかった。

เพราะหญ้าถูกถอนกับรางถูกขัดจนขึ้นเงาสะท้อนเห็นท้องฟ้า ทำให้วิ่งง่ายกว่าเมื่อวานมากทีเดียว

phrɔ́ʔ	yâa	thùuk	thɔ̌ɔn	kàp	raan	thùuk	khàt	con	khûun-ŋaw
CON1	草	された	抜く	及び	レール	された	磨く	まで	綺麗

sàʔthɔ́ɔn	hěn	thɔ́ɔŋ-fáa	tham-hây	wîŋ	ŋâay	kwàa	mûa-waan	mâak-thii-diaw
映る	見える	空	CON2	走る	簡単	より	昨日	はるかに

≪日本≫（時雨沢恵一『キノの旅』）

≪タイ≫（Chaninan Gittipatimarkun：*KINO NO TABI*）

49） 清流が木々をどけてくれているおかげで、てっぺんの監視塔の形がよく分かる。

สายธารใสสะอาดช่วยแหวกแมกไม้ให้เห็นรูปทรงของหอคอยชมวิวบนยอดปราสาทได้อย่างชัดเจน

sǎay-thaan	sǎy-saʔàat	chûay	wɛ̀ɛk	mɛ̂ɛk-máy	hây	hěn	rûup-soŋ
川	綺麗な	助ける	どける	木々	BEN	見える	形

khɔ̌ɔŋ	hɔ̌ɔ-khɔɔy-chom-wiw	bon	yɔ̂ɔt	praa-sàat	dây	yàaŋ-chát-ceen
の	監視塔	上	てっぺん	城	できる	ハッキリと

≪日本≫（時雨沢恵一『キノの旅Ⅱ』）

≪タイ≫（Piyawan Subsamruam：*KINO NO TABI 2*）

例文 49）のような場合の chûay～hây も 45）と同様、接続表現ではなく、動詞である。実際、Phrayaa Upphakitsilpasan（1937）と Kamchai（2009）では、chûay-hây と tham-hây は原因・理由表現に分類されていない。とはいえ、ある結果を引き起こす、またはある結果をもたらすという意味用法があるといえる。「おかげで」と「せいで」は、タイ語の phrɔ́ʔ、chûay-hây、tham-hây の構文の他に、cɯŋ 構文にも訳されている。しかし、それらの cɯŋ 構文の文脈から考えると、cɯŋ 自体が日本語の「おかげで」「せいで」に対応しているとは言い難い場合がある。例えば、次の例文 50）である。

50） 私は先生のおかげでこんなにも楽しい時間をすごせました。

เป็นเพราะคุณหมอ ยายจึงมีโอกาสได้ใช้เวลาอย่างมีความสุข

pen	phrɔ́ʔ	khun-mɔ̌ɔ	yaay	cɯŋ	mii	oo-kàat	dây	cháy-weelaa	yàaŋ
は	CON1	先生	婆さん	CON2	ある	機会	できる	時間をすごす	ように

mii-khwaam-sùk
幸せ

≪日本≫（夏川草介『神様のカルテ』）

≪タイ≫（Pornchai Wittayaleetpan：*Ichito khun-moo huajai theewadaa*）

例文 50）ではオカゲデ構文が cɯŋ 構文に訳されているが、phrɔ́ʔも用いられている。しかし、50）の場合では、文脈から考えると「おかげで」に対応しているのは cɯŋ ではなく、phrɔ́ʔの方であると考えられる。50）ではタイ語文の前節が原因・理由であり、結果である後節に結び付けるために cɯŋ が用いられている。

タイ語における cɯŋ 構文は 50）のように、phrɔ́ʔなどの原因・理由を表す表現も使われる場合が多い[7]。そして、phrɔ́ʔを省略して cɯŋ だけを残しても、文全体の意味は変わらない場合もある。ところが、50）の場合では phrɔ́ʔを省略することができない。なぜならば、原因・理由表現なしで 50）の前節の内容だけでは、後節の原因・理由であることを表すことができないからである。実際、cɯŋ 構文で phrɔ́ʔを省略することができるのは、次の例文 51）と 52）のような場合である。

51）　(เพราะ) เขาขยันเขาจึงสอบได้

(phrɔ́ʔ) khǎw khaʔyǎn khǎw cɯŋ sɔ̀ɔp-dây

(CON) 彼 勤勉 彼 CON 合格する

彼は勤勉だから、試験に合格できた。

≪タイ≫（Kamchai Tongloo『Lak Phaasaa-Thai』）

52）　(เพราะ) ยานี้มีรสหวาน เด็กจึงดื่มง่าย

(phrɔ́ʔ) yaa níi mii rót-wǎan dèk cɯŋ dɯ̀ɯm ŋâay

(CON) 薬 この ある 甘い 子供 CON 飲む 簡単

この薬は甘いので、子供が簡単に飲める。

例文 51）はカラ構文であり、52）はノデ構文である。51）と 52）の場合では、phrɔ́ʔがなくても、前節と後節の因果関係が変わらない。これは、前節が名詞のみの場合ではないため、そのまま後節の原因・理由として用いられるからである。このように、前節に phrɔ́ʔが現れる cɯŋ 構文は、前節が名詞だけの場合ではその phrɔ́ʔを省略することができない特徴があるといえる。しかし、動詞または形容詞がある場合、phrɔ́ʔを省略することができる。例えば、次の例文 50）のように、前節には動詞しかない場合でも phrɔ́ʔを省略することができる。

53）　(เพราะ) เหนื่อยแล้ว จึงไม่อยากไปไหน

(phrɔ́ʔ) nɯ̀ay-lɛ́ɛw cɯŋ máy-yàak pay-nǎy

(CON) 疲れた CON したくない 外出

疲れたから、どこにも行きたくない。

例文 53）も 51）、52）と同様、phrɔ́ʔを省略することができる。このように、タイ語の cɯŋ 構文は、前節が名詞のみの場合では、phrɔ́ʔも使わないといけないという特徴があることが分かった。故に、前節が名詞のみのオカゲデ構文、またはセイデ構文を cɯŋ 構文に訳す場合、phrɔ́ʔも必ず用いられているといえる。さらにいうと、これらの cɯŋ 構文を phrɔ́ʔ構文にすることもできる。

54）　ยายมีโอกาสได้ใช้เวลาอย่างมีความสุข เป็นเพราะคุณหมอ

yaay mii oo-kàat dây cháy-weelaa yǎaŋ mii-khwaam-sùk pen phrɔ́ʔ

婆さん ある 機会 できる 時間をすごす ように 幸せ COPU CON

khun-mɔ̌ɔ

先生

例文 54）は 50）の cɯŋ 構文を phrɔ́ʔ構文にした例文である。節の順番が変わっても、文全体の内容は変わらないため、50）の日本語文は 54）のように訳すこともできるといえる。つまり、「おかげで」に対応しているのは cɯŋ ではなく phrɔ́ʔであることが明確であるといえる。そして、「せいで」

も同様であると考えられる。さらに、cɯŋ が「おかげで」と「せいで」に対応しているわけではないため、cɯŋ 自体がプラス性やマイナス性とは関係なしで用いられている表現であるとも考えられる。

3.2.2.5　まとめ―「せいで」「おかげで」とタイ語の表現

本項目では日本語における「おかげで」と「せいで」という原因・理由表現を中心にして、タイ語の因果関係を表す表現と比較考察した。その結果を次のようにまとめることができる。

（A）日本語における「おかげで」と「せいで」は原因・理由表現を表すほかに、原因に対するプラス性とマイナス性も表す。しかし、タイ語の原因・理由を表す表現である phrɔ́ʔからはプラス性もマイナス性も確認できない。そのため、phrɔ́ʔはプラス性もマイナス性も表さない表現であると考えられる。chûay-hây という表現は「助ける」という意味も含まれているため、「おかげで」と同様、プラス性も表しているといえる。ところが、chûay-hây 自体は原因・理由表現ではないため、この表現は「おかげで」に対応しているとは言い難い。一方、tham-hây も chûay-hây と同様であるが、この表現はプラス性もマイナス性も表さないと考えられる。同じ結果を表す表現である cɯŋ も、それと同様である。また、chûay-hây と chûay～hây は、接続表現として用いられていない場合があり、動詞として用いる場合がある。とはいえ、その場合でも意味的には「おかげで」に対応していると考える。

（B）オカゲデ構文、またはセイデ構文を cɯŋ 構文に訳す場合、phrɔ́ʔも使われることもある。そして、前節が名詞のみのオカゲデ構文、またはセイデ構文を cɯŋ 構文に訳す場合、必ず phrɔ́ʔが現れる。また、どの場合でも「おかげで」と「せいで」が原因・理由表現として対応しているのは cɯŋ ではなく、phrɔ́ʔである。そのため、オカゲデ構文、またはセイデ構文から訳された cɯŋ 構文の前節と後節を逆にすることで、phrɔ́ʔ構文にすることもできる。

本項目の結果は以上の要点にまとめられるが、本項目ではまだ皮肉な意味で用いられている「おかげで」とマイナスの意味ではない「せいで」をタイ語の表現と比較考察を行っていない。この点に関しては、今後の課題とする。

3.2.3　「あまり（に）」とタイ語の表現

本項目では、事態系の原因・理由表現である「あまり（に）」の用法および特徴を中心にして、タイ語における原因・理由表現と比較考察する。原因・理由表現である「あまり（に）」は、原因・理由を表すほかに、感情・状態の程度が過ぎたという意味も表わす表現である。タイ語にも「から」や「ので」のような、一般的な原因・理由を表す表現はあるが、「あまり（に）」とのような特徴を持つ表現はあるかどうかはまだ明確ではないである。そのため、これらの表現に近いものは、タイ語にはあるかどうか検討を試みる。原因・理由を表す「あまり（に）」について言及する研究は、前田（2009）、田中寛（2010）、益岡・田窪（1992）などがある。しかし、「あまり（に）」をタイ語と比較考察した研究は、管見の限り、見当たらない。

3.2.3.1　原因・理由を表す「あまり（に）」について

日本語における原因・理由表現の中には、「あまり（に）」という表現がある。「あまり（に）」は、否定形と一緒に使うことで、程度を表す用法で用いられているが、複文構造では原因・理由を表す表現としても用いられている。この表現は、「から」と「ので」と違い、単に前述と後述の因果関

係を表すだけではなく、従属節における感情・状態の極端な程度も表わしている。例えば、次の例文55）と56）である。

55）　心配のあまり、病気になってしまった

（日本語記述文法研究会『現代日本語文法6第11部　複文』）

56）　なんとか逆転しようと焦るあまり、かえってミスをたくさん犯してしまった。

（グループ・ジャマシイ『日本語文型辞典』）

また、この原因・理由表現は、ニ格と一緒に使われることもある。

57）　彼は驚きのあまりに、手のもっていたカップを落としてしまった。

（グループ・ジャマシイ『日本語文型辞典』）

例文55）から57）のように、「あまり（に）」は「心配」「焦り」「驚き」などの感情・状態を表す表現と一緒に用いられている。そして、「あまり（に）」は、それらの感情・状態の程度が極端であり、度が過ぎたということを表わし、その度が過ぎたことが後節の結果を引き起こしたということも表してる。

例えば、55）の場合では、心配し過ぎたことが病気になった原因である。56）の場合では焦りすぎたことがミスの原因で、57）の場合では驚きすぎたことがカップを落とした原因である。このように、「あまり（に）」は原因・理由を表す同時に、前述の感情・状態の度が過ぎたことも表す用法がある。また、グループ・ジャマシイ（2014）によれば、「あまり（に）」が使われていた文の後半では良くない結果が述べられていると述べている。そしてそのためか、「あまり（に）」の原因・理由文の後節では「～てしまう」もよく用いられている。

58）　前日の本番では緊張のあまり、手と脚が一緒に動いて入場してしまった安部。

（<http://www.yomiuri.co.jp/>2015/05/15アクセス）

59）　金光坊は命惜しさのあまり、板を打ち破り、舟を飛び出してしまうのだ。

（<http://mainichi.jp/sports/>2015/05/15アクセス）

例文55）から59）は、いずれも後節は良くない結果である。しかし、「あまり（に）」を原因・理由表現として使用した場合でも、後述で必ず良くない結果が述べているとは限らないと考える。

60）　傷つくことを恐れるあまり、自分の殻の中に閉じこもる人も多い。

（西日本新聞2004/7/30）

61）　水兵たちの神経は極度の緊張のあまり、実際に戦闘がはじまってしまうと、最初はむしろ安堵感さえおぼえるのだった。

（山本史郎『トラファルガル海戦物語 上』）

62）　恐怖のあまり、私は祖母の胸にしがみついた。

（黒古一夫『三浦綾子論』）

実際では、60）から62）までの例文のように「あまり（に）」が使用されても、後述が良くないことであるかを決め付け難い場合がある。これらの例文の中では、後述が良くない結果であることを最も判断しやすいのは、例文60）である。例文62）の場合では、傷つくことを恐れても閉じこもってはいけないという内容に解釈することができ、閉じこもること自体が良くないことであると解釈することができる。しかし、この場合では、傷つくことから自分を守るために、閉じこもることにしたという内容でもある。つまり、閉じこることは自分を守る手段の一つであるため、考え方によっては、それは悪いことではないと解釈することも出来ると考えられる。要するにこれは、後述の閉じこもることは、良いことであるとは言えないが、悪いことであるとも言い切れないという場合である。しかし、これは例文60）の中には、閉じこもることが望ましくないことであると表してる部分がなかったからである。60）の前にある文、または後の文の内容が、60）の後述は良くない結果であることを示してくる内容が含まれている場合も考えられる。

一方、例文 61）の場合では、緊張しすぎて、恐怖ではなく安堵感を感じてしまうと解釈できるが、これは良くないことであるかは決め付け難い。60）と同様、「あまり（に）」が使用されているだけではなく、他の文の内容も合わせないと言い切れないと考える。

そして、例文62）の場合では、怖すぎたため祖母の胸にしがみついたという内容である。例文60）と61）と比べても、この例文の後述は良くない結果であるかは最も曖昧で決め付け難いであると感じる。特に、もし62）の場合の「私」は子供であれば、子供が恐怖から逃れるために祖母の胸にしがみつくことが悪いことであるとは言い難いであろう。祖母の胸にしがみつくことが迷惑になる場合もあると考えても、この62）の内容だけでは分かり難いである。故に、60）と61）と同じく、後述が良くない結果であると解釈するには、他の文の内容も合わせて見ないといけない。

要するに、「あまり（に）」が用いる原因・理由文は、結果が望ましくない場合が多いが、そうではない場合、または判断し難い場合がある。いずれの場合でも、その原因・理由文の前の文と後の文は、内容を正しく理解するための重要な要素となる。

このように、日本語における原因・理由表現である「あまり（に）」は、原因・理由を表すだけではなく、感情・状態の度が過ぎたことが原因であることも表してる。

ところが、次のような例文もある。

63）　死を覚悟した飛行機の揺れ、激しさのあまり数人が負傷

（<http://www.recordchina.co.jp/>2015/05/27アクセス）

原因・理由を表す「あまり（に）」は、原因・状態が感情・状態の場合に用いられているものであって、一般的には「早さ」や「太さ」などの尺度には使われていない。それでも、「激しさ」や「忙しさ」など、が原因・理由の場合に用いられていることがある。ところが、「忙しさ」は意味的に状態であると考えられるが、「激しさ」は勢いの程度であり、感情・状態であるとは言い難い。

実際、63）のような用例も殆ど見られず、「激しさ」を「あまり（に）」と一緒に使うならば、「あまりの激しさに～」という形の方がよく見られる。とはいえ、63）のような使い方の場合でも、原因・理由を表わす「あまり（に）」のニュアンスは他の用例と変わらず、意味は伝わるし、非文であるとは言い難い。このように、感情・状態とは言いがたい場合であっても、原因・理由を表す「あまり（に）」を用いられる例外的な場合もあると考えられる。

3.2.3.2 「あまり（に）」とタイ語の比較

一方、タイ語における原因・理由表現である phrɔ́ʔ と cɯŋ は、「あまり（に）」のような特徴的な意味と用法があるとは考え難い。phrɔ́ʔ と cɯŋ は「から」や「のでと同様、原因・理由と結果を繋ぐ機能を持っているが、それ以外の特徴的な意味を表すかは曖昧な点がある。例えば、例文 62）「恐怖のあまり、私は祖母の胸にしがみついた」を phrɔ́ʔ構文と cɯŋ 構文にする場合、以下の 64）と 65）のようにできる。

64） ฉันซุกอกยายเพราะกลัวมาก

chǎn	sûk	ʔɔ̀k	yaay	phrɔ́ʔ	klua	máak
私	しがみつく	胸	祖母	CON	怖い	かなり

65） ฉันกลัวมากจึงซุกอกยาย

chǎn	klua	máak	cɯŋ	sûk	ʔɔ̀k	yaay
私	怖い	かなり	CON	しがみつく	胸	祖母

例文 64）と 65）は両方とも内容は 62）と殆ど変わらないといえる。しかし、「あまり（に）」特有の感情・状態の極度を表す機能は、phrɔ́ʔ と cɯŋ にはないため、例文 64）と 65）では máak という程度を表す表現も必要である。これは、62）では「あまり（に）」自体が原因・理由を表してることも重ねて、「恐怖」という感情・状態の極度も表してるが、64）と 65）の phrɔ́ʔ と cɯŋ は原因・理由しか表していないため、感情・状態の極度を表す別の副詞が必要ということである。要するに、例文 64）と 65）における phrɔ́ʔ と cɯŋ は、単に原因・理由を提示しているだけである。あえて言うならば、例文 64）と 65）は、62）の「あまり（に）」構文よりも、次の 66）のような「から」構文に近いといえる。

66） とても怖かったから、私は祖母の胸にしがみついた。

このように、phrɔ́ʔ と cɯŋ はタイ語における代表的な原因・理由表現ではあるが、「あまり（に）」のような単に原因・理由を表すだけではない表現と比べて、同じように使用することはできない部分がある。しかし、phrɔ́ʔ と cɯŋ よりも、「あまり（に）」に近いタイ語の接続表現があると考えている。例えば、con という表現である。

3.2.3.3　con という単語について

第 2 章では con についても述べたが、ここでは「あまり（に）」と比較考察するために、さらに con の機能について見ていく。タイ語における con という表現は、一般的に 4 つの意味・用法を持っていると考えられる。それは、「名詞としての con」、「形容詞としての con」、「副詞としての con」、そして「接続詞としての con」である。まず、名詞としての con は、「貧乏」「乏しさ」「貧しさ」の意味を持つ。基本的には名詞化するために khwaam という表現を用いて、khwaam-con にするが、con のみでも名詞として使用できると考えられる。

67）　จน คือ ความทุกข์

con	khɯɯ	khwaam-thúk
貧乏	COPU	苦しみ

貧乏は苦しみである。

68）　ความจน ทำให้คนเป็นทุกข์

khwaam-con	tham-hây	khon	pen	thúk
貧乏さ	にする	人	COPU	苦しむ

貧乏さは人を苦しむ。

次は、形容詞としての con である。日本語の「貧乏」が「貧乏な」という形容詞として使用できると同じく、con も形容詞として使用できる。ただし、タイ語では活用形がないため、名詞の場合でも、形容詞の場合でも、con という形のままで使用できる。

69）　คนจนไม่มีที่อยู่อาศัย

khon	con	mây-mii	thîi-yùu-aasǎy
人	貧乏な	ない	住む場所

貧乏な人は住む場所がない。

また、yaak という単語と併せて、yaak-con という複合語にすることも多い。意味は con と同様、貧乏さや乏しさを表す。

70）　เขาใช้ชีวิตยากจนมาตลอดสิบปี

khǎw	cháy-chii-wít	yâak-con maa-tàʔrɔɔt	sìp-pii
彼	生活をする	まずしい ずっと	十年

彼は十年間ずっとまずしい生活をしてきた。

次は、副詞としての con である。con は「貧乏」という意味を表すほかに、「まで」「ほど」という意味も持っている。距離や程度などを表す用法で使用されている。

71） เดินไปจนถึงสถานีรถไฟ

dɤɤn　pay　con　thŭŋ　sàʔthǎanii-rótfay

歩く　行く　まで　到着　駅

駅まで歩いていく。

例文 71）のように、con は日本語の「まで」のような意味を持っている。距離を表す con は、「到着」の意味を表す thŭŋ という表現と一緒に用いられる場合が多い。

72） ร้อนมากจนปวดหัว

rɔ́ɔn　mâak　con　pùat　hŭa

暑い　とても　ほど　痛い　頭

頭痛がするほど暑い

また、例文 72）のように、con は程度を表す「ほど」のような意味・用法も持っている。
最後に、接続詞としての con の例文をあげる。

73） เขาเหนื่อยมากจนเผลอหลับไป

khǎw　nùay　máak　con　phlɤ̌ɤ　làp　pay

彼　疲れる　とても　CON　つい　眠る　してしまう

彼は疲れのあまりに、つい眠ってしまった。

例文 73）のように、con は接続詞としても使用することができる。さらに、日本語における「あまり（に）」と類似している意味・用法を持っていると考えられる。

74） ยากจน จนไม่มีที่จะซุกหัวนอน

yaak-con　con　mây-mii　thîi　cà̀ʔ　súk-hŭa-nɔɔn

貧乏　CON　ない　場所　FUT　寝る

貧乏さのあまりに、帰って寝る場所もない。

≪タイ≫（Tianchai Iamworamate：*Pojjanarnugrom Thai Chabap nakrian*）

例文 74）では名詞の con と接続詞の con があり、それぞれの意味と用法が異なっているということははっきりと確認できる。

3.2.3.4　「あまり（に）」と con の比較

まず、con と「あまり（に）」の対訳の例文を見てみる。

75a）ฉันตกใจมากจนหมดสติล้มลง

chǎn	tòk-cay	mâak	con	mòt-saʔtiʔ	lóm-loŋ
私	驚く	とても	CON	気絶する	倒れる

私は驚きのあまりに、意識を失って倒れてしまった。

76a）ยุ่งจนไม่มีเวลานอน

yûŋ	con	mây-mii	veelaa	nɔɔn
忙しい	CON	ない	時間	寝る

忙しさのあまり、睡眠時間が取れない。

例文 75a）と 76a）における con という表現は、前述の感情・状態が限度を超えて、後述の結果まで引き起こすという意味を表している。この意味的な機能は、日本語の「あまり（に）」に非常に類似していると考えられる。75a）では、mâak という程度を表す表現も用いられているが、この表現がなくても con 自体だけで「限度が超えている」という意味は表わしている。そのため、76a）では程度を表わす表現がなくても、con を日本語の「あまり（に）」に訳すことができる。これは、phrɔ́ʔと cɯŋ にはない意味的な特徴であり、phrɔ́ʔと cɯŋ より con の方が「あまり（に）」に近いと考えられる理由である。

Phrayaa Upphakitsilpasan（1937）によれば、con は phrɔ́ʔと同様、主節と従属節を接続する表現であると述べているが、phrɔ́ʔは原因・理由を表す表現のに対して、con は結果を表す表現であるとも述べている。実際、75a）と 76a）の con は、同じ結果を表す表現である cɯŋ に置き換えることもできる。ただし、cɯŋ は因果関係を表す以外の機能はないため、con の代わりに cɯŋ が使われると違和感を感じる場合がある。例文 75a）はそれに該当する。

75b）？ฉันตกใจมากจึงหมดสติล้มลง

chǎn	tòk-cay	mâak	cɯŋ	mòt-saʔtiʔ	lóm-loŋ
私	驚く	とても	CON	気絶する	倒れる

？私は驚いたから、意識を失って倒れてしまった。

76b）ยุ่งจึงไม่มีเวลานอน

yûŋ	cɯŋ	mây-mii	veelaa	nɔɔn
忙しい	CON	ない	時間	寝る

忙しいから、睡眠時間が取れない。

例文 75b）の場合、cɯŋ が用いられているため、前述の感情・状態の過度が表されていない。「驚く」から「意識を失う」の流れは、その内容自体から一般的に考えても、ちょっとした驚きではないことは変わる。しかし、その極度を表してる表現がないため、抜けている部分があると感じる。これは、76b）のタイ語文からも日本語文からも同じように感じられる。一方、例文 76b）の方は 75b）と比べて、cɯŋ が使われていても違和感を感じない。とはいえ、この例文も 75b）と同様、極度を表している表現がないため、単なる因果関係となっている。75a）と 76a）のような感情・状態の極度が原

因・理由であることが表されていない。このように、conの方はcɯŋより意味的に「あまり（に）」に近いと言える。しかし、conの意味と機能は、「あまり（に）」と一致しているというわけでもない。原因・理由表現である「あまり（に）」は、感情・状態の極度と表すが、conの方は原因・理由が感情・状態以外の場合でも使用できる。

77） พ่อดุจนลูกร้องไห้

phɔ̂ɔ　dùʔ　con　lûuk　rɔ́ɔŋ-hây

父　叱る　CON　子供　泣く

父は叱りすぎて、子供が泣いた。

≪タイ≫（Kamchai Tongloo：*Lak Phaasaa-Thai*）

78） ลมพัดจนหน้าต่างเปิด

lom　phát　con　náa-tàaŋ　pɔ̀ɔt

風　吹く　CON　窓　開く

風が強すぎて、窓が開いた。

≪タイ≫（Kamchai Tongloo：*Lak Phaasaa-Thai*）

上記の例文77）と78）における原因である前述は、感情・状態ではない。77）では、dùʔという動詞であり、78）ではphátという動詞である。それぞれは日本語の「叱る」「吹く」に当てはまり、行動・現象である。77）と78）のように、感情・状態ではなくても、conは度が過ぎたことが原因であることを表すことができる。ところが、実際では77）及び78）のような例文は、別の解釈をすることもできると考えられる。元々conという表現は結果を表すほかに、終点、あるいは継続する事態が至る時点を表す機能も持っている。つまり、日本語における「まで」と類似している意味も持っている。さらに、con自体は、物事の程度または数量などの度合を表わす表現であるため、日本語における「ほど」という表現に近い部分もある。その故、conが用いられている77）と78）のような場合、後述の事態に至るまで前述の行動・現象が続いている、または前述の行動・現象は後述の事態を引き起こすほどのことだったという意味でも解釈できる。例文77）の場合は因果構文のほかに「父は子供が泣いたまで叱った」または「子供が泣くほど父は叱った」などに解釈することもできる。一方、例文78）の場合は因果構文のほかに「窓が開くほど風が吹いた」などに解釈することもできる。よって、「あまり（に）」にない用法は、conにはある。また、77）と78）のように、conは「あまり（に）」だけではなく、意味的に考えて、日本語における原因・理由を表す述語のテ形に訳すこともできる。その場合、「～すぎて」という形になる。原因・理由が感情・状態ではない場合、conは「あまり（に）」ではなく、「～すぎて」の方に対応していると考えられる。

79） คนอ้วนจนเขาเดินไม่ไหว

khon　ûan　con　khǎw　dəən　mây-wǎy

人　太る　CON　彼　歩く　できない

彼は太りすぎて、歩けない。

≪タイ≫（Kamchai Tongloo：*Lak Phaasaa-Thai*）

80） เขาพูดเร็วจนฉันฟังไม่ทัน

khǎw　phûut　rew　con　chǎn　faŋ-mây-than

彼　喋る　早い　CON　私　聞き取れない

彼の話すスピードが早すぎて、私は聞き取れなかった。

≪タイ≫（Kamchai Tongloo：*Lak Phaasaa-Thai*）

上記の例文 79）におけるタイ語文では、ûan という単語が原因である。この ûan という単語は、動詞であるが、形容詞でもある。そのため、日本語の「太る」と「太い」のいずれにも訳すことができる。79）の ûan が「太る」として解釈する場合、con が極度を表すため、「太りすぎる」になる。そして、後述と接続するため、「太りすぎて」になる。

一方、80）のタイ語文では、phûut　rew が原因であるが、rew の方が主な原因である。rew は形容詞および形容動詞であり、日本語における「早い」と同じである。この場合であると、rew と con を合わせて、「早すぎて」に訳すことができる。これは、79）と 80）だけではなく、77）と 78）でも con を「～すぎて」に訳せる理由である。また、79）と 80）も 77）と 78）と同様、原因・理由である前述の部分は感情・状態ではないため、「あまり（に）」の文にすることはできない。

con は「あまり（に）」と「～すぎて」に両方とも対応してる。ところが、con は日本語における「ほど」という表現にも近い意味を持っている、「ほど」に訳すことも可能である。

81） หัวใจเต้นระทึกจนเจ็บหน้าอก

hŭa-cay　tên-raʔtúk　con　cèp　nâa-òk

心臓　激しく高鳴る　CON　痛い　胸

胸が痛くなるほど鼓動が激しい。

鼓動が激しくなりすぎて、胸が痛い。

鼓動の激しさのあまり、胸が痛い。

≪タイ≫（Srisurang：*Pleeng sii naam-geen*）

例文 81）のように、「ほど」「～すぎて」「あまり（に）」のいずれも、con 構文から解釈することが可能である。ただし、「ほど」の意味で解釈する場合、con は因果関係を表さず、物事の程度だけを表していると考える。また、「激しさ」は「あまり（に）」と一緒用いられていることが殆ど見られないため、81）の場合では「ほど」と「～すぎて」の方が自然に con が対応していると感じる。

タイ語における con は、名詞と形容詞の con を除けば、「結果を表す」「極度を表す」「継続する事態が至る時点を表す」の三つの意味と用法を持ち合わせているといえる。さらに、この中から二つ以上の意味・用法が重なっている場合もある。そのため、81）のように、「～すぎて」や「あまり（に）」だけではなく、「ほど」の意味にでも解釈できる場合がある。しかし、当然であるが、一部の意味と用法でしか解釈することができない場合もある。特に日本語における「まで」に近い con の継続する事態が至る時点を表す用法は、結果を表す用法に重ならない場合が多いと考えられる。

82） ก็คงอยู่จนแน่ใจว่าฉันเมากลิ้งหลับไปนั่นแหละ

kɔ̂ʔ-khoŋ	yùu	con	nɛ̂ɛ-cay	wâa	chǎn	maw-klîŋ	làp-pay	nân-lɛ̀ʔ
多分	いる	まで	確信する	と	私	酔いつぶれる	眠る	だろう

多分、私が完全に酔いつぶれて眠るまでいるつもりでしょう。

≪タイ≫（Jutisorn：*Buang Gau*）

上記の 82）の con は、因果関係を表す表現ではなく、終点または時点を表す表現である。この場合では、「まで」に訳すことができるが、「あまり（に）」と「～すぎて」だけではなく、「から」と「ので」にも訳すことができない。

83） ชายหนุ่มกลั้นหัวเราะจนตัวสั่น

chaay-nùm	klân	hǔa-rɔ́ʔ	con	tua	sàn
若い男性	我慢	笑う	CON	体	震える

若い男性は体が震えているほど笑いを堪えている。

若い男性は笑いを堪えすぎて、体が震えている。

＊若い男性は笑いの我慢するあまり、体が震えている。

≪タイ≫（Srisurang『*Pleeng sii naam-geen*』）

また、例文 77）と 78）と同様、例文 83）のように、原因・理由が感情・状態ではないため、con を「あまり（に）」と訳すことは難しいが、「～すぎて」と「ほど」を両方とも自然に訳すことができる場合がある。とはいえ、一応 83）の場合では、「我慢のあまり」に訳すことができると考えられる。

con を「あまり（に）」に解釈できるかどうかは、主に前述の原因・理由が感情・状態であるかどうかによると考えられる。一方、con を「～すぎて」と「ほど」のいずれにも訳すこと可能である場合が多いと見られる。これは、「あまり（に）」と違い、原因・理由の部分に制限がないからであると考えられる。つまり、原因・理由は感情・状態ではなくても、「～すぎて」と「ほど」は用いられるため、con はいずれにも訳せることが多い。また、この con と日本語における原因・理由表現と比較することで、原因・理由構文とホド構文の関係も見られる。

「ほど」は程度を表す表現であり、本来は因果関係を表すことはないはずであるが、程度も原因・理由も表わす「あまり（に）」と「～すぎて」と比べてみると、ホド構文の中から因果関係も確認できる場合がある。そして、ホド構文では、後述は前述の原因になりうる場合が多いということが分かる。例えば、例文 83）では「体が震えているほど笑いを堪えている」という内容から、「笑いを堪えすぎて、体が震えている」という因果関係が見られる。例文 22）から 26）までも同様に、因果構文からホド構文にすることができ、またはホド構文から因果構文にすることができると考える。よって、「ほど」が用いられている文と「あまり（に）」「～すぎて」が用いられている文の間には、意味的に関係があると考えられる。

3.2.3.5　まとめ—「あまり（に）」とタイ語の表現

本項目では、日本語における原因・理由表現である「あまり（に）」を一部のタイ語の表現と比較考察した。その結果として、以下の要点にまとめる。

（A）タイ語にも、因果関係を表す用法と別の特徴的な用法を持ち合わせている表現があることが確認できた。日本語では、原因・理由を表す「から」と「ので」があるが、原因・理由と同時に程度も表わす「あまり（に）」という表現がある。それと同様、タイ語では因果関係を表す同時に程度も表わすconという表現がある。conにはこのような特徴的な用法があるため、conをphrɔ́とcɯŋなどの因果関係のみを表す表現から区別することができる。

（B）タイ語におけるconという表現は、「結果を表す」「極度を表す」「継続する事態が至る時点を表す」の三つの用法を持ち合わせている。「結果を表す」と「極度を表す」の用法で用いられている場合、日本語における原因・理由を表す「あまり（に）」と類似している働きをする。しかし、「あまり（に）」は感情・状態の極度を表すのに用いられているが、conにはその制限がない。そのため、conが感情・状態以外の極度を表すのに用いられている場合、「あまり（に）」に訳せない場合がある。その場合のconは、程度が過ぎていることを表す「過ぎる」と原因・理由を表す述語のテ形などを合わせて、「～すぎて」という表現に近い働きをしていると考えられる。また、「～すぎたから」「～すぎたので」などの形式にも対応していると考えられる。さらに、「継続する事態が至る時点を表す」という用法があるため、「あまり（に）」のほかに、「まで」と「ほど」にも対応している場合がある。

（C）タイ語における因果関係を表すconが用いられている例文を対訳した日本語文と比較することで、「あまり（に）」や「～すぎて」が使用されている原因・理由文と「ほど」が使用されている文の近い関係が見られる。ホド構文の「ほど」の後に続いている部分は、「ほど」の直前にある部分の原因・理由になりうる場合があることが確認できた。あえて言うならば、「あまり（に）」の原因・理由は、原因・理由の部分と結果の部分を互いに置き換えて、「ほど」と用いれば、ホド構文にすることができる場合があるということが分かった。

タイ語のconは、原因・理由を表わす「あまり（に）」だけではなく、述語のテ形にも関係があると考えられる。継続する事態が至る時点を表す機能は、いわゆる物事の順序を表してる機能である。そのため、並列関係の複文によく用いられていると考えられ、日本語におけるテ形に近い部分があると考えられる。主節と従属節の主語が同じであればテ形が使われやすいという原因・理由を表す場合のテ形の特徴は、conにもあると考えられる。これについては、本稿で使用されている例文からも確認できた。故に、「あまり（に）」のほかに、conとテ形を比較考察することも今後の課題として必要であると考える。

また、conには様々な表現と組み合わせて使われることも多いが、その場合のconは原因・理由を表す「あまり（に）」に対応しているかどうかも、今後の課題として残されている。さらに、タイ語ではconの他に、ləəyなどの表現もある[8]。con以外の「あまり（に）」に近い他のタイ語の表現もあると考えられるため、検討することが必要である。

3.2.4　「たけに」とタイ語の表現

本項目では、日本語における事態系の原因・理由表現は「だけに」を考察の対象としてタイ語と比較考察する。また、「だけに」に類似している「だけあって」という表現の比較考察も行う。

3.2.4.1　「だけに」の意味・用法

「だけに」はの意味・用法は、原因・理由を表すものとそうではないものがある。

84）　「あなただけにそうはさせておきませんよ。わたしだって定子をみごとに捨てて見せますからね」

（有島武郎『或る女　後編』）

85）　いつしかおれ達だけになって、喜久子もいっしょに、三人でビールやウイスキーを飲んでいた。

（豊島与志雄『豊島与志雄著作集　第四巻』）

86）　プレハブとはいえ、そこはいちおう仮設校舎だけに、工事現場にあるそれと較べると、多少は小奇麗にできている。

（東川篤哉『学ばない探偵たちの学園』）

例文 84）と 85）のような接続詞ではない「だけに」は、「だけ」と「に」の働きは別々であると考え、原因・理由を表す機能はない。それに対して、86）の「だけに」は一つの接続表現として用いられていて、前件と後件を因果関係で結ぶ機能が働いている。

例文 84）と 85）のよう場合の「だけに」のほかに、「だけには」の用例もある。

87）　これといってする仕事もなく、胸の中だけにはいろいろな空想を浮かべたり消したりして、とかく回想にふけりやすい日送りをしている時だった。

（有島武郎『或る女　前編』）

例文 84）と 85）の「だけに」の「だけ」と「に」の働きが別々であると同様、87）の「だけには」も「だけ」、「に」、「は」の働きは別々である。接続表現である「だけに」は、「から」や「ので」などのように、原因・理由を表す意味・用法を持っているが、そのほかに、当然性も表すといわれている。ここでの当然性は、因果関係の当然性であり、「その原因・理由が引き起こした結果が当然の結果である」という意味である。グループ・ジャマシイ（1998）によれば、前件におけることがらの当然のなりゆきとして後件における状況が出てくるという意味で「だけに」が使用されていると述べている。つまり、「だけに」は前述と後述の因果関係を表すだけではなく、その因果関係は当然のなりゆきであることも表すということである。

88）　彼は現職の教師だけに受験について詳しい。

（グループ・ジャマシイ『教師と学習者のための日本語文型辞典』）

89）　今回の事故は一歩まちがえれば、大惨事につながるだけに、原因の究明急がれる。

（グループ・ジャマシイ『教師と学習者のための日本語文型辞典』）

90）　それにしても、新しい教育を受け、新しい思想を好み、世事にうといだけに、世の中の習俗からも飛び離れて自由でありげに見える古藤さえが、葉子が今立っている崖がけのきわから先には、葉子が足を踏み出すのを憎み恐れる様子を明らかに見せているのだ。

（有島武郎『或る女　前編』）

91）　どんな秘密が潜んでいるかだれも知る人のないその内部は、船中では機関室よりも危険な一区域と見なされていただけに、その入り口さえが一種人を脅かすような薄気味わるさを持っていた。

（有島武郎『或る女　前編』）

92）　鉄塔のかげにかくれていたが、追ってくる人もないようなので、杉田二等水兵は、そこを出て、そろりそろりと甲板の方へよじのぼっていった。こういうことなら、水兵さんだけに得意なものである。

（海野十三『海野十三全集　第5巻　浮かぶ飛行島』）

「だけに」の当然性については、例文88）の場合、「現職の教師」と「受験に詳しい」の因果的な関係は当然なものであるということになる。例文92）の場合では、「水兵」であれば「のぼることが得意」ということが当然であるということになる。ところが、実際ではそうとは限らない場合もあるため、「たけに」の当然性そのものに関しては必然的なものではない部分があるといえる。「現職の教師」だからといって、「受験に詳しい」とは限らないし、「水兵」だからといって、必ず「のぼることが得意」というわけではない。そのため、「だけに」の特性は、当然性ではなく、他であると考えられる。

前田（2009）では、「Aだけに B」の意味は、「Aが理由になっていることによって、A以外の場合に比べてより Bである」であると述べている。また、「Aだけに B」は、「A は A である分、その分だけ、一層・より（～だ）」という意味を表しているとも述べている[9]。つまり、Aはほかと比べて一層より上であるため、Bという結果との結びつけが強いということであるといえる。そして、この強い因果関係から、「Aだから当然 B」という解釈ができる場合も出てくるからであろうとも述べている。

前田（2009）における「だけに」の定義の考えを基にし、上記の「だけに」の例文を見れば、「Aだから当然 B」の意味で言い難い場合が、「A は A である分、その分だけ、一層・より（～だ）」の意味で言えることが確認できる。例えば、例文5）の場合では、「彼は現職の教師である分、その分だけ一層より受験について詳しいだ」という意味で「だけに」が使用されていると解釈できる。

一方、益岡（2013b）では、「だけに」は「だけ」と同じ特徴を持ち、スケール性を表していると述べている。「だけに」構文の意味には事態のスケール性に基づく前件の事態と後件の事態の比例関係が関与すると述べている[10]。

93）　ただ、気になるのは車体の老朽化で、ホームなどで見ても、痛み具合が手に取るようにわかるだけに、「果たしていつまで持つのか？」と不安になってくる。

（<http://www.yomiuri.co.jp/>2015/08/20 アクセス）

また、益岡（2013b）は、「だけに」のスケール性を「ほど」と比較して、「AだけにB」を「AなればなるほどB」で置き換えることが可能であるとも述べている。それによって、例文93）の場合の「だけに」が表すスケール性は、「痛み具合が手に取るようにわかる」という事態のスケールと、「果たしていつまで持つのかと不安になってくる」という事態のスケールとの間に対応関係が認められ、痛み具合がわかる程度のスケールと不安さのスケールの間に比例関係があるといえる。つまり、「痛み具合がわかればわかるほど不安になってくる」といったような言い換えが可能であり、「だけに」はその意味も表わしているといえる。

スケール性に関しては、「だけに」の後件の意味的な制約にも関わっていると考えられる。前田（2009）によれば、「だけに」構文における後件は「程度性」を持つ内容が来なければならないと述べている。これは、「AだけにB」は「A以外の場合に比べてそれよりもB」の意味が表しているため、Bには程度を表す部分がなければならないからである。また、前田（2009）は、Bにおける程度性は、後節の述語そのものが「深い」「難しい」「残念」などの単純に程度性を表わす形容詞である場合があり、節の中にある形容詞が程度性を表す場合もあるとも述べている[(11)]。

94）　「震災前の水準に少しでも近づけられればという期待はあった。マリン券も完売し、序盤の入り込みを維持できていれば、昨年を上回ることができただけに残念だ」

（<http://www.yomiuri.co.jp/>2015/08/26 アクセス）

95）　その後は２本のシュートがゴールポストに阻まれるなど、運にも見放された。押し込んでいただけに、悔しさの残る敗戦となった。

（<http://www.yomiuri.co.jp/>2015/08/20 アクセス）

例文94）の後件の述語は「上品（な）」という形容詞が程度性を表し、95）では「悔しさ」という形容詞が程度性を表わしている。

さらに、田中（2010）によれば、「だけに」は「XがXだけに、いっそう、よけいに、ますます」という意味が前面にだされていると述べている。また、後件には「かえって」や「むしろ」などの副詞がつきやすいとも述べている[(12)]。これはいわゆる、「だけに」構文では「から」構文や「ので」構文よりも原因・理由が強化されているということであるといえる。前田（2009）における、「AはAである分、その分だけ、一層・より（～だ）」という「だけに」が表わす意味と同様であるといえる。

このように、「だけに」は原因・理由を表すほかに、その原因・理由を強化する意味も表わしている。さらに、前件と後件の因果関係の中にあるスケール性と程度性を表わす機能も持っている。それによって、「だけに」構文における後節は内容の制約もある。これらの機能の特徴は、同じ原因・理由表現である「から」や「ので」などにはないものである。

3.2.4.2 「だけあって」について

「だけあって」は「だけに」に類似している意味・用法の特徴を持つ表現形式であり、互いに置き換えることが可能な場合もある。

96a）難関のコンクールを制した若手だけあって、確かに指の回りはすこぶる良い。

（<http://www.yomiuri.co.jp/>2015/08/20 アクセス）

96b）難関のコンクールを制した若手だけに、確かに指の回りはすこぶる良い。

ところが、「だけに」と「だけあって」の間にも相違点があり、置き換え難い場合もある。前田（2009）によれば、後件が否定的な評価である場合には、「だけあって」は使用できないと述べている。また、田中（2010）では、「だけあって」はプラス評価の場合に使用すると述べている。

97a）若いだけに気持ちを隠すのがうまくない。（岩井三四二『竹千代を盗め』）

？97b）若いだけあって気持ちを隠すのがうまくない。

上記の例文 97a）と 97b）は両方とも同じ内容であるが、後件の内容がマイナス評価であるため、「だけに」と比べて「だけあって」が用いられ難い。

また、益岡（2013b）では、「だけあって」には事態を積極的に評価するという意味特徴を持っていると述べている。そのため、「だけあって」構文では「さすがに」という語の使用がよく現れているとも述べている。実際、「だけあって」構文の中に「さすがに」を挿入することが可能な場合が多い。

98a）母親だけあって、彼の性格や行動パターンは理解しているらしい。

（永嶋恵美『あなたの恋人、強奪します。泥棒猫ヒナコの事件簿』）

98b）さすがに母親だけあって、彼の性格や行動パターンは理解しているらしい。

さらに、益岡（2013b）は、「だけあって」の由来の形式は「だけのことはある」であると述べている。故に、「だけあって」の積極的に評価するという意味特徴は、「だけのことはある」の意味特徴から由来するといえる。また、「だけあって」は後節がプラス評価の場合に用いる表現であるのに対して、「だけに」はその制約はない。そのため、「だけあって」よりも「だけに」のほうは用法の範囲が広いといえる。ところが、「だけあって」構文におけるプラス評価の制約に関しては、「だけあって」構文だけを見ると、プラスの評価があるかどうかは分かり難い場合がある。例えば、次のような「だけあって」の用例がある。

99） 闇雲に電車を乗り継ぎ、気がつくと、池袋駅の構内を歩いていた。休日だけあって、人が多い。人混みを流されるままに歩いていると、余計なことを考えずに済むからだろうか、少しずつ気分が落ち着いてきた。

（永嶋恵美『あなたの恋人、強奪します。泥棒猫ヒナコの事件簿』）

上記の例文 99）では、「休日だけあって、人が多い」という「だけあって」構文のみをみる場合、後節はプラス評価であるかどうかは判断しにくい場合があることが分かる。「休日だけあって、人が多い」という内容だけでは、一般的に考えれば、「人が多い」ということが話し手にとって「不快なこと」である場合もあるからである。つまり、この「だけあって」構文だけでは、話し手による後節の評価はプラスであるかどうかは断言できない場合である。しかし、例文 99）を全体的みれば、この「だけあって」構文における「人が多い」という後節は話し手にとってプラス評価であることが分かる。特に「だけあって」構文の後に続いている「人混みを流されるままに歩いていると、余計なことを考えずに済むからだろうか、少しずつ気分が落ち着いてきた。」という文は、「だけあって」構文における後節の評価を補足しているといえる。このように、「だけあって」構文における後節のプラス評価は、その構文だけでは分かり難い場合があり、その文の内容を補足するほかの文も見なければならない場合がある。

3.2.4.3 「だけに」とタイ語の表現の比較考察

続いては、「だけに」の意味・用法をタイ語の表現と比較考察する。「だけに」構文のタイ語訳の用例は、次のようにあげられる。

100a）奥さんは年を取っているだけに、私よりもずっと落ち付いていました。

คุณนายเป็นผู้ใหญ่กว่าฉัน คุณนายจึงสงบเยือกเย็นกว่าฉันมาก

khun-naay	pen	phûu-yài kwàa	chăn	khun-naay		cɯŋ	saʔŋòp-yúak-yen
奥さん	COPU	年を取っている	より	私	奥さん	CON	落ち着いている

kwàa	chăn	mâak
より	私	とても

≪日本≫（夏目漱石『こころ』）

≪タイ≫（Preeya Ingkaphirom：*Kokoro*）

まずは 100a）の場合のように、「だけに」構文の対訳としてシンプルに cɯŋ 構文にする場合である。この場合では、cɯŋ という結果表現は「だけに」に対応し、前後が因果関係で結ばれている。

101a）連休だけに、道路は行楽地へ向かう車でいっぱいだ。

เพราะเป็นวันหยุดยาว ท้องถนนจึงเต็มไปด้วยรถยนต์ที่มุ่งหน้าไปยังสถานที่พักตากอากาศ

phrɔ́ʔ	pen	wan-yùt-yaaw	thɔ́ɔŋ-thàʔnŏn	cɯŋ	tem-pay-dûay	rót-yon	thîi
CON1	COPU	連休	道路	CON2	いっぱい	車	COMP

mûŋ-nâa-pay-yaŋ	sàʔthăan-thîi-pák-tàak-aakàat
向かう	行楽地

≪日タイ≫（Wiirawan Washiradirok：*Gunjae suu 500 Ruup-prayook*）

102a）トイレ、風呂、キッチンことごとく共用であるが、これもまた旅館であっただけに、トイレの数は多いし、一階のキッチンは蛇口が横一列に四つも並ぶ巨大なシンクを揃えて機能的である。

ทั้งห้องส้วม ห้องอาบน้ำและห้องครัวเป็นแบบใช้ร่วมกัน แต่เนื่องจากเป็นเรียวคังมากอ่นอีกเช่นกัน ที่นี่จึงมีห้องส้วมแยะ ส่วนห้องครัวซึ่งอยู่ชั้นล่างก็มีอ่างล้างจานขนาดมหึมา ติดก๊อกน้ำเรียงรายถึงสี่หัว ช่วยให้ใช้งานสะดวกง่ายดาย

tháŋ	hɔ̂ɔŋ-sûam	hɔ̂ɔŋ-àap-nâam	lɛ́ʔ	hɔ̂ɔŋ-khrua	pen	bɛ̀ɛp	cháy-rûam-kan	
も	トイレ	風呂	と	キッチン	COPU	型	共用	
tɛ̀ɛ	nûaŋ-càak	pen	riaw-khaŋ	maa-kɔ̀ɔn	ìik-chên-kan	thîi-nîi		
逆接	CON1	COPU	旅館	PST	これもまた	ここ		
cɯŋ	mii	hɔ̂ɔŋ-sûam	yɛ́ʔ	sùan	hɔ̂ɔŋ-khrua	cûŋ	yùu	chán-lâaŋ
CON2	ある	トイレ	多い	一方	キッチン	COMP	ある	下の階
kɔ̂ʔ-mii	àaŋ-láaŋ-caan	khàʔnàat-máʔhùʔmaa		tìt	kók-nâam	riaŋ-raay		
もある	シンク	巨大		設置	蛇口	並ぶ		
thŭŋ	sìi-hŭa	chûay-hây	cháy-ŋaan-saʔdùak-ŋâay-daay					
も	四つ	助かる	機能的					

≪日本≫（夏川草介『神様のカルテ』）

≪タイ≫（Pornchai Wittayaleetpan：*Ichito khun-moo huajai theewadaa*）

cɯŋ のみを用いる場合のほかに、phrɔ́ʔ～cɯŋ という形式が「だけに」の対訳として用いられる場合もある。また、phrɔ́ʔのかわりに nûaŋ-càak という表現が用いられる場合もある。例文 101a）と 102a）のように、前件の前に原因・理由を現す phrɔ́ʔ、nûaŋ-càak が用いられていて、前件と後件の間に結果を表す cɯŋ が用いられている。これらの場合も 100a）と同様であり、phrɔ́ʔ～cɯŋ と nûaŋ-càak～cɯŋ は「だけに」と同じく前件と後件の因果関係を表してる。さらに、「だけに」構文のタイ語訳で nûaŋ-càak～daŋ-nán～cɯŋ のような三つの因果関係を表す表現が含まれている表現形式が用いられる用例もある。

103a）あきらめていただけに、合格とわかったときは本当に嬉しかった。

เนื่องจากทำใจไว้แล้วว่าไม่ผ่าน ดังนั้น พอรู้ว่าสอบผ่าน จึงดีใจจริงๆ

nûaŋ-càak	tham-caywáy	lɛ́ɛw	wâa	mây-phàan	daŋ-nán	phɔɔ	rúu
CON1	あきらめる	PST	COMP	不合格	CON2	時	知る
wâa	sɔ̀ɔp-phàan	cɯŋ	dii-cay	ciŋ-ciŋ			
COMP	合格	CON2	嬉しい	本当に			

≪日タイ≫（Somkiat Chawengkijwanich：*20 Huakhoo-det Phichit Waiyakorn-Yiipun Chan-klang*）

上記の例文 20a）におけるタイ語文では、nûaŋ-càak は原因・理由を表し、daŋ-nán～cɯŋ は結果を表す。前件と後件を因果関係で結び付けるのは daŋ-nán～cɯŋ であるため、この例文の「だけに」の対訳は daŋ-nán～cɯŋ である。

このように、「だけに」構文のタイ語訳の用例では、phrɔ́ʔ、nûaŋ-càak 、daŋ-nán 、cɯŋ などのタイ語の代表的な因果関係を表す表現が「だけに」の訳として用いられる。ところが、これらの表現は因

果関係を表す機能を持っていても、原因・理由の強化、スケール性、評価といった特徴的な機能を持っていない。ゆえに、これらの例文は「だけに」の因果関係を表す意味にしか対応していないと考える。実際、100a）から 103a）までの例文の原因・理由表現が「から」または「ので」であっても、同じタイ語訳が対応していると考えられる。

100b）奥さんは年を取っているから、私よりもずっと落ち付いていました。

คุณนายเป็นผู้ใหญ่กว่าฉัน คุณนายจึงสงบเยือกเย็นกว่าฉันมาก

khun-naay pen phûu-yài kwàa chǎn khun-naay cɯŋ saʔŋòp-yúak-yen
奥さん COPU 大人 より 私 奥さん CON 落ち着いている
kwàa chǎn mâak
より 私 とても

101b）連休だから、道路は行楽地へ向かう車でいっぱいだ。

เพราะเป็นวันหยุดยาว ท้องถนนจึงเต็มไปด้วยรถยนต์ที่มุ่งหน้าไปยังสถานที่พักตากอากาศ

phrɔ́ʔ pen wan-yùt-yaaw thɔ́ɔŋ-thàʔnǒn cɯŋ tem-pay-dûay rót-yon thîi
CON1 COPU 連休 道路 CON2 いっぱい 車 COMP
mûŋ-nâa-pay-yaŋ sàʔthǎan-thîi-pák-tàak-aakàat
向かう 行楽地

102b）トイレ、風呂、キッチンことごとく共用であるが、これもまた旅館であったから、トイレの数は多いし…

ทั้งห้องส้วม ห้องอาบน้ำและห้องครัวเป็นแบบใช้ร่วมกัน แต่เนื่องจากเป็นเรียวคังมาก่อนอีกเช่นกัน ที่นี่จึงมีห้องส้วมแยะ…

tháŋ hɔ̂ɔŋ-sûam hɔ̂ɔŋ-àap-nâam lɛ́ʔ hɔ̂ɔŋ-khrua pen bɛ̀ɛp cháy-rûam-kan
も トイレ 風呂 と キッチン COPU 型 共用
tɛ̀ɛ nûaŋ-càak pen riaw-khaŋ maa-kɔ̀ɔn ìik-chên-kan thîi-nîi
逆接 CON1 COPU 旅館 PST これもまた ここ
cɯŋ mii hɔ̂ɔŋ-sûam yɛ́ʔ
CON2 ある トイレ 多い

103b）あきらめていたので、合格とわかったときは本当に嬉しかった。

เนื่องจากทำใจไว้แล้วว่าไม่ผ่าน ดังนั้น พอรู้ว่าสอบผ่าน จึงดีใจจริงๆ

nûaŋ-càak tham-caywáy lɛ́ɛw wâa mây-phàan daŋ-nán phɔɔ rúu
CON1 あきらめる PST COMP 不合格 CON2 時 知る
wâa sɔ̀ɔp-phàan cɯŋ dii-cay ciŋ-ciŋ
COMP 合格 CON3 嬉しい 本当に

上記の 100b）から 103b）までの例文は、いずれもタイ語の phrɔ́ʔ、nûaŋ-càak 、daŋ-nán 、cɯŋ が「から」「ので」と同じ意味を表すため、タイ語文のニュアンスは元の日本語文に近いといえる。それに対して、100a）から 103a）までのタイ語文は、日本語の「だけに」構文の一部のニュアンスにしか対

応していないと考えられる。また、次の例文のように「A が A だけに B」のような場合でも、上記の 100）から 103）までの例文と同様、タイ語文で使用されている因果関係を表す表現そのものは、原因・理由の強化のニュアンスがないと考える。

104）今日は 37 度以上あるそうだ、暑さが暑さだけに、ちょっと歩くと大汗をかく。
ได้ยินว่าวันนี้อุณหภูมิจะสูงกว่า 37 องศา เพราะอากาศร้อนขนาดนี้ พอเดินไปหน่อยก็เหงื่อท่วมตัว

dây-yin	wâa	wan-níi	unnaʔhàʔphuum	sǔuŋ	kwàa	sǎam-sìp-cèt		oŋsǎa
聞いた	COMP	今日	温度	高い	以上	三十七		度
phrɔ́ʔ	aakàat	rɔ́ɔn	khàʔnàat-níi	phɔɔ	dəən	pay	nɔ̀ɔy	kɔ̂ʔ
CON1	天気	暑い	こんなに	CON2	歩く	行く	少し	CON3
ŋùa-thûam-tua								
汗だく								

≪日タイ≫（Wiirawan Washiradirok：*500 Ruup-Prayook Phaasaa-Yiipun N1-N3*）

例文 104）のタイ語文における phɔɔ～kɔ̂ʔという表現形式は、一般的には「～すると～なる」「～したら～なら」といった条件的な意味を表す表現であるが、この場合では phrɔ́ʔとあわせて、因果関係も表していると考える[13]。phrɔ́ʔは後節の原因・理由を表し、phɔɔ の後はその原因・理由に基づいた行動・動作が来る。そして、kɔ̂ʔの後はその原因・理由と行動・動作がもたらした結果である。つまり、この場合では「phrɔ́ʔ＋原因＋phɔɔ＋動作＋kɔ̂ʔ＋結果」という構造になっている。ところが、この場合でも、phrɔ́ʔ～phɔɔ～kɔ̂ʔという表現形式は、原因・理由の強化やスケール性などを表していない。ゆえに、104）のタイ語文は「から」構文の場合でも対応しているといえる。「こんなに暑いから、ちょっと歩くと大汗をかく」という内容の場合であっても、104）のような phrɔ́ʔ～phɔɔ～kɔ̂ʔという表現形式で対訳することが可能であるということである。

105）デザインのいいセーターがあったが、2 万円という値段が値段だけに買わなかった。
มีเสื้อสเวตเตอร์ที่ออกแบบดี แต่เพราะราคาตั้ง2หมื่นเยน จึงไม่ได้ซื้อ

mii	sûua-sàʔwéttêə		thîi	ɔ̀ɔkbɛɛp	dii	tɛ̀ɛ	phrɔ́ʔ	raakaa	tâŋ
ある	セーター		COMP	デザイン	いい	逆接	CON1	値段	も
sɔ̌ɔŋ-mùɯn-yeen		cɯŋ	mây-dây		sɯ́ɯ				
二万円		CON2	NEG		買う				

≪日タイ≫（Wiirawan Washiradirok：*500 Ruup-Prayook Phaasaa-Yiipun N1-N3*）

一方、105）の場合では phrɔ́ʔ～cɯŋ という表現形式が用いられている。この場合も 103a）における daŋ-nán～cɯŋ と殆ど変わらないといえる。前節と後節の因果関係を表すが、「だけに」のような原因・理由の強化のニュアンスがない。

タイ語における因果関係を表す phrɔ́ʔ、nûaŋ-càak、daŋ-nán、cɯŋ などは、「だけに」の因果関係を表す意味にしか対応していないが、「だけに」の原因・理由の強化または評価に近い意味を持つタイ語の表現もあると考える。例えば、yîŋ という表現である。

3.2.4.4 「だけに」と yîŋ の比較

「だけに」構文のタイ語訳の中には、因果関係を表す表現のほかに、yîŋ という表現も用いられている場合がある。例えば、次の 106）である。

106）昼前には雨も上がり、快晴と呼べるほどの天気となっただけに、本当に朝方の雨が恨めしかった。

ฝนหยุดเมื่อก่อนเที่ยง อากาศเปลี่ยนเป็นแจ่มใส ยิ่งทำให้รู้สึกเจ็บใจที่ฝนตกตอนเช้า

fŏn	yùt	múa	kɔ̀ɔn	thîaŋ	aakàat	plìan-pen	cɛ̀ɛm-sǎy	yîŋ
雨	止む	時	前	昼	天気	変わる	快晴	ますます
tham-hây		rúu-sùk	cèp-cay	thîi	fŏn	tòk	tɔɔn-cháaw	
CON		感じる	悔しい	COMP	雨	降る	朝方	

≪日本≫（乙武洋匡『五体不満足』）

≪タイ≫（Pornanong Niyomka：*Mai-Khrop-Haa*）

例文 106）のタイ語文では、tham-hây という結果を表す表現のほかに、yîŋ という表現も用いられている。tham-hây は日本語の「～にする」という意味に近い表現であり、106）のように接続詞として用いる場合、後節のような結果にした前節であるという意味で用いられている。この表現自体は、同じ結果表現である cɯŋ と比べて、「前節に責任がある」または「前節のせいである」というニュアンスが含まれている場合があり、「せいで」のようにマイナス性を表すためにも用いられる。ところが、tham-hây という表現も cɯŋ と同様、原因・理由を強化する機能はない。

そこで、日本語の「だけに」のニュアンスにあわせるために、106）では結果表現とともに yîŋ という表現も用いられている。タイ語における yîŋ は、「ますます」「いっそう」「よけいに」「さらに」「なおさら」といった、程度が一段と加わる意味を表す表現である。ただし、一般的には、この表現は因果関係を表す機能はないため、「だけに」のように用いるためには、106）のように tham-hây などの因果関係を表す表現と共起する必要がある。

実際、yîŋ という表現は結果を表す表現と共起する場合がよく見られる。例文 106）のような yîŋ-tham-hây だけではなく、cɯŋ-yîŋ という組み合わせも「だけに」の対訳文に見られる。

107）父は年をとっているだけに、病気をすると心配だ。

เพราะพ่ออายุมากขึ้น จึงยิ่งเป็นห่วงว่าจะเจ็บป่วย

phrɔ́ʔ	phɔ̂ɔ	aayú	maak-khûun	cɯŋ	yîŋ	pen-hùaŋ	wâa
CON1	父	年	増える	CON2	ますます	心配する	COMP
càʔ	cèp-pùay						
FUT	病気をする						

≪日タイ≫（Wiirawan Washiradirok：*Gunjae suu 500 Ruup-prayook*）

上記の例文 107）のタイ語文では、cɯŋ が前件と後件の因果関係を表し、yîŋ はその因果関係における原因・理由が原因・理由だけになおさらその結果になるという意味を表している。つまり、cɯŋ 自

体は「父は年をとっているから、病気をすると心配だ」という意味で前件と後件を結び付けている一方、yîŋ はその因果関係の中に「ますます」「いっそう」「よけいに」「さらに」「なおさら」などの意味を加わる働きをしている。故に、cɯŋ と yîŋ の意味・用法をあわせることで、この表現形式は日本語の「だけに」に近い意味を表している。ところが、ここで注意したいのは、yîŋ の位置である。「だけに」は原因・理由節に位置するものであり、その原因・理由な他と比べて一層より強い意味を表す。そして、その結果の節に「ますます」「いっそう」「よけいに」などの表現を用いることが可能である。一方、結果表現と共起する場合、yîŋ は結果の節に位置するものである。つまり、この yîŋ 自体は「だけに」に対応しているというより、その「だけに」の後に来るであろう「ますます」「いっそう」「よけいに」などの表現に対応しているといえる。

とはいえ、107）のように、「ますます」「いっそう」「よけいに」といった表現が現れていない場合でも、「だけに」自体はそれらの表現の意味も含まれているため、cɯŋ-yîŋ などの表現形式はその「だけに」の意味に対応しているといえる。yîŋ は yîŋ-tham-hây と cɯŋ-yîŋ のほかに、ləəy-yîŋ という表現形式もある。ləəy は cɯŋ と同様、結果を表す表現であるため、cɯŋ-yîŋ と同じように使用できる。ləəy は cɯŋ より口語的な表現であるため、ləəy-yîŋ も cɯŋ-yîŋ より口語的な表現である。例えば、次の例文 108）である[14]。

108）เราดันขี้โวยวายเลยยิ่งโดนแกล้ง

raw	dan	khîi	wooywaay	ləəy	yîŋ	doon	klɛ̂ɛŋ
私	しまった	癖がある	騒ぐ	CON	よけいに	PAS	いじめる

ちょっとしたことでもすぐに騒いでしまう癖があるだけに、よけいにいじめられていた。

≪タイ≫（<http://pantip.com/topic/34096901>2015/08/25 アクセス）

yîŋ は yîŋ-pay-kan-yày という慣用的にな用法もよくみられる。yîŋ-pay-kan-yày は、yîŋ と pay-kan-yày に分けられて、両方とも「よけいに」「なおさら」「いっそう」といった意味を表す。そのため、日本語における「まして～なおさらだ」に近い働きもする。また、yîŋ-pay-kan-yày そのものは後節として用いることが可能であるが、yîŋ と pay-kan-yày の間に「よけいに」「なおさら」「いっそう」になる事柄が入る場合もある。さらに、この慣用的な用法の場合でも、cɯŋ や ləəy などと共起することも可能である。ところが、「よけいに」「なおさら」「いっそう」になる特定とした事柄が後節に現れなていない場合では、前節に対する極度のプラス評価またはマイナス評価を表すことが多い。つまり、「最悪だ」または「最高だ」といった意味で後節として用いられる。

109a）พอเริ่มแป้กๆเพื่อนๆและพี่ๆก็แซวเลยยิ่งไปกันใหญ่เลยครับ

phɔɔ	rə̂əm	pɛ̂ɛk-pɛ̂ɛk	phûan-phûan	lɛ́ʔ	phîi-phîi	kɔ̂ʔ	sɛɛw
時	始める	悪くなる	友達	と	先輩達	CON	からかう

ləəy	yîŋ-pay-kan-yày	ləəy	khrâp
CON	なおさら	PERF	MPP

だんだん調子が悪くなってきたら、友人達と先輩達にからかわれて、最悪だったんです。

≪タイ≫（<http://pantip.com/topic/32837991>2015/08/25 アクセス）

109b）พอเริ่มแป๊กๆเพื่อนๆและพี่ๆก็แซวเลยยิ่งอายไปกันใหญ่เลยครับ

phɔɔ	rɤ̂ɤm	pɛ̂ɛk-pɛ̂ɛk	phûan-phûan	lɛ́ʔ	phîi-phîi	kɔ̂ʔ	sɛɛw
時	始める	悪くなる	友達	と	先輩達	CON	からかう

lɤɤy	yîŋ	aay	pay-kan-yày	lɤɤy	khrâp
CON	なおさら	恥ずかしい	なおさら	PERF	MPP

だんだん調子が悪くなってきたら、友人達と先輩達にからかわれて、なおさら恥ずかしかったです。

例文 109a）および 109b）は話し手がサッカーをうまくできず、周りにからかわれたという内容の用例である。109a）の場合では、完了の意味を持つ終助詞 lɤɤy と丁寧語 khrâp を除けば、yîŋ-pay-kan-yày そのものだけが後節の内容である。何が「なおさら」なのかは話し手が述べていないため、この場合では前節の内容に対してマイナス評価を表し、「最悪だ」という意味を表す。

一方、109b）では「恥ずかしい」という意味を持つ aay という形容詞が yîŋ と pay-kan-yày の間にあるため、この場合ではその形容詞が「なおさら」であり、「なおさら恥ずかしい」という意味になる。とはいえ、109a）では aay という形容詞がなくても、文全体の内容をみれば、109b）と同じように解釈することも可能である。

このように、yîŋ は結果表現と共起して、yîŋ-tham-hây、cɯŋ-yîŋ、lɤɤy-yîŋ といった表現形式で用いることができる[15]。yîŋ は結果表現と共起する他、次の例文 110）のように、yîŋ～yîŋ という用法である。この場合の yîŋ は「ほど」に近い意味を持ち、「～ば～ほど」に近い意味を表す。

110）ยิ่งห้ามยิ่งคิด และบ่อยครั้งก็ทำให้สรุปผิดๆ

yîŋ	hâam	yîŋ	khit	lɛ́ʔ	bɔ̀ɔy-khráŋ	kɔ̂ʔ-tham-hây	saʔrùp	pìt-pìt
ほど	止める	ほど	考える	そして	殆どの場合	CON	結論	間違い

止めようとすればするほど考えてしまい、間違った結論に行き着いてしまったことも多い。

≪タイ≫（Win Lyovarin：*Nay Lum Rak*）

例文 110）のように、yîŋ～yîŋ は、「A であれば A であるほど B」という意味で用いられる。ただし、yîŋ～yîŋ の場合では、「yîŋ＋事柄 1＋yîŋ＋事柄 2」という形で用いる。この場合の「事柄 1」は「A であれば A であるほど B」における A に相当し、「事柄 2」は B に相当する。

また、この yîŋ～yîŋ という yîŋ の用法では、kɔ̂ʔ も用いることが多い。その場合では yîŋ～kɔ̂ʔ-yîŋ という形式になる。例文 110）の場合では、yîŋ～yîŋ を yîŋ～kɔ̂ʔ-yîŋ で置き換えることも可能であり、この二つの形式の間には意味的に殆ど相違点がないと考えられるが、この場合の kɔ̂ʔ は結果を表す機能が働いていると考える。実際、yîŋ～kɔ̂ʔ-yîŋ を yîŋ～kɔ̂ʔ-lɤɤy-yîŋ で置き換えることも可能である。日本語と比べて、「A であれば A であるほど B」の B は結果と解釈できる場合もあり、「yîŋ＋事柄 1＋yîŋ＋事柄 2」の「事柄 1」は「事柄 2」と解釈できる場合もある。「～ば～ほど」の意味を持つ yîŋ～yîŋ 自体は、yîŋ-tham-hây、cɯŋ-yîŋ、lɤɤy-yîŋ などと異なって、因果関係を表す表現が加わっていないため、yîŋ～yîŋ は直接に因果構文に関わっていない。

しかし、yîŋ〜yîŋ は、益岡（2013b）が述べている「だけ」および「だけに」のスケール性に関係していると考えられる。つまり、「A だけに B」が「A なればなるほど B」で置き換えることが可能であると同様、cɯŋ-yîŋ、ləəy-yîŋ、yîŋ-tham-hây を yîŋ〜yîŋ で置き換えることが可能な場合もある[16]。

111a）ยิ่งอยู่บนที่สูงก็ยิ่งหนาว

yîŋ	yùu	bon	thîi	suuŋ	kɔ̂ʔ	yîŋ	nǎaw
ほど	いる	上	場所	高い	CON	ほど	寒い

高い所にいればいるほど、寒い。

111b）เพราะอยู่บนที่สูงจึงยิ่งหนาว

phrɔ́ʔ	yùu	bon	thîi	suuŋ	cɯŋ	yîŋ	nǎaw
CON1	いる	上	場所	高い	CON2	よけいに	寒い

高い所にいるだけに、寒い。

例文 111a）と 111b）のように、「だけに」と「ほど」と同様、cɯŋ-yîŋ 構文を yîŋ〜yîŋ 構文に変えることが可能である。とはいえ、111a）のニュアンスは 111b）と全く同じというわけでもない。実際、日本語の場合でも、因果構文を「ほど」の構文に言い換えることが可能な場合があっても、程度を述べるニュアンスと因果関係を述べるニュアンスは、別々であると考える。111a）の程度を述べるニュアンスから因果関係も読み取ることができても、111a）は 111b）のように因果関係が述べられているというわけでもない。元々、yîŋ という表現自体は因果関係を表す機能がなく、因果構文で用いる yîŋ-tham-hây、cɯŋ-yîŋ、ləəy-yîŋ なども yîŋ と結果表現の働きは別々である。日本語で言えば、「いっそう」「よけいに」「なおさら」といった表現と「から」や「ので」などの表現の働きな別々であることと同様である。ただ、「だけに」の機能特徴は因果関係を表すほかに「いっそう」「よけいに」「なおさら」などの意味も含まれているため、yîŋ と結果表現の働きは別々であっても、yîŋ-tham-hây、cɯŋ-yîŋ、ləəy-yîŋ などの表現形式は「だけに」に対応しているといえる。

3.2.4.5 「だけあって」とタイ語の比較

「だけあって」は「だけに」に近い表現であるが、「だけあって」の用法は後節の内容に対する話し手によるプラス評価がある場合に限定されている。故に、「だけに」と「だけあって」が互いに置き換えることが可能な場合も、後節にプラス評価が含まれている場合のみである。

そして、「だけに」と「だけあって」が置き換えることが可能であるため、「だけに」に対応しているタイ語の表現である yîŋ-tham-hây、cɯŋ-yîŋ、ləəy-yîŋ は、「だけあって」にも対応している。「だけあって」は後節の制限があるが、yîŋ-tham-hây、cɯŋ-yîŋ、ləəy-yîŋ は「だけに」と同様でその制限はないと考えられる。

112a）これは人気のある商品だけに、すぐに売り切れるかもしれませんよ。

เนื่องจากนี่เป็นสินค้าที่ได้รับความนิยม จึงอาจจะขายหมดในทันที

nɯ̂ang-càak	nîi	pen	sǐn-khâa	thîi	dây-ráp-khwaam-níʔyom	cɯŋ	àakt-càʔ
CON1	これ	COPU	商品	COMP	人気のある	CON2	かもしれない

khǎay-mòt　　nay-than-thii
売り切れる　　すぐに

≪日タイ≫（Somkiat Chawengkijwanich：*20 Huakhoo-det Phichit Waiyakorn-Yiipun Chan-klang*）

112b）これは人気のある商品だけあって、すぐに売り切れるかもしれませんよ。

เนื่องจากนี่เป็นสินค้าที่ได้รับความนิยม จึงอาจจะขายหมดในทันที

nûaŋ-càak	nii	pen	sǐn-khâa	thii	dây-ráp-khwaam-nípʔyom	cɯŋ	àakt-càʔ
CON1	これ	COPU	商品	COMP	人気のある	CON2	かもしれない

khǎay-mòt　　nay-than-thii
売り切れる　　すぐに

例文 112a）112b）のように、「だけに」と「だけあって」が互いに置き換えることが可能な場合、いずれも同じタイ語の表現が対応していて、同様に訳すことが可能であると考える。結果表現である tham-hây、cɯŋ、ləəy は、プラス評価とマイナス評価、いずれの場合でも使用できる表現であり、yîŋ もそれらと同様である。ただし、yîŋ-pay-kan-yày という慣用的な表現は、マイナス評価のほうによく用いられると考えられる。「だけに」と「だけあって」の間には共通点が多くあり、tham-hây、cɯŋ、ləəy、そして yîŋ が両方ともに同じように対応しているといえる。しかし、yîŋ-tham-hây、cɯŋ-yîŋ、ləəy-yîŋ などよりもプラス評価の場合によく用いられる表現があり、「だけに」より「だけあって」のほうに近いタイ語の表現がある。例えば、sǒm-kàp や sǒm-pen などの sǒm 形の表現である。

3.2.4.6　「だけあって」と sǒm 形の表現の比較

sǒm-kàp や sǒm-pen などの sǒm 形の表現は yîŋ と同様、程度を表す表現であり、一般的には因果関係を表さない。そのため、因果構文に用いられる場合、yîŋ の yîŋ-tham-hây、cɯŋ-yîŋ、ləəy-yîŋ などと同様、因果関係を表す表現と共起する。

yîŋ は程度が一段と加わる意味を表すが、評価を表さないと考える。そのため、「ますます」「いっそう」「よけいに」「さらに」「なおさら」といった表現のいずれの場合にも対応する。一方、sǒm-kàp や sǒm-pen などの表現における sǒm は mɔ̀ʔ-sǒm が由来の形式であり、いずれも「相応しい」「さすが」という意味を表す。必ずプラス評価を表す表現ではないが、皮肉の場合を除き、マイナス評価を表すために用いられない表現であり、yîŋ と比べて、プラス評価を表す場合に用いられやすい表現である。故に、sǒm 形の表現が因果関係を表す表現と共起する場合、「だけあって」に近い意味を表すと考えられる。例えば、次の用例である。

113a）ここは一流ホテルだけあって、サービスがとてもいい。

ที่นี่สมกับเป็นโรงแรมชั้นหนึ่ง บริการจึงดีมาก

thîi-nîi	sǒm-kàp-pen	rooŋ-rɛɛm	chân-nùŋ	bɔɔríʔkaan	cɯŋ	dii	mâak
ここ	さすが	ホテル	一流	サービス	CON	いい	とても

≪日タイ≫（Wiirawan Washiradirok：*Gunjae suu 500 Ruup-prayook*）

「さすが」「相応しい」といった意味を表す sǒm は kàp と共起することが多くあり、kàp は「～に相応しい」の「に」に近い働きをするといえる。故に、sǒm-kàp という表現形式がよく見られる。また、sǒm-kàp は文中の副詞 pen や関係詞 thîi などの直前に位置することが多い。つまり、sǒm-kàp-pen、sǒm-kàp-thîi、sǒm-kàp-thîi-pen といった表現形式で用いられる場合が一般的である。ただし、sǒm の後に pen または thîi が来る場合、kàp がなくても用いられる。例えば、例文 113a）の sǒm-kàp-pen を sǒm-pen にすることが可能である。ニュアンスに違いはないと考えられるが、表現を短くすればするほどより口語的になると考える。

113b）ここは一流ホテルだけあって、サービスがとてもいい。

ที่นี่สมเป็นโรงแรมชั้นหนึ่ง บริการจึงดีมาก

thîi-nîi	sǒm-pen	rooŋ-rɛɛm	chân-nùŋ	bɔɔriʔkaan	cɯŋ	dii	mâak
ここ	さすが	ホテル	一流	サービス	CON	いい	とても

例文 113a）と 113b）におけるタイ語文では、sǒm-kàp-pen および sǒm-pen が程度を表し、因果関係は cɯŋ が表している。sǒm-kàp-pen、sǒm-pen の意味と cɯŋ の意味をあわせて、「だけあって」構文に近いニュアンスになる。一応、113a）と 113b）の cɯŋ がなくても、前節と後節の内容を見れば、因果関係で前節と後節が続いていることが推測できると考える。いわゆる、タイ語における因果関係を表す表現が現れない因果構文にすることが可能である。しかし、いずれの場合でも、sǒm-kàp-pen、sǒm-pen の機能は因果関係に関わっていないと考える。そのため、sǒm-kàp-pen、sǒm-pen と cɯŋ の働きは別々である。この点に関しては、yîŋ と同様である。とはいえ、sǒm-kàp、sǒm-pen の用法は、程度とプラス評価を表すほかに、前件と後件を接続する用法もある。そのため、cɯŋ などの接続表現を使用せずとも、sǒm-kàp や sǒm-pen などで前件と後件を結び付けることが可能である。

114a）この大学は歴史が長いだけあって伝統がある。

มหาวิทยาลัยนี้มีประเพณีเก่าแก่สมกับที่มีประวัติยาวนาน

maʔhǎa-wíttha ʔyaalay	nîi	mii	praʔpheenii	kàw-kɛ̀ɛ	sǒm-kàp-thîi	mii	
大学	この	ある	伝統	古い	さすが	ある	
praʔwàt	yaaw-naan						
歴史	長い						

≪日タイ≫（Bussabaa Banjongmanii：*Waiyakorn Radap 2 Samrap triam sorp Wat-Radap Phaasaa-Yiipun*）

本来、sǒm 形の表現は因果関係を表さない表現であるが、114a）のような場合では前件と後件の間には因果関係があると解釈することが可能な内容であるため、sǒm 形の表現を「だけあって」のように接続表現として用いられる。とはいえ、114a）におけるタイ語文のニュアンスは、「この大学は歴史が長いから伝統がある」ではなく、「歴史が長いことに相応しく、伝統がある」に近いと考えられる。要するに、「歴史が長い」と「伝統がある」を因果関係で結び付けることが可能であっても、本来の 114a）のタイ語文は因果関係のニュアンスはないと考えられる。よって、114a）における日本語

文とタイ語文は、互いに近い内容を述べているとはいえ、sǒm 形の表現は「だけあって」と全く同じ意味・用法で用いられているというわけではない。

実際、114a）のような sǒm 形の表現の用法は、「だけあって」のみならず、「だけに」の場合にも対応している。

115a）林さんはセールスマンだけに話が上手だ。

คุณฮายาชิพูดเก่งสมกับที่เป็นพนักงานขาย

khun-haayaashíʔ phûut kèeŋ sǒm-kàp-thîi-pen phaʔnákŋaan-khǎay

林さん 話す 上手 さすが セールスマン

≪日タイ≫（Bussabaa Banjongmanii：*Waiyakorn Radap 2 Samrap triam sorp Wat-Radap Phaasaa-Yiipun*）

116a）マッキーが、三郎に飛びかかり、首を絞めた。元高校球児だけに、力は強い。

มักกีโผเข้ามาบีบคอเขาแรงเยอะสมเป็นอดีตนักเบสบอลสมัยมัธยมปลาย

makkii phǒo-khâw-maa bìip khɔɔ khaw rɛɛŋ-yə́ʔ sǒm-pen àʔdìit

マッキー 飛び掛る 絞める 首 彼 力強い さすが 元

nák-beesbɔɔn saʔmǎy máttha ʔyom-plaay

野球選手 時代 高校

≪日本≫（木下半太『悪夢のエレベーター』）

≪タイ≫（Methee Thampipop：*Fan-raay nay Lift*）

上記の 115a）と 116a）は「だけに」構文であるが、114a）と同様、sǒm 形の表現構文に訳すことが可能である。特に、115a）は 114a）と同様、話し手によるプラスの評価が含まれているため、「だけに」を「だけあって」に置き換えることも可能であり、sǒm 形の表現はいずれの場合も対応しているといえる。しかし、116a）は 115a）と違って、プラスの評価が含まれていない。115a）における「話が上手だ」は話し手が感心して評価したものである。それ対して、116a）における「力は強い」は、前の文の内容も見れば、話し手が感心して述べているというわけではなく、プラスに評価したというわけではないと考える。116a）における因果関係は、「A 以外の場合に比べてそれよりも B」というニュアンスがあっても、プラス評価が含まれていないため、「だけに」が用いられている。

例文 116a）の場合ではプラスの評価はないが、タイ語訳で sǒm 形の表現を用いることが可能である。つまり、話し手による評価がない場合でも、「A に相応しく B」という意味であれば、sǒm 形の表現を用いることが可能である。しかし、このような場合でも、sǒm 形の表現は「だけに」と同じ意味を表すというわけではない。「だけあって」の場合と同様、sǒm 形の表現構文には「A から B」というニュアンスが含まれていないと考えられる。

さらにいうと、sǒm-kàp 構文または sǒm-pen 構文における前件と後件が因果関係で結ぶことが可能な場合であっても、cɯŋ 構文などの因果構文に言い換え難い場合もある。実際、114a）115a）116a）のいずれの場合も、cɯŋ 構文にすることが可能であるが、sǒm-kàp や sǒm-pen などと共起するとなると、114a）115a）116a）のような sǒm 形の表現構文のほうが自然な文であると考える。

114b）สมเป็นมหาวิทยาลัยที่มีประวัติยาวนาน มหาวิทยาลัยนี้จึงมีประเพณีที่เก่าแก่

sǒm-pen	maʔhǎa-wítthaʔyaalay	thîi	mii	praʔwàt	yaaw-naan	cɯŋ	mii
さすが	大学	COMP	ある	歴史	長い	CON	ある

pràʔpheenii	thîi	kàw-kɛ̀ɛ
伝統	COMP	古い

この大学は歴史が長いだけあって伝統がある。

115b）สมเป็นพนักงานขาย คุณฮายาชิจึงพูดเก่ง

sǒm-pen	phaʔnákŋaan-khǎay	khun-haayaashíʔ	cɯŋ	phûut	kèeŋ
さすが	セールスマン	林さん	CON	話す	上手

林さんはセールスマンだけに話が上手だ。

116b）มักกีโผเข้ามาบีบคอเขา สมกับที่เป็นอดีตนักเบสบอลสมัยมัธยมปลาย จึงแรงเยอะ

makkii	phǒo-khâw-maa	bìip	khɔɔ	khaw	sǒm-kàp-thîi-pen	àʔdìit
マッキー	飛び掛る	絞める	首	彼	さすが	元

nák-beesbɔɔn	saʔmǎy	máttha ʔyom-plaay	cɯŋ	rɛɛŋ-yɔ́ʔ
野球選手	時代	高校	CON	力強い

マッキーが、三郎に飛びかかり、首を絞めた。元高校球児だけに、力は強い。

sǒm 形の表現構文における前件と後件は因果関係で結ぶことが可能な場合があるが、必ず自然な因果関係になるとはいえない。例えば、114a）における「歴史が長い」は必ず「伝統がある」の原因・理由にあるとはいえないため、114b）のようにすると不自然な部分がある。それと同様、115a）における「セールスマンである」は必ず「話が上手」の原因・理由になるとはいえず、116a）における「元高校球児」は必ず「力は強い」の原因・理由になるとはいえない。

「だけに」における「当然性」は確かなものではないと同様、sǒm 形の表現にも確かな「当然性」がないといえる。そのため、上記の 114b）115b）116b）はいずれも 114a）115a）116a）と比べて、因果関係のニュアンスが加われているが、無理に因果関係を加わらない 114a）115a）116a）のほうが自然な文であると考えられる。

一応、114b）115b）116b）はいずれも sǒm 系の表現を取り除き、代わりに phrɔ́ʔなどの原因・理由表現を用いれば、自然な因果構文にすることが可能である。ただし、その場合、程度と評価のニュアンスがなくなり、「から」構文や「ので」構文ような因果構文になる。また、sǒm 形の表現構文を次のような構文にすることも可能である。

114c）เพราะมหาวิทยาลัยนี้มีประเพณีเก่าแก่จึงสมกับที่มีประวัติยาวนาน

phrɔ́ʔ	maʔhǎa-wítthaʔyaalay	nîi	mii	pràʔpheenii	kàw-kɛ̀ɛ	cɯŋ
CON1	大学	この	ある	伝統	古い	CON2

sǒm-kàp-thîi	mii	praʔwàt	yaaw-naan
相応しい	ある	歴史	長い

115c）เพราะคุณฮายาชิพูดเก่ง จึงสมกับที่เป็นพนักงานขาย

phrɔ́ʔ	khun-haayaashíʔ	phûut	kèeŋ	cɯŋ	sǒm-kàp-thîi-pen	phaʔnákŋaan-khǎay
CON1	林さん	話す	上手	CON2	相応しい	セールスマン

116c）เพราะแรงเยอะ จึงสมเป็นอดีตนักเบสบอลสมัยมัธยมปลาย

phrɔ́ʔ	rɛɛŋ-yɔ́ʔ	cɯŋ	sǒm-pen	àʔdìit	nák-beesbɔɔn	saʔmǎy	mátthaʔyom-plaay
CON1	力強い	CON2	相応しい	元	野球選手	時代	高校

114c）115c）116c）のように、cɯŋ が sǒm 系の表現に結合して、cɯŋ-sǒm-kàp-thîi、cɯŋ-sǒm-kàp-thîi-pen、cɯŋ-sǒm-pen の表現形式にすることが可能である。しかし、これらの表現形式は、cɯŋ と sǒm 系の表現が別々で働いている場合、または sǒm 系の表現が接続表現の場合とは、異なる意味を表している。114c）115c）116c）のような場合では、「A 以外の場合に比べてそれよりも B」というより「A だから B として相応しい」または「A だから、さすが B である」といったニュアンスのほうが近い。例えば、115c）の場合、「林さんは話が上手だからセールスマンとして相応しい」「林さんは話が上手だから、さすがセールスマンだ」といった内容になっている。114b）115b）116b）と比べて、さらに「だけに」「だけあって」の構文とは異なるニュアンスになっているといえる。

このように、sǒm 形の表現構文は、cɯŋ 構文などの因果構文に言い換えることが可能であっても、自然な文になるとは限らないうえに、「だけに」構文または「だけあって」構文に近いニュアンスを持つ構文になるとも限らない。

3.2.4.7 yîŋ と sǒm 形の表現の相違点について

yîŋ と sǒm 形の表現は両方とも程度を表す表現であるが、意味・用法ともに相違点がある。意味の相違点に関しては、sǒm 系の表現の意味が「相応しい」に近いのに対して、yîŋ のほうは「いっそう」「さらに」に近いといえる。要するに、「A＋sǒm 系＋B」は A が B に相応するものであるという意味に近いのに対して、「A＋yîŋ＋B」は A でいっそう B という意味に近い。一方、用法の相違点に関しては、単体で用いる場合と因果関係を表す表現と共起する場合に分けられる。単体で用いる場合、sǒm 形の表現のほうが接続表現としても用いられやすいが、yîŋ はそのまま接続表現として用いられることが少ない。また、sǒm 形の表現と yîŋ 間には意味の違いがあるため、互いに置き換えることができない場合も多い。例えば、例文 117）の yîŋ を sǒm 形の表現に置き換えることができない。

117）ไม่มีใครตักเตือนเขาเขา（จึง）ยิ่งได้ใจ

mây-mii	khray	tàk-tɯan khǎw	khǎw	（cɯŋ）	yîŋ	dây-cay
いない	誰	注意	彼	彼	（CON）	さらに	調子に乗る

誰も彼を注意しないから、さらに調子に乗っちゃっている。

誰も注意しないだけに、彼はさらに調子に乗っちゃっている。

例文 117）のような場合では、cɯŋ がなくても yîŋ を用いることが可能である。yîŋ は、sǒm 形の表現と同じように、接続表現のように用いるのは、このような因果構文の場合でなけらば用いられ難いと考える。言い換えれば、cɯŋ などの因果関係を表す表現が省略されている場合以外では、yîŋ を接

続表現のように用い難いと考えられる。一応、thâa～yîŋ という条件的な用法もあるが、yîŋ～yîŋ の形で用いる場合を殆ど変わらないである。

118）ถ้าไม่ติดต่อมาก็จะยิ่งคาราคาซังเนิ่นนานไปอีกครับ

thâa	mây	tìt-tɔ̀ɔ	maa	kɔ̂ʔ	càʔ	yîŋ	kaaraa-kaasaŋ	nɔ̂ən-naan
もし	NEG	連絡	来る	CON	FUT	さらに	引っ張る	長い期間

pay-ìik	khráp
さらに	MPP

連絡が来なければ、さらに長く引き伸ばします。

≪タイ≫（<http://pantip.com/topic/34127883>2015/09/02 アクセス）

上記の例文 118）の thâa～yîŋ は yîŋ～yîŋ で置き換えることが可能である。この場合も 117）と同様、yîŋ を sǒm 形の表現に置き換えることができない。yîŋ に対して、sǒm 形の表現は前件と後件が互いに「A は B として相応しい」という関係があれば、因果構文ではなくても、接続表現のように用いることが可能である。

119）ขอให้คุณตั้งใจทำงานสมกับที่ตั้งใจไว้

khɔ̌ɔ-hay	khun	tâŋ-cay	tham-ŋaan	sǒm-kàp-thîi	tâŋ-cay-wáy
お願い	あなた	頑張る	働く	相応しい	決意した

心に決めたとおりに、仕事を頑張ってください。

≪タイ≫（<http://pantip.com/topic/30270609>2015/09/02 アクセス）

例文 119）は因果構文ではないが、sǒm-kàp-thîi で前件と後件を結び付けることができる。因果構文の場合と同様、119）のような場合でも、sǒm 形の表現を yîŋ で置き換えることは不可能である。このように、yîŋ と sǒm 形の表現は同じ程度を表す表現であり、似ている意味を表す場合もあるが、意味・用法ともに相違点があり、置き換えられない場合が多く、言い換えることもできない場合も多い。

3.2.4.8　まとめ―「だけに」「だけあって」とタイ語の表現

本項目では、日本語における原因・理由表現である「だけに」と「だけあって」を一部のタイ語の表現と比較考察した。その結果として、以下の要点にまとめる。

（A）「だけに」と「だけあって」は、因果関係を表すほかに、原因・理由の程度も表わす。ただし、極度を表す「あまり（に）」とは異なり、「その原因・理由は他を比べていっそうその結果である」といった意味で表わしている。

それに対して、タイ語における tham-hây、cɯŋ、ɲɔ̂ɔy などの因果関係のほうは、程度を表す機能がないため、「だけに」と「だけあって」に対応するのに程度を表す表現と組み合わせる必要がある。組み合わせる程度を表す表現は、yîŋ と sǒm 形の表現に分けられる。

（B）タイ語における yîŋ は「いっそう」「さらに」「なおさら」といった程度が一段と加わる意味を表す表現である。それに対して、sǒm 形の表現は「さすが」や「相応しい」などの意味のほうが

強く、双方の本分や実力などが釣り合っている意味で用いられる表現である。yîŋ と sǒm 形の表現を「だけに」「だけあって」と比較し、それぞれの意味を次の表にまとめる。

表 3.1　「だけに」、「だけあって」、yîŋ、sǒm 形の表現の意味表

	因果関係を表す	程度が一段と加わる	双方の本分や実力などが釣り合っている	プラス評価	マイナス評価	無評価
だけに	○	○	○	○	○	○
だけあって	○	○	○	○	×	△*1
yîŋ	×	○	○	○	○	○
sǒm 形の表現	△*2	△*3	○	○	△*4	○*5

＊1　「だけあって」は、一般的にはプラスの評価が含まれている場合に用いられているが、「だけあって」構文における後節からプラスの評価が取りにくい場合がある。その場合では、「だけあって」構文の回りの文の内容も考慮すると、プラスの評価が取りやすくなる。

＊2　yîŋ は因果構文の接続表現として用いられず、明らかに因果関係を表さない表現である。それに対して、sǒm 形の表現は接続表現のように用いられる。その場合でも、一般的には、sǒm 形の表現は因果関係の意味を表さないと考えるが、前件と後件が因果関係で結び付けられる場合があるため、因果関係も表しているように見える場合がある。

＊3　sǒm 形の表現は、前件と後件、双方が釣り合っている場合に用いられるが、前件と後件の内容によっては程度が一段と加わる意味も含まれている。主に、「A＋sǒm 形の表現＋B」における B が「他と比べて優秀であり、さすがである」という意味が含まれている場合である。

＊4　sǒm 形の表現は「相応しい」「さすが」「釣り合う」といった意味を表すため、一般的にはマイナスの評価が含まれている場合には用いられないが、皮肉の場合には用いられる。

＊5　sǒm 形の表現は、前件と後件の双方が互いに「相応しい」という内容で用いるため、一般的には話し手のプラス評価も含まれている。とはいえ、「A に見合った B」といった単に双方が平均する意味を表す場合もあり、話し手の評価が含まれていない場合もある。

(C)「A 以外の場合に比べてより B である」という意味では、yîŋ と sǒm 形の表現は両方とも同様に表していると考えられる。yîŋ は「A は他と比べて、いっそう B である」といった意味を表し、sǒm 形の表現は「A は他と比べて、B に相応しい」といった意味を表す。要するに、両方とも「だけに」に対応している部分がある。ただし、いずれも因果関係を表す機能がないと考えられるため、「だけに」をさらに対応するためには tham-hây、cɯŋ、ləəy などの表現も必要であると考える。

(D) yîŋ は tham-hây、cɯŋ、ləəy などの表現にくっつき、yîŋ-tham-hây、cɯŋ-yîŋ、ləəy-yîŋ などの表現形式にすることが可能である。sǒm 形の表現もそれと同様、cɯŋ-sǒm-kàp、cɯŋ-sǒm-pen といった表現形式もある。しかし、yîŋ の場合と違い、これらの表現形式は「だけに」「だけあって」に対応し難いと考えられる。また、yîŋ は yîŋ～yîŋ という表現形式もあるが、「～ば～ほど」のほうに対応している。

yîŋ と sǒm 形の表現のほかにも、程度を表し、「だけに」「だけあって」に対応できると考えられる表現はあるが、いずれにしても、因果関係も程度も表わす表現はないと考えられる。いずれの場合でも、タイ語で「だけに」「だけあって」のようなニュアンスを作るためには、それらの表現と同じような程度を表す表現と因果関係を表す表現をあわせる必要があると考える。「A＋sǒm 形の表現＋B」のような「A だけに B」「A だけあって B」に近い表現があっても、それぞれのニュアンスはやはり全く同じというわけではない。より「だけに」「だけあって」に近いタイ語の表現形式を見つけるためには、それぞれの表現の意味・用法の特徴をさらに分析し、更なる検討が必要である。

3.3　本章のまとめ

本章では日本語における事態系の原因・理由表現を中心にして、タイ語の表現と比較考察した。その結果、日本語における事態系という特徴に関しては、タイ語の表現にあまり関わりがないと考える。しかし、日本語では同じ事態系の原因・理由表現であっても、意味・用法は多種多様であり、それぞれの特徴がある。それの表現のそれぞれの特徴を重視し、タイ語の表現と比較した。本章では「ため（に）」「おかげで」「せいで」「あまり（に）」「だけに」「だけあって」を比較考察の対象にした。それぞれの比較考察の結果のまとめは、それぞれの項目にまとめたが、タイ語の因果関係を表す表現だけでは対応できないという事実が目立っている。特に、「おかげで」「せいで」「だけに」「だけあって」は、タイ語の基本的な因果関係を表す表現だけでは、同じニュアンスを出すことができない場合がある。「おかげで」「せいで」はプラス性とマイナス性を表す機能があり、基本的には phrɔ́ʔ や cɯŋ だけでは同じニュアンスを出すことが出来ない。chûay や tham-hây などプラス性またはマイナス性を表す別の表現も用いる必要がある。「だけに」「だけあって」も同様、プラス・マイナスに関する特徴があり、程度が一段と加わる意味を表す機能も持っている。これらの表現に対しても、phrɔ́ʔ や cɯŋ だけでは十分に対応できない場合があり、yîŋ や sǒm などの表現も必要な場合がある。

また、「あまり（に）」は程度を表わす特徴があるが、意味的に con に近く、他の表現を用いなくても同じニュアンスを出すことが可能である。ただし、con にも「あまり（に）」が持っていない意味・用法があるため、例外的に「あまり（に）」の訳として用い難い場合があり、逆に con 構文を「あまり（に）」構文にすることが出来ない場合もある。

日本語の事態系の原因・理由表現は、これら以外にも「ばかりに」「もので」「ものだから」などがある。タイ語と比較考察する場合、事態系であること自体は比較考察する際に問題にならないと考えられるが、これらの表現特有の意味・用法がどのようなものがあるか重要であろう。タイ語のほうにはまだ因果関係を表す表現自体の特徴を考察する研究が進んでいないため、特徴がある日本語の表現と比較考察することで、さらにそれぞれの表現の特徴が見えてくる。モダリティーの関係から比較考察することも、今後に残された重要な課題であろう。

章注：

（1）　Phrayaa Upphakitsilpasan（1937）および Kamchai（2009）では、anĕekkatthà-pra'yòok と sǎŋkɔɔn-pra'yòok という名称で文を分類している。一方、田中（1998）では、それぞれを日本語の「重文」と「複文」で呼んでいる。本研究はその日本語の名称を参考にした。第 1 章 1.3 項目参考。

(2) Phrayaa Upphakitsilpasan（1937）は、タイ語の複文構造では、主節と従属節を因果関係で結び付けるものが praʔphanthá̌ʔ-wí̌ʔseet というものであると述べている。そして、冨田（1957）は、praʔphanthá̌ʔ-wí̌ʔseet を日本語で関係修飾詞と呼んでいる。故に、phrɔ́ʔの品詞は関係修飾詞であると考えられる。一方、タイ語の重文では、文と文を結び付けるものが接続詞であるため、cɯŋ、ləəy、chàʔnán の品詞は接続詞であるとも述べている。ただし、Phrayaa Upphakitsilpasan（1937）は、節と節ではなく、名詞と節を結び付ける場合、phrɔ́ʔの品詞は前置詞であるとも指定している。つまり「節＋phrɔ́ʔ＋節」の場合の phrɔ́ʔは関係代名詞であり、「節＋phrɔ́ʔ＋名詞」の場合の phrɔ́ʔは前置詞である。

(3) 前田（2009）ページ 126 参考。

(4) 前田（2009）ページ 150 参考。

(5) 例文 14a）及び 14b）では tɛ̀ɛ という逆接接続表現も用いられているが、ここでは原因・理由節の部分を中心にして考察するため、tɛ̀ɛ については言及しない。

(6) 複文は主節と従属節で構成されている文構造である。つまり、複文の中には、二つの節が含まれている。三浦（2007）と前田（2009）は、前節に起きる事態を前件と呼んでおり、後節に起きることを後件と呼んでいる。

(7) 実際、オカゲデ構文は、cɯŋ などの結果表現が使用されている構文に訳される場合が多いという傾向がある。本稿で例文の出典として使用している時雨沢恵一の『キノの旅』第 1 巻から第 6 巻まで、及び夏川草介の『神様のカルテ』の「おかげで」の例文は 35 例がある。そのうちの 15 例は、タイ語版で phrɔ́ʔが使用されている。しかし。その 15 例のうち、13 例は cɯŋ、tham-háy、chûay-hây、ləəy などと一緒に使用されており、結果構文に訳されている。一方、これらの例文出典の中で、セイデ構文のタイ語訳の例文は少ないが、phrɔ́ʔ構文に訳された例文は一例もない。

(8) タイ語における ləəy は、con と cɯŋ と同様、「原因＋ləəy＋結果」という形で用いられている結果を表す表現である。con と cɯŋ との相違点としては、ləəy の方は口語的な表現であるといえる。

(9) 前田（2009）ページ 151 参考。

(10) 益岡（2013b）ページ 185 参考。

(11) 前田（2009）ページ 154-155 参考。

(12) 田中（2010）は、「だけに」の後件に「かえって」が使用できない場合は、「だけあって」のプラス評価に傾くことになると述べている。田中（2010）ページ 154 参考。

(13) 例文 104）における phrɔ́ʔ～phɔɔ～kɔ̂ʔ構文は、「こんなに暑いから、ちょっと歩くと大汗をかく」という意味でも解釈できる。

(14) 例文 108）における dan という表現は 4 つほどの意味・用法を持っているが、この場合であは「するべきではないことをしてしまう」という意味で用いられている。

(15) yîŋ と tham-hây の組み合わせは、yîŋ-tham-hây のほかに tham-hây-yîŋ という並び順でも用いることが可能である。しかし、cɯŋ-yîŋ および ləəy-yîŋ は yîŋ-cɯŋ か yîŋ-ləəy のような並び順にすることができない。

(16) yîŋ-tham-hây は語順の関係で、cɯŋ-yîŋ、ləəy-yîŋ と比べて、yîŋ～yîŋ で置き換えることが難しい場合があると考えられる。しかし、tham-hây-yîŋ なら cɯŋ-yîŋ、ləəy-yîŋ と同様に置き換えることが可能であると考えられる。

第 4 章

判断系の原因・理由表現の日タイ対象研究

4.1　判断系の原因・理由表現とタイ語の表現

本章では日本語における判断系の原因・理由表現を中心にして、タイ語における原因・理由表現と比較考察する。判断系の原因・理由表現は、比較的に事態系の原因・理由表現より数は少ないが、特徴的な意味・用法を持つものが多くあり、「のだから」「からには」「以上」「からこそ」などが取りあげられる。

4.1.1　「のだから」の考察

本項目では、「のだから」の意味・用法を中心にして考察し、タイ語における表現と比較する。「のだから」は、文末表現「のだ」と原因・理由表現「から」から構成されている表現であるが、「のだから」の意味・用法は通常の原因・理由を表す「から」や「ので」とは異なっている。

「のだから」は、判断系の原因・理由表現の中でも代表的なものである。つまり、原因・理由を表すほかに、判断・根拠も表す表現である。タイ語では、このタイプの原因・理由表現に類似している表現は分類されていないため、一般的にはどのような表現に近いかは不明である。タイ語における因果関係を表す表現の中には、「のだから」に近い働きをするものもあるかどうかを検討してみる。

「のだから」について述べている研究はいくつかある。その中から、田野村忠温（1990）、野田春美（1995）、岩崎卓（1996）、前田直子（2009）、益岡隆志・田窪行則（2013）などが取り上げられる。「のだから」の意味・用法に関する研究のほかに、鈴木庸子（2008）など、中国人の学習者における「のだから」の誤用に関する研究もある。しかし、タイ語との対照研究に関しては、管見の限りまだ見当たらない。そのため、日本語おける研究とタイにおける研究を基に考察する必要がある。

4.1.1.1　「のだから」の意味・用法

「のだから」は、「から」や「ので」と同様、原因・理由を表す表現であるが、事態の原因・理由を表す場合には使用されていない [(1)] 。話し手による判断または態度の根拠を表す場合に使用する原因・理由表現であり、即ち典型的な判断系の原因・理由表現の一つである。

前田（2009）は、「のだから」の特徴は三つにまとめられると述べている。それは、「後節には話し手の発話時における判断を含む形式に限定される」「前節は聞き手が既に知っている事柄であることが多い」「話し手は聞き手が前節のことを当然知っているべきであると強調している場合もある」である。

まず、「後節には話し手の発話時における判断を含む形式に限定される」に関しては、典型的な判断系の原因・理由表現が共通している特徴であるといえる。要するに、後節には話し手による判断・命令・依頼・意志などの表現があり、ただ出来事の生起を表す文ではないということである。例を挙

げるならば、「～でしょう」「～だろう」「～なさい」などの表現である。これらの表現は、「のだから」の後節でよく見られる。

1)　私でもできたのだから、あなたにできないはずがない。
（グループ・ジャマシイ『教師と学習者のための日本語文型辞典』）

2)　冬の山は危険なのだから、くれぐれも慎重に行動してくださいね。
（グループ・ジャマシイ『教師と学習者のための日本語文型辞典』）

3)　しかし今のところあなたを通してよりほかに、ありのままの兄さんを、兄さんの家庭に知らせる手段はないのだから、あなたも少し真面目まじめになって、聞き慣れない字面じづらに眼を御注おそそぎなさい。
（夏目漱石『夏目漱石全集 7』）

4)　下宿屋ならば、一人より二人が便利だし、二人より三人が得になるけれども、商売でないのだから、なるべくなら止よした方が好いいというのです。
（夏目漱石『こころ』）

5)　源五郎は六尺近い大男である。それが薄暮のなか、山伏姿で金剛杖を手にいきなりあらわれたのだから、侍はさぞびっくりしただろう
（岩井三四二『竹千代を盗め』）

6)　国民の重要な情報を守るためなのだから、徹底して守ってほしいが、それだけの予算を確保できるかどうかが大きな課題だ。
（<http://www.yomiuri.co.jp/>2015/06/06 アクセス）

ところが、岩崎卓（1996）及び前田（2009）によれば、これらの表現がない場合でも、「ものだ」「のは当然だ」など話し手による判断を述べる文に近い意図と持つこともあるとも述べている。

7)　私はもう卒業したのだから、必ず九月に出て来る必要もなかった。
（夏目漱石『こころ』）

8)　二百人で、守りのうすい搦め手から攻め込んだのだから、与七郎より先に本丸に到達していてもいいはずだ。
（岩井三四二『竹千代を盗め』）

9)　もう七十歳なのだから、そんなことがあってもふしぎではない。
（赤川次郎『茜色のプロムナード』）

さらに、前田（2009）は、「のだから」の後節には評価的な感情表現も用いられることもあると述べている。また、その場合の感情表現はマイナスな表現の場合が多く、プラスな場合であっても意外性を表す場合が多いとも述べている。

10）　「何心配するほどの事じゃなくってよ」とか答えてただ微笑するのが常であった。それをまるで逆さかさまにして、自分の最も心苦しく思っている問題の真相を、向うから積極的にこちらへ吐きかけたのだから、卑怯ひきょうな自分は不意に硫酸を浴あびせられたようにひりひりとした。

（夏目漱石『夏目漱石全集 7』）

11）　人に手紙を出すのも、旅行するのも、聖書を読むのも、女と遊ぶのも、井原と冗談を言い合うのも、みんな君の仕事に直接、役立つようにじたばた工夫しているのだから、かなわない。

（太宰治『太宰治全集 4』）

12）　そんなことしながら仕事のペースを落とさなかったというのだから、ある意味恐ろしいが。

（そえだ信『ねずみと巨獣』）

このように、「のだから」の後節は、事態系の原因・理由表現の場合と違って、単なる結果を表すものではない。話し手の判断や感情が大きく関わってくる表現である。

次は、「前節は聞き手が既に知っている事柄であることが多い」という特徴である。必ずというわけではないが、「のだから」の原因・理由文では、前節の内容は既に聞き手が知っている情報である場合、または話し手が聞き手も前節のことを知っていると見なしている場合がよく見られる。

13）　まだ子供なのだから、分からなくても仕方がないでしょう。

（グループ・ジャマシイ『教師と学習者のための日本語文型辞典』）

14）　機構職員の個人アドレスにメールが届いているのだから、最初の感染でメールのやり取りなどが流出したことを疑わなければならない。しかしここでも静観し、ネットを遮断しなかった。

（<http://www.yomiuri.co.jp/>2015/06/06 アクセス）

15）　不審な通信を再び検知したのに、ここでもネットを遮断しなかった。2 回目の不審な通信なのだから、この時点で多数のパソコンがやられていることを想定し、機構全体のインターネット接続を遮断するべきだった。

（<http://www.yomiuri.co.jp/>2015/06/06 アクセス）

さらに、この二つ目の特徴は三つ目の特徴「話し手は聞き手が前節のことを当然知っているべきであると強調している場合もある」にも繋がる。つまり、「のだから」の原因・理由文では前節が相手の知っている内容になっている場合が多いが、そうでない場合でも、前節の内容は相手が知っているべきであるという話し手による強調が見られる場合がある。

上記の例文 13）では、「まだ子供」ということは聞き手も知っている情報であると解釈できる。しかし、たとえ聞き手が対象の人物が「まだ子供」であると思わない、または知らない場合であっても、この例文 13）の話し手は対象の人物が「まだ子供」であることを聞き手に押し付けているという解釈もできる。つまり、「まだ子供だということは言うまでもなくても、貴方も分かるでしょう」という内容も隠されていると考えられる。

例文 14）と 15）でも、前節の情報は相手も既に知っているものである。さらに、この二つの例文の後節では、責任や後悔といったマイナスな感情も感じられる。14）の「のだから」は、前節という事実は聞き手も当然知っていると表している上に、後節の内容も当然のことであるという話し手の強調も表していると考えられる。つまり、この場合では、「機構職員の個人アドレスにメールが届いている」という内容が当然聞き手も知っているし、「最初の感染でメールのやり取りなどが流出したことを疑わなければならない」ということも当然であると話し手は思っていると考えられる。

一方、15）では「（これが）2 回目の不審な通信である」という事実は相手も知っているはずと話し手は思っているし、「この時点で多数のパソコンがやられていることを想定し、機構全体のインターネット接続を遮断するべき」ということも当然なことであると思っていると考えられる。この「知っているであろう」と「当然である」という話し手の強調を表している「のだから」の特徴があるため、14）と 15）のように若干聞き手を責めているニュアンスもある場合があると考えられる。

「のだから」という表現は、「から」と「ので」に置き換えることが可能であると考えられる。原因・理由表現である「から」と「ので」は、事態系でもあり判断系でもあるため、その一部の機能で判断系である「のだから」に置き換える場合があると考えられる。しかし、「から」と「ので」にもそれぞれの特徴があり、自然に置き換えられない場合も当然ある。さらに言うと、「のだから」の原因・理由文における「から」と「ので」の交換性は両方とも同じではなく、片方が片方より自然に「のだから」と交換することができる場合もあると考えられる。特に、「ので」は「から」と比べて、判断系で使われにくいため、「から」のほうは「のだから」と交換しやすいと考えられる [(2)]。

また、「のだから」と交換することができるとはいえ、ニュアンスが全く変わらないともいえない。前田（2009）によれば、「から」を使用する場合、前件が後件の理由であるというニュアンスが強くなる場合があると述べている。そのため、「のだから」と交換することができる場合も、「から」のほうが原因・理由を示すニュアンスが強いと考えられる。さらに、「から」も「ので」も、「のだから」に置き換えることが可能な場合でも、その「から」の場合と「ので」の場合のニュアンスは、必ず同じだとは限らない。

16a）まだ子供だから、分からなくても仕方がないでしょう。
16b）まだ子供なので、分からなくても仕方がないでしょう。

例文 16a）と 16b）は 13）の「のだから」を「から」と「ので」で置き換えた例文である。この場合の「から」と「ので」は両方とも判断系で使用できるため、「のだから」と置き換えることができるが、それぞれのニュアンスは異なっている点がある。まず、話し手はどの部分にスコープしているかに関する相違点がある。「から」のほうは、前節が原因・理由であることを強く強調していると考えられ、前節の部分ににスコープしていると考えられる。つまり、16a）の「まだ子供だ」の部分である。一方、「ので」のほうは、特にスコープしている部分はなく、話し手は全体的な内容を述べているだけであると考えられる。次は、内容のスコープにも関係するが、主観的か客観的かに関する違いもある。これについては、永野（1952）は、判断系の「から」は主観的で、「ので」は客観的で話

し手が述べていると述べている。よって、16a）の場合では話し手の主観で因果関係を述べているが、16b）の場合では話し手は文全体の因果関係を一つの事態として客観的に述べているといえる。

「のだから」もいわば「から」から成った表現であるため、判断系の「から」の特徴である主観性も持っていると考えられる。典型的な判断系の原因・理由表現であるため、話し手の思考が関わっている場合が多い。その故、因果関係を主観的に述べている場合も多いと考えられる。

また、当然ではあるが、「のだから」は判断系の原因・理由でしか使われていないため、事態系にも使用できる「から」の原因・理由文で「から」と交換することができない場合がある。要するに、「のだから」を「から」で置き換えることが可能な場合があるとはいえ、「から」を「のだから」で置き換えることができない場合もあると考えられる。前田（2009）は、「から」「ので」との違いに関して、「のだから」の用法を3点にまとめている[(3)]。その中で、「原因を尋ねる疑問文の答えとなる場合には用いられない」という「のだから」の用法の制限がある。それに対して、「から」は原因を尋ねる疑問文の答えとして使用できるため、その場合の「から」は「のだから」で置き換えることができない。さらに、「から」「ので」の使い分けに関しては、使い分けを決め付けにくい点がある。前田（2009）によれば、必ず「から」または「ので」しか使われないということは決め付けることが難しく、許容には地域差と個人差も大きいと述べている。

4.1.1.2 「のだから」とタイ語の比較

日本語では事態系と判断系の原因・理由表現はあるが、タイ語ではそのような分類はないと考える。さらにいうと、タイ語における原因・理由表現は、日本語でいう判断系のような用法があるかどうかに関してもまだ不明な点がある。よって、日本語の典型的な判断系の原因・理由表現である「のだから」を対象として、タイ語の代表的な原因・理由表現の用法と比較することを試みる。

タイ語における因果関係を表す表現は、「原因・理由を表す」と「結果を表す」の2種類に大きく分けられると考えるが、いずれも日本語における原因・理由表現に対応していると考えられる。「原因・理由を表す」の代表的な表現はphrɔ́ʔであり、「結果を表す」のほうはcɯŋである。第1章の1.3項目ではすでに述べたが、ここでは「のだから」と比較する前に改めてphrɔ́ʔとcɯŋの用例を挙げてみる。

17） เขาไม่ไป<u>เพราะ</u>จะต้องรอรับแขก

khǎw	mây-pay	<u>phrɔ́ʔ</u>	càʔ	thɔ̂ɔŋ	rɔɔ-ráp	khɛ̀ɛk
彼	行かない	<u>CON</u>	FUT	義務	迎える	客

お客を迎えないといけない<u>から</u>、彼は行かない。

≪タイ≫（Tianchai Iamworamate：*Pojjanarnugrom Thai Chabap nakrian*）

18） ถนนบนเขาเส้นนี้อันตราย <u>จึง</u>ห้ามใช้สัญจรไปมา

thàʔnǒn	bon	khǎw	sêen	níi	antàʔraay	<u>cɯŋ</u>	hâam	cháy	sàn-cɔɔn-pay-maa
道	上	山	道	この	危ない	<u>CON</u>	禁止	使う	行き来する

この山道は危ない<u>から</u>、通行止めになっている。

≪日タイ≫（Somkiat Chawengkijwanich：*20 Huakhoo-det Phichit Waiyakorn-Yiipun Chan-klang*）

上記の例文から phrɔ́ʔ と cɯŋ の違いを説明すると、phrɔ́ʔのほうは原因・理由を表すため、phrɔ́ʔの後は原因・理由が続いているのに対して、cɯŋ のほうは結果を表すため、cɯŋ の後は結果が続いている。要するに、17）のタイ語文は「結果＋phrɔ́ʔ＋原因・理由」という構造になっているのに対して、18）のタイ語文は「原因・理由＋cɯŋ＋結果」という構造になっている。ところが、両方とも日本語に訳す場合、「から」の原因・理由文に訳すことができる。これは、phrɔ́ʔと cɯŋ の間には意味的な相違点があり、用いる文構造における相違点もあるが、実際では phrɔ́ʔ構文と cɯŋ 構文の文全体の意味は殆ど同じであり。互いに交換できる場合も多く、前節と後節を置き換えれば、phrɔ́ʔと cɯŋ を交換することが可能である。（第 3 章 3.1.1 項目参考）実際、例文 17）と 18）もそうである。このように、phrɔ́ʔと cɯŋ は一般的な原因・理由を表す「から」に対応していることが見られる。

一方、判断系の内容を持つ原因・理由文でも、次の例文 19）のように、phrɔ́ʔが「から」に対応している場合がみられる。

19） ขอขึ้นเงินเดือน <u>เพราะ</u>ผมไม่พอกินครับ

khɔ̌ɔ	khûun	ŋəən-dɯan	<u>phrɔ́ʔ</u>	phǒm	mây-phɔɔ	kin	khráp
お願い	上げる	月給	<u>CON</u>	僕	足りない	食べる	MPP

食べるのに足りません<u>から</u>月給を上げてください。

≪日タイ≫（Preeya Ingkaphirom：*Waiyakorn Phaasaa Yii-pun*）

例文 19）のように、日本語文における後節では「～てください」という命令・依頼を表す表現があり、この例文の「から」は判断系である。この「～てください」は、19）のタイ語文の khɔ̌ɔ に当てはまる。タイ語における原因・理由文には、まだ事態系と判断系という概念はないが、19）の文の内容と原因・理由表現 phrɔ́ʔの意味・用法から見れば、この phrɔ́ʔは判断系の「から」と同じような働きをしているを言える。「khɔ̌ɔ khûun ŋəən-dɯan」という前節は、話し手の希望であり、結果でもある。そして、その「phǒm mây-phɔɔ kin khráp」という後節は、話し手の判断の根拠であり、後節の原因である。

言語の特徴によって、タイ語文と日本語文の節の順番は異なっているが、意味的に考えれば、19）のようなタイ語の phrɔ́ʔ構文は、日本語における判断系の「から」の原因・理由文と変わらないといえる。因みに、phrɔ́ʔ構文は、前節と後節を置き換えることで、cɯŋ 構文にすることができる。19）の場合でもそれは可能であるが、khɔ̌ɔ という依頼の表現を yàak-khɔ̌ɔ というさらに丁寧な表現にする必要がある[(4)]。

20） ผมไม่พอกินครับ <u>จึง</u>อยากขอขึ้นเงินเดือน

phǒm	mây	phɔɔ	kin	khráp	<u>cɯŋ</u>	yàak-khɔ̌ɔ	khûun	ŋəən-dɯan
僕	NEG	足りる	食べる	MPP	<u>CON</u>	～にもらいたい	上げる	月給

食べるのに足りません<u>から</u>月給を上げてください。

節の順は異なるが、19）と 20）の間には、殆ど意味的な違いはないと考えられる。とはいえ、ニュアンスに違いはないともいえない。これは phrɔ́ʔ と cɯŋ の特徴に関係している問題である [5]。このように、判断系の「から」は、タイ語の原因・理由に対応している点がある。次は、「のだから」の用例も挙げてみる。

21） お前はもともとこやつを刺そうとしたのではないのだから、これは事故だ。
นายไม่ได้ตั้งใจจะแทงเขาอยู่แล้ว ดังนั้นถือว่าเป็นอุบัติเหตุ

naay	mây-dây	tâŋ-cay	càʔ	thɛɛŋ	khǎw	yùu-lɛ́ɛw	daŋ-nán	thùɯ-wâa
お前	NEG	つもり	FUT	刺す	彼	もともと	CON	～と思う
pen	uʔbàttiʔhèet							
COPU	事故							

≪日本≫（時雨沢恵一『キノの旅』）
≪タイ≫（Chaninan Gittipatimarkun：*KINO NO TABI*）

例文 21）の訳文であるタイ語文は、phrɔ́ʔ と cɯŋ ではなく、daŋ-nán という表現が使われている。この daŋ-nán という表現は cɯŋ と同じく、結果を表す表現である。意味と用法は、両方ともほぼ同じであり、置き換えることが可能な場合が多くあり、または一緒に使われている場合も多い。実際、例文 21）も daŋ-nán の代わりに cɯŋ を使用することが可能であり、daŋ-nán-cɯŋ という複合語の形で使用することも可能である。その場合でも、文の内容に影響はない。ニュアンスが変わらないとは言い切れないが、daŋ-nán-cɯŋ のほうが最もが解説的なニュアンスになるといえる。とはいえ、因果関係を表す意味と用法に関しては、daŋ-nán でも cɯŋ でも変わらないといえる。

例文 21）の「のだから」は、前節が話し手の後節という結論を出す理由であることを表している。意味的にに考えれば、この例文の daŋ-nán のほうも同じような働きをしているといえる。ただし、タイ語文の後節には、話し手の結論であることを表す表現も出ている。thùɯ-wâa という表現は日本語で言うならば、意味的に「という訳で」に近いといえる。この表現があるため、21）のタイ語文は日本語と同じく、判断系の原因・理由文であることが理解しやすい。

また、次のような例文もある。

22） 私だってろくに部屋には帰ってこない生活をしているのだから、得体が知れない点ではお互い様かもしれない。
ผมเองก็ใช้ชีวิตแบบไม่เอื้อให้ได้กลับห้องบ่อยนัก ดังนั้นการที่ผมมิอาจชี้ชัด คงเป็นความผิดของทั้งสองฝ่ายกระมัง

phǒm	eeŋ-kɔ̂ʔ	cháy-chiivít		bèɛp	mây	ûa-hây-dây	klàp	hɔ̂ɔŋ	bɔ̀ɔy
私	だって	生活する		ような	NEG	できるように	帰る	部屋	頻繁に
nak		daŋ-nán	kaan-thîi	phǒm	míʔ-àakt	chíi-chát	khoŋ	pen	khwaam-phìt
ちょっと		CON	こと	私	NEG	特定する	多分	COPU	悪い

khɔ̀ɔŋ	tháŋ-sɔ̌ɔŋ-fàay	kraʔmaŋ
の	お互い	だろう

≪日本≫（夏川草介『神様のカルテ』）

≪タイ≫（Pornchai Wittayaleetpan：*Ichito khun-moo huajai theewadaa*）

例文 22）も、タイ語文では daŋ-nán が使われている。例文 22）の日本文の後節では、「かもしれない」という話し手の判断を表す表現が使われている。一方、タイ語文のほうでは、khoŋ と kraʔmaŋ という表現が使われている。この二つの表現は 22）のように一緒に使うことができるが、別々で使用することもできる。いずれの場合でも、khoŋ と kraʔmaŋ は、日本語の「かもしれない」と類似している意味を持つ表現である。つまり、この二つの表現はタイ語における話し手の判断を表わす表現であり、22）のタイ語文も日本語でいう判断系の原因・理由文であるが分かる。

このように、「のだから」はタイ語の daŋ-nán に対応している用例が見られるが、cɯŋ に対応している用例もある。

23） 本名はその時聞いたはずだが、五年間男爵で通していたのだから、今さら覚えているはずもない。

ชื่อจริงของแก ผมมั่นใจว่าได้รู้ตั้งแต่ครั้งนั้น แต่เพราะเรียกว่าท่านบารอนมาตลอดห้าปี ตอนนี้จึงมิอาจจำได้แล้ว

chûɯ-cɨŋ	khɔ̌ɔŋ	kɛɛ	phŏm	mân-cay-wâa	dây	rúu	tâŋ-tɛ̀ɛ	khráŋ-nán
本名	の	彼	私	はず	得た	知る	から	あの時

tɛ̀ɛ	phrɔ́ʔ	rîak	wâa	thâan	baa-ron	maa-tàʔlɔ̀ɔt	hâa-pii	tɔɔn-níi	cɯŋ
逆接	CON1	呼ぶ	COMP	貴方	男爵	ずっと	五年	今	CON2

míʔ-àat	cam-dâay	lɛ́ɛw
はずがない	覚える	PST

≪日本≫（夏川草介『神様のカルテ』）

≪タイ≫（Pornchai Wittayaleetpan：*Ichito khun-moo huajai theewadaa*）

例文 23）では、phrɔ́ʔ と cɯŋ が両方とも使われているが、原因・理由と結果を接続しているのは cɯŋ のほうである[6]。例文 23）では、「rîak-wâa thâan baa-ron maa-tàʔlɔ̀ɔt hâa pii」という前の文があり、この文は原因理由であることを表しすために、この文の直前で phrɔ́ʔ が置かれている。しかし、この phrɔ́ʔ は接続役ではない。後の文は「míʔàat cam-dâay lɛ́ɛw」であり、この文が前の文の結果であること、そして二つの文は因果関係で結ばれていることを表すために、この二つの文の間に cɯŋ が使用されている。

例文 23）の cɯŋ は、21）と 22）の daŋ-nán と同様、日本語のける「のだから」に対応している。ところが、23）の cɯŋ を daŋ-nán で置き換えることができない。その理由は、cɯŋ と daŋ-nán の間には、位置の違いがあるからである。cɯŋ は文の間に位置する表現であり、主語または「今」や「現在」などの時制が文頭にある場合、cɯŋ はそれらの単語の後に位置する。それに対して、daŋ-nán は必ず文の

前に置く表現である。その文に主語などがある場合、それらも必ず daŋ-nán の後に位置する。23）のタイ語文では、tɔɔn-níi という時制があり、その後に cɯŋ が使用されているため、その cɯŋ をそのまま daŋ-nán で置き換えることができない。また、「時制＋cɯŋ」もかなり典型的な cɯŋ の形式の一つである。そのため、23）の cɯŋ を取り除き、時制 tɔɔn-níi の直前に daŋ-nán を使用する場合、不自然な文構造になる。

例文 21）と 22）とは異なっているが、例文 23）のタイ語における結果文の中にも話し手の判断を表わす表現があると考えられる。それは、mí˘と àat を併せて、mí˘-àat という表現である。この mí˘という表現は mây と同様、否定の表現である。一方、àat という表現は可能性を表す表現ある、しかし、可能性があるということだけを表す表現であり、話し手の確信は表さないため、日本語の「はず」より「かもしれない」のほうに近いといえる。

ところが、mí˘と併せて、複合語になった mí˘-àat は、「その可能性はない」「ありえない」または「できない」という意味を表す表現になり、一部の用法では「はずがない」に近い表現になっている。よって、23）の場合にも、日本語文と同様、タイ語文にも判断系の表現があるといえる。

24） せっかく三人揃ってゆっくり話のできる時間なのだから、邪魔しない方がいい。

เพราะนี่เป็นโอกาสดีสำหรับเธอ คุณพ่อและคุณแม่ที่จะได้อยู่พร้อมหน้าพร้อมตากันสามคน พ่อแม่ลูกได้พูดจาปรับความเข้าใจกัน ดังนั้นจึงไม่สมควรจะไปรบกวน

phrɔ́˘	nîi	pen	oo-kàat	dii	sǎmràp	thəə	khun-phɔ̂ɔ	lɛ́˘
CON1	これ	COMP	機会	いい	にとって	彼女	お父さん	と

khun-mɛ̂ɛ	thîi	cà˘	day	yùu	phrɔ́ɔm-nâa-phrɔ́ɔm-taa-kan
お母さん	COMP	FUT	できる	いる	全員揃って

sǎam-khon	phɔ̂ɔ-mɛ̂ɛ-lûuk	dây	phûɯt-caa	pràp-khwaam-khâw-cay-kan
三人	親子	できる	喋る	分かり合う

daŋ-nán-cɯŋ	mây	sǒmkhuan	cà˘	pay	rópkuan
CON2	NEG	するべき	FUT	行く	邪魔をする

≪日本≫（阿川佐和子『ウメ子』）

≪タイ≫（Suwannaa Arai : *Dek-ying Umeko*）

例文 24）のように、daŋ-nán と cɯŋ を併せて、daŋ-nán-cɯŋ が使用されていることもある。そして、この daŋ-nán-cɯŋ も日本語の「のだから」に対応している。この例文の場合では、daŋ-nán-cɯŋ の代わりに、daŋ-nán か cɯŋ だけを使用することも可能である。例文 23）と違い、結果文の中に主語や時制などがないため、そのまま daŋ-nán と cɯŋ の交換も可能である。この例文では、文頭に phrɔ́˘という表現も使用されていて、その後の部分が原因・理由であることを表し、daŋ-nán-cɯŋ の機能を補足している。しかし、この phrɔ́˘は接続役ではないため、省略しても文全体に影響はない。

また、この例文のタイ語文における判断系の表現は、mây-sǒmkhuan であると考えられる。この表現は sǒmkhuan の否定形で、「相応しくない」という意味があるが、「～しないほうがいい」「～べき

ではない」という意味もある。よって、これはこの例文において話し手の判断を表わす表現である。そして、判断系の因果関係を表す「のだから」に対応して、daŋ-nán-cɯŋ が使用されている。

例文 21）から 24）までのように、「のだから」は daŋ-nán と cɯŋ に対応している場合がよく見られるが、他の表現に訳された場合も見られる。例えば、次の例文 25）である。

25） いつも身が、ちゃんちゃんと決っているのだから、気持の上から楽なことだろうと思う。

ยศถาบรรดาศักดิ์ก็แน่นอนตามลำดับขั้น เพราะงั้นคงสบายนับตั้งแต่ด้านอารมณ์ความรู้สึกลงมา

yótthăa-bandaa-sàk		kɔ̂ʔ	nɛ̂ɛnɔ̀ɔn	taam-lamdàp-khân	phrɔ́ʔ-ŋán	khoŋ
階級		も	ちゃんと	順調に	CON	多分
sàʔbaay	náp-tâŋ-tɛ̀ɛ	dâan	aarom-khwaam-rûu-sùuk	loŋ-maa		
楽	から	方面	気持	まで		

≪日本≫（太宰治『女生徒』）

≪タイ≫（Monthar Pimthong：*Ruang-san Yiipun 5*）

例文 25）のタイ語文では、因果関係を表す接続詞が phrɔ́ʔ-ŋán という表現が使われている。この表現は phrɔ́ʔが含まれているが、意味と用法は daŋ-nán と cɯŋ と同様であり、結果を表す表現である。さらに、これと類似している表現が phrɔ́ʔ-chàʔnan という表現があるが、phrɔ́ʔ-ŋán のほうは口語的な表現である。また、phrɔ́ʔ-chàʔnan という表現は、phrɔ́ʔと chàʔnan で構成されている複合語の表現であり、chàʔnan は結果を表す表現である。そのため、phrɔ́ʔがなくても、chàʔnan のみで phrɔ́ʔ-chàʔnan と同じように使用できる。それに対して、phrɔ́ʔ-ŋán を ŋán のみにして結果を表す表現として使用することはできない。当然ながら、phrɔ́ʔは原因・理由を表す表現であるため、25）のような場合では ŋán を省略して、phrɔ́ʔのみを使用することもできない。

例文 25）では、phrɔ́ʔ-ŋán という表現を daŋ-nán で置き換えることも可能である。phrɔ́ʔ-ŋán は daŋ-nán と同様、「のだから」に対応しているといえる。また、例文 25）のタイ語文における結果文の中に話し手の判断を表わす表現もある。日本語文のほうでは「～だろう」と「～と思う」が使用されているのに対して、タイ語文では khoŋ という表現が使用されている。この表現は「多分」や「～だろう」などの意味を表し、話し手の推量または推測を表す表現である。よって、例文 25）のタイ語文も日本語と同様、話し手の判断の根拠を表す原因・理由構文となっている。

ところが、25）のタイ語文では phrɔ́ʔ-ŋán と daŋ-nán を互いに置き換えることが可能であるが、それらと比べて cɯŋ で置き換えることは難しいと考えられる。phrɔ́ʔ-ŋán は daŋ-nán と同様、必ず結果文の文頭に位置する表現である。それと比べて、cɯŋ は結果文の文頭に位置することも可能な表現であるが、その文頭の単語または表現によって、cɯŋ を文頭に置くことができない場合がある。例えば主語または時制が文頭にある場合がそれに該当する。例文 25）の場合では、khoŋ という文頭における推測を表す表現があり、cɯŋ はこの表現と並ぶことがあまり見られない。同じ文頭における表現がある場合、cɯŋ を使用することが難しくなる可能性があると考えられる。

実際、次の例文26）のように、例文25）の結果文でkhoŋの代わりに、同じ推測を表すが、文末におけるleey-krǎʔmaŋという表現を使用すると、phrɔ́ʔ-ŋánの代わりにcɯŋを自然に使用できると考えられる。

26） ยศถาบรรดาศักดิ์ก็แน่นอนตามลำดับขั้น จึงสบายนับตั้งแต่ด้านอารมณ์ความรู้สึกลงมาเลยกระมัง

yótthǎa-bandaa-sàk		kɔ̂ʔ	nɛ̂ɛnɔɔn	taam-lamdàp-khân	cɯŋ
階級		も	ちゃんと	順調に	CON
sàʔbaay	náp-tâŋ-tɛ̀ɛ	dâan	aarom-khwaam-rûu-sùk	loŋ-maa	leey-krǎʔmaŋ
楽	から	方面	気持	まで	だろう

このように、結果文の文頭に現れている単語または表現によって、cɯŋよりもphrɔ́ʔ-ŋánとdaŋ-nánのほうが使用しやすい場合がある。故に、cɯŋと比べて、daŋ-nánのほうがphrɔ́ʔ-ŋánとの交換性が高いと考えられる。

4.1.1.3 まとめ―「のだから」とタイ語の表現

以上により、タイ語にも、話し手の判断を表す表現があり、判断系の原因・理由文があるという概念はタイ語でも適用することが可能であると考えられる。ところが、日本語では、判断系の内容を持つ原因・理由文には、判断系の原因・理由表現があるのに対して、タイ語では判断系の原因・理由表現そのものがあるとは言いがたい。判断系の典型的な表現である「のだから」と違い、daŋ-nánとcɯŋ、そしてphrɔ́ʔも判断系の用法だけで使用されている表現ではない。いわば、日本語では「のだから」のような判断系の用法に限定されている表現があるが、タイ語では「から」と「ので」のような用法の幅が広いタイプの表現のほうが一般的であるといえる。

本項目ではkhɔ̌ɔやyàak-khɔ̌ɔなどの依頼・命令の表現の他にthùɯɯ-wâa、sǒmkhuan、mây-sǒmkhuan、khoŋ、krǎʔmaŋ、leey-krǎʔmaŋなどの話し手の判断を表わす表現が見られる。これらの表現は、タイ語における判断形の因果構文の目印になれると考えられる。しかし、これら以外にもまだ判断系の表現が多数あると考えられ、さらに検討する必要がある。また、判断系の因果構文の専用的な因果関係を表す表現がまだ見つからないが、phrɔ́ʔ、daŋ-nán、cɯŋ、phrɔ́ʔ-ŋán、そしてphrɔ́ʔ-chǎʔnanの中で、daŋ-nánが「のだから」構文の対訳で最もよく見られると考えられる。しかし、これらの表現の中で最も判断形の因果構文で使用しやすいのはどの表現かを明確にできたというわけではない。これらの表現のそれぞれの特徴を比較考察をし、さらに検討する必要がある。

4.1.2 「からこそ」の考察

本項目では、「からこそ」の意味・用法について考察し、タイ語の表現と比較考察する。前田（2009）では、「からこそ」は、「のだから」と同様、判断系の原因・理由表現として分類されていると述べている。同じ判断系の「のだから」と同様、「からこそ」も原因・理由を表すことから「から」で置き換えることが可能な場合があるが、できない場合もある。「からこそ」は原因・理由を表す表現であっても、「から」とは異なっている意味・用法があると思われる。

「からこそ」に関する研究の数は多いとはいえないが、沼田（1986）、寺村（1991）、山下・山内・島多（1993）、前田（2009）などがある。沼田（1986）と山下・山内・島多（1993）では、「こそ」の補足として「からこそ」についても触れているが、前田（2009）は「からこそ」の意味・用法について考察をしている。また、概略ながら、タイでは、冨田竹次郎の研究を基にして書いた Preeya（2008）も、「からこそ」について触れている。

4.1.2.1 「からこそ」の意味・用法

「からこそ」はその形式の通り、「から」と「こそ」から構成された表現である。原因・理由を表す「から」の意味・用法と、ほかではなくこれであると強調する「こそ」の意味・用法と、二つを合わせた意味・用法を持っている表現であると言える。

グループ・ジャマシイ（1998）では、原因・理由を取り立てて特に強調する表現であると述べている。

27） 仲間を信じてクロスを上げた川澄と、いいボールが来ると信じて走り込んだ２トップ。記録上はあくまでオウンゴールだが、３人がイメージを共有しながらゴールに迫り、チャンスの形を作ったからこそ生まれた決勝点だった。

（<http://www.yomiuri.co.jp/>2015/07/03 アクセス）

28） 世界が注目する和食を「定食」という形でご提供する大戸屋だからこそ、こうした和食の基本ともいうべき手間を省けることなく、原点に戻る気持ちで料理をこしらえてまいります。

（大戸屋のチラシ『テイスト・アイ Vol.28』）

また、グループ・ジャマシイ（1998）では、「からこそ」が「のだ」と共起する場合も多いとも述べている。次の例文 29）から 31）の後節では、「のだ」が「んだ」の形で使用されている。

29） これは運ではない。努力したからこそ成功したんだ。

（グループ・ジャマシイ『教師と学習者のための日本語文型辞典』）

30） 結果から見るとそれくらいの前提があるからこそ、今回の実行に踏み切ったんじゃないか。

（そえだ信『ねずみと巨獣』）

31） 「こうあると見越して、高い鳥目を払って鉄砲をそろえたからこそ、うまくいったんやで」

（岩井三四二『竹千代を盗め』）

上記の例文 27）から 31）までは、いずれの場合も「からこそ」の前件と後件が因果関係で結ばれている。しかし、これらの例文が「から」構文と異なっているのは、後件の原因・理由はほかではなく前件であるという強調のニュアンスがある点である。言い換えれば、「から」と「こそ」の機能が同時に働いているため、前件こそが原因・理由であるという意味を「からこそ」が表してる。例えば、例文 29）の場合であれば、成功したのはほかならぬ努力したからであるという意味に解釈される。例文 31）の場合では、鉄砲をそろえたことこそがうまくいった理由であるということが読み取れる。

さらに、「のだ」と「んだ」が一緒によく使用されているのは、「からこそ」が話し手の判断の根拠を表す原因・理由表現であるためである。文末の「のだ」及び「んだ」は話し手の主張を表す表現のためでもあると考えられる。話し手の強い主張を表す「のだ」の機能から考えると、「からこそ」構文では、前件が原因・理由であるとも話し手の主張であるとも考えられ、「のだ」と「からこそ」の意味が嚙み合った複合語形式であるといえる。

一方、グループ・ジャマシイ（1998）によれば、「のだ」は前の文で述べたこと、その場の状況、その原因・理由などを説明する機能も持っていると述べている。しかし、「からこそ」構文で使用されている「のだ」は、「からこそ」の意味も考慮して、話し手の主張を表す意味のほうが強いと考えられる。さらに、「のだ」は話し手自信の主張を表す表現であるため、話し手自身の思考による発言ではない、または話し手自信に関わっている話題ではない場合の「からこそ」構文では、「のだ」が使用されていないと考えられる。例えば、例文 27）では、サッカー選手のプレーが話題であり、話し手自身の事柄ではないため「のだ」が使用されていないと考えられる。とはいえ、この場合の「からこそ」構文も「のだ」が使用できないといわけではない。ただし、例文 27）の「からこそ」の後節に「のだ」が使用された場合、話し手の主張が加わり、ニュアンスが変わると考えられる。

32）　（略）チャンスの形を作ったからこそ生まれた決勝点だったんだ。

例文 27）の「からこそ」構文を例文 32）のようにすると、話し手自身の主張が加わっているといえる。この場合では、話し手による評価のニュアンスもあると考えられる。つまり、チャンスの形を作ったことこそが決勝点を生み出す要因であり、その要因が重要な点であり、すぐれた点であると読み取ることができる。

このように、「からこそ」は原因・理由を表すだけではなく、その原因・理由を強調する機能も持っている。ところが、「からこそ」構文は、その結果の原因・理由は一般的に予想されているものと異なっているある場合も多い。つまり、逆接の意味も持っている原因・理由文である場合もある。前田（2009）によれば、「からこそ」が「から」と「ので」と異なっているのは、「逆接的な原因・理由」を表す点であると述べている。また、「からこそ」は、単に予測された条件的関係とは逆の事態が起こる逆接条件付けとは異なり、予測とは逆の関係の中でも真理があることを表す表現であるとも述べている。例えば、次の例文である。

33）　愛が終わったから別れるではなく、愛するからこそ別れるという場合もあるのだ。

（グループ・ジャマシイ『教師と学習者のための日本語文型辞典』）

34）　「しかし、この子はなにぶん新人で――」

「新人だからこそ、安売りしてはだめなの。どこの報告会社？」

（赤川次郎『茜色のプロムナード』）

35）　アサガオを栽培する参加型のアートプロジェクトも計画通りに進まないからこそ面白いと思っている。

（<http://www.yomiuri.co.jp/ >2015/07/03 アクセス）

例文 33）の場合では、「別れるのは愛が終わったから」という因果関係の真理が予想されているが、実際では逆に「別れるのは愛するから」ということが真理である。例文 34）の場合では、「新人だから安売りしてもいい」ということが一般的であるという考えに対して、逆に安売りしてはいけないということが真理であると話し手が主張している。それと同様、例文 35）では、一般的には計画通りに進むほうが面白いと思われるが、逆にうまく進まないほうが面白いという事実もあると解釈できる。このように、一般的に予想される因果関係とは逆であるが、その因果関係もまた真理であるということを表すのが「からこそ」の機能の特徴である。

そして、この逆接的な原因・理由を表す機能の性質上、原因・理由である部分が一般的にはマイナスの要因であると思われる場合が多いと考えられる。前田（2009）では、「X からこそ Y」の最も典型的な意味関係は、望ましくない事態の発生から同じく望ましくない事態が発生すると予想されるが、実際には逆に望ましい事態が発生するという事態があると述べている。実際、例文 35）はそれに該当し、「計画通りに進まない」という原因・理由が一般的にマイナス要因であるのに対して、結果である後件が「面白い」という望ましい事態が発生する。ところが、前田（2009）は、「X からこそ Y」であっても、後件に望ましい事態が来ない場合もあると述べている。つまり、例文 33）のように、前件がマイナス要因とはいえない場合もある。このような場合は、逆に結果の部分がマイナスな内容であることが多いと考えられる。例えば、例文 33）の「愛する」という原因・理由はマイナスではないのに対して、その結果の「別れる」がマイナスである。

さらに、前田（2009）は、逆接的な原因・理由を表す意味・用法は「からこそ」の特徴であり、「から」にはこの意味・用法がないため、この意味・用法で使用されている「からこそ」を「から」で置き換えることが難しいと指摘している。

36a）危険だからこそ挑戦する。
？36b）危険だから挑戦する。

「こそ」という強調を表す部分がないため、例文 36b）は 36a）と比べて、逆接的な因果関係のニュアンスがとりにくいだけではなく、話し手の主張と強調も読み取り難いと考えられる。

このように、「からこそ」は原因・理由を表す表現ではあるが、単に原因・理由を表すだけではなく、「から」にはない特徴的な意味・用法を有している。

4.1.2.2 「からこそ」とタイ語の比較

タイ語における因果構文では phrɔ̂ʔ と cɯŋ などの表現を使用するのが一般的であるが、これらの表現には、「からこそ」のように強調と逆接的な因果関係を表す機能があるかどうかは明確ではない。では、「からこそ」の原因・理由文は、どのようにタイ語に訳されているのだろうか。対訳例をあげ、比較考察する。

37a）木曾路に生まれ育ったからこそ書ける名文であろう。

ที่ท่านเขียนประโยคเลื่องชื่อนี้ขึ้นได้คงเพราะเกิดและเติบโตมาบนถนนสายนี้กระมัง

thîi	thâan	khĕan	praʔ-yòo	klûaŋ-chûɯ	nîi	khûn-dây	khoŋ
COMP	あの方	書く	文	有名	この	出来上がる	多分
phrɔ́ʔ	kɔ̀ət-lɛ̂ʔ-tɔ̀əp-too-maa			bon	sêen-thaaŋ		sĕay-nîi	khrâʔmaŋ
CON	生まれ育った			上	道		この道	であろう

≪日本≫（夏川草介『神様のカルテ』）

≪タイ≫（Pornchai Wittayaleetpan：*Ichito khun-moo huajai theewadaa*）

38a）学校側も、バスケ部の顧問がこの先生だったからこそ、「乙武入部」を認めてくれたのかもしれない。

ทางโรงเรียนคงเห็นว่าชมรมบาสเกตบอลมีครูที่ปรึกษาคือ โค้ชคนนี้ จึงยินยอมให้โอโตทาเกะเข้าชมรม

thaaŋ	rooŋ-rian	khoŋ	hĕn-wâa	chom-rom	báat-kêt-bɔɔn		mii
側	学校	多分	見て判断する	部	バスケ		いる
khruu-thîi-prùk-sǎa		khɯɯ	khóot	khon-nîi	cɯŋ	yin-yɔɔmhây	oo-thoo-thaa-kèʔ
顧問先生		は	コーチ	この人	CON	許可する くれる	乙武
khâw-chom-rom							
入部する							

≪日本≫（乙武洋匡『五体不満足』）

≪タイ≫（Pornanong Niyomka：*Mai-Khrop-Haa*）

例文 37a）と 38a）における「からこそ」は、逆接的なものではなく、ほかではなくその原因・理由であるという強調を表す「からこそ」である。そして、例文 37a）のタイ語文では phrɔ́ʔ が使用されている。一方、例文 38a）では cɯŋ が使用されている。故に、「からこそ」は phrɔ́ʔ と cɯŋ のいずれにも訳すことが可能である。

また、例文 37a）と 38a）のタイ語文では、両方とも話し手の判断を表わす表現も見られる。補助的表現手段として、「多分」の意味を表す khoŋ という表現である。さらに、例文 37a）では「～だろう」の意味を表す khrâʔmaŋ という表現も使用されている。これは、「からこそ」も判断系の原因・理由表現であるため、その対訳のタイ語文にも判断系の表現が見られるということである。

ところが、「からこそ」の特徴である原因・理由を強調する意味・用法は、例文 37a）の phrɔ́ʔ と例文 38a）の cɯŋ にもあるかというと、かなり不明である。元々、phrɔ́ʔ と cɯŋ はいずれも因果関係を表す意味・用法以外は見られない表現であるため、例文 37a）と 38a）のタイ語文はいずれも前件と後件が単なる因果関係で結ばれているとしか見えない。例文 37a）と 38a）におけるタイ語文はいずれも話し手の判断を表わす表現があるため、日本語文と同様、これらのタイ語文も判断系の原因・理由文に対応しているといえる。それでも、それらの因果構文の結果の部分を引き起こすのは、ほかならぬその原因・理由であるというニュアンスは、phrɔ́ʔ と cɯŋ からは読み取れない。要するに、phrɔ́ʔ と cɯŋ の因果構文は、どちらかというと、「からこそ」構文よりも判断系の「から」構文に近いと考え

られる。実際、例文 37a）と 38a）の「からこそ」を「から」にしても、37a）と 38a）と同じようなタイ語文に訳すことが可能であると考えられる。

37b）木曾路に生まれ育ったから書ける名文であろう。
ที่ท่านเขียนประโยคเลื่องชื่อนี้ขึ้นได้คงเพราะเกิดและเติบโตมาบนถนนสายนี้กระมัง

thîi	thâan	khĕan	praʔ-yòo	klûaŋ-chûɯ	nîi	khûn-dây	khoŋ
COMP	あの方	書く	文	有名	この	出来上がる	多分
phrɔ́ʔ	kɔ̀ət-lɛ́ʔ-tɔ̀ɔp-too-maa			bon	sêen-thaaŋ		sǎay-nîi	khrà̀ʔmaŋ
CON	生まれ育った			上	道		この道	であろう

≪タイ≫（Pornchai Wittayaleetpan：*Ichito khun-moo huajai theewadaa*）

38b）学校側も、バスケ部の顧問がこの先生だったから、「乙武入部」を認めてくれたのかもしれない。
ทางโรงเรียนคงเห็นว่าชมรมบาสเกตบอลมีครูที่ปรึกษาคือ โค้ชคนนี้ จึงยินยอมให้โอโตทาเกะเข้าชมรม

thaaŋ	rooŋ-rian	khoŋ	hĕn-wâa	chom-rom	báat-kêt-bɔɔn	mii
側	学校	多分	見て判断する	部	バスケ	いる

khruu-thîi-prùk-sǎa	khɯɯ	khóot	khon-nîi	cɯŋ	yin-yɔɔmhây	oo-thoo-thaa-kè ʔ
顧問先生	は	コーチ	この人	CON	許可する くれる	乙武

khâw-chom-rom
入部する

≪タイ≫（Pornanong Niyomka：*Mai-Khrop-Haa*）

例文 37b）と 38b）は順番に 37a）と 38a）の「からこそ」と「から」にした例文であるが、タイ語文のほうは変わらない。これはどういうことかというと、phrɔ́ʔと cɯŋ は「から」と類似している意味・用法を有しているが、「からこそ」と同じ意味・用法を有していないため、対訳しても日本語の「からこそ」構文と同じニュアンスが読み取れるとは限らないということである。

しかし、これは「からこそ」を「から」にすることが可能な日本語文の場合である。逆接的な原因・理由を表す「からこそ」、つまり「からこそ」を「から」にすることが難しい原因・理由文の場合、タイ語文ではどのような表現が使用されているかを検討する。

39a）かわいいと思っているからこそ、厳しくしつけるのです。
ก็เพราะรักและเอ็นดู ถึงต้องอบรมอย่างเข้มงวด

kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔ	rák	lɛ́ʔ	en-duu	thŭŋ	thɔ̂ɔŋ	òp-rom	yàaŋ	khêem-ŋûat
CON1	愛する	と	かわいがる	CON2	必要	しつける	ように	厳しい

≪日タイ≫（Wiirawan Washiradirok：*Gunjae suu 500 Ruup-prayook*）

40a）知らない人ばかりだからこそ、言いにくいことも言うことができたのだ。
ก็เพราะมีแต่คนที่ไม่รู้จัก เลยพูดเรื่องที่พูดยากได้

kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔ	mii	tɛ̀ɛ	khon	thîi	mây	rúu-càk	lɔ̀ɔy	phûut	rûaŋ
CON1	ある	だけ	人	COMP	NEG	知っている	CON2	言う	話

thîi	phûut	yâak	dâay
COMP	言う	難しい	可能

≪日タイ≫（Wiirawan Washiradirok：*Gunjae suu 500 Ruup-prayook*）

41a）雨だからこそ、うちにいたくない。雨の日にうちにいるのは寂しすぎる。
ก็เพราะฝนตกนี่แหละ เลยไม่อยากอยู่บ้าน การอยู่บ้านในวันที่ฝนตก ช่างเหงาเหลือทน

kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔ	fŏn-tòk	nîi-lɛ̂ʔ	lɔ̀ɔy	mây-yàak		yùu	bâan	kaan	yùu	bâan
CON1	雨	こそ	CON2	したくない		いる	家	COMP	いる	家

nay	wan	thîi	fŏn-tòk	châaŋ	ŋǎw	lŭa-thon
中	日	COMP	雨	とても	寂しい	耐えられない

≪日タイ≫（Wiirawan Washiradirok：*Gunjae suu 500 Ruup-prayook*）

上記の例文 39a）から 41a）の「からこそ」は逆接的な原因・理由を表すものである。これらの例文のタイ語文では、kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔという原因・理由を表す表現が用いられている。また、thŭŋ や lɔ̀ɔy などの結果を表す表現も共起する。

kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔは、kɔ̂ʔという表現と phrɔ́ʔを組み合わせた表現形式である。kɔ̂ʔは、様々な意味・用法を持つ表現であるが、この場合では事柄の強調という意味・用法で用いられていると考える。よって、kɔ̂ʔと原因・理由表現である phrɔ́ʔを組み合わせた kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔという表現は、原因・理由を表す上に、その原因・理由の強調の意味も表わしている機能を持っている。つまり、通常の phrɔ́ʔより、kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔのほうが強調の意味があり、「からこそ」に近いと考えられる。特に、逆接的な原因・理由を表す場合では、ほかならぬそれが原因・理由であるという強調の意味が強いため、39a）から 41a）までのような「からこそ」構文では phrɔ́ʔより kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔのほうが「からこそ」の対訳に相応しいと考えられる。また、これらの例文の内容は逆説的な因果関係であるにも関わらず、タイ語文では因果関係を表す表現が用いられているというのは、タイ語にも逆接的な因果関係という概念もあるといえる。そして、そのような因果構文でもタイ語では因果関係を表す表現を用いることが可能であるということもいえる。

さらに、例文 41a）では因果関係を表す kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔと thŭŋ、lɔ̀ɔy のほかに、nîi-lɛ̂ʔという強調の表現も用いられている。この nîi-lɛ̂ʔは、話し手が物・事柄を「これだ」と強く示すために用いる表現であり、日本語における「こそ」にかなり近い表現である。原因・理由文の文末に nîi-lɛ̂ʔを用いることによって、原因はほかならぬこれであると強く示すことができる。つまり、例文 41a）では nîi-lɛ̂ʔと原因・理由表現の kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔと共起することによって、最も「からこそ」に近いニュアンスを読み取れると考えられる。kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔは強調の意味も有しているため、nîi-lɛ̂ʔの意味に噛み合って、共起することが可能な場合が多い。実際、例文 39a）と 40a）にも、原因・理由文の文末に nîi-lɛ̂ʔを用いることが可能である。

39b）ก็เพราะรักและเอ็นดูนี่แหละ ถึงต้องอบรมอย่างเข้มงวด

kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔ	rák	lɛ́ʔ	en-duu	nîi-lɛ̀ʔ	thŭŋ	thɔ̂ɔŋ	òp-rom	yàaŋ
CON1	愛する	と	かわいがる	こそ	CON2	必要	しつける	ように
khêem-ŋûat								
厳しい								

40b）ก็เพราะมีแต่คนที่ไม่รู้จักนี่แหละ เลยพูดเรื่องที่พูดยากได้

kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔ	mii	tɛ̀ɛ	khon	thîi	mây	rúu-càk	nîi-lɛ̀ʔ	lɔ̀ɔy	phûut
CON1	ある	だけ	人	COMP	NEG	知っている	こそ	CON2	言う
rûaŋ	thîi	phûut	yâak	dâay					
話	COMP	言う	難しい	可能					

また、kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔは phrɔ́ʔと同様、原因・理由文と結果文を接続する表現として用いることが可能である。しかし、例文 39a）から 41a）までは、thŭŋ と lɔ̀ɔy が接続表現であり、kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔは原因・理由を示す表現として使用されている。phrɔ́ʔ、kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔ構文と thŭŋ、lɔ̀ɔy 構文の違いは、主に原因・理由と結果の順番にあるが、話の重点または強調のニュアンスに関する相違点もあると考えられる。例文 39a）から 41a）の thŭŋ、lɔ̀ɔy 構文を kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔ構文にする場合、以下の例文のようにすることができる。

42a）ที่ต้องอบรมอย่างเข้มงวด ก็เพราะรักและเอ็นดูนี่แหละ

thîi	thɔ̂ɔŋ	òp-rom	yàaŋ	khêem-ŋûat	kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔ	rák	lɛ́ʔ	en-duu
COMP	必要	しつける	ように	厳しい	CON	愛する	と	かわいがる
nîi-lɛ̀ʔ								
こそ								

43a）ที่พูดเรื่องที่พูดยากได้ ก็เพราะมีแต่คนที่ไม่รู้จักนี่แหละ

thîi	phûut	rûaŋ	thîi	phûut	yâak	dâay	kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔ	mii	tɛ̀ɛ	khon
COMP	言う	話	COMP	言う	難しい	可能	CON	ある	だけ	人
thîi	mây	rúu-càk	nîi-lɛ̀ʔ							
COMP	NEG	知っている	【強調】							

44a）ที่ไม่อยากอยู่บ้าน ก็เพราะฝนตกนี่แหละ

thîi	mây-yàak	yùu	bâan	kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔ	fŏn-tòk	nîi-lɛ̀ʔ
COMP	したくない	いる	家	CON	雨	【強調】

例文 42a）から 44a）までのタイ語文は、例文 39a）から 41a）までのタイ語文とは逆で、結果から原因・理由の順で述べられている文である。文の内容は 15a）から 17a）までと変わらないといえるが、内容の順番以外にも相違点があると考える。

まずは、39a）から 41a）までの thŭŋ、lɔ̀ɔy 構文では、原因・理由を表す表現が接続表現ではないが、前文が原因・理由文であることを強調するために原因・理由を表す kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔを用いることが可能である。それに対して、42a）から 44a）までの kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔ構文では、前の文が結果文であることを強調する

ために thŭŋ や ləəy を用いることはできない。その代わりに、関係代名詞である thîi を用いることが可能である。

次は、kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔ構文と thŭŋ、ləəy 構文を比べてみれば、因果関係を表す表現と強調の表現を部分的に省略することが許されやすい場合とそうではない場合がある。タイ語における因果構文では、一般的には接続表現以外の因果関係を表す表現が使用される場合、その因果関係を表す表現を省略することができる。例えば、「phrɔ́ʔ＋原因＋ləəy＋結果」という文構造では、ləəy が接続表現であり、省略することは難しい。一方、phrɔ́ʔは原因・理由を表しているが、この場合では接続表現ではないため、省略することが可能な場合が多いと考えられる。とはいえ、そのような部分的に表現の省略を行うと、ニュアンスが変わる場合もある。

例文 39a）と 40a）の thŭŋ、ləəy 構文では、thŭŋ と ləəy は接続表現としてい働いているため、省略はできないが、kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔを省略しても非文にはならない。例文 41a）の場合では強調の nîi-lɛ̀ʔを取り除けば、kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔを省略することが可能である。ただし、これらの文では kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔと nîi-lɛ̀ʔという強調の意味を持つ表現があるからこそ、日本語における「からこそ」構文に対応している。そのため、これらの例文から kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔと nîi-lɛ̀ʔを取り除いた場合、強調のニュアンスがなくなり、「からこそ」の意味を読み取ることができなくなる。つまり、その場合では「から」構文のような単なる因果構文に近い文になる。

39c）รักและเอ็นดู <u>ถึง</u>ต้องอบรมอย่างเข้มงวด

rák	lɛ́ʔ	en-duu	<u>thŭŋ</u>	thɔ̂ɔŋ	òp-rom	yàaŋ	khêem-ŋûat
愛する	と	かわいがる	<u>CON</u>	必要	しつける	ように	厳しい

かわいいと思っている<u>から</u>、厳しくしつける。

40c）มีแต่คนที่ไม่รู้จัก <u>เลย</u>พูดเรื่องที่พูดยากได้

mii	tɛ̀ɛ	khon	thîi	mây	rúu-càk	<u>ləəy</u>	phûut	rûaŋ	thîi
ある	だけ	人	COMP	NEG	知っている	<u>CON</u>	言う	話	COMP

phûut	yâak	dâay
言う	難しい	可能

知らない人ばかりだ<u>から</u>、言いにくいことも言うことができた。

41b）ฝนตก <u>เลย</u>ไม่อยากอยู่บ้าน การอยู่บ้านในวันที่ฝนตก ช่างเหงาเหลือทน

fŏn-tòk	<u>ləəy</u>	mây-yàak	yùu	bâan	kaan	yùu	bâan	nay	wan
雨	<u>CON</u>	したくない	いる	家	COMP	いる	家	中	日

thîi	fŏn-tòk	châaŋ	ŋǎw	lŭa-thon
COMP	雨	とても	寂しい	耐えられない

雨だ<u>から</u>、うちにいたくない。雨の日にうちにいるのは寂しすぎる。

このように、39c）40c）41b）のタイ語文では強調のニュアンスがなく、原因・理由を説明するようなニュアンスになっている。例文 41a）では nîi-lɛ̀ʔという強調の表現が kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔに依存していると考えられ、nîi-lɛ̀ʔのみを省略することが可能であるが、kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔのみを取り除くことができない。つまり、

kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔと nîi-lɛ̂ʔは共起することができる表現であるが、共起する場合、kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔのほうが重要である。実際、例文 39a）と 40a）にも、41a）のように原因・理由文の文末に nîi-lɛ̂ʔを用いることが可能である。しかし、これらの例文には nîi-lɛ̂ʔが使用されていないということは、kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔが使用されている場合、nîi-lɛ̂ʔを省略してもいいということであると考える。

一方、42a）から 44a）までのタイ語文は、関係詞である thîi、そして強調の表現である nîi-lɛ̂ʔを省略することが可能である。ただし、kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔを phrɔ́ʔにする必要もあると考える。また、そのような thîi と nîi-lɛ̂ʔの省略を行う場合、原因・理由の強調のニュアンスがなくなる。

42b）ต้องอบรมอย่างเข้มงวด<u>เพราะ</u>รักและเอ็นดู

thɔ̂ɔŋ	òp-rom	yàaŋ	khêem-ŋûat	<u>phrɔ́ʔ</u>	rák	lɛ́ʔ	en-duu
必要	しつける	ように	厳しい	<u>CON</u>	愛する	と	かわいがる

かわいいと思っている<u>から</u>、厳しくしつける。

43b）พูดเรื่องที่พูดยากได้<u>เพราะ</u>มีแต่คนที่ไม่รู้จัก

phûut	rûaŋ	thîi	phûut	yâak	dâay	<u>phrɔ́ʔ</u>	mii	tɛ̀ɛ	khon	thîi
言う	話	COMP	言う	難しい	可能	<u>CON</u>	ある	だけ	人	COMP

mây	rúu-càk
NEG	知っている

知らない人ばかりだ<u>から</u>、言いにくいことも言うことができた。

44b）ไม่อยากอยู่บ้าน<u>เพราะ</u>ฝนตก การอยู่บ้านในวันที่ฝนตก ช่างเหงาเหลือทน

mây-yàak	yùu	bâan	<u>phrɔ́ʔ</u>	fŏn-tòk	kaan	yùu	bâan	nay	wan
したくない	いる	家	<u>CON</u>	雨	COMP	いる	家	中	日

thîi	fŏn-tòk	châaŋ	ŋǎw	lŭa-thon
COMP	雨	とても	寂しい	耐えられない

雨だ<u>から</u>、うちにいたくない。雨の日にうちにいるのは寂しすぎる。

結果構文である 39c）40c）41b）の場合と同様、原因・理由構文である 42b）43b）44b）の場合も強調の表現がなく、単なる原因・理由を表す文になっている。これらの文には、thîi と nîi-lɛ̂ʔのいずれがある場合、phrɔ́ʔの代わりに kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔを用いることができるが、いずれもない場合では kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔを用いることが難しい。結果構文である 39a）40a）41a）と違い、原因・理由構文である 42a）43a）44a）のように、kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔを用いるならば、thîi または nîi-lɛ̂ʔのいずれかが共起しなければ、不自然な文になる。

最後に、結果構文である 39a）39b）39c）40a）40b）40c）41a）41b）のような例文では、後文が前文の結果であることを示すために接続表現として thŭŋ や ləəy などが用いられているが、そのほかに前文が原因・理由であることを示す、または強調するために phrɔ́ʔや kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔなどの原因・理由を表す表現も使用することは可能である。それに対して、原因・理由構文である 42a）42b）43a）43b）44a）44b）のようなでは、後文が前文の原因・理由であることを示すために接続表現として phrɔ́ʔや kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔなどが用いられているが、そのほかに前文が結果であることを示す、または強調するために thŭŋ や ləəy などを用いることができない、または用い難い場合が多い。

？42c）　{ถึง／เลย／จึง}　ต้องอบรมอย่างเข้มงวด เพราะ รักและเอ็นดู

{thŭŋ／ləəy／cɯŋ}　thɔ̂ɔŋ　òp-rom　yàaŋ　khêem-ŋûat　phrɔ́ʔ　rák　lɛ̂ʔ

CON1　必要　しつける　ように　厳しい　CON2　愛する　と

en-duu

かわいがる

？43c）　{ถึง／เลย／จึง}　พูดเรื่องที่พูดยากได้ เพราะ มีแต่คนที่ไม่รู้จัก

{thŭŋ／ləəy／cɯŋ}　phûut　rûaŋ　thîi　phûut　yâak　dâay　phrɔ́ʔ　mii　tɛ̀ɛ

CON1　言う　話　COMP　言う　難しい　可能　CON2　ある　だけ

khon　thîi　mây　rúu-càk

人　COMP　NEG　知っている

？44c）　{ถึง／เลย／จึง}　ไม่อยากอยู่บ้าน เพราะ ฝนตก การอยู่บ้านในวันที่ฝนตก ช่างเหงาเหลือทน

{thŭŋ／ləəy／cɯŋ}　mây-yàak　yùu　bâan　phrɔ́ʔ　fŏn-tòk　kaan　yùu

CON1　したくない　いる　家　CON2　雨　COMP　いる

bâan　nay　wan　thîi　fŏn-tòk　châaŋ　ŋǎw　lŭa-thon

家　中　日　COMP　雨　とても　寂しい　耐えられない

要するに、タイ語における結果構文では前文に原因・理由表現が用いられているが、原因・理由構文では前文に結果表現が用いられ難いと考えられる。

このように、結果構文である thŭŋ、ləəy 構文を原因・理由構文の phrɔ́ʔ や kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔ 構文にする場合、語順以外にもいくつかの相違点が出てくる。ただし、いずれの場合でも、文が表している内容は殆ど変わらないと考えられる。「からこそ」構文と類似しているニュアンスを持つ kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔ～thŭŋ 構文や kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔ～ləəy 構文は、kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔ 構文とも類似しているニュアンスを持っている。つまり、結果構文の kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔ～thŭŋ 構文または kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔ～ləəy 構文でも、原因・理由構文の kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔ 構文でも、いずれも日本語における「からこそ」構文に対応しているといえる。

また、「からこそ」に対応しているタイ語文の中には、thŭŋ や ləəy のほかに、cɯŋ や thŭŋ-dây などの接続表現が用いられる場合もある。さらに、nîi-lɛ̂ʔ のほかに、nàʔ-siʔ という強調の表現を用いる場合もある。例えば、次の 45）と 46）の用例である。

45）　暑い時だからこそ、熱いシャワーを浴びたい。

เพราะเป็นตอนที่อากาศร้อน นี่แหละ จึงอยากอาบน้ำร้อนๆ

phrɔ́ʔ　pen　tɔɔn　thîi　aa-kàat　rɔ̂ɔn　nîi-lɛ̂ʔ　cɯŋ　yàak　àap-náam

CON1　COPU　時　COMP　天気　暑い　こそ　CON2　したい　シャワーを浴びる

rɔ̂ɔn-rɔ̂ɔn

熱い

46） あなたのことが心配だからこそ、うるさく注意するんですよ。
เพราะเป็นห่วงน่ะสิ ถึงได้เตือนแล้วเตือนอีกจนน่ารำคาญแบบนี้

phrɔ́ʔ	pen-hùaŋ	nàʔ-siʔ	thŭŋ-dây	tɯan-lɛ́ɛw-tɯan-ìik	con	náa-ram-kaan
CON1	心配	こそ	CON2	なんども注意する	ほど	うるさい
bɛ̀ɛp-níi (7)						
このように						

例文 45）と 46）のような場合も、結果構文から原因・理由構文にすることが可能であるが、原因・理由構文の前文には結果表現が用い難い。故に、45）と 46）を 47）と 48）のようにする場合、不自然な文になる。

？47） จึงอยากอาบน้ำร้อนๆ เพราะเป็นตอนที่อากาศร้อนนี่แหละ

cɯŋ	yàak	àap-náam	rɔ̂ɔn-rɔ̂ɔn	phrɔ́ʔ	pen	tɔɔn	thîi
CON1	したい	シャワーを浴びる	熱い	CON2	COPU	時	COMP
aa-kàat	rɔ̂ɔn	nîi-lɛ̀ʔ					
天気	暑い	こそ					

？48） ถึงได้เตือนแล้วเตือนอีกจนน่ารำคาญแบบนี้ เพราะเป็นห่วงน่ะสิ

thŭŋ-dây	tɯan-lɛ́ɛw-tɯan-ìik	con	náa-ram-kaan	bɛ̀ɛp-níi	phrɔ́ʔ
CON1	なんども注意する	ほど	うるさい	このように	CON2
pen-hùaŋ	nàʔ-siʔ				
心配	こそ				

このように、「からこそ」に対応しているタイ語文は、thŭŋ と lɤɤy 以外にもほかの表現が用いられている構文もある。また、日本語の「こそ」に類似している強調の表現は nîi-lɛ̀ʔ以外に nàʔ-siʔも存在する。さらに、次のような「からこそ」の対訳の用例もある。

49） さっきも言いましたけれど、私だって結婚しています。だから分かるんですよ。夫婦として一緒にいると、一番近くにいるからこそ、愛し合っているからこそ喧嘩することもあるんです。
อย่างที่บอกเมื่อครู่ ผมแต่งงานแล้วถึงได้เข้าใจ พออยู่ด้วยกันในฐานะสามีภรรยา ถึงจะอยู่ใกล้กันที่สุด ถึงจะรักกันก็ยังมีเรื่องทะเลาะกันบ้าง

yàaŋ-thîi	bɔ̀ɔk	mûa-khrûu	phŏm	tɛ̀ɛŋ-ŋaan	lɛ̂ɛw	thŭŋ-dây	khâw-cay
ように		言う	さっき	私	結婚	PERF	CON	分かる
phɔɔ	yŭu-dûay-kan	nay-thǎanaʔ		sǎamii-panraʔyaa	thŭŋ-càʔ	yùu	
時	一緒にいる	として		夫婦	たとえ	いる	
klây-kan	thîi-sùt	thŭŋ-càʔ		rák-kan	kɔ̂ʔ-yaŋ	mii	rûaŋ
近い	一番	たとえ		愛し合う	それでも	ある	話

thaʔlɔ́ʔ-kan	bâaŋ
喧嘩する	たまに

≪日本≫（時雨沢恵一『キノの旅IV』）

≪タイ≫（Piyawan Subsamruam：*KINO NO TABI 4*）

例文 49）は、46）と同様、thŭŋ-dây という表現が用いられているが、この場合では「からこそ」ではなく、「だから」に対応している。この例文の「からこそ」は、タイ語文では thŭŋ-càʔと kɔ̂ʔ-yaŋ という表現に対応していると考える。この thŭŋ-càʔ～kɔ̂ʔ-yaŋ は、日本語では「その場合でも」、または「たとえ～でも」という意味に近い表現である。そのため、この場合のタイ語文から「たとえ一番近くにいても、たとえ愛し合っていても、喧嘩することもある」という意味にも解釈できる。「たとえ～でも」は、仮にそのような状況が成立しても、後文の事態は発生するであろうという意味で用いられている表現であり、一般的には因果関係を表さない表現であるが、因果構文との関係がないとはいえない。「たとえ～でも」構文は、その逆接的な条件の関係を逆接的な因果関係に変換することが可能な場合もあると考える。例えば、49）の場合では「一番近くにいる」と「愛し合っている」は、一般的には「喧嘩することもある」の条件であるとは考えられないが、逆にそのような場合もあるという意味で「たとえ～でも」が用いられている。この常識とは逆である関係を表す意味・用法は、逆接的な原因・理由を表す「からこそ」に類似している部分があるといえる。そのため、49）の場合では「一番近くにいる」と「愛し合っている」という条件はそのまま原因・理由としても解釈でき、「喧嘩することもある」はその結果であると解釈することもできると考える。

このように、「たとえ～でも」と「からこそ」は近似に関係している部分があるため、タイ語における thŭŋ-càʔ～kɔ̂ʔ-yaŋ という表現は「たとえ～でも」に近い表現であるが、「からこそ」の意味でも解釈することが可能である。

4.1.2.3　まとめ―「からこそ」とタイ語の表現

「からこそ」とタイ語の表現と比較した結果、phrɔ́ʔと cɯŋ 以外の表現も「からこそ」に対応していることが見られる。phrɔ́ʔと cɯŋ は因果関係しか表さないと考えられるため、他ならぬそれが原因・理由であると強調する「からこそ」と比較する場合、phrɔ́ʔと cɯŋ が同じように意味を表すことができない部分がある。「からこそ」の訳語として phrɔ́ʔまたは cɯŋ を用いるならば、強調の意味を表すほかの表現も必要であると考える。強調の意味を表す表現の中でも、nîi-lɛ̂ʔは「こそ」に近い表現であるといえる。「ほかではなくこれである」という意味を持っているため、因果関係を表す表現と共起する場合、「からこそ」に近いニュアンスを表すことが可能である。しかし、その nîi-lɛ̂ʔという強調の表現は、phrɔ́ʔよりも、kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔという表現と共起しやすいと考えられる。

また、nîi-lɛ̂ʔのほかに、nâʔ-siʔという表現も「からこそ」の対訳文にみられる。さらに、cɯŋ のほかに、thŭŋ、lɤ̂ɤy も「からこそ」の対訳で用いられている。いずれも同じ結果表現であり、強調の意味を表さないため、kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔや nâʔ-siʔなどが必要である。その他、原因・理由の部分を示すために thîi を原因・理由節の前に置く場合もあり、thîi～kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔ～nîi-lɛ̂ʔという形式で用いり、より「からこそ」構文に近いニュアンスを持つ因果構文になる。

「からこそ」は、後節の原因・理由を強く強調するほかに、逆接的な因果関係を表す用法もある。タイ語では、その逆接的な用法の場合でも、因果関係を表す表現を用いることが可能である。逆接的な因果関係の場合では、一般の常識に反する因果関係を述べる場合があるため、特に強調の表現が必要であると考える。強調の表現がない通常の phrɔ́ʔ構文や cɯŋ 構文、thŭŋ 構文、ləəy 構文などでは、「こそ」の意味が含まれていないため、これらの因果構文は単なる因果関係を述べる文である。そして、逆接的な因果関係ではない「からこそ」構文の場合ならば、強調の意味がなくても、因果関係が一般の常識で成立しているため、その「からこそ」構文と同じ因果関係の内容で強調の表現がない phrɔ́ʔ構文、cɯŋ 構文、thŭŋ 構文、ləəy 構文を作っても自然な文になりやすいといえる。それに対して、逆接的な因果関係の「からこそ」構文の場合では、因果関係そのものが一般の常識に反している場合があるため、単なる因果構文の phrɔ́ʔ構文、cɯŋ 構文、thŭŋ 構文、ləəy 構文にすると、不自然な内容になる場合が多いと考えられる。

その他、thŭŋ-càʔ～kɔ̂ʔ-yaŋ という表現が「からこそ」の訳として用いる場合もある。thŭŋ-càʔ～kɔ̂ʔ-yaŋ は「たとえ～でも」に近い意味を表す表現であるが、「からこそ」にも対応している場合もある。そして、thŭŋ-càʔ～kɔ̂ʔ-yaŋ 構文から解釈できる「たとえ～でも」構文と「からこそ」構文を比較すると、「からこそ」が「たとえ～でも」に類似している点もあることが分かる。要するに、逆接的な条件節である「たとえ～でも」構文における条件の部分は、そのまま逆接的な「からこそ」構文の原因・理由の部分に変換することが可能な場合がある。ただし、その場合でも元の「たとえ～でも」構文のニュアンスが「からこそ」構文と同じニュアンスと持つというわけではない。あくまでも逆接的な関係を表すという点が類似しているだけであり、「たとえ～でも」と「からこそ」は同じ意味を表すというわけではない。

更なる検討は必要であるが、「からこそ」は、thîi や nîɨ-lɛ̌ʔ、nàʔ-siʔなどの部分的な強調の意味を表す表現と共起する phrɔ́ʔ、kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔ、cɯŋ、thŭŋ、ləəy に対応しているといえる。特に、原因・理由表現と強調の表現を併せた kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔは、通常の phrɔ́ʔよりも「からこそ」に近い表現であるといえる。ただし、kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔだけでは自然な因果構文が作り難い場合もあり、やはり thîi や nîɨ-lɛ̌ʔ、nàʔ-siʔなど強調の表現が「からこそ」を対応するのに重要な部分である。逆に言えば、これらの強調の表現がなければ、「からこそ」構文を同じニュアンスを持つタイ語の因果構文を作ることが難しいといえる。因果関係を表す表現ではない thŭŋ-càʔ～kɔ̂ʔ-yaŋ などを「からこそ」の対訳として用いる場合もあるが、やはり thîi～kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔ～nîɨ-lɛ̌ʔなどのほうが「からこそ」に近いと考える。

最後に、「からこそ」とタイ語の表現の意味・用法を次の表 4.1 にまとめる。

表 4.1　「からこそ」とタイ語の意味・用法比較表

	原因と結果の関係を表す	逆接的な因果関係を表す	他ではなく、これであると強調する意味
から	○	×	×
こそ	×	△＊1	○
からこそ	○	○	○
phrɔ́ʔ	○	△＊2	×
cɯŋ／ləəy	○	△＊2	×
kɔ̂ʔ	△＊3	△＊3	○＊4
nîi-lɛ̂ʔ／nàʔ-sìʔ	×	△＊5	○＊4

＊1　「こそ」自体は因果関係を表さないため、単体では逆接的な因果関係を表すために用いることができない。ただし、前述された内容に反する事実を述べる場合には用いられる。「それは正しいと思っているようだが、その考えこそ間違いだ」のような反論する時に用いられる

＊2　phrɔ́ʔと cɯŋ、ləəy はいずれも逆接的な因果関係を表す場合に用いられる。ただし、話し手の主張・判断で成り立った逆接的な因果関係の場合のみと考える。一般常識に反す逆接では、因果関係が論理的に成り立たない場合があるため、そのような場合では phrɔ́ʔ、cɯŋ、ləəy のいずれも用い難いと考える。

＊3　kɔ̂ʔは単体でも、因果関係を表すことができる上に、逆接的な因果関係を表すこともできる。ただし、kɔ̂ʔ自体は元々接続表現ではなく、因果関係を表す表現ではない。kɔ̂ʔが因果関係を表す接続表現として用いられている場合が、kɔ̂ʔ-ləəy に置き換えることが可能である。また、「からこそ」構文との比較では、kɔ̂ʔ単体で因果関係を表す場合が少なく、「こそ」のように強調の意味・用法のほうで用いられる場合が多いと考える。

＊4　kɔ̂ʔと nîi-lɛ̂ʔ、nǎʔ-siʔは、いずれも「こそ」と同様、「他ではなく、これである」という意味で用いられる。ただし、nîi-lɛ̂ʔと nǎʔ-siʔは因果関係を表す機能がなく、「彼こそ」「あれこそ」「金こそ」のような名詞修飾の「こそ」と同様に用いられる。kɔ̂ʔは単体ではこのような用法で用いることが出来ないため、「こそ」の意味・用法だけを重視して比較するなら、nîi-lɛ̂ʔと nàʔ-sìʔのほうが「こそ」に近いと考える

＊5　nîi-lɛ̂ʔは「こそ」と同様、単体では因果関係を表すことができず、逆接的な因果関係を表すこともできない。ただし、phrɔ́ʔと cɯŋ、ləəy などと共起すれば、それが可能になる。

タイ語における因果関係を表す表現の中には phrɔ́ʔ、kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔ、cɯŋ、thŭŋ、ləəy のほかに、thŭŋ-dây や daŋ-nán などもある。これらの表現も因果関係を表す機能に関しては他の表現と変わらないため、thîi や nîi-lɛ̂ʔ、nǎʔ-siʔなどと併せれば、「からこそ」の対訳として用いられると考えられる。因果関係を

表す表現ではなく、強調の意味を持つ表現も多種多様であるため、それぞれの表現の組み合わせをさらに「からこそ」と検討する必要がある。

4.2　本章のまとめ

本章では判断系の表現を中心にして、タイ語の表現と比較考察した。本章で考察の対象として取り上げた日本語の表現は、「のだから」と「からこそ」である。それぞれの比較考察の結果は、それぞれの項目で述べたが、ここで改めてまとめる。まず、第3章で述べたとおり、事態系のほうは話し手の判断が含まれていないため、事態系という特徴をタイ語の表現の特徴と関連付けることが難しい。しかし、判断系の原因・理由表現という分類のほうでは、話し手の判断の根拠を表すという特徴があり、タイ語の表現と区別化することができる。

ところが、タイ語の原因と結果を表す表現の中には、判断の根拠を表す機能があるものが見られない。日本語では「のだから」が判断系の典型的な表現であり、事態系の原因・理由表現から区別化できるが、タイ語の phrɔ́ʔ と cɯŋ は「から」と同様、事態系または判断系の原因・理由文のいずれにも用いられる。事態系と判断系という限定的な特徴がないといえる。ただし、daŋ-nán は phrɔ́ʔ と cɯŋ と比べて、話し手の判断によるまとめた結果を表す機能があると考えられ、「のだから」に近い部分があると考えられる。また、タイ語では、thùɯɯ-wâa、sŏmkhuan、mây-sŏmkhuan、khoŋ、krǎʔmaŋ 、leey-krǎʔmaŋ など、話し手の判断を表わす様々な表現があり、内容に応じて phrɔ́ʔ、cɯŋ、daŋ-nán と一緒に用いることが可能である。要するに、判断を表す表現と因果関係を表す表現、両方を一緒に使用すれば、「のだから」のように因果関係も話し手の判断の根拠も表すことが可能である。「からこそ」の場合では、nîi-lɛ́ʔや nàʔ-siʔなどを phrɔ́ʔ、cɯŋ と一緒に用いることで対応できる。

原因・理由を表す機能がメインで、判断の根拠を表す機能がサブであると考えれば、第3章の事態系との比較考察と同様、原因・理由を表す以外の機能を重視にして比較考察するべきであろう。タイ語ではどの機能がどの表現が対応しているか、そして因果関係以外にも表す表現を見つけ出すことも重要である。daŋ-nán のように、cɯŋ に近いように見えて、交換も可能であっても、やはり何らかの相違点がある。この場合では、daŋ-nán のほうが話し手が決めた結論を表すという特徴があるが、その他にもあると考えられる。また、日本語の判断系の原因・理由表現は、「からには」や「以上」などもあり、これらとタイ語の比較考察は、今後の課題として残されている。

章注：

(1)　実は「から」は、事態系だけではなく、判断系の用法もある表現である。それに対して「のだからは」判断系の用法でしか使用されていないと考えられる。

(2)　前田（2009）によれば、「から」は後節に現れる文のタイプにあまり制限がなく、非常に多くの文のタイプが来るが、「ので」のほうは後節に現れる文のタイプに制限があり、事態系のほうはよく見られると述べている。

(3)　前田（2009）ページ 172 参考。

(4)　khɔ̌ɔ という表現は、相手から何らかを求める意味を持ち、「～てください」に近い表現である。ところが、この表現のみでは丁寧さがないため、「～くれ」というニュアンスになる場合もある。または、図々しく相

手から求めているというニュアンスになる場合もある。たとえ文末に丁寧語がある場合でも図々しく感じられることがあるため、他の表現と一緒に使用して、図々しさを和らぐべきの場合がある。実際、19）でも khɔ̌ɔの代わりに yàak-khɔ̌ɔのほうが丁寧である。

(5) phrɔ́ʔと cɯŋの違いに関しては、まだ明らかになっていない点があるが、文語的と口語的という違いがある。また、phrɔ́ʔは「から」と同様、結果の原因を示すという意味を強調しているという特徴があるといえる。それに対して、cɯŋは原因から結果を述べる表現であり、因果関係の流れを客観的に述べている特徴があると考えられる。

(6) phrɔ́ʔと cɯŋは、同じ文に使われることがあるが、その場合の phrɔ́ʔは原因・理由である前節に使われ、cɯŋはその前節と後節を接続するために使われる。要するに、その場合の接続詞は cɯŋのほうであり、phrɔ́ʔより cɯŋのほうが重要な因果関係を表す役目を持っている。また、その場合の phrɔ́ʔは前節が原因・理由であることを強調するため使われていると考えられ、省略してもいい場合が多い。ところが、例文 23）のような逆接と接続している因果構文の場合では、phrɔ́ʔも cɯŋと一緒に使われる場合が多いと考えられる。この場合では、phrɔ́ʔが tɛ̀ɛという逆接の表現と一緒になって、tɛ̀ɛ-phrɔ́ʔという複合的な表現になっており、逆接での因果関係を表す表現になっていると考えられる。（第 3 章 3.1.1 項目参考）

(7) 例 46）のタイ語文における conは、日本語では程度を表す「ほど」の意味で解釈することが可能であるが、結果を表す表現としても解釈することが可能である。つまり、この場合では、「うるさく感じるほど何度も注意する」と「何度も注意するからうるさく感じる」と二通りに解釈が可能であると考えられる。con については、第 4 章の第 3.3.1 項目を参考。

終章

1. 全体のまとめ

本章では、これまで述べてきたタイ語の文と表現の特徴、日本語の原因・理由文および原因・理由表現とタイ語の比較考察、事態系と判断系の表現のそれぞれの特徴的な意味・用法とタイ語の比較考察、それぞれの結果をまとめて、今後の課題についても述べる。

1.1 文構造と接続表現について

序章および第1章では、文構造と因果関係を表す表現について述べた。日本語における原因・理由文は複文構造の典型であり、「カラ」や「ノデ」などが原因・理由を表す接続表現である。原因・理由文では、基本的に従属節が原因・理由節であり、主節が結果節である。ただし、「カラ」や「ノデ」などの接続表現ではなく、テ形による接続で原因・理由を表す場合もある。また、日本語における原因・理由表現は、「事態系」「判断系」「原因・理由を表さない系」の3種類に分けることができる。

それに対して、タイ語では、節と節の関係が原因と結果で構成されている文は、複文と重文に分けられる。この違いは、原因・理由表現自体の意味・用法に直接の関わりがないが、日本語とタイ語の間にある原因・理由文の構造や分類に関する概念の違いを考察する際に関わってくる。

タイ語の複文は、日本語と同様、主節と従属節から構成されている。ただし、タイ語における原因と結果の関係で結び付く複文は、結果節が必ず主節になるとは限らない。タイ語では、原因・理由節と結果節を接続するのに用いる表現が基本的に「原因・理由表現」と「結果表現」の2種類に分けられる。表現自体が表す意味から考える場合、「原因・理由表現」は原因・理由を表す表現であり、「結果表現」は結果を表す表現である。または、構造的に考える場合、「原因・理由表現」は後が原因・理由節であることを示すものであるのに対して、「結果表現」は結果節を示すものであるともいえる。原因・理由表現を複文で接続表現として用いる場合、その複文は日本語と同様で、主節が結果節である。逆に、結果を表す表現が接続表現の場合、その複文の主節が原因・理由節になる。

ただし、タイ語の複文で接続表現として用いられる結果を表す表現は、conのみである。このconを接続表現として用いる場合、単純に結果を表すだけではなく、継起関係も表し、従属節における述語の動詞の頻度・程度も表わす。日本語と比較した場合、conが日本語の原因・理由表現に対応していない場合もある。それに対して、タイ語における原因・理由を表す表現は、phrɔ́ʔが代表的であり、そのほかにはnûaŋやhèetなどがある。phrɔ́ʔは基本的に単体でも接続表現として用いられるが、ほかの表現と組み合わさる場合も多い。nûaŋとhèetは基本的に単体で接続表現として用い難く、nûaŋ-càak、hèet-wâaの形式で用いることが一般的である。

一方、タイ語の重文である因果構文は、結果表現が接続表現である。cɯŋとləəyが代表的な接続表現で、そのほかにchàʔnánとdaŋnánもよく見られる。phrɔ́ʔ-chàʔnán-cɯŋやphrɔ́ʔ～cɯŋなど、重文で用いる結果を表す表現形式の中で、phrɔ́ʔなど原因・理由表現を用いる場合もあるが、重文で原因・理由表現を接続表現として用いることはできない。

大まかではあるが、タイ語における因果構文の分類をまとめると、複文構文と重文構文に分けられる。そして、複文の因果構文は原因・理由構文と結果構文の 2 種類があるのに対して、重文の因果構文は結果構文のみである。それぞれの構文には決まった接続表現が存在し、用いる接続表現により構文の分類が決定されるといえる。phrɔ́ʔは複文の原因・理由構文に、con は複文の結果構文に、cɯŋ は重文の結果構文に接続表現としての使用が限定される。

ところで、タイ語の重文は、主節と従属節に分けられるだけではなく、それぞれが対等である節と節から構成されているという構文という定義がある。Phrayaa Upphakitsilpasan（1937）及び Kamchai（2009）によれば、重文は一つの文として成立している節が二つ以上から構成されている構文であると述べている。しかし、この重文の定義に関しては、不可解な点が多いと考える。

第一に、タイ語における複文構造である原因・理由文でも、原因・理由節と結果節がそれぞれ一つの文として成立している場合が多くあり、この定義だけでは複文と重文を区別することができない。

1a） มีคนบอกว่า “ความชอบ” สำคัญกว่า “ความรัก” เพราะความชอบอยู่ยืนยาวกว่า

mii	khon	bɔɔk	waa	khwaam	chɔ̂ɔp	sǎmkhan	kwàa	khwaam	râk	phrɔ́ʔ
ある	人	言う	COMP	名詞化	好き	大切	より	名詞化	愛する	CON

khwaam	chɔ̂ɔp	yùu	yuɯn-yaaw	kwàa
名詞化	好き	いる	長く	より

「好き」のほうが「愛する」より長く続けられるから、「好き」のほうが大事だと誰かが言ってた。

≪タイ≫（Win Lyovarin：*Nay Lum Rak*）

1b） มีคนบอกว่า “ความชอบ” สำคัญกว่า “ความรัก”

mii	khon	bɔɔk	waa	khwaam	chɔ̂ɔp	sǎmkhan	kwàa	khwaam	râk
ある	人	言う	COMP	名詞化	好き	大切	より	名詞化	愛する

「好き」のほうが大事だと誰かが言ってた。

1c） เพราะความชอบอยู่ยืนยาวกว่า

phrɔ́ʔ	khwaam	chɔ̂ɔp	yùu	yuɯn-yaaw	kwàa
CON	名詞化	好き	いる	長く	より

「好き」のほうが「愛する」より長く続けられるからだ。

第二に、節と節がそれぞれ対等であるかどうかに関する定義も明らかになっていない。原因・理由構文と結果構文は、いずれも原因・理由節と結果節から構成されている構文であるにもかかわらず、原因・理由構文だけが複文で、結果構文が複文の場合もあり、重文の場合もある。

第三に、日本語の場合では、重文は並列的に並んでいる構文に限られるが、タイ語では並列ではなくても、逆接構文の場合も重文として扱う。日本語では、「大地は割れ、海は涸れた」など、それぞれの節が互いに互いを従属せず、対等である場合のみに重文として扱うと考えるが、タイ語の場合ではそれぞれの節が因果関係で並んでいる場合でも重文として扱う。しかし、それぞれの節が対等であるかどうかで複文か重文かを分けるのであれば、結果構文が重文であることの説明が付かない。

このように、タイ語における複文と重文に関する分類は、複雑な問題がある。特に日本語と比較考察する際には、この問題が原因で様々な不合理な点が生じる。節と節の対等さという定義から離れて、用いる表現によって文の分類が決まるという定義を重視したほうが適切であり、タイ語では複文か重文かという問題を越えて日本語と比較考察ができると考える。

日本語と比較する場合、複文であっても、重文であっても、原因・理由と結果の関係で節と節が結び付けられているのであれば、いずれも日本語の原因・理由文に対応すると考えられる。ただし、タイ語における重文のほうの結果表現で節と節を結び付ける文は、日本語の原因・理由文と同じ節順を持つが、phrɔ́ʔ構文などの複文は日本語と逆の節順を持つ。この節順に関する相違点は、文全体の意味に関わらない場合が多く、「結果節＋phrɔ́ʔ＋原因節」の構造であっても、「原因節＋cɯŋ＋結果節」であっても、意味的には「原因節＋から＋結果節」に対応する。しかし、前節と後節が並列的に原因と結果の関係だけではなく、前後の継起関係もある文構造の場合、「結果節＋phrɔ́ʔ＋原因節」の構造では日本語文に対応できない場合がある。主に、「風邪をひいて、学校を休んだ」のような場合は、原因から結果の順番で節が並んでいて、継起関係もあるが、「結果節＋phrɔ́ʔ＋原因節」はその構文とは節順が逆であるため、同じような継起関係は成り立たないと考える。

1.2　タイ語における複合タイプと共起タイプの表現

タイ語の表現は、単体で用いること以外に、二つ以上の表現を組み合わせて用いることも多い。形式的には、二つ以上の表現を結合に用いる「複合タイプ」と、文中に別々の位置に用いるが、意味・用法が連携している「共起タイプ」と、2 種類に分けられる。例えば、phrɔ́ʔ-chàʔnán や phrɔ́ʔ-chàʔnán-cɯŋ などは複合タイプであり、日本語の接続詞類に対応し、phrɔ́ʔ～cɯŋ は共起タイプで日本語の接続助詞類に対応する。

複合タイプと共起タイプの表現形式は、因果関係を表す表現以外にも存在するが、本研究では因果関係を表す表現のみ考察の対象にした。原因・理由表現と結果表現は、いずれも複合タイプの表現形式が存在する。しかし、共起タイプの表現形式が存在するのは、結果表現のみである。phrɔ́ʔ～cɯŋ と phrɔ́ʔ～chàʔnân-lɤɤy はいずれも原因・理由を表す phrɔ́ʔが含まれているが、いずれも結果を表す表現形式である。共起タイプは、主に原因・理由表現と結果表現が同文に用いられる形式が多いが、結果表現のみで構成されているものもある。例えば、daŋnán～cɯŋ や chàʔnân～cɯŋ などである。

基本的に複合タイプと共起タイプの形式内には、いずれも基礎となる表現が一つだけ存在すると考える。その基礎表現以外の部分を取り除いても、文全体の意味は殆ど変わらない場合が多い。要するに、基礎表現はそのまま同じ文で複合タイプと共起タイプの表現形式の代わりに用いられるといえる。例えば、phrɔ́ʔ-chàʔnán-cɯŋ と phrɔ́ʔ～cɯŋ は両方とも cɯŋ が基礎表現であり、phrɔ́ʔ-chàʔnán と phrɔ́ʔを取り除いて、cɯŋ だけを残しても同じ文で用いられる。言い換えれば、意味・用法が基礎表現に連動いている表現は、省略することが可能であるともいえる。複合タイプと共起タイプの形式内で、文の中で最も重要な役割を果たしている表現が基礎表現になると考える。主に、節と節の関係を表す表現、または節と節を接続する表現が基礎表現になりやすいと考える。phrɔ́ʔ-chàʔnán-cɯŋ と phrɔ́ʔ～cɯŋ は、いずれも cɯŋ が接続表現であり、最も重要な役割を持っているため、cɯŋ はこれらの表現形式の基礎表現である。言い換えれば、phrɔ́ʔ-chàʔnán-cɯŋ の phrɔ́ʔ-chàʔnán、phrɔ́ʔ～cɯŋ の phrɔ́ʔは、省略しても問題な

い。ただし、文の中で重要な役割を果たしているという基礎表現の条件は不確定な条件であるとも考える。実際、phrɔ́ʔ-chàʔnán-cɯŋ の基礎表現は必ず cɯŋ とは限らず、chàʔnán を基礎表現として扱うことが可能な場合もある。

複合タイプ・共起タイプの形式内には、文への依存レベルがあるとも考えられる。基礎表現は文の中で重要な役割を持ち、省略は許され難いため、複合タイプ・共起タイプの形式内で最も依存レベルが高い部分は基礎表現である。基礎表現になる条件は不確定であるが、依存レベルを考慮すれば、文構造を説明する重要な手がかりとなろう。

まず、原因・理由表現と結果表現で構成されている複合タイプと共起タイプは、ほぼ例外なく結果表現のほうが基礎表現になる。その理由は、タイ語で原因・理由表現と結果表現を同文で用いられるのは、結果表現が接続表現である場合に限られているからある。つまり、結果表現のほうが必ず原因・理由表現よりも文への依存レベルが高く、複合タイプと共起タイプの中で省略が許され難い部分である。複合タイプの phrɔ́ʔ-chàʔnán-cɯŋ の中には原因・理由表現 phrɔ́ʔが含まれているが、この表現形式は結果表現であるため、原因・理由を表す機能がなく、phrɔ́ʔの文への依存レベルが最も低い。それに対して、chàʔnán と cɯŋ の文への依存レベルが高く、基礎表現になりうる部分である。一方、共起タイプの phrɔ́ʔ～cɯŋ にも phrɔ́ʔはあるが、接続表現として働いているのは cɯŋ のほうであり、cɯŋ のほうが文への依存レベルが高い。

2a） เขาไม่มาแล้ว（เพราะ）ฉะนั้นจึง ไม่จำเป็นต้องรอเขา

khǎw mây maa lɛ́ɛw (phrɔ́ʔ) chàʔnán-cɯŋ mây cam-pen-tɔ̂ɔŋ rɔɔ khǎw
彼 NEG 来る もう (CON1) CON2 NEG 必要 待つ 彼

彼はもう来ないから、待つ必要はない。

2b） (เพราะ) เขาไม่มา แล้ว จึง ไม่จำเป็นต้องรอเขา

(phrɔ́ʔ) khǎw mây maa lɛ́ɛw chàʔnán-cɯŋ mây cam-pen-tɔ̂ɔŋ rɔɔ khǎw
(CON1) 彼 NEG 来る もう CON2 NEG 必要 待つ 彼

彼はもう来ないから、待つ必要はない。

次は、chàʔnán-cɯŋ や daŋnán-ləəy などの結果表現のみで構成されている複合タイプは、cɯŋ または ləəy が含まれている場合、cɯŋ と ləəy が最も文への依存レベルが高い場合が多いと考える。chàʔnán と daŋnán は主語の前に位置する表現であるのに対して、cɯŋ と ləəy は主語の後に位置する表現である。要するに、主語が存在する場合、主語が chàʔnán と cɯŋ の間に位置するため、chàʔnán-cɯŋ と daŋnán-ləəy の表現形式が用いられない。言い換えれば、chàʔnán-cɯŋ と daŋnán-ləəy という表現形式の使用は、主語がない場合に制限されている。

そして、chàʔnán と daŋnán は、結果節に主語がない場合には用い難い表現であるのに対して、cɯŋ と ləəy は主語がなくても用いられやすい表現である。そのため、主語がない場合にしか使用できない chàʔnán-cɯŋ と daŋnán-ləəy は、主語がないと用い難い傾向がある chàʔnán と daŋnán を省略することも難しくなる。比較的に、cɯŋ と ləəy のほうが残りやすく、基礎表現になりやすいと考える。とはいえ、chàʔnán-cɯŋ の cɯŋ を省略して chàʔnán のほうを残すことが可能な場合もある。ただし、比較的に cɯŋ

を残す場合が自然な文になる場合が多いと考える、また、daŋnán-lɤɤy は比較的に lɤɤy のほうが省略され難い。cɯŋ と比べて、lɤɤy のほうは継起関係を表す場合があるため、そういった場合では lɤɤy を残さないとニュアンスが変わったり、不自然な文になったりする場合があるため、lɤɤy は cɯŋ よりも文への依存レベルが高いと考えられる。

3a） วันนี้ว่างมาก（ดังนั้น）เลยไปเที่ยวไกลๆได้

wan-níi	wâaŋ	maak	(daŋnán)	lɤɤy	pay-thîaw	klay-klay	dây
今日	暇	とても	(CON1)	CON2	遊びに行く	遠く	可能

今日は暇なので遠くまで遊びに行ける。

？3b） วันนี้ว่างมาก ดังนั้น（เลย）ไปเที่ยวไกลๆได้

wan-níi	wâaŋ	maak	daŋnán	(lɤɤy)	pay-thîaw	klay-klay	dây
今日	暇	とても	CON1	(CON2)	遊びに行く	遠く	可能

今日は暇だから遠くまで遊びに行ける。

さらに、lɤɤy と cɯŋ、chàʔnán、daŋnán の間には、文体的な相違点もあるため、片方を省略すれば、口語的になったりする場合もある。元々、タイ語では表現を複数に用いれば用いるほど文語的になる傾向があるため、表現を単体で用るほうが口語的である場合が多いと考える。

一方、共起タイプの chàʔnán～cɯŋ と daŋnán～lɤɤy は、複合タイプと違い、主語の有無を問わず用いられる表現形式である。そのため、chàʔnán と cɯŋ の文への依存レベルが対等で、chàʔnán と cɯŋ のいずれが省略されても文全体に影響がない場合がある。

4a） นี่เป็นการทดลองที่อันตราย（ฉะนั้น）เราจึงต้องระวังมาก

nîi	pen	kaan-thót-lɔɔŋ	thîi	antàʔraay	(chàʔnán)	raw	cɯŋ	tɔ̂ɔŋ
これ	COPU	実験	COMP	危険	(CON1)	我々	CON2	義務

ràʔwaŋ	maak
注意	とても

これはとても危険な実験のため、我々は本当に気をつけなければならない。

4b） นี่เป็นการทดลองที่อันตราย ฉะนั้นเรา（จึง）ต้องระวังมาก

nîi	pen	kaan-thót-lɔɔŋ	thîi	antàʔraay	chàʔnán	raw	(cɯŋ)
これ	COPU	実験	COMP	危険	CON1	我々	(CON2)

tɔ̂ɔŋ	ràʔwaŋ	maak
義務	注意	とても

これはとても危険な実験のため、我々は本当に気をつけなければならない。

特に、4a）と 4b）のような命令表現が用いられている場合では、chàʔnán を残しやすくなると考えられる。ただし、共起タイプの chàʔnán～cɯŋ と daŋnán～lɤɤy は、chàʔnán か daŋnán の省略が許され難い

場合がないもの、cɯŋ か ləəy の省略が許され難い場合がある。次の例文 5）では、chàʔnán を省略することが可能であるが、cɯŋ の省略は許され難い。

??5）　เขาไม่สบาย ฉะนั้นเขา（จึง）ไปโรงพยาบาล

khǎw	mây-sa̰ʔbaay	chàʔnán	khǎw	(cɯŋ)	pay	rooŋ-phaʔyaabaan
彼	具合が悪い	CON1	彼	(CON2)	行く	病院

彼は具合が悪かったため、病院へ行った。

このような文への依存レベルの差が出てくる場合があるため、複合タイプ・共起タイプを問わず、cɯŋ と ləəy は常に最も文への依存レベルが高い表現であると考えるべきであろう。

また、原因・理由表現または結果表現である複合タイプ・共起タイプの表現形式は、原因・理由表現と結果表現のほかに、判断表現や引用表現などが含まれているものもある。ただし、原因・理由表現と結果表現の複合タイプ・共起タイプは、必ず原因・理由表現または結果表現が形式内に含まれていなければならない。そして、原因・理由表現と結果表現の複合タイプ・共起タイプでは、判断表現や引用表現などが基礎表現になることはない。必ず原因・理由表現または結果表現が基礎表現である。

6）　ฉันเป็นห่วงเขาเพราะ（ว่า）ฉันเป็นเพื่อนเขา

chǎn	pen-hùaŋ	khaw	phrɔ́ʔ	(wâa)	chǎn	pen	pûan	khǎw
私	心配	彼	CON	(COMP)	私	COPU	友達	彼

彼は私の友達だから、彼のことが心配だ。

例えば、phrɔ́ʔ-wâa には wâa という引用表現が含まれているが、この表現形式の基礎表現は phrɔ́ʔである。

1.3　タイ語の表現を日本語と比較する場合

日本語の場合では、「カラ」と「コソ」から構成されている「カラコソ」や、「セイ」と「デ」から構成されている「セイデ」などの複合的な表現が存在するが、タイ語と比べて構成の法則と構成された表現の意味・用法に関する定義は、タイ語の複合タイプとは異なっている。タイ語では、複合的に表現を結合して用いる場合、その複合的な表現の意味・用法が基礎となる表現に依存している上に、意味・用法が変わる場合が殆どない。日本語の場合では、複合的な表現には元の表現と同じ意味・用法を持っていても、さらに特徴的な意味・用法も追加されているものが多くあり、元の表現と置き換えることが出来ない場合も多くある。「カラコソ」は「カラ」と同様、原因・理由を表す意味・用法を持っているが、「カラ」にない意味・用法も持っている。例え言い換えることが可能な場合があっても、「カラコソ」構文と「カラ」構文のニュアンスは同じではないことは明らかであろう。それに対して、タイ語の場合では、phrɔ́ʔ-chàʔnân-cɯŋ や dûay-hèet-níi-cɯŋ などのように、複数の表現から構成されている複合的な表現であっても、実質の意味・用法は基礎表現である cɯŋ とは変わらず、いずれも cɯŋ と置き換えることが可能である。タイ語では基礎表現と比べて別の意味・用法が追加されてい

る表現形式も存在するが、数が少ない上に、言い換えが可能な場合も多いと考える。例えば、kɔ̂ʔ-phrɔ́ʔは phrɔ́ʔと比べて、話し手による原因・理由への強調、または言い訳などのニュアンスが含まれているが、phrɔ́ʔで置き換えても不自然ではない場合が多い。タイ語で基礎表現と置き換えられないほど意味・用法が変わる表現形式は、管見の限り、まだ見つからない。

また、phrɔ́ʔ～cɯŋ や daŋnán～ləəy など、タイ語では共起タイプの表現があるのに対して、日本語では「（せっかく）～からには～」や「～のは～からだ」などの表現形式が見られる。これらの表現に関しても、日本語の方は慣用的な意味・用法で用いるものが多くあり、決まった形式で用いられているものも多い。それに対して、タイ語の共起タイプの表現は基礎表現であり、それ以外の表現は基礎表現を補足するために用いられているものが殆どである。phrɔ́ʔ～cɯŋ は実質上 cɯŋ と変わらず、結果節を示す cɯŋ と補足するために原因・理由を示す phrɔ́ʔが用いられているため、phrɔ́ʔがなくても文全体に影響はない。それに対して、「（せっかく）～からには～」は「セッカク」がなくてもいい場合もあり、「カラニハ」構文で必ず「セッカク」が用いられるとは限らず、「（せっかく）～からには～」と「からには」の間には相違点がある。「～のは～からだ」も、あることがらを先に述べて、その原因は何であるかを述べる構文で用いる表現形式で、「ノハ」と「カラダ」を両方とも用いなければ、その構文が成立しない。このように、日本語の表現形式は部分的な省略が許されず、決まった意味・用法で用いられているのが一般的である。それに対して、タイ語の phrɔ́ʔ～cɯŋ や daŋnán～ləəy などは、基本的には基礎表現と同じ意味・用法で用いられているものが殆どであり、日本語と比べて置き換えの柔軟性は高いが、個別的な意味・用法は殆どないといえる。

1.4　事態系と判断系をタイ語と比較考察する結果

本研究では、事態系と判断系という日本語の分類方法を基準にして、タイ語の表現と比較考察したが、結果として、事態系という分類をタイ語の表現に関連付けることは難しい。元々、日本語における事態系は、話し手の判断とは関係なく、原因と結果の関係を表す表現のことである。この分類を基準にしてタイ語と比較する場合、殆どの因果関係を表す表現がこの部類に入ることになるため、分類する必要性が薄い。一方、判断系のほうは、話し手の判断の根拠も表す原因・理由表現を示す。しかし、言い換えれば、原因・理由を表すという〈主たる〉機能のほかに、話し手の判断の根拠も表すという〈副次的〉機能も持っている表現を示すともいえる。因果関係だけを表すか話し手の判断の根拠も表すかという違いでタイ語の表現と比較考察すれば、タイ語の表現の分類も可能であることを試みたが、原因と結果の関係を表す表現の殆どが事態系であるという結果に行き着いた。

日本語では「ノダカラ」という判断系の典型的な表現があり、事態系の原因・理由表現から区別することができる。それに対し、タイ語の phrɔ́ʔや cɯŋ などはいずれも「カラ」と同様で、事態系または判断系の原因・理由文のいずれにも用いられるものが多い。言い換えれば、事態系と判断系という限定的な特徴で区別できる表現はタイ語にはないと考える。

一応、daŋ-nán という話し手の判断の根拠を表す機能も持っている表現もある。この表現は、話し手自身の判断または決断で出した結果を表す機能があり、phrɔ́ʔや cɯŋ と比べて「ノダカラ」に近いといえる。とはいえ、この表現もまた「ノダカラ」と違い、判断の根拠を表す場合に限定されていてる表現ではなく、事態系のように用いることも可能である。

そのため、日本語とタイ語の表現を比較考察する場合、事態系と判断系を重視せず、原因・理由を表す機能が〈主たる〉機能で、判断の根拠を表す機能が〈副次的〉機能であると考える。そして、原因・理由を表す以外の機能を重視して、日本語とタイ語の表現を比較考察すべきであろう。タイ語ではどの機能がどの表現が対応しているか、因果関係以外にも表す表現は存在するか、このような疑問を中心にして考察することが重要であろう。daŋ-nán のように、cɯŋ に近いように見えて、交換も可能であっても、やはり何らかの相違点があり、それぞれの特徴がある。この場合では、daŋ-nán のほうが話し手が決めた結論を表すという特徴があるが、その他にもあると考えられる。日本語ほどそれぞれの特徴は目立つものではないが、その特徴により、文のニュアンスが変わる場合がある

タイ語の因果関係を表す表現は、単独の機能しか持たないものが殆どであり、日本語における因果関係以外にも何らかの意味・用法を表わす表現と比較する場合、タイ語の因果関係を表す表現の単体だけでは、十分にそれらの日本語の表現に対応できない事実がある。「オカゲデ」「セイデ」「アマリ（ニ）」「ダケニ」「ダケアッテ」「カラコソ」はいずれも特徴的な意味・用法があり、これらの表現を訳す場合、原因と結果の関係しか表さない phrɔ́ʔや cɯŋ などだけでは、当然表現しつくせない。phrɔ́ʔと cɯŋ 以外にも、それぞれの日本語の表現の〈副次的〉機能に対応している表現も用いるべきであると考える。そして、これは話し手の判断の根拠を表す機能も、〈副次的〉機能の一つと扱うべきであろう。例えば、「ダケニ」には程度を表す意味・用法があるため、phrɔ́ʔと cɯŋ のほかに yîŋ や sǒm などの表現もその内容に合わせて用いるべきであると考える。

2. 今後の課題

本研究では、日本語における原因・理由表現とタイ語の表現を比較考察したが、まだ考察の範囲は狭く、日本語にもタイ語にもまだ考察していない表現が残っている。日本語は、「カラ」と「ノデ」をはじめ、「タメニ」、「オカデゲ」、「セイデ」、「アマリニ」、「ダケニ」、「ダケアッテ」、「ノダカラ」、「カラコソ」をタイ語と比較考察したが、比較の対象にタイ語の表現は殆どphrɔ́ʔと cɯŋ であり、不十分な点があると考える。タイ語では phrɔ́ʔと cɯŋ は代表的な原因と結果の関係を表す表現ではあるが、これら以外にも様々な表現がある。chàʔnán、daŋnán、tham-hây、con などの表現も本研究で日本語と比較考察したが、本研究では用例で用いられている表現を中心にして比較考察をしたため、それぞれの使用の偏りがある。それぞれの特徴をさらに明確にするためには、用例に出てこない表現で置き換えてさらに比較考察することも必要であると考える。さらに、本研究で比較考察した日本語の表現に関しても、まだ考察していない部分がある。例えば、皮肉な意味で用いられている「オカゲデ」、マイナスの意味ではない「セイデ」、それぞれのタイ語との比較考察が残っている。また、日本語には「バガリニ」「モノデ」「モノダカラ」「カラニハ」「以上」などの原因・理由表現が多数ある。これの表現も、用例を集め、様々なタイ語の表現と比較考察することが必要である。

事態系と判断系を分けて比較考察する必要がなくなると考えるが、それぞれの意味・用法の特徴を重視して比較考察することが重要であると考える。日本語のほうはそれぞれの表現の特徴が明らかになった部分が多く、分別することも可能であるが、タイ語のほうは分別することはおろそか、それぞれの表現の特徴はまだ十分に解明されていない。本研究ではタイ語の原因と結果を表す表現を「原因・理由表現」と「結果表現」に分けたが、いずれもそれぞれの〈主たる〉機能で分別したに過ぎな

い。それぞれの表現が持っている個性をより明確にし、分別することが重要な今後の課題である。そうすれば、日本語との比較考察もさらに円滑に進むことができ、新たな研究に繋がりやすくなると考える。

【参考文献】（日本語文献）

網浜信乃（1990）「条件節と理由節―ナラとカラの対比を中心に―」『待兼山論叢　日本学編』24 大阪大学文学部.

庵功雄・中西久実子・高梨信乃・山田敏弘（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.

李吉鎔（2004）「中間言語話者の原因・理由を表す表現の切換え：切換えと表現形式の習得をめぐって」『阪大社会言語学研究ノート』第 6 巻　pp. 121-138　大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.

池上素子（2004）「「ため」と「ために」：農学系論文コーパスの分析から」『北海道大学留学生センター紀要』第 8 号　pp. 14-27　北海道大学留学生センター.

―――（2005）「原因を表す「によって／により」―学術論文コーパスにおける用いられ方」『日本語教育』第 127 号　pp. 21-30　日本語教育学会.

―――（2008）「原因・理由を表す「ため」と「によって」」『北海道大学留学生センター紀要』第 11 巻　pp. 19-38　北海道大学留学生センター.

―――（2009）「因果関係を表す「結果」の使用実態-―学術論文コーパスにおける用いられ方」『北海道大学留学生センター紀要』第 13 号　pp. 22-39　北海道大学留学生センター.

―――（2010）「因果関係を表す「結果」の用法」『日本語教育』第 144 号　pp. 109-120　日本語教育学会.

伊藤智博（1996）「原因・理由の「だけに」に関する一考察」『三重大学日本語学文学』第 7 巻　pp. 54-44　三重大学日本語学文学研究室.

今井忍（2011）「日本語とタイ語の対照研究―2009 年度までの動向―」大阪大学　日本語日本文化教育センター

今尾ゆき子（1991）「カラ、ノデ、タメ--その選択条件をめぐって--」『日本語学　Vol.10　No.12』pp. 78-89　明治書院.

岩崎卓（1995）「ノデとカラ」宮島達夫・仁田義雄（編）『日本語類義表現の文法（下）複文・連分編』くろしお出版.

内田万里子（1998）「「から」と「ので」:その使い分けについて」『日本語・日本文化研究』第 6 号　pp. 14-27　京都外国語大学.

大島資生（2010）『日本語連体修飾節構造の研究』ひつじ研究叢書（言語編）第 78 巻　ひつじ書房.

尾方理恵（1993）「「から」と「ので」の使い分け」松村明先生喜寿記念会（編）『国語研究』明治書院.

加藤重広（2003）『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房.

加藤由紀子（2005）「原因・理由を表すテ形接続に関する一考察」『岐阜大学留学生センター紀要』2005 年号　pp. 13-24　岐阜大学.

上林洋二（1992）「理由を表す接続詞補稿：「から」と「ので」」『東海大学紀要　留学生教育センター』第 12 号　pp. 23-27　東海大学.

ケウワッタナ ピヤトーン（2014a）「接続表現をめぐる日タイ対照研究―原因・理由節で用いる接続表現を中心として―」『大東文化大学外国語学研究』第 15 号　pp. 201-207　大東文化大学大学院外

国語学研究科.
———（2014b）「原因・理由表現をめぐる日タイ対照研究—日本語における「から・ので」とタイ語における“phrɔ́ʔ”を中心に—」『日タイ言語文化研究』第 2 号　pp. 153-163　日タイ言語文化研究所.
———（2014c）「原因・理由文をめぐる日タイ対照研究—原因・理由文の分類について—」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』第 11 号　pp. 131-136　国際交流基金バンコク日本文化センター.
———（2015a）「事態系の原因・理由表現をめぐる日タイ対照研究—「せいで」「おかげで」に対応するタイ語の原因・理由表現を中心に—」『語学教育研究論叢』第 32 号　pp. 1-22　大東文化大学語学教育研究所.
———（2015b）「原因・理由文をめぐる日タイ対照研究—タイ語の因果構文を中心として—」『大東文化大学外国語学研究』第 16 号　pp. 145-150　大東文化大学大学院外国語学研究科.
———（2015c）「原因・理由表現の日タイ語対照研究—タイ語の因果構文の特徴と分類の考察を中心に—」『語学教育研究所創設 30 周年記念フォーラム』pp. 283-298　大東文化大学語学教育研究所.
———（2015d）「事態系の原因・理由表現をめぐる日タイ対照研究—「ため（に）」と対応するタイ語における原因・理由表現を中心として—」『日タイ言語文化研究』第 3 号　pp. 131-142　日タイ言語文化研究所.
———（2016a）「原因・理由表現をめぐる日タイ対照研究—「のだから」を中心に—」『語学教育研究論叢』第 33 号　pp. 19-35　大東文化大学語学教育研究所.
———（2016b）「原因・理由表現をめぐる日タイ対照研究—「だけに」と「だけあって」を中心に—」『大東文化大学外国語学研究』第 17 号　大東文化大学大学院外国語学研究科.
言語学研究会・構文論グループ（1985a）「条件づけを表現するつきそい・あわせ文（1）—その 1・まえがき—」『教育国語』81（むぎ書房）
———（1985b）「条件づけを表現するつきそい・あわせ文（2）—その 2・原因的なつきそい・あわせ文—」『教育国語』82（むぎ書房）
———（1985c）「条件づけを表現するつきそい・あわせ文（3）—その 3・条件的なつきそい・あわせ文—」『教育国語』83（むぎ書房）
———（1986）「条件づけを表現するつきそい・あわせ文（4）—その 4・うらめ的なつきそい・あわせ文—」『教育国語』84（むぎ書房）
小林賢次（1992）「原因・理由を表す接続助詞--分布と史的変遷--」」『日本語学』　Vol.11　No.6　pp. 131-141　明治書院.
澤西稔子（2003）「動詞・連用形の性質」『日本語・日本文化』第 29 号　pp. 47-66　大阪大学日本語日本文化教育センター.
周升干（2009）「待遇表現から見る原因・理由を表す「カラ」「ノデ」：中国の日本語学習者と日本語母語話者を比較して」『言語文化学研究　言語情報編』第 4 号　pp. 123-135　大阪府立大学人間社会学部言語文化学科.
白川博之（1994）「「から」と「からだ」」『広島大学日本語日本語教育学科紀要』第 4 号　pp. 63-74　広島大学教育学部日本語教育学科.

———（1995）「理由を表わさない「カラ」」仁田義雄（編）『複文の研究（上）』くろしお出版.
———（2009）『「言いさし文」の研究』くろしお出版.
鈴木庸子（2008）「中国語母語話者における「のだから」の誤用傾向とその要因 : KY コーパスのデータをもとに」『甲南大学紀要』文学編　第 153 号　pp. 21-33　甲南大学.
砂川由利子（2005）『文法と談話の接点-日本語の談話における主題展開機能の研究』くろしお出版.
高橋清子（2011）「タイ語の関係節構文」『70 年代生成文法再認識—日本語研究の地平—』pp. 253-275　開拓社.
———（2013）「タイ語の節連接標識」『神田外語大学紀要』第 25 号　pp. 157-178　神田外語大学.
髙宮優実（2011）「自己弁護の「ものだから」：説得の「のだから」、理由の「から」と比較して」『言語と文化』第 24 号　pp. 124-144　文教大学大学院言語文化研究科付属言語文化研究所.
———（1998）「接続表現をめぐる日タイ語対照研究」『講座日本語教育』第 33 分冊　pp. 115-143　早稲田大学日本語研究教育センター.
田中寛（2002）『対照言語学的手法・視点にもとづく、日本語とタイ語の基本語彙・語法に関する比較研究』科学研究費助成報告書.
———（2004a）『統語構造を中心とした日本語とタイ語の対照研究』ひつじ書房.
———（2004b）「接続詞のように使われるタイ語の thamhây について—「使役」と因果関係—」『指向　第 2 号』pp. 77-92　大東文化大学大学院外国語学研究科日本語学専攻.
———（2004c）「「カラ」と「ノデ」をめぐる諸問題　—認知的把握にもとづく再考—」『日本語複文表現の研究　—接続と叙述の構造—』白帝社.
———（2010）『複合辞からみた日本語文法の研究』ひつじ研究叢書（言語編）第 85 巻　ひつじ書房.
田野村忠温（1993）「「のだ」の機能」『日本語学　Vol.12　No.11』pp. 43-50　明治書院.
玉村文郎（2002）『日本語学と言語学』明治書院.
田村早苗（2013）『認識視点と因果：日本語理由表現と時制の研究』くろしお出版.
趙順文（1988）「「から」と「ので」—永野説を改釈する」『日本語学』7（7）.
寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版.
———（1984）『日本語のシンタクスと意味 II』くろしお出版.
———（1991）『日本語のシンタクスと意味 III』くろしお出版.
———（1992）『寺村秀夫論文集 I - 日本語文法編』くろしお出版.
———（1993）『寺村秀夫論文集 II - 言語学・日本語教育編』くろしお出版.
東寺祐亮（2012）「ホドの構造と解釈：比較相関構文におけるホドの項の選択」『九州大学言語学論集』第 33 号　pp. 1-40　九州大学大学院人文科学研究院言語学研究室.
———（2015）「程度表現のホドの意味的特性と構造」『九州大学言語学論集』第 35 号　pp. 227-238　九州大学大学院人文科学研究院言語学研究室.
富田隆行（1993）「原因・理由を表す「て」について　日本語教育の立場から」『東京大学留学生センター紀要』第 3 号　pp. 49-58　東京大学国際センター.
中里理子（1997）「順接条件を表す「には」「からには」「以上」」『学校法人佐藤栄学園埼玉短期大学研究紀要』第 6 号　pp. 115-123　埼玉短期大学.

仁田義雄編（1995a）『複文の研究（上）』仁田義雄編　くろしお出版.
———（1995b）『複文の研究（下）』仁田義雄編　くろしお出版.
———（2009）『仁田義雄　日本語文法著作選　第2巻　日本語のモダリティとその周辺』ひつじ書房.
日本語記述文法研究会（2008）『現代日本語文法6 第11部　複文』くろしお出版.
———（2012）『現代日本語文法7 第12部　談話　第13部　待遇表現』くろしお出版.
沼田善子（1986）「第2章　とりたて詞」奥津敬一郎・沼田善子・杉本武『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社.
野田春美（1992）「複文における「の（だ）」の機能 「のではなく（て）」「のでは」と「のだから」「のだが」」『阪大日本語研究』第4号　pp. 73-90　大阪大学文学部日本学科言語系.
萩原孝恵（2006a）「「だから」と「それで」と「そこで」の使い分け」『群馬大学留学生センター論集』第6号　pp. 1-11　群馬大学留学生センター.
———（2006b）「接続詞「だから」の言語現象の考察--認知的制約と言語的制約」『言語文化教育学会第6回大会予稿集』pp. 144-161　言語文化教育学会.
———（2007a）「接続詞でみる日本語の言語社会--接続詞の位相について」」『言語文化教育学会第7回大会予稿集』pp. 144-161　言語文化教育学会.
———（2007b）「因果関係を表さない「だから」の存在」『昭和女子大学大学院言語教育・コミュニケーション研究』第2号　pp. 1-13　昭和女子大学.
———（2008）「人間関係と接続詞「だって」の使い方」『昭和女子大学大学院言語教育・コミュニケーション研究』第3号　pp. 37-54　昭和女子大学.
———（2012）『日本語教育の新潮流3「だから」の語用論―テクスト構成的機能から対人関係的機能へ』ココ出版.
蓮沼昭子（2011）「条件文と理由文の相関：「（ノ）ナラ」と「ノダカラ」を例に」『日本語日本文学』第21号　pp. 1-18　創価大学日本語日本文学会.
姫野伴子（1995）「「から」と文の階層性1―演述型の場合―」『坂田雪子先生古希記念論文集』.
廣田周子（1999）「理由を表す「だけに」」『文化外国語専門学校日本語課程紀要』　第13号　pp. 5-14　文化学園外国語専門学校.
許夏玲（2002）「文末の「カラ」と「カラダ」の意味用法：「ノダ」の用法との比較を通して」『言語文化論集』第23巻　第2号　pp. 67-79　名古屋大学.
藤田保幸（2006）「「語彙論的統語論」と引用研究：仁田義雄・阿部忍の所論について」『龍谷大学国際センター研究年報』第15号　龍谷大学国際センター.
堀池尚明（1999）「「シ」を用いた原因・理由表現について」『筑波日本語研究』　第4号　pp. 71-90、筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科日本語学研究室.
前田直子（1991）「「論理文」の体系性：条件文・理由文・逆条件文をめぐって」『大阪大学日本学報』第10号　pp. 29-43　大阪大学.
———（2003）「現代日本語における「様態節」をめぐって：その体系性と連続性」『研究年報』第50号　pp. 115-134　学習院大学.
———（2005）「現代日本語における接続助詞「し」の意味・用法:並列と理由の関係を中心に」

『人文』第4巻　pp. 131-144　学習院大学.
———（2006）「連用形派生の目的節について」益岡隆志・野田尚史・森山卓郎編『日本語文法の新地平3　複文・談話文』くろしお出版.
———（2009）『日本語の複文　条件文と原因・理由文の記述的研究』くろしお出版.
馬紹華（2013）「「以上」と「からには」の相違に関する考察」『日本語学論集』第9号　pp. 174-189　東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室.
益岡隆志（1997）『新日本語文法選書2　複文』くろしお出版.
———（2001）「説明・判断のモダリティ」『神戸外大論叢』第52号　第4号　pp. 1-25　神戸市外国語大学.
———（2001）「複文の意味分析--目的表現をめぐって」『国文学　解釈と教材の研究』第46号　第12号　pp. 30-33　学灯社.
———（2006）『条件表現の対照』くろしお出版.
———（2009）「連体節表現の構文と意味」『月刊言語』第38号　第1号　pp. 18-25　大修館書店.
———（2011）「原因理由を表すダケニとダケアッテの分化」『日本語・日本学研究』第1号　pp. 1-12　東京外国語大学国際日本研究センター.
———（2013a）「複文構文プロジェクトにおけるいくつかの話題」『国語研プロジェクトレビュー』第4巻　第2号　pp. 75-81　国立国語研究所.
———（2013b）『日本語構文意味論』くろしお出版.
益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法・改訂版』くろしお出版.
益岡隆志・野田尚史・森山卓郎編（2006）『日本語文法の新地平3　複文・談話編』くろしお出版.
益岡隆志・大島資生・橋本修・堀江薫・前田直子・丸山岳彦編（2014）『日本語複文構文の研究』ひつじ書房.
松岡洸司（1997）「感動詞における研究史と位置づけ」『上智大学国文学科紀要』第14号　pp. 31-50　上智大学国文学科.
三浦佑子（2007）「複文における複合接続助詞の機能--「せいで」・「おかげで」について」『言語科学論集』第11号　pp. 35-46　東北大学大学院文学研究科言語科学専攻.
皆島博（2003）「原因・理由を表す英語の従位接続詞と日本語の接続表現－英日パラレルコーパスを利用した分析－」『福井大学教育地域科学部紀要　第Ⅰ部　人文科学（外国語・外国文学編）』第59号　pp. 49-65　福井大学教育地域科学部.
宮島達夫・仁田義雄編（1995）『日本語類義表現の文法（下）複文・連文編』くろしお出版.
宮本マラシー（1990）『タイ語の重要な文法と会話』大阪外国語大学.
———（1997）『タイ語の言語表現』大阪外国語大学学術研究叢書17　大阪外国語大学学術出版委員会.
宮本マラシー・一宮孝子（2000）『日・タイ表現例文集』大阪外国語大学学術研究叢書25　大阪外国語大学学術出版委員会.
森田良行（1989）『基礎日本語辞典』　角川書店.
———（2002）『日本語文法の発想』　ひつじ書房.
森田良行・松木正恵（1989）『日本語表現文型：用例中心・複合辞の意味と用法』アルク.

矢島正浩（2012）「条件表現史上における原因理由文の変化の意味」『国語国文学報』第 70 巻 pp.11-36　愛知教育大学国語国文学研究室.
山下明昭・山内博之・島多麻美（2010）『「こそ」の用法分析』pp.10-27　文月刊行会.
山下好孝（1999）「「から」「ので」「て」：日本語の原因・理由を表す表現について」『北海道大学留学生センター紀要』第 3 巻　pp. 1-14　北海道大学留学生センター.
山田孝雄（1984）『日本文法学概論』宝文館.
———（2009）『日本文法学要論』書肆心水.
山中恵美子（1995）「『とりたて』という機能―「こそ」を中心に―」『日本語の主題と取り立て』益岡・野田・蓮沼編　くろしお出版.
山本もと子（2001）「接続助詞「から」と「ので」の違い--「丁寧さ」による分析」『信州大学留学生センター紀要／信州大学留学生センター編』第 2 号　pp. 9-21　信州大学留学生センター.
由揚（2014）「原因・理由を表す「テ」形節・「タメ（ニ）」節・「ノデ」節の使用制約：前・後件の「緊密性」という観点から」『文学史研究』第 54 号　pp. 44-54　大阪市立大学国語国文学研究室.
吉田永弘（2000）「ホドニ小史--原因理由を表す用法の成立--」『國語學』第 51 巻 3 号　pp. 74-87　日本語学会.
吉永尚（2012）「テ形節における統語的考察」『園田学園女子大学論文集』第 46 号　pp. 113-123　園田学園女子大学.

【参考文献】（タイ語文献）

ABK. 2008. *Waiyaakorn Radab 3 Samrab Triam Soop-wat-radab Phaasaa-Yiipun*. Bangkok：TPA Press.
Amara Prasitratsin. 2010. *Chanit khorng kham nay Phaasaa-Thai*. Bangkok：Chulalongkorn University Press.
Assadaayut Chuusrii. 2013. *STEP UP Kham Kariyaa-wiseet*. Bangkok：TPA Press.
Bussabaa Banjongmanii. 2007. *Waiyakorn Radap 2 Samrap triam sorp Wat-Radap Phaasaa-Yiipun*. Bangkok：TPA Press.
Bussabaa Banjongmanii. 2014. *Nihongo Akiko To Tomodachi 6*. Japan Foundation Press.
Debi JaratJaRungkiat. 2000. *Discourse Connectors in Thai from the Sukhothai Period to the present*. Bangkok：Chulalongkorn University Press.
Kanokwan Laohaburanakit Katagiri. 2007a. *Hop Step Jump 1*. Bangkok：Chulalongkorn University Press.
Kanokwan Laohaburanakit Katagiri. 2007b. *Hop Step Jump 2*. Bangkok：Chulalongkorn University Press.
Kamchai Tongloo. 2009. *Lak Phaasaa-Thai*. Bangkok：Ruamsan Press.
Methawee Yootthapongthada. 2001. *The Study of Relative Clause in Documents of the Rattanakosin Era*. Bangkok：Thammasat University Press.
Nawawan Phanmetha. 2010. *Waiyakorn Phaasaa-Thai*. Bangkok：Chulalongkorn University Press.
Paasinee Sornhiran. 1981. *thii sun an nai khunaanuprayook*. In akson-satt 13-1. Bangkok：Culaalonkon University Press.
Phatcharaaporn Kaewklitsapaang. 2010. *Kroong-saang Phaasaa-Yiipun*. Bangkok：Thammasat University Press.
Phrayaa Upphakitsilpasan. 1937. *Lak Phaasaa-Thai*. Bangkok：TWP Press.
Piyajit Thardeang、Monthar Pimthong. 2000. *Phaasaa-Yiipun Chut Theaw-Muang-Thai*. Bangkok：

Chulalongkorn University Press.
Preeya Ingkaphirom. 2008. *Waiyakorn Phaasaa Yii-pun*. Bangkok：Dokya Group Publishing Press.
Somkiat Chawengkijwanich. 2010. *20 hua-khoo ded phichit Waiyakorn Phaasaa-Yiipun Chan-Klaang*. Bangkok：TPA Press.
Thassanii Methaphisit. 2010. *20 hua-khoo ded phichit Waiyakorn Phaasaa-Yiipun Chan-ton*. Bangkok：TPA Press.
Suteep Normsawat. 2011. *Waiyakorn Phaasaa Yii-pun Buang-ton Chabab Sombuun*. Bangkok：Thana Press.
Suniirat Niamjareensuk. 2014. *Khroong-saang Phaasaa Yii-pun*. Bangkok：Thammasat University Press.
Tianchai Iamworamate. 2008. *Pojjanarnugrom Thai Chabap nakrian*. Bangkok：Ruamsan Press.
Wiirawan Washiradirok. 2009. *Gunjae suu 500 Ruup-prayook*. Bangkok：TPA Press.
Wiirawan Washiradirok. 2013. *500 Ruup-prayook Phaasaa-Yiipun N1-N3*. Bangkok：TPA Press.

【参考文献】（英語文献）

Barbara Dancygier. 1998. *Conditionals and prediction*. Cambridge University Press.
Berlitz. 2012. *Thai Phrase Book and Dictionary*. Berlitz Publishing Press.
Charles Degnaux. 1996. *The Main of Thai Vocabulary*. Craftsman Press.
David Smyth. 2014. *Teach Yourself Thai (Teach Yourself Complete Course)*. Teach Yourself Books Press.
David Smyth. 2014. *Thai: An Essential Grammar (Routledge Essential Grammars)*. London：Routledge Press.
Delmoer M. Brown. 1987. *An Introduction to Advanced Spoken Japanese*. Inter-University Center for Japanese Language Studies Press.
Gordon H. Allison. 1989. *Easy Thai: An Introduction to the Thai Language*. Tuttle Publishing Press.
Hideo Teramura. 1968. *A Synchronic Study of Spontaneous Voice in Japanese*. In Journal of Osaka University of Foreign Studies Vol.18. pp. 109-130. Osaka University of Foreign Studies Press.
Iwasaki Shoichi and Preeya Ingkaphirom. 2005. *A Reference Grammar of Thai*. Cambridge：Cambridge University Press.
Prawet Jantharat. 1995. *Thai Sound System and Reading Rules*. Northern Illinois University Center Press.
Richard B. Noss. 1964. *Thai Reference Grammar*. Washington, D.C.：Foreign Service Institute Press.
Tasanalai Boonyapatipark. 1983. *A study of aspect in Thai*. School of Oriental and African Studies Press.
Tipawan Thampusama. 1997. *Thai for Speaking Learners*. D.K. Book Store Press.
Udom Warotamasikkhadit. 1975. *Thai Syntax: An Outline*. Paris：The Hague Mouton Publishers Press.
William A. Smalley. 1995. *Linguistic Diversity and National Unity: Language Ecology in Thailand*. University of Chicago Press.

【タイ語学習書】

宇戸清治（1991）『やさしいタイ語　文学の読み方』大学書林.
———（1994）『やさしいタイ語　基本表現』大学書林.
———（2010）『タイ語』、「アジア理解教育の総合的取組」刊行物シリーズ　No.18　大東文化大学国際関係学部.
宇戸清治・マリーベンヤグソン（1989）『現代タイ語会話』大学書林.

田中寛（1984）『現代タイ語入門Ⅰ』日タイ経済協力協会.
———（1985）『現代タイ語入門Ⅱ』日タイ経済協力協会.
———（2002a）『まずはこれだけ　タイ語』国際語学社.
———（2002b）『らくらくタイ語　文法から会話』、改訂版 CD ブック、国際語学社.
冨田竹二郎（1957）『タイ語（日本語）基礎　アジア語学双書Ⅳ』、江南書院.
———（1959）『日泰双用　日泰会話事典』、アジア語学双書、江南書院.
ポンパンレプナグ（1999）『旅たび会話　タイ語』、国際語学社.
水野潔（2001）『今すぐ話せるタイ語 入門編 東進ブックス』ナガセ.
———（2004）『今すぐ話せるタイ語 入門編 Ver.2 （東進ブックス）』ナガセ.
宮本マラシー（1992）『日常生活の中のタイ語会話　サワッディー1』、国際語学社.
———（1996）『日常生活の中のタイ語会話　サワッディー2』、国際語学社.

【辞典類】

『教師と学習者のための日本語文型辞典』グループ・ジャマシイ（1998）くろしお出版.
『国語学辞典』国語学会（1955）東京堂出版.
『国語学大辞典』国語学会（1980）東京堂出版.
『新版日本語教育辞典』日本語教育学会（2005）大修館書店.
『タイ日大辞典』冨田竹二郎編（1997）めこん.
『日本語文法辞典』日本語文法学会（2014）大修館書店.
『日本語学キーワード辞典』小池 清治・細川 英雄・犬飼 隆・小林 賢次（2007）朝倉書店.

【例文出典】（日本語の作品）

赤川次郎（2003）『茜色のプロムナード』光文社.
赤川次郎（2006）『真珠色のコーヒーカップ』光文社.
赤川次郎（2007）『桜色のハーフコート』光文社.
阿川佐和子（2002）『ウメ子』小学館文庫　小学館.
芥川龍之介（1968）「芋粥」『現代日本文學大系 43 芥川龍之介集』筑摩書房.
芥川龍之介（1987）「白」『芥川龍之介全集 5』ちくま文庫、筑摩書房.
阿部和重（2013）『IP／NN 阿部和重傑作集』コルク.
有島武郎（1950）『或る女　前編』岩波文庫　岩波書店.
有島武郎（1950）『或る女　後編』岩波文庫　岩波書店.
岩井三四二（2009）『竹千代を盗め』講談社.
海野十三（1989）『海野十三全集　第 5 巻　浮かぶ飛行島』三一書房.
乙武洋匡（1998）『五体不満足　完全版』講談社.
木下半太（2007）『悪夢のエレベーター』幻冬舎.
グループ・ジャマシイ（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版.
黒古一夫（1994）『三浦綾子論』小学館.
小池龍之介（2012）『考えない練習』練習シリーズ　小学館.
佐々木圭一（2013）『伝え方が 9 割』ダイヤモンド社.
時雨沢恵一（2000）『キノの旅』電撃文庫　KADOKAWA.
時雨沢恵一（2000）『キノの旅Ⅱ』電撃文庫　KADOKAWA.
時雨沢恵一（2001）『キノの旅Ⅲ』電撃文庫　KADOKAWA.
時雨沢恵一（2001）『キノの旅Ⅳ』電撃文庫　KADOKAWA.
時雨沢恵一（2002）『キノの旅Ⅴ』電撃文庫　KADOKAWA.
時雨沢恵一（2002）『キノの旅Ⅵ』電撃文庫　KADOKAWA.
新村出（2008）『広辞苑第六版』岩波書店.
そえだ信（2013）『ねずみと巨獣』デザインエッグ社.
太宰治（1954）『女生徒』角川文庫　角川書店.
太宰治（1988）「風の便り」『太宰治全集 4』ちくま文庫　筑摩書房.
豊島与志雄（1965）『豊島与志雄著作集　第四巻』未来社.
永嶋恵美（2010）『あなたの恋人、強奪します。泥棒猫ヒナコの事件簿』徳間書店.
南雲吉則（2012）『「空腹」が人を健康にする』サンマーク.
夏川草介（2009）『神様のカルテ』小学館文庫　小学館.
夏目漱石（1948）『それから』新潮文庫　新潮社.
夏目漱石（1988）「行人」『夏目漱石全集 7』ちくま文庫　筑摩書房.
夏目漱石（1991）『こころ』集英社文庫　集英社.
日本語記述文法研究会（2008）『現代日本語文法 6 第 11 部　複文』くろしお出版.
ハセガワケイスケ（2003）『しにがみのバラッド。』電撃文庫　メディアワークス.

ハセガワケイスケ（2003）『しにがみのバラッド。2』電撃文庫　メディアワークス.
ハセガワケイスケ（2004）『しにがみのバラッド。3』電撃文庫　メディアワークス.
鳩山一郎（1966）『若き血の清く燃えて―鳩山一郎から薫へのラブレター』講談社.
東川篤哉（2003）『学ばない探偵たちの学園』実業之日本社.
平岩弓枝（1983）『午後の恋人（下）』文春文庫　文藝春秋.
前田直子（2009）『日本語の複文　条件文と原因・理由文の記述的研究』くろしお出版.
益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法・改訂版』くろしお出版.
安田佳生（2008）『千円札は拾うな。』サンマーク出版.
山本史郎（2005）『トラファルガル海戦物語 上』原書房.
横溝正史（1974）『真珠郎』角川書店.
Hanako 編集部（2015）『Hanako』2015 年 10 月 8 日号　No.1096　マガジンハウス.

【例文出典】（タイ語の作品の日本語訳）

宇戸清治（訳）プラーブダーユン（著）（2011）『パンダ』物語の島アジア　東京外国語大学出版会.

【例文出典】（日本語の作品のタイ語訳）

「芋粥」『現代日本文學大系 43 芥川龍之介集』
「白」『芥川龍之介全集 5』
Monthar Pimthong. 2009. *Ruang-san Yiipun 4*. Bangkok：Chulalongkorn University Press.
『悪夢のエレベーター』
Methee Thampipop. 2013. *Fan-raay nay Lift*. Bangkok：Talent1 Publishing Press.
『ウメ子』
Suwannaa Arai. 2010. *Dek-ying Umeko*. Bangkok：NANMEEBOOKS Press.
『神様のカルテ』
Pornchai Wittayaleetpan. 2012. *Ichito khun-moo huajai theewadaa*. Bangkok：Amarin publishing Press.
『キノの旅』
Chaninan Gittipatimarkun. 2008. *Karn-dern-thaang khorng Kino*. Bangkok：Bliss publishing Press.
『キノの旅Ⅱ』
Piyawan Subsamruam. 2009. *Karn-dern-thaang khorng Kino 2*. Bangkok：Bliss publishing Press.
『キノの旅Ⅲ』
Chaninan Gittipatimarkun. 2009. *Karn-dern-thaang khorng Kino 3*. Bangkok：Bliss publishing Press.
『キノの旅Ⅳ』
Piyawan Subsamruam. 2009. *Karn-dern-thaang khorng Kino 4*. Bangkok：Bliss publishing Press.
『キノの旅Ⅵ』
Chaninan Gittipatimarkun. 2010. *Karn-dern-thaang khorng Kino 6*. Bangkok：Bliss publishing Press.
『五体不満足』
Pornanong Niyomka. 2001. *Mai-Khrop-Haa*. Bangkok：TPA Press.

『しにがみのバラッド。2』
Supattraa Phadungpriichaathai. 2006. *Yom-ma-tuut sii khaaw 2*. Bangkok：Bliss publishing Press.
『女生徒』
「風の便り」『太宰治全集 4』
Monthar Pimthong. 2009. *Ruang-san Yiipun 5*. Bangkok：Chulalongkorn University Press.

【例文出典】（タイ語の作品）

Bussabaa Banjongmanii. 2007. *Waiyakorn Radap 2 Samrap triam sorp Wat-Radap Phaasaa-Yiipun*. Bangkok：TPA Press.
Jutisorn. 2014. *Buang Gau*. Bangkok：I.J.P. international Press.
Kamchai Tongloo. 2009. *Lak Phaasaa-Thai*. Bangkok：Ruamsan Press.
Madame Constant. 2012. *Khaattakam taay duang-daaw*. Bangkok：Nok-hook publishing Press.
Phatcharaaporn Kaewklitsapaang. 2010. *Kroong-saang Phaasaa-Yiipun*. Bangkok：Thammasat University Press.
Phrayaa Upphakitsilpasan. 1937. *Lak Phaasaa-Thai*. Bangkok：TWP Press.
Preeya Ingkaphirom. 2005. *Waiyakorn Phaasaa Yii-pun*. Bangkok：Dokya Group Publishing Press.
Pranee Jongsutjarittam. 2014. *Phojjanaanukrom Kham-Yiipun Laak-laay Khwaammaay*. Bangkok：TPA Press.
Somkiat Chawengkijwanich. 2010. *20 hua-khoo ded phichit Waiyakorn Phaasaa-Yiipun Chan-Klaang*. Bangkok：TPA Press.
Srisurang. 2014. *Pleeng sii naam-gern*. Bangkok：Fine Book publishing Press.
Tianchai Iamworamate. 2008. *Pojjanarnugrom Thai Chabap nakrian*. Bangkok：Ruamsan Press.
Wiirawan Washiradirok. 2009. *Gunjae suu 500 Ruup-prayook*. Bangkok：TPA Press.
Wiirawan Washiradirok. 2013. *500 Ruup-Prayook Phaasaa-Yiipun N1-N3*. Bangkok：TPA Press.
Win Lyovarin. 1999. *Sing-mii-Chiiwit-thii-Riak-waa-Khon*. Bangkok：113 publishing Press.
Win Lyovarin. 2010. *Sorng keen thii kod lok*. Bangkok：113 publishing Press.
Win Lyovarin. 2014. *Nay Lum Rak*. Bangkok：113 publishing Press.

【例文出典】（検索サイト）

スポーツ - 毎日新聞 - 毎日 jp <http://mainichi.jp/sports/>
中国 台湾 香港 レコードチャイナ <http://www.recordchina.co.jp/>
ニュース速報：読売新聞（YOMIURI ONLINE） <http://www.yomiuri.co.jp/>
Pantip - Learn, Share & Fun < http://pantip.com/>
Thai dictionary <http://th.w3dictionary.org/>
Yahoo! 知恵袋 - みんなの知恵共有サービス <http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/>
KOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス」少納言 <http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/>

【本論文と既出論文との関係】

序章　　書き下ろし

第 1 章

⑴　「接続表現をめぐる日タイ対照研究―原因・理由節で用いる接続表現を中心として―」（2014）『外国語学研究』第 15 号 pp. 201－207　大東文化大学大学院外国語学研究科

⑵　「原因・理由文をめぐる日タイ対照研究―原因・理由文の分類について―」（2014）『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』第 11 号 pp. 131－136　国際交流基金バンコク日本文化センター

⑶　「原因・理由文をめぐる日タイ対照研究―タイ語の因果構文を中心として―」（2015）『外国語学研究』第 16 号 pp. 145－150　大東文化大学大学院外国語学研究科

⑷　「原因・理由表現の日タイ語対照研究―タイ語の因果構文の特徴と分類の考察を中心に―」（2015）『語学教育研究所創設 30 周年記念フォーラム』pp. 283－298　大東文化大学語学教育研究所

第 2 章　「原因・理由表現をめぐる日タイ対照研究　―日本語における「から・ので」とタイ語における“phrá”を中心に―」（2014）『日タイ言語文化研究』第 2 号 pp. 153－163　日タイ言語文化研究所

第 3 章

⑴　「事態系の原因・理由表現をめぐる日タイ対照研究―「せいで」「おかげで」に対応するタイ語の原因・理由表現を中心に―」（2015）『語学教育研究論叢』第 32 号 pp. 1－22　大東文化大学語学教育研究所

⑵　「事態系の原因・理由表現をめぐる日タイ対照研究―「ため（に）」と対応するタイ語における原因・理由表現を中心として―」（2015）『日タイ言語文化研究』第 3 号 pp. 131－142　日タイ言語文化研究所

⑶　「原因・理由表現をめぐる日タイ対照研究―「だけに」と「だけあって」を中心に―」『外国語学研究』第 17 号　大東文化大学大学院外国語学研究科　（2016 年）

第 4 章　「原因・理由表現をめぐる日タイ対照研究―「のだから」を中心に―」『語学教育研究論叢』第 33 号　pp. 19－35　大東文化大学語学教育研究所　（2016 年）

終章　　書き下ろし

謝辞

このたび、日本語の複文構造の重要な領域を占める順接構文のなかで因果構文、すなわち原因・理由文をタイ語との対照研究の視角から研究し、ここに学位請求論文としてまとめることになった。以下、研究の発端となった経緯をしばし振り返ってみることにしたい。

言語研究の大きな基盤は当該言語を学ぶ過程でのさまざまな発見がある。外国人にとって日本語の研究は母語話者とくらべてその言語の内省には一定の限界があると思われるが、その一方で、日本語を外から分析し、新たな視点を与えることも可能である。すなわち外国語の一つとして日本語を分析するとき、筆者の母語であるタイ語との異同に気づき、そこからさらに日本語習得上の問題点なども明らかになる。以上が本研究の出発点であるが、日本語の文構造とタイ語の文構造の根本的な異同とともに、その中でもっとも顕著にあらわれると思われる複文の構造に焦点を当てることとした。

しかしながら、上述のように文の概念、文の認識には序章で述べたように日本語とタイ語には大きな異同があると思われる。ひとつは文標識と意味構造の問題である。日本語の特徴のひとつに類義表現の多様さがあげられるが、とりわけ、日本語は接続表現が多様に発達しているとされる。そしてなかでも複文の代表的な構文である原因・理由文にも多くの形式が存在する。「テ」「カラ」「ノデ」「タメ（ニ)」などの中心となる用法、そしてその周辺には「オカゲデ」などの諸形式、さらに「ダケニ」「バカリニ」といった形式名詞を接続成分とするものが分布する。こうした諸形式がタイ語でどうあわらされるのか、どのような意味の異同が伝達可能なのか、という疑問がある。本研究はこうした現象を扱ったものである。

複文にはさまざまな問題が山積しており、これまでにもさまざまな形式に関してさまざまな研究がなされてきた。しかし、これを対照研究から精査した研究はたとえば、中国語との対照研究を除いてほとんどなされていないのが現状である。しかし、単に形式の異同だけを問題にしたのでは問題の根本的な解決にはならない。実証的、科学的データにもとづく研究が必要である。一方、対照すべきタイ語については詳細な文法研究は日本語とくらべて大きく遅れており、したがって、双方の研究を対等にあつかうことには多くの問題点が介在する。とはいえ、タイ語複文研究のためにも現在できうるかぎりの展望をしめすことは今後の研究にとっても必要であると感じている。

複文研究に置いて標識（マーカー）の有標について述べたが、無標形式についても不明な点が山積している。これは双方の文の意味関係が根底にあるのだが、本研究では扱いきれなかった課題であるが、その基本となるのは文相互の関係の解明であり、その意味では本研究はタイ語の複文研究の基礎にも貢献するものと考えている。

いくつかの不十分な点を内包するにもかかわらず、これまでの研究の一区切りとしてまとめることにしたのは、今後の研究を明確にし、出発点とするためでもある。ここに本研究を進めるに至った経緯を述べておきたい。筆者は母国タイではチェンマイ大学で日本語を専攻し、日本語の多様な表現に大きな関心をもった。しかし更にその理解を深めるためには日本での研鑽が必須である。その後、日本の日本語学校で日本語を学び、大東文化大学大学院に進むことに

した。大東文化大学大学院には日本語とタイ語の対照研究で著名な田中教授が教鞭をとっておられることを知り、お手紙を書いて面談し、進学することになったのである。そして 2012 年に修士論文「接続表現をめぐる日タイ対照研究―“thîi”“sûŋ”“an”と日本語の成分節の機能を中心として―」を提出したが、複文のなかでタイ語の関係節構造をあつかったもので、連体修飾構造の解明であったが、博士課程後期に進学してからはさらに文の意味、相互関係に関心を深めることになった。

本学在学中には応用日本語学研究会での発表で先輩、同輩からの研究から大きな刺激を受けることが出来た。また、田中寛教授の主宰する日タイ言語文化研究所、日タイ言語文化研究会での発表、投稿にも多大な恩恵を受けることになった。また、本研究会を通してタイ人留学生との学術交流にも大きな助けとなった。また、日本語・日本語教育研究会での発表に際しても、多くの参加者からの提言、示唆を受けることが出来た。

本研究を進めるにあたって、田中寛指導教授からは研究方法について、また研究姿勢について実に多くのことを学ぶことができ。これは一生の財産である。また、学内では福盛貴弘先生、上村圭介先生からも多くの学恩を受けている。青木淳子先生からも博士課程前期課程の時から多くの知恵や示唆をいただいた。また、タイのチェンマイ大学の教員にも多くの資料の提供など指導を受けたことに心から感謝申し上げる。

学外では複文研究の専門家である学習院大学前田直子教授からは温かいご助言をうけることができた。また、大学院の先輩諸氏からも多くの貴重な知見を受けたことも感謝の意をあらわしておきたい。学内論文の投稿にあたっては大学院事務室、語学教育研究所のスタッフの皆様には懇切丁寧なご指導をいただいた。心から感謝申し上げる。

日本の物価はタイより数倍も高く、生活費だけでもタイ人にとっては厳しい金額である。それでも留学することを許し、今までずっと支えてきていただいた両親には、どんなに感謝してもしきれない。筆者をここまで温かく見守ってくれた両親にも心から感謝したい。

さまざまなお寧の上に本研究が到達したが、残された問題は多く残されている。研究は緒に就いたばかりである。これからも本研究を出発点として研究を進め、タイと日本の学術交流に微力ながらも尽力していきたいと願っている。

2015 年 10 月 29 日記す